
運命のマスティマ

鏡 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のマスティマ

【Zコード】

Z2989K

【作者名】

鏡 香夜

【あらすじ】

十年前、マフィアの抗争に巻き込まれた私を救ってくれた存在、闇組織マスティマ。

銃は苦手だし、争い」とも好きじゃない。もつとも重要な条件である男でもない。

けれど、私にしかできないこともあるはず。

恩に報いようとコツクを志したのはいいけど……。

恩人であるはずのボスはとんでもな人だつたり?

周りの人も皆個性豊か過ぎだつたり?

主人公ミシェルが、騒動に巻き込まれつつも、男のコックとして切り抜けてゆくお話。

（第一部完結済み。サイド・ストーリーとしてミシェル過去編を別小説として掲載。本編の第一部の連載開始時期は未定です）

1・十年前 始まりの夜

あの夜の出来事ははっきりと思い出せる。十年たった今でも。石釜から漂うピッシャの香りや沸き立つ鍋から立ちのぼる湯気。鼻歌を歌いながら厨房を歩き回る父の姿さえも。白衣に包まれたふっくらとした体つき。コック帽から覗く柔らかい栗色の髪。

陽気な鳶色の瞳は料理へ向ひと光に溢れる。始終浮かんでいた笑顔。まるで特別なものを作り出すかのように。

小さな料理店の経営者であり、コックでもあった父。思い出すのはいつも白衣姿。

父の手伝いは、幼い私の楽しみでもあった。厨房は不思議に溢れた魔法の園。父は魔法使いであり、私はその弟子の気分だった。

包丁を持たせもらったのは五才になる頃で、簡単な料理も教えてもらつた。もっとも、まだ子供だからと、お箸に出す品には手を出させてはくれなかつたけれど。

それでも、料理を運んで店を訪れた人と話をするのは面白かつた。可愛いウェイトレスさん。みんなそう呼んで優しくしてくれた。

そして十年前の那个夜も。

店の入り口には閉店の札をかけているが、奥の席は三人の男が占めていた。黒っぽいスース姿で煙草をくゆらし、ワイングラスを傾ける。

彼らの低く柔らかい声。

皿を乗せた盆を手に近寄ると、話し声がぴたりと止まる。

「お手伝いとは偉いね、お譲ちゃん」

私の背からすると高いテーブルに、ようやく料理を並べる。顔なじみの初老の男が手を伸ばして、頭をなでてくれる。

「お譲ちゃんじゃないわ。ミシェルよ。ブルーノさん」

「いつこいつとした大きな手で、髪をくちやくちやくされてふてくさ

れると、男は顔を綻ばせる。髪と同様白の混じつた口ひげが余計樂しげに見せる。

膨らんだ私の頬に、人差し指を押し付けながら彼は言葉短く詫びた。

両脇の彼より若い一人の男が微笑んでいる。

よくあるやりとりだった。小さな料理店を持つ父の手伝いに借り出されるのは。

そしてこの初老の男。店を貸切にして食事をする、何度も訪れるお得意様。当時の私にとって彼はそれ以上ではなかつた。

優しい微笑みを持つおじいちゃん。例え連れの男達が何度も鋭い目つきで入り口を見やつていたとしても。それを知っていたところで幼い私の想像できることなど、たかがしれている。

十歳の誕生日を迎えて間もないその日。それは起こつた。

入り口のガラスが弾ける。

続いてドアが蹴破られ、黒い衣服に身を包んだ男達が押し入つてきた。

奥にいた初老の男の頭を手の平で守りながら、テーブルの下に逃がす連れの若い男は、素早くジャケットの下から何かを取り出した。連續の銃声と共にテーブルのグラスが砕け、壁の絵画がソファに落ちる。

「ミシェル」

立ち尽くす私を抱えるようにして、父は床に身を投げ出した。

男達の怒号。応戦する奥の男の一人が銃弾を浴びながら後ろに倒れた。

粉々になつた照明が激しい雨のように落ちてくる。

「皆殺しにしろ。誰一人逃がすな」

銃声を突き破る声で侵入者の一人が怒鳴つた。

父は私をかばいながら、カウンターの傍へと這つた。

「大丈夫か、ミシェル」

がたがたと震えることしかできない私を父は気遣う。

「怪我はないな？」

頷くのを見て安心したように笑む。その微笑みにほつとしたのは私のほうだった。

途絶えることのない銃声の中でパーティクに落ちこぼすに済んだのは、父の存在ゆえだった。

簿のかな明かりが上から降り注ぐ。カウンターの上に置かれたシード付きのランプ型のライト。傘を失いながらもまだ光を放ち続けていた。

「パパ、血が……」

その明かりの元、胸を濡らす血を皿に止める。赤い色はどんどん広がり、白衣を染めていった。

「パパ……！」

カウンターに上半身を預け、苦痛に耐えるように皿をつぶっていて父の脣には微笑みが残っていた。弾丸が顔の脇の板にめり込んだときも。

銃口を向けて男が近付いてくる。私たちをどうするつもりなのかは明白だった。

父は顔を引きつらせ、半目を開けながら、私を抱き寄せた。男に背を向けるようにして。

男の歪んだ笑み。父の腕越しに恐ろしいその表情を皿にしたのが最後だった。

一発の銃声。

恐る恐る父の背から顔を覗かせたとき、男の姿は消えていた。

新たな人影を見つけて身をくませる。長い丈の黒いコートを着た黒髪の男がそこにいた。大型の拳銃を手にしている。

「下衆が」

コートの男は床に転がる銃撃者を足で押しやつた。

苦痛の声を上げながら床をまさぐる手の届かないところへ銃を蹴り飛ばす。

「ブルーノの救出が最優先だ」

「コートの男が良く響く声で命ずる。他にも同じような上着の男達が店の中にいた。

彼らの銃弾は確実に侵入者を仕留めていった。

黒髪の男は歩み寄つてきて私たちを一警した。傍にいた仲間としき者に向つて命ずる。

「救急車を呼んでやれ」

私は男を仰ぎ見た。戻つてきた視線とぶつかりそうになり、慌てて俯く。だが、彼のコートの袖にあつたエンブレム。描かれた黒い翼は不吉な予感のようなものだった。

父を見やる。荒い息をし、目をつぶつたままの父。

不意に涙がこみ上げてきた。泣き始める私の傍に黒髪の男の仲間であろう、若者が腰を落とした。

「もう大丈夫だ。俺たちが来たんだから。救急車だつてすぐに来るそんな言葉が幼い私の何の救いになるだろう。

男が差し伸ばしてきた手を引っ込めたのは、私の声を耳にしたからだろう。

私は父を呼び続け、隣の男はそれ以上何も言わずにそこにいた。やがて救急車が到着し、救急隊員が父の処置を始めた。

私は何もできずに立ち尽くし、泣くだけだった。

担架で先に救急車に運ばれようとしていたブルーノさんは、声をかけてそれを止めた。

「すまないミシェル。巻き込んでしまって。本当にすまない」

彼は腕を伸ばし、血で汚れた手で私の頭をなでた。

こんな状況でなければいつもの仕草。それは、この悪夢のような状況が現実であることを知らしめるだけだった。

私はより激しく泣き出した。担架は去つていき、詫びるブルーノさんの声だけが置き去りになつた。

「もう大丈夫……なんてことはなかつた。

病院に搬送されて三日後、父は息を引き取つた。

何よりも料理を作ることを愛し、私たち家族を愛してくれた父は逝ってしまった。

後に、お得意様だったブルーノさんは地域一体を仕切るマフィアのボスで、私達が巻き込まれたのは組織の抗争だったことが分かった。穩健派であるボスを亡き者にしようとした 武闘派の一昧によるもの。

そして、私と父を救い出した者たちはそれを阻止するためにやつて来たのだと。

彼らの正体を知り、その存在を知ったこと。それは私の運命の方向を付け、私の志の源となつた。

1・十年前 始まりの夜（後書き）

闇社会に属する組織が出てくるお話です。

主人公ミシューを通することで、「ミカルな部分も多くなつていいく予定です。（最初の方はシリアルですが……）

当サイト初投稿ですが、よろしくお願ひします。

2・ミシユルの決意

住み慣れた、気兼ねない人たちのたくさんいる街。賑やかで温かい街。

南イタリアのこの街で私は生まれ育った。母の郷でもあるこの地は、父を亡くしてからも変わらないもの一つだった。

周りの人たちは私たちを力づけてくれた。祖母、母、私と男手のいない我が家を何かと気遣つてくれた。

なによりもブルーノさんは、私の進学の相談に乗り、返済はいつになつてもいいからと学費の肩代わりまでしてくれた。

お陰で無事に義務教育を終えて、希望通り、各地を巡つての料理の修業に打ち込むことができた。

私の唯一といつてもいい才能を磨くための旅。そんなことができたのも、後ろ盾あつてこそだ。

どれほど礼を尽くしても足りることはない。そんな人の心に背くことはしたくなかった。

だが、他にどうすればいいというのだろう。頼る人は他になく、彼の力添えなくしては私の目標に近付くことさえできないのだ。

チャンスを知らせる一本の電話。これを逃せば一度と巡つては来ないだろう。今までの努力はまったくの無駄になつてしまふかもしない。

料理の師匠に慌しく別れの挨拶をして、荷物をまとめると飛行機に飛び乗つた。そして、故郷へ戻つてきたのだ。

私の足取りは重かつた。

ブルーノさんの家は目の前にあつた。

高い塀に囲まれた屋敷だ。両開きの門に手をかけると開いていた。無用心だと思いつつ、一応植木に隠された監視カメラに手を振つてみる。気付けば誰か出てくるはずだが、その様子はない。

私は仕方なく門を開けて入つた。玄関を目指して歩いていると、

二頭の犬が駆けてきた。黒と茶色の屈強なマスティフ犬だ。彼らは私に狙いを定めて飛びかかってきた。

バランスを崩し、座り込むと胸に両足をかけられた。荒い息がすぐ傍に聞こえる。

「もう、ネーロ、カフェラッテ、やめてよ」

言つている傍から顔をべろべろと舐められる。くすぐつたい。笑い声を上げながら、黒いネーロの顔を両手で挟んでもみくちゃにする。彼の顔の皺があちこちに動いて奇妙な形を作る。それがおかしくてさらなる笑いを誘う。

カフェラッテが負けじと顔を突っ込んでくるので、二頭の耳の後ろを掻いてやりながら、彼らの鼻先にキスをした。

「誰だ？」

声をかけられたのはその時だった。

屋敷から出てきたのだろう、男が上着の懐に手を入れたまま近付いてくる。

「こんにちは。お久しぶりです」

私の挨拶にも男は怪訝そうな顔をしている。まるで誰だか分からぬい感じだ。

唇を舐めてこようとする二頭をなだめながら、私は立ち上がった。

「ブルーーさん、いらっしゃいますか？」

「……お前、ミシェルか？」

男は困惑気味に指を差す。

頷いて笑い返すしかなかつた。こんな格好では分かれつて言つほうが無理なのかもしけない。

今私は赤いカンフー着にボストンバッグを肩に提げ、大きな中華鍋を背負つてゐるんだから。

男はブルーーさんの部下だった。確かマルコと呼ばれていて、父のレストランにもよく訪れていた一人だつた。あの十年前の事件のときも。

その頃は濃い灰色だつた彼の髪にも、今は白いものが混じつてい

る。

「ブルーノさんの所に連れて行ってください」

私の言葉に彼はぎょっとする。再び私の全身を見回す。奇妙な格好なのは分かつていてる。

「時間がそんなにないんです。お願ひします」

彼は屋敷を見返し、窮屈そうにネクタイをいじった。

「分かつた。来い」

それでもそう言つてくれた。

私は、名残惜しく垂らした尻尾をゆつくつと振る一頭を背にして、彼の後ろに付いていった。

玄関を抜け、廊下を歩いて、私たちは一つの扉の前に立ち止まる。マルコはここで待つよう指示して、先に部屋に入ってしまった。

「会つてくださるそうだ」

しばらくして扉が開き、彼は顔を覗かせて言つた。

荷物を抱えなおし、バッグの肩掛けを握り締めながら、私は部屋へと入つた。

豪華な部屋だった。

壁には額縁に入った絵画やコレクションである銃やナイフのケースが掛けられている。東洋のものと思われる白磁気の花瓶に入った花。厚みのある艶のあるカーテンは飾り紐で止められ、窓際に押しやられている。

畳下がりの日差しを遮っているのはレースのカーテンだった。それを背にしてブルーノさんはいた。

白い髪に白い口ひげ。十年前と变つたのはそれだけではない。膝にはエンジ色のブランケットがかけられている。座っているのは車椅子だった。あの事件で受けた傷の後遺症のせいだ。

「やはり来たね。ミシェル」

変らない柔らかい物腰。ネクタイを締め、スーツを着た彼には威厳があった。マフィアのボスの座を退いて隠居の身の今までさえ。

「わしは正直言つて、君に来てもらいたくなかったのだがね」「渋い声。

「でも私は来ました。昨日連絡を頂いたから」

私は彼の前まで歩み寄った。彼は目を細めてじっと私を見つめた。「君に頼まれていたからね。だが、面接は今晚だ。中国からでは時間がかかるだろう。間に合わなければ良かつたのに」

「私はここにいます。面接だつて間に合わせます」

私の言葉に、彼は車椅子の肘置きを節くれだつた手で握り締めた。床を睨みつけている。

私はさらに彼に歩み寄つた。腕を取り、留めよつとするマル口の手を払う。

「お願いです。あなたの推薦状が必要なんです。そつ教えてくださいたのはあなたじやないですか」

「君は何も分かつとらん」

ブルーノさんは厳しい口調で言つた。私へと戻つてくる視線。彼の雰囲気ががらりと変わつた。それはまさしく闇を治める男のものだつた。

柔らかかつた眼差しは鋭い光を放ち、同じ人物とは思えないほどだつた。

私はバッグを床に置き、たすき掛けにした中華鍋の紐を解いた。バッグの上に鍋が落下する。

「マスティマはわしらと同じだ。闇に属するものだ。そんなところへ君を……」

ブルーノさんの声を物音が止めた。床の鳴る低い音だつた。バッグに落ちた中華鍋の音。重さを受け止め切れなかつたバッグは、ペシャンこに潰れている。

「どうおっしゃらうと私の決心は変わりません」

私の言葉に、彼の唇から深い溜め息が漏れた。

「だがね、ミシェル。マスティマに入れるのは男だけだと言つただろう。女の君に資格はない」

今度はなだめるような声。

私は唇を噛んだ。自分の技術が足らないから認められないといつのなら分かる。だが、変えようのない性別で拒まれるなんて。変えようのない……性別？

私は壁に目をやつた。一人の視線を感じながらも、足は止まらなかつた。

壁掛けのガラスケースから一番大きいナイフを取り出す。マルコが慌てたように駆け寄つてくるが、間に合ひわけもなかつた。腰に届くお下げを前に寄せ、切り落とす。

「男になればいいんでしょう」

切り離した、茶色がかつた金髪を握り締める。髪を伸ばしていたのは十年前からだ。願掛けのようなものだ。願いが叶つたときに切るつもりだったが、この際仕方ない。

「……無茶苦茶だ」

マルコが呆れたように言つ。

ブルーノさんはとつと、笑い出していた。彼は最後に溜め息と共に笑いを收め、肘かけを叩いた。

「降参だミシエル。推薦状は渡そつ」

彼は懐から封筒を取り出した。

マルコが寄り、それを受け取ると私の前に持つてきた。

「最初は騙せたとしてもすぐにばれるぞ」

「その時はその時ですよ」

推薦状を受け取りながらの私の答えは、彼をやうに呆れさせたようだつた。

「マルコ、彼女を君の行きつけの理髪店に連れて行つてあげ。その髪ではあんまりだ」

「……分かりました」

随分と歯切れの悪い返事。

私はブルーノさんの近くまで行つて床に膝を付いた。

「ありがとうございます、ブルーノさん。本当に何から何までお世

話になつて」

彼は首を横に振り、私の頭に触れた。

「ミシェル、君はわしの娘同様だ。君のお父さんはいい友人だつた。

彼にそう誓つたのだから「

私の髪をなでる彼の手は、昔と変らず大きく優しかつた。

「さあ行きなさい。面接の時間に遅れてはいけない」

彼は促した。私は頷いて立ち上がり、彼を後にした。

「幸運を。娘よ」

最後に振り返つたとき、彼は微笑んでいた。

心の中に温かい光が点つたように感じられ、私はそれに背を押さ

れて屋敷を後にした。

2・ミシェルの決意（後書き）

次回予告：ブルーノより得た推薦状を手に、マステイマの本拠地イギリスへと発つミシェル。向つた先は窓口である警備会社だった。

第3話「ディケンズ警備会社」

3・ディケンズ警備会社

指定時間の午後八時を前にして、ロンドンの空港からタクシーに乗り、たどり着いた。

緯度の高いこの地ではまだ空も薄つすらと明るい。

ここは企業のビルが立ち並ぶオフィス街。ディケンズ警備会社はその一画にあった。

建物を前にして身なりを整える。

今までにないほど短くなつた髪は手櫛でも簡単に梳ける。もともと扱いにくいクセのある髪だが、それさえも気にならないほどだ。風通しが良くなつたせいで首筋が涼しいが、すぐに慣れるだろう。いつ慣れるか分からるのは紺色のパンツスーツだ。首を絞めつけるネクタイ。

よく男の人はこんな息苦しいものを毎日着けていられるものだ。いや、苦しい思いをするのはこの服のせいだけではない。

胸に手を置く。もともとそう大きくはない胸だが、巻きつけたサポーターのお陰でほとんど分からない。

おかしいのか悲しいのか分からない気分で、私は俯いた。

そして、顔を上げて建物を見やる。天を突く高層のビル。世界にその名を轟かす一流の会社にふさわしい外観だ。

明かりがいくつもの窓からもれている。色を深めていく空がいつもより遠くに感じられる。

車寄せに刻まれた「ディケンズ警備会社」の文字。植え込みから覗くライトが建物を照らし出している。

意を決して、エントランスへと入り、広いロビーに出る。

明度を落とした照明の下、人は誰もおらず、受付のカウンターにも姿はない。

どうすればいいのか決めかねて立ちすくんでいると、背後から声をかけられた。

「マイケル？」

ミシェル改め、今日からの私の名前。

呼ばれて振り向くと、黒髪のグレーのスーツを着た男が歩み寄ってきた。書類が入っていると思われる茶封筒を片手に、微笑みを浮かべている。

「面接担当のアーロンだ。よろしく」

年のころ四十歳くらいだろうか。

細い黒ぶち眼鏡の奥の瞳が細まる。目の脇に浮かぶ笑い皺。気さくな感じを醸し出している。

「よろしくお願ひします」

私はほつとした思いで、差し出された彼の手を握り返した。

彼はロビーのソファへと私を案内した。

茶封筒から書類を取り出す。先に送っていた履歴書だ。彼はそれに一度目を落としただけだった。

渡したブルーノさんが書いてくれた推薦状にも目を通そうとはせず、履歴書ともども封筒にしまった。

「ブルーノとは昨日電話で話したんだが、もし君が来ても採用を断つてくれと言われたんだ。君には向いていない仕事だと。社会の裏側をわざわざ見せる必要はないよね」

私は膝上で拳を握り締めた。昨日といえば、私が屋敷を訪れる前の話だ。

「彼の気持ちも分かる。我々警備では踏み込めない暗闇に挑むものがマスティマだからね。そんな陰の組織に属すれば、見たくないものだつて目にすることになるかもしない」

その声はどこまでも落ち着いたものだった。俯いてしまった私を慰めるような響きがあつた。

ブルーノさんの気持ちは、私だとてよく分かつていた。彼は友人であつた父を死なせた上、その娘まで危険にさらすことになるのではないかと恐れていたのだ。

だが、彼は分かつてくれた。これでもう気兼ねなく私は私の道を

貫ける。

顔を上げてアーロンを見たとき、彼は微笑みを浮かべていた。

「決心は固いようだね。マスティマのコック、勤務は大変だが君には頑張つてもらいたい」「

「……それって、採用つてことですか？」「

言葉の意味が分かるのに数秒を要した。

アーロンは頷いた。

「まだ仮だがね。詳しいことは……そうだな、あっちの人事に聞いたほうがいいな」

私の混乱をよそに、アーロンは上着のポケットから取り出した携帯電話で何かを話し始めた。

ディケンズ警備会社の裏組織であるマスティマ。採用は厳しいものだと聞いていた。試験自体も難しく、倍率もかなりのもので、おいそれとは入れないと。

だが、仮とはいえ、これほど簡単に採用を言い渡されるとよ。アーロンの行動は早かった。私をエレベーターに押し込み、屋上を目指す。

扉が開くとともに耳を覆いたくなるような騒音が襲つた。プロペラを回転させながらヘリコプターが待機していた。

状況についていけない私を引っ張るよつとして、彼は座席に乗り込んだ。

私のシートベルトの巻きまでして、操縦士に行き先を告げる。マスティマへ。

機体を前に傾けて飛び立つヘリの中で悲鳴を押し殺す。

「仕事は住み込みだから。荷物は後で送ればいいからね」

騒音に負けじとアーロンは大声で告げる。

座席にしがみつきながら、これは拉致に近いものだと確信していた。

3・ディケンズ警備会社（後書き）

次回予告：アーロンと共にマステイマの本拠地へ向ったミシェル。扉の奥から現れたのは総務担当だというアビゲイル。彼女の案内でミシェルはマステイマの内部へ入り込むこととなる。

第4話「マステイマの城」

4・マスティマの城

乗り物酔いといつのはヘリコプターにもあるらしい。

極度の緊張と恐怖と相まって、私は半分グロッキー状態だった。締め付けるネクタイや胸のサポーターも影響していたに違いない。降り立ったのは古めかしい石を敷き詰めた地面。だが、乗り物酔いのせいでその感触はふわふわとしたものだった。

よひめきながらも足元に注意しつつ、先を歩くアーロンの後に続く。

「ここがマスティマの本拠地。君の勤務場所だ」
指し示す彼の指先を追つて、私の足は止まった。

ここが勤務場所とは。近代的ビルのティケンズ本社とはまるで違う。目を疑うほどだった。

周りを高い壁に取り囲まれた、朽ちかけにも見える古城。中庭の外灯がぼんやりとした形を照らし出す。観光目的の旅行者も素通りしそうな代物だった。

どちらかと言つたらお化け屋敷に近いような。月の光も届かない、雲の多い空だったから余計そう思えたのかもしれない。

軋んだ音を立てて玄関の扉が開く。

怪しそうな。中から出てくるのは、蠟燭を持ったざんばら髪のせむし男とかだつたりして。

私は思わず唾を飲み込んだ。内側の明かりが四角くもれる。

現れたのは白衣を羽織った女だつた。二十代後半くらいで、カールした赤毛をアップにして、藍色のシャツに黒いタイトスカートを身に着けている。

綺麗な人だつた。

化粧品ブランドのモデルと言つても通りそうだ。それにスタイルも抜群で私よりもずっと背が高い。

彼女はアーロンの姿を目に止めて、顔を輝かせた。

「早かったのね。お久しぶり、セオ」

「お待ちかねのコックを連れてきたよ」

アーロンは笑顔で私を彼女の前に押し出した。

「マイケル、彼女はアビゲイル。マステイマの総務を仕切っている。優秀な医者だよ」

「よろしくお願ひします」

乗り物酔いはどこかへ吹っ飛んでいった。

華やかな彼女の笑顔を受け止めて、女である私も赤面してしまった。

「可愛い子ね。あなたが推すなんて珍しいけど」

「ディヴィッドには内緒だ」

人差し指を唇につけて、アーロンはいたずらっぽく笑った。アビゲイルは肩をすくめる。

「もちろんだわ。こんなことでボスにへそ曲げられちゃかなわないもの」

「中を見せて、色々説明してやってくれ」

彼は私たちに背を向ける。ヘリを待たしているからと。

だが、去りかけた彼は思い出したように、引き帰して來た。

「健康診断は済ませている。再度する必要はないよ」

怪訝そうに形の良い眉をひそめるアビゲイルの肩を叩く。そして、彼は本当に行ってしまった。

「いらっしゃい、マイケル。案内するわ」

促され、私は古城に踏み入った。

外と同じく、中もまたどれだけ痛んでいて、ボロボロになつているだろうかと想像していたが、まるで違っていた。

ホテルのような内装。大きなロビーを抜けて、天井の高い廊下を歩く。

一画一的な装飾がホテルに近い印象をより深めていた。壁に取り付けられたベルを思わせるウォールライトも。アイボリーの壁紙も。どれだけ歩いても同じだった。扉の形、素材や色さえも。

差し掛けたのは木の階段。磨きぬかれた踏み板は艶々と輝いている。

「よく覚えていてね。最初は迷つかもしないけど」

昇りながら、振り返るアビゲイルの言葉に相槌を打つ。これだけ同じ風景が続くなら本当に迷ってしまいそうだ。侵入者を考えての構造だという説明に納得する。

「天井と壁は対衝撃、ガラスも防弾になっているのよ。まあ、そういう意味では役立つことは今までないんだけどね」

彼女は苦笑を浮かべる。

そういう意味では役立つことはない……ということは、そういう意味とは別のことでは役立つていていうことだ。
とはいって、その時の私にはまるで分かつていなかつた。後に良く分かることになるのだけど。

「ここがあなたの部屋。住み込みだつてことは聞いてるわね」

ポケットから取り出した鍵で扉を開ける。電気が付いて部屋を見渡すとちょうどホテルのシングルルームのような造りになつていた。
「荷物はディケンズ本社宛に送るといいわ。こっちに回してくれるから」

「ここのは住所は秘密つてことですね」

「そう。マステイマは公的社會に害あるものを狩る黒い天使なの。保安面に抜かりがあつては駄目つてことよ」

マステイマ。それが十年前の私たち親子の前に現れた黒いコートの集団。あの地域のマフィアを仕切るブルーノさんが教えてくれた正体。ディケンズ警備会社の陰の組織。

「他にも色々面倒な規則があるんだけど、それは後々ね。次はバスの食堂。奥にあるのよ」

部屋の鍵を渡してもらい、それをジャケットのポケットにしまう。アビゲイルの後に続いて、辺りに目を凝らしながら廊下を進む。

私の部屋から幾つ目の角をどちらに曲がり、向かっているのか覚えなければならない。

息詰まるような緊張は続いていた。

「こじよ。奥がバスの席。あの人はほとんど一人で食事するんだけど」

扉を開けると、細長いテーブルが見えた。白いテーブルクロスがかけられた様は道のようだ。

両脇の壁には高級そうな食器棚が並んでいる。中の食器もおそらく最上級の品だろうと想像できる。

「給仕係がないから、あなたに配膳までしてもらうことになるわ。うちのバスは厳しい人だけど頑張つてね。とにかく時間厳守は基本だから。朝は八時。昼は十一時。夜は二十時ね。慣れるまでは私が様子を見に来るから」

「分かりました」

ポケットから取り出したメモに書き込む。

そして、自分の部屋からの地図を描こうとして止められる。文字は良いが図面は駄目だとのこと。始点と終点は明らかにしてはいけないと。やっぱり厳しい。

「あとは厨房ね。続きの食堂は一般の隊員が主に使っているの。ごつくて色気のない連中よ。彼らの食事も用意してもらうわ。遅番、早番もあるし、時間はまちまちになるわね」

頷きながら、バスの食堂から厨房までの道順をメモに書き込む。ページを変えて……左、右、真っ直ぐ、左、右、右と。

「言い忘れていたけれど、三ヶ月は仮契約の期間で時給制になるわ。その期間を超えたたら自動的に本契約へと移行する。本採用になつたら……ま、その話はその時にしましょう。仮契約の開始は明日二十分のバスの夕食からね」

「はい」

一応そのこともメモしておこう。

顔を上げると、立ち止まつたアビゲイルを追い抜いてしまつた事に気付く。慌てて戻ると、彼女は窓を覗きこんでいた。

「ボスたちがお帰りだわ」

私も並んで目を凝らす。

止まつた車のヘッドライトが見えた。三台の車。黒塗りなのだろう、はつきりとした形は見て取れない。

ドアの締まる音か聞こえてきた。いくつかの人影が見える。

「ミッションの後はまずいわね」

アビゲイルは独り言を呟く。

「いらっしゃい」

彼女は窓に張り付く私の腕を取つて歩き出した。

4・マスティマの城（後書き）

次回予告・ミシェルの前に姿を現したマスティマの幹部の男たち。彼女はその中に幼い自分を救ってくれたであろう人物を見つける。
第5話「ミッショングル」

5・ミッション後

程なく廊下の先に五人の男たちの姿が見えた。明かりの下に浮き上がる闇の色。

彼らの着衣が黒だったため、それは一角を埋め尽くす塊のようにも見えた。

体に緊張が走る。彼らの中に幼い私を救ってくれたあの夜の男が含まれているかもしないのだ。

黒髪の青年が先頭を歩く。なびくコートに襟の開かれた白いシャツ。ネクタイは緩められ、両手には黒くぴつたりとした革手袋を着けている。

背丈は私より三十センチほど上に見える。百八十以上あるんじゃないだろうか。

鋭い目は随分前からこちらを捉えている。ライフルを片手にしていることから、スナイパーなのだろう。ボスのボディガードというところだろうか。

その後ろに見えているのはこれまた黒髪の男だった。彼は私たちを見ると笑みを浮かべた。黒い巻き毛が、優しげな笑顔に柔らかさを付け加えていた。

コートは着ていないが、黒い上着を身に着け、しっかりとネクタイを締めている。胸に挿しているのは濃い紫色のポケットチーフ。歳は三十代後半くらいだろうか。落ち着いた雰囲気のある男だった。年齢からして彼がボスなのだろう。

私を救ってくれた人に違いない。

脇にいるのは赤毛の青年。ノーネクタイのシャツに上のほうまでボタンをとめたコート。襟から束ねた癖のある髪がのぞいている。彼は顔をしかめ、不審そうに私を見ていた。

「お疲れ様」

アビゲイルが声をかける。赤毛の男が一転して嫌味ない笑顔を向

ける。

「ミッショーンは完璧だぜ、アビー。ボスの出る幕はなかつたんだがな。……んで、その若造は誰だ？」

「新しいコックよ。マイケルって言うの」「よろしくお願ひします」

アビゲイルの紹介に慌てて挨拶をする。

すると、その横にライフルを持った目つきの悪い男が寄つて来た。私には目もくれず、彼はアビゲイルにそのライフルを押し付けた。

「壊れた」

低くよく響く声だつた。その言葉にただ彼女は銃を見下ろした。
銃床ストックが欠けていた。それで全てを悟つてしまつたようで、彼女は憤然と彼を見やつた。

「壊れたじゃなくて壊したんでしょう」

彼女の怒りを含んだ言葉など何処へやら。

彼は私たちの傍を通り抜けていった。最後に恐ろしく迫力のある一瞥を私にくれて。

世界が切り取られて時間が止まつたかよつに思われた。頭から冷や水をかぶせられたような感覚。

なんという恐ろしい目をした人だろう。息をするのも忘れたほどだ。

「まったく自分のじゃないと扱いが荒いんだから」

収まらないアビゲイルに彼女と同じ赤毛の男が笑いを浮かべる。

「そいつで敵の顎、碎いてたからな」

その言葉に彼女は絶句した。

銃をそんな風に扱うなんて。あの目つきの悪い人ならやりそうだ。できるだけ関わりたくない。

「お前若いな。それに小さいし細い。そんなんでマスティマのコックが務まんのか？」

赤毛の人気が私の顔を覗き込みながら、頭をぽんぽんと叩く。上から振り下ろしてくるので、はつきり言って痛いくらいだ。

あの日の怖いボディガードより少し低めだが、私との身長差は一セントはある。

「ジャズ、最初から脅さないの」

アビゲイルが助け舟を出してくれたお陰で、連打から開放された。

「マイケル、彼はジャザナイア。私の弟で部隊長よ」

「よろしくな、若いの」

今度は腕を叩かれる。そこで彼は一瞬真顔になった。

「おつ、いい筋肉してるじゃねえか」

「料理のためですか？」

私は胸を張る。その言葉に偽りはない。料理人としての意地だった。

にやりと彼は笑った。

その後ろからぼそりと「面白れーの」と言つ声と馬鹿にしたような鼻息が同時に聞こえてくる。

ジャザナイア隊長は肩越しに背後の一人を見やつた。彼らは黙り込んだ。

「まあ頑張れや」

私へと視線を戻すとにこやかに言つ。

そうして、黒い「マー」の男達と共に歩き去つていった。

ジャザナイア隊長はいまいち距離感が分からぬが、悪い人ではなさそうだと思った。

それにボスも親しみの持てる感じのようだ。

歩きながら隊長に「へラへラ笑うな。姉貴に色目使つてんじゃねえ」って、突つ込まれていたし。

アビゲイルは彼らを見送りながら、溜め息をついた。欠けたライフルを恨めしそうに見つめている。

私には銃の修理の大変さや費用など分かるはずもなかつたが、彼女の憂鬱さだけは感じ取れた。

私の視線に気付いた彼女は氣を取り直して言つた。

「あとは厨房ね」

耳にして今まで以上に身が引き締まる。向かいながら胸は高鳴る。私の仕事場。全てを注ぎ込む勝負の場所。妥協は許されない聖域。マスティマのその場所に立つためにどれほどの積み重ねがあったか。

それが今日の前に、壁一枚を隔てた向こうにあるのだ。扉の前で立ち止まり、興奮は最高潮になる。

アビゲイルが開け、電気を付けてくれた。

……とたん、息が詰まりそうになる。何なの、これは。

5・ミッション後（後書き）

次回予告…といつも足を踏み入れたマスティマの食堂。ミシェルは、そこで宿敵にして最強の脅威と対面する。

第6話「隠れ潜む脅威」

6・隠れ潜む脅威

田の前にした食堂。二十人ほどが入れるそのスペースに並べられたイスとテーブル。その上に散らかつたゴミ。

干からびた食べ物や汁が染み付いている。これでは床もテーブルの上もほとんど差はない。

ゴミ箱に溢れているインスタント食品の包装。そして、食べ残し。匂いも相当なものだ。

「これは……酷いわね」

アビゲイルも言葉を詰まらせた。思いつきり眉間に皺が寄っている。

「仮契約の開始は明日の午後からでしたよね？」

私の確認に、口と鼻を手で覆っている彼女は頷く。
「今から掃除してもいいですか。こんな所で食事してたら病気になっちゃいますよ」

マスティマが男所帯だとしてもこれは酷すぎる。アビゲイルもそれを認めた。彼女は深く頷くと、掃除道具の手配をしてくれた。雑巾やモップ、簞にちりとり。掃除機も。それにゴミ袋。掃除に取りかかるべく、ジャケットを脱ぎうとしてやめる。

誰が訪れるかしれない。薄いシャツでは女であることが分かつてしまふ可能性だってあった。仕方なく上着を着たままで掃除を始める。

別の仕事があるからとアビゲイルは出て行ってしまった。
まずはゴミ箱からあふれたゴミを袋に入れる。袖を汚さないよう気をつけて。

じついうところにはアレが出る。

普通なら考えうことだ。だが、私は初めて取りかかった仕事に夢中になっていて、そんなことは思いもしなかった。

よく知ったあの音を聞くまでは。丸まつた紙が地面を転がるよう

な音。

ぎくりとして振り向くとソレはいた。

油でも塗つているかのような艶やかさ。長い触角。まさにアレだ。

六本足の超危険生物！

一匹ではない。私の足元にも。

今まさに足の甲の上を通りかかっている。革靴の上からでもその感触が伝わってくる。

気が付いたときには悲鳴がもれていた。まったく素の声。誰が聞いても女の声だと分かる。

慌てて口を塞ぎ、廊下に飛び出して回りを確認する。

幸い誰もいなかつた。誰か通りかかる様子さえない。アビゲイルももう遠くに行ってしまったようだ。

ほつとしながらも食堂にはもう戻れない。

扉を閉めて考え込む。開ければいる。私の苦手な「」の付く生き物たちが。

他の昆虫に罪はない。アレが特別なのだ。

何が嫌いってあのフォルム。メタリックとは違う、触つたらベタベタしそうな艶のある体。動き方も嫌だ。素早いくせに、時々はたと立ち止まる。何を考へてるのか分からぬ。

人類よりもずっと昔から地球に棲んでいた大先輩ではあるが、残念ながら敬意なんて感じない。

アレとのバトルロイヤルは人類滅亡の日まできっと続くと思う。

私は頭をめぐらせる。ここにじつとしているわけにもいかない。

思い切つて入つて戦う？

幕で叩くか……まともに見れないほど嫌なのにヤツらに当たるはずもない。

掃除機で吸う……アレがまた忘れた頃に吸い込み口から出てくるかもなんて考えるだけでもホラーだ。

殺虫剤を借りに行く……でも、殺虫剤つてすぐに効かないって言うし、飛んだアイツらは方向感覚ないからこっちへ来るかもしれない

いし。

こうして考えをめぐらせているだけでもそつとする。扉の前で苦

惱すること数十分。

「何してんの？」

突然、声をかけられた。

振り返ると、黒いハーフコートのポケットに両手を突っ込んだ銀色の髪の男がいた。

長い前髪で右耳は殆ど見えない。年は私と同じかもつと若いように見える。少年を思わせる華奢な体格だが、もちろん私よりはずっと背が高い。

さつきジャザニア隊長の後ろにいた二人のうちの一人だ。

「いえ、中を掃除してたんですけど、アレが出たもんで」

「アレ？」

上ずつた私の声に首をかしげながらも、彼は躊躇なく食堂の扉を開けた。

「ああ、コレね」

彼は振り返って片手を突き出した。摘むようにして持っているのは長い黒っぽい紐のようなもの。そしてその先にはよく知った橢円の形が。

私は声もなく後退りした。

素手で持っているアレを。どうやつて、いつ、手にしたなんか問題ではない。

よほど酷い顔をしていたのだろう。その人は噴き出した。

「オモチャだよ、オモチャ。面白れー奴だな」

私に向かつて投げてよこす。思わず横に飛び退く。

オモチャだと言われても嫌いなものは嫌いだ。よく出来ているし……。というか、オモチャでもじつと見ていると鳥肌なのだ。

だが、それは甘いものだった。距離を置いてアレのオモチャをやり過ごして、食堂の入り口に立つ。

そして目したもの。私は呻いて口を押された。

アイツらが死んでいる。それも床の上で串刺しになつて。貫いて
いるのはダーツの矢。

私は半分涙目で隣の銀髪の男を見やつた。彼はにやつと笑うと廊
下を振り返つた。

「おいお前、何人か連れて来い」

通りかかった黒いジャケットの男に声をかける。

「はい、グレイさん」

男は慌てて今来た道を走つて戻つていつた。グレイと呼ばれた銀
髪の男よりも年上に見えたが。

私が顔を見上げると、彼は扉に手を付きながら、再び唇の端を上
げて笑つた。

6・隠れ潜む脅威（後書き）

次回予告・食堂の掃除を終えたミシェルたち。彼らの耳に突然響いた爆発音。動搖するマステイマ隊員。現場に駆けつけた彼女が目としたものは……。

第7話「初日の事件」

7・初日の事件

グレイの呼びかけて集まってきたのは五人。いずれも黒いジャケットを身に着けている。

袖にエンブレムもあり、マステイマの制服だと分かる。皆体格もいい。

お陰で掃除はあつとこう間に済んだ。

綺麗になつた食堂を見て思わず笑顔になる。やつぱり食事をするところは清潔でないと。

あとは厨房だが、ここ最近使われた形跡はなく、埃を取るだけで済みそうだ。

お礼を言おうと食堂に戻ると、グレイが棚の奥からなにやら引つ張り出していた。

「あんた、美味しいコーヒーは入れられるか？」

田の前に置かれたのはコーヒーメーカーとコーヒー豆の缶。

「お好みの味かどうか。味見していつてもらえませんか。皆さんも一緒に」

掃除を手伝ってくれた、せめてものねぎらいに。

グレイは頷き、男達は顔を輝かせた。コーヒーでこんなに喜んでもらえるなんて、料理のしがいがありそうだ。

豆をひいたり、ミルクや砂糖を搜したり、コーヒーカップを用意したり、皆協力してくれた。

食堂に香りが広がる。コーヒーが溜まつていいくサーバーに熱い視線が集まる。皆の期待が高まるのが分かつた。

その時だつた。爆発音が遠くに聞こえ、振動が伝わってきた。

グレイが舌打ちをする。男達を見ると彼らは明らかに動搖していた。

「何事ですか？」

私が問うと彼は一度手首のブレスレットを見やつて、それから笑

顔を向けた。

「なんでもない。まあ気にすんな」

なんでもない……なんて訳がない。何かの事故か、敵襲か、どちらかだろ？

開け放しの扉の向こうを苛立ちを口にしながら駆けていくアビゲイルの姿が見えた。

私は彼女の後を追つた。グレイの止める声が聞こえような気がしたが構わなかつた。

向こうはハイヒールだというのに、悲しいかな足の長さの違いが、私よりずっと早い。引き離されそうになりながらも必死に走る。そして、立ち止まつた彼女を見つけたとき、その足元に人がいるのが見えた。

廊下の壁に寄りかかるようにして座り込んでいる。黒いジャケット、この人もマスティマの人だ。

「下手をやつたわね」

手早く上着をはだけさせ、シャツの胸に手を当て触診しながら、彼女は半ば呆れたように言つた。

「僕は……決済を伺いに来ただけで。サインをもらいに」
その若い男は喘ぎながら言つた。ボードに挟んだ書類を握り締めている。

男の顔が一瞬引きつる。大きな音を耳にして、思わず振り向くと、彼の正面の扉が閉まつたところだつた。

遅れてアビゲイルもそれを見やつた。

「今近寄るなんて自殺行為……」

言いかけて私の存在に気付く。

「あら、マイケル。何をしてるの、こんな所で」

心なしか声が殺氣立つてゐるような。

私が言葉を返そとしたりとき、後ろから腕を取られた。

「ちょっと気になつただけだよな。今からコーヒー入れてくれるんだよな」

現れたのはグレイだつた。慌てたように私を後ろに引っ張つていく。

「コーヒーができた頃だ。さあ、行こうぜ」

私の意向など関係なし。有無を言わざず引っ張られ、食堂まで連れ戻される。

扉を閉めると、彼は深い溜め息をついた。

「無茶をするな、あんた。初日からあんなのに巻き込まれたいのか」「でもあの音、ただことじやないですよ」

私の言葉にグレイは苦笑を浮かべる。

そして、自分の手首のブレスレットを外すと私に押し付けた。

「緊急連絡用だ。付けてろ。メッセージと色で連絡が来る。赤でEコードは敵。数字五段階で敵の規模を表して五が最大。黄色が召集。青色が業務連絡だ。今は何も出なかつたから、事故でも敵襲でもない」

だつたら何だというのだろう。

答えを待つも彼はそれ以上何も言わなかつた。私の疑問など無視して、サーバーからカップにコーヒーを注ぎだす。男達はもういかつた。仕事に戻らせたと彼は言つた。

「あんた、ボスに会つてみてどうだつた?」

プレスレットを付けていると、彼はコーヒーを口に含みながら問う。ずっとあんたと言われっぱなし。なんだか居心地が悪い。

「わ……僕の名前はマイケルですよ。グレイさん」

「グレイでいいよ。んで、どうだつたんだ、ミック?」「いきなり呼び方愛称だ。でも先輩だから仕方ないか。

私は廊下で会つたボスの微笑みを思い出した。

「優しそうな方だと。まだちゃんとお話はしていないので分からないんですけど」

その答えにグレイはコーヒーを噴き出した。

「大丈夫ですか?」

気管に入ったようで咳き込んでいる。彼は涙目になりながら私を

見た。顔をしかめながらも唇は笑っている。

「面白れーの。最高だな、ミック」

何が最高なのか分からぬが、とりあえずは褒め言葉なのだろう。私は催促する彼に一杯目のコーヒーを注いだ。これも気に入つてもらえたようだ。

結局、他の人たちに用意した分全てを飲み干してから、彼は上機嫌で食堂から出て行つた。

あんなにカフェインを摂つて眠れるのだろうか。もう深夜だとうのに。

私もゆっくりとは眠れそうにない。明日の夕刻からが契約開始だとしても。

やることは沢山ある。まずは食材の確認。それから厨房の掃除だ。廊下を通りかかった人にアビゲイルの連絡先を聞いて、厨房の電話からかける。

彼女は食材については心配ない、明日正午までには色々と届けるように指示しているからと教えてくれた。

調理器具を使いやすいように並べなおし、包丁を研ぐ。手に馴染まず、満足のいく道具ではないが、とりあえずは私の物が届くまでの辛抱だ。

全てを終えて、道順を書いたのメモを見ながら自分の部屋に戻つた頃には、三時を回つていた。

服を脱ぎ、サポーターを外し、ようやくほつとする。

Tシャツに下着だけとは心もどないが、着替えもないし、スーツを皺だらけにするわけにもいかない。私はベッドに潜り込み、明日（正確には今日だが）のことを考えた。

なんだかまだ実感がわかないが、今自分はマスティマにいるのだ。仮契約ではあるが念願だったマスティマのミックになれたのだ。

興奮に眠気が訪れるることはなく、やつと眠りに付いたのは日が昇り始めた頃だつた。

そして、私は夢の中でもマスティマのミックとして働いていてい

た。

7・初日の事件（後書き）

次回予告：仮契約の日を迎えて働き始めるニシル。マステイマの隊員たちの期待に応えようとする。
第8話「マステイマのコック」

8・マスティマのコック

目が覚めたのは午前八時。

三時間ほどしか眠つてはいないが、高まつた気分に眠氣は感じない。

急いで身なりを整え、厨房に向かう。
食堂に入ると、テーブルに白衣が置かれているのに気付いた。メモが上に乗っている。

『あなたのよ。着替えてね。アビゲイル』

早速上着を脱いで袖を通すとサイズも丁度いい。真新しい白衣に氣も引き締まる。

まずはコーヒーの準備だ。

それから冷凍庫にあつた食パンで朝食にしよう。そういえばベーコンもあつたし、焼いてみるか。野菜もほしいところだがそれは仕方ない。届くまで待つしかない。

用意を始めると、コーヒーの匂いに釣られてきたのか、男が一人顔を覗かせた。

「コーヒーありますよ。どうぞ」

厨房からの言葉に笑顔で入ってくる。一人だけではない。三人いる。

「俺たち遅番で今上がりなんだ。丁度コーヒー飲みたいと思つてたら、いい香りがしたから。缶コーヒーなんて不味いから飲めたもんじゃないし」

「そうそう、これには比べられないな」

彼らは本当においしそうに飲んでくれる。

「パンとベーコンもいかがですが。ちょうど焼こうとしてたところなんです」

三人は大喜びだ。こんなちょっとしたものでしかないのに。

昨日の食堂の掃除を思い出す。あんなのばかりを食べていたから

なんだろうな。

過酷な労働にあれでは体が持つわけがない。これから栄養面も良く考えて食事を作らないと。

軽食を平らげ、礼を言いながら出て行く彼らを見送り、後片付けをしながら考えをめぐらせる。

栄養もあつて美味しい食事。日指すはそれだ。献立表を作つたほうがいいかもしれない。アレルギーのことも考えておかなければ。

私は厨房の電話の脇に置かれたメモに料理の名前を書き出していく。まずは一週間の献立。バランスを考え、料理を入れ替えたり、素材を変えてみたり。

そうこうしているうちに時間は瞬く間に経ち、アビゲイルがスース姿の男を連れてやつてきた。デイケンズ本社からやつてきた食料調達係だという。

食材の入つたダンボール三箱が台車に積まれている。溢れんばかりの野菜。それに肉。調味料や酒の瓶まで入っている。中をチェックし、追加したい物を告げる。メモを取つたその男は空になつた台車を転がしながら帰つていった。

「これで料理のほうは大丈夫かしら」

野菜を整理して冷蔵庫に入れる私に、背後からアビゲイルが声をかける。

「はい」

冷蔵庫を閉め、私は振り返つた。

「これだけあれば、大概のものは作れますよ」

中華だろうがイタリアだろうがフランスだろうが日本だろうが、料理であればほぼ何でも作れる食材の多さだ。

アビゲイルは微笑みを浮かべた。だめだ。この人の笑顔を見るとやつぱり赤面してしまう。それくらいに艶やかなのだ。

「……ところで、ボスの好きな物と嫌いな物って教えてもらえますか。あと食物アレルギーは」

気を取り直して問うと、彼女は思い出すように首をかしげた。

「アレルギーはないわ。好物はとにかく肉。牛肉ね。それにお酒も好き。ワインは毎晩欠かさないわね。嫌いなものはありすぎて私も分からないわ」

あまり参考にはならない答えた。肉と酒だけで食事なんて作れない。まして栄養のバランスを考えてとなると……。

彼女は考え込む私の肩に触れる。

「歴代のコツクたちがメモを残しているんじゃないかしら。厨房になかつた？」

首を横に振る。昨日の掃除のときにもなかつたし、今日もそんなものは見かけなかつた。

棚も引き出しも全部見たのだ。間違いはなかつた。

「探り探り行くしかないわね。あなたなら大丈夫じゃないかと思うわ、私」

彼女の声がほんのちょつぴり自信なさげに聞こえたのは、私の気持ちからだろうか。

肩を叩かれ、指差した先を見ると、食堂の扉から覗いている男達の顔が見えた。

「早速噂が広がつたみたいね」

アビゲイルは食堂まで戻ると彼らを追い払おうとする。

「彼の契約は今晚のボスの食事からよ。あなた達の世話はまだ焼けないわ」

彼女の登場に彼らは明らかに怖気づいている。

「でも、姉さん^{ねえ}」

「あいつら……ベーコン」

「俺たちも……」

途切れ途切れだが、声が聞こえてくる。

私が食堂へ出ると、アビゲイルが困った顔をして振り返った。そこで、私は食堂の扉を全開にしながら言った。

「大丈夫ですよ。もうお昼ですもんね。何か作ります。何か……そ、う、チャーハンはいかがですか」

冷凍庫に大量のライスがあった。あれを使えば、本格的ではないにしろ、そう時間はからず作れる。

「チャーハン、中華料理か！」

男達は廊下で歓喜の声を上げる。

数えると十人いる。計算外だが何とかなるだろ？ 多分。中華鍋がないからフライパンを代用だ。それを二つ使って両手で一気に作る。それしかない。

お師匠様、感謝します。

『片手を怪我したら料理が出来ないなんて料理人ではない。両手を同じように使って初めてプロだ』

そう教えてくれたのは、つい最近まで私の修行をしてくれた中華料理の達人である、師匠だった。

それがここで大いに役立つ。

卵を割るのも、ご飯を皿で返すのも二つ一度で出来る。両手を鍛えたお陰だ。

男達はカウンターで歓声を送ってくれた。その後ろでしばらく笑つて見ていたアビゲイルだが、いつの間にか姿を消していった。付け合せのスープをカップに注ぎ、チャーハンを皿に載せ、彼らに振舞う。

皆豪快にそれも美味しそうに食べててくれる。男の人の食事って見ていて気持ちがいい。

そして食べ終えた彼らは口々に礼を言つて、去つていった。

8・マスティマのコック（後書き）

次回予告・マスティマのコックとしての正式な初仕事。夜を迎えた
ボス専用の食堂でミシェルを待っていたのは……。
第9話「ボスの夕食」

9・ボスの夕食

さて、そろそろボスの夕食の準備に取りかからなければ。
十個の皿とカップを洗い終え、調理器具も片付けた私は考え込む。
それから、皆の分もだ。少なくとも十人分は用意したほうが良さ
そうだ。

まずは何を作るかだ。最初だから得意なものを作るのが無難なん
だろうな。

やっぱリイタリア料理にしようか。一番年季が入っているし、自
分なりのアレンジもききやすいし。

食材を見て回りながらメモを取る。

牛肉もある。それを使った料理をメインにして。

お酒も必要だろう。ちょうどビイタリアワインがダンボールの中に
入っていたし。

一時間程かかってなんとかまとめた。あとはもうこれで作るし
かない。決めてしまえば早いものだ。

下ごしらえを終えた後、ボスの食堂との間を何度も行き来してみ
る。道を間違えました、迷つて遅れました、なんて許されるわけが
ない。運搬用のワゴンと食器を持ち出して、厨房に置いておく。

鍋に入火を入れて、壁に掛けられた時計を見上げ、息を吐く。

あと二時間。長いようで短い。いや、短いようで長いのだろうか。
私はテスト前の学生のように落ち着かない気分でその時を待つて
いた。

午後八時を十分前にして、料理を皿に載せる。

そして、ワゴンを押して廊下へ出て、ボスの食堂へと向かう。

扉の前で腕時計を確認する。三分前だ。ノックをして部屋に入る
と、奥の正面の席に人が座っているのが見えた。

落ち着かずに見渡すと、壁際に立つアビゲイルと皿が合づ。さす

がに白衣は着ておらず、スカートにマスティマの制服であらう黒い上着を身に着けていた。こちらにウインクをくれる。

彼女の存在に勇気をもつて、私は部屋の中を進んだ。

テーブルの横にワゴンを止め、食事の準備を始める。皿の配置は頭に入っていたし、置き方だつて自信があつた。だてに子供の頃からウェイトレスをやつてはいない。

だが、私の手は皿を持ったまま、完全に止まってしまった。アビゲイルを振り返る。彼女は何事かと近寄ってきた。

「ボスは……後でいらっしゃるんですか？」

問い合わせに彼女はまるで要領を得ないと、うつ顔をしていた。

「この人、ボディガードの人ですよね？」

念押ししてみる。彼女は目を見開いて私を見つめた。

「早くしろ」

ボスの席に着いた人が低い声で凄む。上着を脱いでちゃっかりボスの場所にいるなんて、ずうずうしい。

この黒髪の人はボディガードだ。廊下ですれ違ったライフルを持つていた人。どんなに怖がらせても、ボスのために作った料理を渡したりするもんですか。

「ちょっと、マイケル」

彼女は壁際に私を引っ張る。

「彼がマスティマのボスよ。何言つてるの？」

「え？ あのジャザナイヤ隊長の横にいた人じゃ……」

「あれは部隊が捕縛した犯罪者よ」

彼女の答えに一気に血の気が引く。どうも私はとんでもない勘違いをしていたらしい。

にしても、あんな温和そうな犯罪者なんて反則だ。どう見ても椅子に座っているこの人のほうが悪者に見える。

今も彼は恐ろしい目つきで私を睨みつけている。全身の血が凍りつきそうだ。

「いつまで待たせる気だ？」

冷たい刃のような声。含まれる怒りの度合いが増した気がする。

私は慌てて準備を続けた。ボスの視線をかわすようにして。グラ

スを返しかけること一回。それだけで済んだのは奇跡だ。

彼はナイフとフォークをとる前にスープ皿に触れた。黒い革手袋をつけたままで。

もともと上がり気味の眉がさらに吊りあがる。彼が眉を寄せたせ

いだ。

それから、いきなり牛フィレ肉のソテーに手を付けた彼は一口だけで、ナイフもフォークも置いてしまった。

「おいお前、こんな不味いものを俺に食わせる気か？」

迫力のある声にあの目つき。人を威嚇するには効果抜群だ。おまけに苛立つているのが分かる。

しかし、不味いと言われるとほ。味見はちゃんとしたし、そこまでの味ではないと思う。

だが、相手はマステイマのボスで、もちろん私のボスでもある。私は言葉もなく、手の付けられていない料理を見下ろすだけだった。

「アビゲイル、いつもの店に電話しろ。今から行く」

彼の言葉にアビゲイルは肩をすくめ、上着のポケットから携帯電話をとった。

ボスは席を立とうとしていた。

そんな。こんな風に最初の食事が終わってしまうなんて。私はテーブルに歩み寄り、ボスの傍に立つた。

「何処がいけなかつたんでしようか？」

アビゲイルがあっけにとられて、私たちを見つめている。

「ああ？」

ボスは立ち上がり、私を見下ろした。かなりの身長差になる。怖いけど、今さら後には引けない。

私は恐怖を押し殺し、彼を見上げた。

「自分で考える」

次の瞬間、何が起こったのか分からなかつた。

頭に温かいものが降り注いだ。その後に続く硬い感触。顔を滑り落ち、胸を伝わって、絨毯に広がるそれを目にするまでは。私の料理だ。彼は私の頭にスープ皿を投げつけたのだ。思わず力が抜ける。膝を崩して座り込む私の横を、上着を羽織つたボスが通り抜けていった。

頭を下げるとき皿も落ちてきた。

ボスが扉を閉めるのと皿が床に落ちるのは同時だった。

茫然と座り込む私にアビゲイルが声をかける。

「私がボスをちゃんと紹介しなかつたから。ごめんなさいね、マイケル」

違います、アビゲイル。確認しなかつた私が悪いんです。

心の中で思うも言葉として出てこない。ただ、私にできたことは床を片付けることだけ。

体を動かしていないと涙が出てきそうだった。悪寒を感じているように震えが走る。

アビゲイルの慰めの言葉に何も返すことが出来ないまま、私は片付けを終えると、ワゴンを押してボスの食堂を後にした。

9・バスの夕食（後書き）

次回予告：バスの仕打ちにショックを受けるミシェル。食堂で待っていたグレイは、彼女に過去の料理人たちが残したメモを見せるのだが……。

第10話「料理人の覚悟」

厨房に戻つてみると、続きの食堂に一人の男がいた。グレイだ。彼は飲みかけの「コーヒーを置いて、気の毒そうに私を見た。一旦で何が起こったのか察したようだ。

「派手にやられたな。まあ、初日の洗礼はこんなもんだろ」彼も次々と慰めの言葉を口にする。

私は何も言わず、ワゴンから下した食器を厨房の台に並べていった。

「こんな日に会つんだ。今辞めたつて誰も文句は言わねーさ」何も言葉がないせいか、彼はそんなことを言い始める。つづく私の顔を覗きこんで。

「誰がつ……」

不意にもれた、たつた一言が引き金になる。

「誰が辞めるもんですか！」

私は叫びながら勢いよく顔を上げた。

おかげで、グレイと頭をぶつけてしまった。

彼は呻きながら額を押さえて後退りした。

「あんな目に合つて辞める？『冗談じやないですよ。ボスには絶対負けるもんですか』

あんな目つきの悪い「ロツキみたいな人。気持ちを込めて作った料理を粗末にされて、逃げ出すなんて自分が許せない。絶対に。いつか彼には美味しいと言わせてやるんだ。炎の決意は私を昂ぶらせる。

グレイはぽかんと私を見ていた。

そして、笑い出す。まったく愉快だと彼は腹を抱えた。

「ミック、お前みたいな奴を待つてたんだ。面白過ぎだぜ」どうもこの人は何でも面白がる癖があるようだ。

だけど、今そんなことはどうでもいい。

私はボスが手を付けた唯一の皿の料理を取り出したナイフで切り分け、口に運んだ。一口で不味いと言われたものだ。
何が不味いのか見極めなくては。よく味わってみるがまるで分からぬ。

そして、次に思い出したのは、ボスが最初にスープ皿に手をやつていたことだ。

私の頭にかけられたもの。

あれが引き金だとすると温度しかない。確かにかけられたとき、熱くはなかつた。だが、確信はもてない。

皿を前に、腕を組んで考え込んでいると、グレイが目の前にA5サイズの古臭いノートを差し出した。

「歴代のコツクの記録ノートだ。参考になるかもな」アビゲイルが言つていたものだ。

彼が持つていたのか。道理で見つからないはずだ。
私は受け取ると、ページを開いた。日付順になつてているから後ろのほうが新しいものになっている。

最後に書き込まれたページを見てみると、そこにあつたのは献立やレシピなどではなかつた。

『もう駄目だ。俺はもう耐えられない。

これを見た者へ。このときすすでに俺はここにはいないだろう。万歳。

最後の忠告だ。ボスには逆らわないこと。

逆らつたら何をされるか想像しただけでも恐ろしい。今では夢にまで見る。

現実と夢の境目がなくなつてきた。

四六時中付きまとうのはボスの顔。ボスの仕打ち。

いくら高給でもここは我慢できない。

俺は辞める。自由の身だ。自由、なんという素晴らしい響きだろ

最後のまづまづめづが這つたような文字。

何これ。まるで無人島漂流者か投獄された者の書き遺しのようだ。

私はグレイを見やつた。

彼の判断は正しかつたのだろう。

こんなものを先に見せられていたら、私だって決心が揺らいでいたかもしれない。

ボスの献立表のページを見つけてさらに驚く。

殆どが肉料理だ。付け合せも気持ちだけ。サラダなんかもない。きっとボスの恐ろしさに耐えかねて、こんな献立になつてゐるんだろう。

レシピのページも無茶苦茶だ。調味料の量からして味が濃い過ぎる。

じつのは、田那を病氣にして早死にさせたい極悪妻の料理だ。こんな料理をずっと食べていたら、体調がおかしくなるに違ない。

若いうちはともかく、長生きできるとはとても思えない。もしか

したら、ボスが短気なのはこの傾栄養のせいかもしれない。

『温度に気をつける。熱過ぎても温すぎてもボスは許さない』

この走り書きにはアンダーラインが一本も引かれていた。

思わず笑いがもれてしまう。やるべきことははつきりとしているではないか。

グレイがぎょっとしたように私を見ていた。

「ボスの体質改善計画、始めます」

私の宣言に彼はさらに面白がつた。

そう、コックはコックの出来ることをやればいいのだ。

10・料理人の覚悟（後書き）

次回予告・覚悟を決めたミシェルの奮闘は、マステイマ隊員たちの間で噂となる。果敢にボスに挑む彼女であつたが……。

第11話「天使と悪魔」

朝食作り。それは夕食以上に頭の痛い問題だつた。

昨日の夕食のことだけではない。何をどう作るか以前に大きな問題があつた。それはボリュームだ。

我が家朝食はいつもしつかりとしたものだつた。十年前までは父が、それ以降は祖母が作つていた。

イギリス人と日本人。どちらもボリュームのある朝食を好む傾向があるらしい。周りのイタリアの友人に聞くとまったく違つていた。朝からベーコン、焼き魚と聞いて目を丸くしていた。

もちろん、その国民の傾向だけではない。個人差も大きい。

ボスが朝食に重きを置いているか否か、それが核心だ。アビゲイルに聞いてみると、どちらとも言えないとの要領を得ない回答が返つてきた。

コーヒーだけで済ますこともあるし、しつかり食べるときもあると言つのだ。

一番たちが悪い。だけど、大は小を兼ねる。

第一回目の朝食は代表的なイングリッシュ・ブレックファストに決めた。

なんといっても、ここはイギリスだし。その国の例に沿つてみようではないか。

失敗だつた。

料理に手をつけないのはもちろんのこと、最初に手にしたコーヒーで勝負は決まつてしまつた。

一口飲んで、ボスは私を視線で突き刺した。

「これはなんだ？」

「……コーヒーです」

凝視の拷問、約三秒。

カップが宙で返された。足元に注がれるコーヒーに慌てふためく。絨毯に広がるシミに思わず手をさし伸ばす。

コーヒーには届かなかつたが、遅れて放られたカップはダイビングキャッチでなんとか受け止めた。

「エスプレッソじゃねえ」

それは当たり前だ。エスプレッソメーカーで作ったコーヒーじゃないから。

カップを両手で抱えたまま腹ばいで倒れる私の傍を通り抜け、ボスはさつさと出て行ってしまった。

起き上ると絨毯のシミが私の白衣に思いつきり移っていた。朝のコーヒーはエスプレッソ。それがボスから学んだ最初の教訓だった。

エスプレッソメーカーがボスの食堂にあることを教えてくれたのはアビゲイルだ。

食器棚の下の段、木の扉に隠されたそれは、鎖を巻きつけられた。鎖の先は棚の奥の板に螺子で固定されている。

前に何度もグレイが無断で持ち出したという。それでこんな厳重になつているわけか。

だけど、こんな動かせない状態じゃ使えない。まさに宝の持ち腐れだ。

ドライバーを借りてきて、エスプレッソメーカーの解放に取り掛かりながら思った。これがコックの仕事なんだろうかと。

今朝はコーヒーだけだったし。

肝心な料理も一口も食べてもらわなければ話にならない。味だの量だの言つている場合ではない。

もつとも、調理にしてもなんとかこなしているという状態だった。器具がとにかく扱いづらい。手にフィットしないし、バランスも悪い。重さもしつくりとこない。

ここに着いた晩、すぐにイタリアの家に私の道具を送つてもうつように連絡した。だけど着くまでには時間がかかるだろう。

万全の体制で挑みたいところだが、こればかりは仕方ない。

やつとの思いでエスプレッソメーカーを棚から取り出して、ワゴンに移す。汗ばんだ額を手の甲でぬぐつた。

前途は多難だが、何とかするしかないのだ。

驚いたことに、取り寄せた調理道具は夕方に届いた。

ディケンズ本社が関わってくれたためだ。拉致同然に連れてきたあのアーロンという人の罪の意識もあつたのかもしれない。特に皆の目を引いたのは大きな中華鍋だ。中国から持つて帰ってきた、修行終了証明でもあるもの。

あまりの大きさに風呂なのか、中で魚でも飼う氣かと聞かれたほどだ。

鍋を片手で扱う私を隊員たちのぞよめきが包む。

これで少しばましな料理が作れるはずだ。使い慣れた道具を使えば効率も上がるに違いない。

だが、もちろん、それは甘い考えだった。

ボスとの戦いは連敗が続いている。

「熱い」「不味い」「温い」「味がない」etc……。

時として感想はくれるようになつたが、結果は同じだった。

皿を床に放られたこともあつたし、足蹴りを食らつてワゴンを道連れにひっくり返つたこともあった。

料理は何度も投げつけられた。思わず受け止めたときなど「何受け止めてんだ」と二皿目が来た。

ボスの住居は城の一画で執務室の奥にあるという話だった。だから、三食必要なのだ。

日に三度の真剣勝負。コーヒーはクリアした朝食、そして昼食で突っ込まれるのは、味はもちろんのこと、主に盛り付けや焼き加減だった。

「こんなふやけてんの食えるか」「これは旦玉焼きじやねえ」「ハムが湿つてんぞ」

これらを翻訳すると、スープのクルトンはカリカリでなければならぬ、目玉焼きは卵二つで両面焼き黄身半熟が常識だ、生野菜と焼いたハムは別の皿に入れろ……である。

短くて説明なんかないボスの言葉。真意を推し測るだけでも大変だ。皿の数が少ない朝食、昼食でこれだ。夕食こそが本番だといつていい。

救いなのはボスが城にいない日、そして夜があることだ。ヨーロッパを始めとして世界各地を股にかけ、夜間を主な活動時間とするマスティマの任務のお陰だ。

最初の方こそ、仕事明けにも何か食べるべき、疲れている時こそ栄養ある食事をと用意していたが、すぐに考えを改めた。ミツシヨン開けのボスには関わりたくなかつた。いつも以上にご機嫌斜めなのだ。恐ろしくピリピリしている。

声でもかけようものなら、とばっちりが来ることは身をもつて知つた。

そんな日に合いながらも、食事を出し続ける私の奮闘振りは噂になつたようだ。

食堂に入りする隊員たちは皆同情的だつた。彼らも私と同じような、いやもつと酷い仕打ちを受けた者もいた。

「僕なんか決裁のサインをもらいに行つただけなのに」

見覚えのある男は泣きそうな顔で言った。

マスティマに着いて初日、爆発音を聞いて駆けつけたところに倒れていた男だつた。

あの夜の出来事、今なら何が起こつたのか想像できる。止めたグレイの気持ちも。

過去に私の命を救つてくれた人だということを差し引いたとしても、お釣りが来る。

恐ろしいボスに耐えられる者はそつ多くなく、マスティマの隊員たちの入れ替わりが激しいことはすぐに分かつた。彼らは半泣きで最後の挨拶に来てくれたのだから。

女が入れないことも理解できた。あんな扱いをされたら続かないだろう。

ボスが影で皆から^{デヴィル}悪魔だと呼ばれても仕方ない。あの人の名前はデイヴィッドだというから、なるほど少し言葉がかぶっている。

私は父に感謝した。私の名前はミシェル。

イギリス人であった父が、大天使ミカエルにちなんで付けてくれた名前だ。数々の悪魔を成敗した勇敢な天使。

少なくとも名前の上では私に軍配が上がっている。それを考えただけでも、また今日も一日耐えていける。

応援してくれる声と料理を美味しく食べててくれる皆の存在が私をまた強くしてくれるのだ。

私は胸を張る。そして、もう一枚の白衣とタオルを厨房に準備してから、ボスの食事を載せたワゴンを押して行つた。

11・天使と悪魔（後書き）

次回予告：静かな朝の空氣を切り裂く悲鳴。それは城の一画から聞こえてきた。通りかかったミシールは思わぬものを田撃することに……。

第12話：「モーニングコール（前編）」

注）ディヴィッドは聖人の名前にもある、歴史ある美しい名前だと思っています。

ミシールの主觀としてああいう表現になってしましましたが、著者はこの名前に対し何の偏見も中傷の意図もないことを申し添えさせていただきます。

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします

12・モーニングコール（前編）

マスティマの任務には危険がつき物だ。

その内容は多岐に渡つていて、ニコースになることはない裏社会に踏み入つたものだ。

闇世界のバランスを崩壊させる活動の阻止、横流し武器の奪取、犯罪組織の計画の暴露、警察も手を出せない重犯罪者の暗殺など上げればきりがない。

まだ正式な隊員ではないといつことで、詳しくは教えてもらえないが。

他の組織と大きく違うのは幹部が中心となって動くことだ。

他の隊員たちは彼らのサポート役。だが、いくら裏方とは言つても危険なことには変わりはない。

ボスたちが無事に任務をこなしているのは、やはり格段に違う能力の差なのだろう。

城の中でも、時として三角巾で腕をつつたり、包帯を巻いたりしている負傷者を見かける。

処置をするのはもちろん医師であるアビゲイルだ。

一度彼女の治療を見かけたことがある。

それは丁度用事があつて医務室を訪れていたときだった。

痛みで脂汗を流して顔色の真っ青な患者を押さえつけ、外れた肩を入れなおす彼女は鬼気迫るものがあった。

脱臼が治つて痛みの取れた患者とは反対に、私は気分が悪くなつて座り込む始末だった。

任務中の怪我とはいえ大変だ。患者もそしてアビゲイルも。

だが、それらの全てが任務のためではないと氣付くのに、そう時間はかからなかつた。

一日の始まりとなる仕事、ボスの朝食作り。

食事は八時開始なので、私が厨房に出てくるのは六時頃だ。

住み込みの良さを最も感じる時間だ。通つていてはさらに早起きをしなければならなかつただろつ。化粧なんていらなくて、ぎりぎりまで眠れていたとしても。

食堂のカーテンを開ける。

この頃にはもう外は完全に明るくなつてゐる。イギリスでは季節によつて夜明けの時間がかなり違つてくるのだ。

窓を開けて、新鮮な空氣を吸い込む。

この辺りには他に建物もないから、開けた風景、連なる丘はとても美しく見える。

気合を入れて、「コーヒー・メーカーをセットする。ガスの元栓を開けて、下ごしらえの開始だ。

次にボスの食堂に朝食用の食器を取りに行く。脇のテーブルにあるエスプレッソ・メーカーの準備をし、部屋の空氣の入れ替えをする。その間にするのはボスの食卓であるテーブル拭きだ。

これらの作業の時間は七時前くらい。

それはちょうどその後。食器を載せたワゴンを押して厨房を目指して歩いてゐる時だつた。

なんだか騒いでいるような声が聞こえてきたので、私は首をめぐらせた。

廊下には誰一人おらず、部屋の入り口である扉も硬く閉ざされたままだ。

立ち止まつてみたが、何処から聞こえてきたものかは分からなかつた。今は耳を澄ませても何の音も聞こえない。気のせいだらうと思つて、再びワゴンを押し始める。

すると急に聞こえてきたのは人が叫んでゐる声。しかもどんどん近くなつてくる。

あまりの異様さに、足を止めた私の横の扉がいきなり開いた。

部屋から顔色を真つ青にした男が飛び出してきた。口は叫んだ形に固まつていたが、すでに声は出でていない。

「ここからはまるで映画のようだつた。よくあるB級の巨大モンスターが出てくるパニック映画だ。

男は私に向かつて手をさし伸ばした。私に救いを求めていた。

だが、何かが彼の上着の裾を引っ張つた。

男は伸ばした手をそのままに部屋の奥に消えていった。続けて扉も音を立てて閉じる。

そして、聞こえてきたのは更なる悲鳴。

何が起こっているのか分からず、私はその場に立ち尽くした。やがて爆発音と共に地響きがして、悲鳴がぴたりと止まった。何かに縛り付けられていた私の体がやつと動いた。恐る恐る扉に近付いて耳を寄せる。何の音もしない。

そこで、扉のノブに手をかけた。大きく息を付いてからノブを回す。扉を開けるべく、引っ張ろうとした時だった。私の手首を掴むものがいた。

「駄目よ、マイケル」

そう言いながら、静かにと唇に指を押し付けている。

アビゲイルだった。彼女は私の肩に手を回して、そつと扉から離した。

「でもアビゲイル、あの人ガ……」

「今行つても屍が二つになるだけよ」

戸惑う私に彼女は不吉なことを言い出す。

「運が悪かったのよ。可哀想だけど彼には受け入れてもらうしかな

いわ
屍になることを?

私は愕然と彼女の顔を見つめる。酷く真面目な顔つきでアビゲイルは扉に寄ると、耳をそばだてた。

「いいわ」

廊下の先に向つて指で招ぐ。

私が目を向けると、角に一人の隊員の顔が見えた。

彼らは走つてやってきた。そのうちの一人は何やら布を巻きつけ

た一本の棒のようなものを手にしている。

アビゲイルが扉を開けて部屋に入つていくと、彼らも続いた。

12・モーニングホール（前編）（後書き）

次回予告：部屋の中に引きずり込まれた隊員。爆発音と地響き。扉の向こうで何が起こったのか。駆けつけたアビゲイルと共に部屋に入ったミシェルは真実を知るのだが……。

第13話「モーニングホール（後編）」

お話を気に入っていただけまつたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

13・モーニングコール（後編）

私はこつそりと入り口から中を覗いた。

カーテンを閉め切った部屋は薄闇の中に沈んでいた。

窓の形に薄つすらと浮かび上がる光。大きなデスクやソファが影を纏い、重厚な黒の色で存在を示している。

そして、壁際には倒れている人物が見えた。さつき目とした男だろう。

アビゲイルが彼の体を触っている。何処か骨が折れていなか調べているようだ。

呻く声が聞こえる。相当激しく壁に体をぶつけたようで、壁にかかるつている額のようなものがずり下がっている。

男達が手にした一本の棒を広げて布を張った状態にする。担架だ。二人がかりで抱えて乗せると、痛みからか男は大きく喘いだ。運ばれる担架に目が行つていてるときに、別の大きな音を耳にした。何かが床の上に落ちた。そして、その向こう。四角い光の中に黒い人影を見つけた。

別の部屋に続いているのだろう。その部屋から差し込む明かりで、その人は影としてしか映らない。

それでも私の背中に冷たいものが走った。よく見えなくとも分かる。その人が発している眼差しの強さが。

アビゲイルは床の上のそれを拾つた。随分と重そうに抱えてくる。担架の後から彼女が出てきた。

再び、人影へと目をやつたが、すでに扉は閉じられたようで何も見えなくなっていた。

廊下の光の下で彼女が持ち出した物の正体を知る。

それは盾だつた。暴動鎮圧のニュース映像でよく見るような。

ポリカーボネート製の半透明の丸みを帯びた盾。腰をかがめれば大の男でも隠れてしまえる大きな物だった。

しかも盾には落書きがされていた。

一番大きい文字は「イージスの盾」。それから「神よ、お慈悲を」

とか「悪魔退散」やら訳の分からぬ言葉が連ねられている。

「まさにロシアンルーレットね。あの子は運がないわ。起きてこないバスに当たるんだもの」

先に行く担架を見やつてアビゲイルは言つ。

ロシアンルーレットって、確か弾を込めた拳銃の弾倉を回して撃つしていく、死を賭けた遊びだ。凄まじい例えだ。

私は先ほどの人影が放つっていた視線を思い出していた。体がぞくりと震える。

「今のは、まさかバス……？」

「起こされたばかりで超不機嫌なね。さすがのイージスの盾も役に立たなかつたようね」

アビゲイルは盾を覗き込んで苦く笑う。

「衝撃銃を使わせるなんて、よっぽどバスを怒らせたのね」話についていけず、混乱する私に彼女は説明してくれた。ボスを起こす係を隊員たちで回しているのだと。

朝バスが起きてくればセーフ。目覚ましで起きても、もちろんセーフ。問題なのは時間通りに起きてこないときだ。

確率は約七パーセント。それほど高確率でないのは、バスが元々不眠症で寝付けないことがあるからだ。

起きること自体が関係ないことも多いらしい。だが、一旦寝入った彼を無理に起こすとどうなるか、想像は容易だ。

「枕元に護身用の銃を置いているから。悪くすれば、寝ぼけたバスに撃たれるつてわけ」

とんでもない話だ。起こすのも命がけだ。だから、あの盾が必要なのだと呟つ。

だけど、あの男の人は相当ダメージを受けていたが、撃たれた様には見えなかつた。血を流している様子もなかつたし。

その答えもまた想像を超えるものだつた。

「城の中でいつも本物の銃を振り回されちゃかなわないでしょ。だから、ボスには衝撃銃を持たせているの。うちの技術情報部が開発したショック・パルス・ランチャーよ。気晴らしに派手な爆発音はするけど、死にはしないわ。もちろん、撃たれ所が悪ければ分からぬいけど」

今日もそうだけれど、ここに来た初日に聞いた爆発音もそれだったのだろう。

だが、選択をボスがするのなら、危険度は変わらないのではないだろうか。気分によつて本物の銃を使われるなんて、恐ろしすぎる。「大丈夫よ。基本的にはうちにボスに銃なんて必要ないわ。あの声、睨みだけで十分でしよう」

私の脅えを感じ取つたのか、彼女は微笑んで言った。

確かにそう思うが、基本的にという所に引っかかる。例外もあるえるということだ。例えば、ボスを本当に怒らせたときとか。

「それよりマイケル、ボスの朝食の用意は大丈夫なの？」

彼女の言葉が私を非情な現実に引き戻す。

恐る恐る腕時計を見る。八時まであと十五分しかない。一気に血の気が引いた。急げば間に合つだらうか。いや、何とか間に合わせるしかない。

アビゲイルに別れを告げ、慌ててワゴンを押して厨房に戻つた。ボスを本当に怒らせることがあつたらつて、今の私が一番それに近いではないか。

担架で運ばれて行つた隊員が目に浮かぶ。あれは十五分後の私の姿ではないだらうか。

目玉焼きを作ろうとして慌てすぎて黄身を壊してしまつ。えい仕方ない、スクランブルエッグに変更だ。

ハムと一緒にフライパンで焼いている間に、付け合せの野菜を用意する。

慌てているときほど、時は早く流れる。

無事にボスの食堂にたどり着くまで、私の背中は冷たいものが流

れっぱなしだつた。

13・モーニングホール（後編）（後書き）

次回予告…ある日、会議室にコーヒーをと連絡があった。届けたミシェルの田の前には寛ぐ幹部達、そしてボスの姿が。だが、ボスの様子はいつもと違っていて……。

第14話「コーヒー・ブレイク」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

14・コーヒー・ブレイク

ある日、時計の針が午後を回ってしばらく経つた頃、厨房に一本の電話が入った。

幹部会議をしている部屋にコーヒーを届けてもらいたいというものがだつた。

道順を詳しく聞き、準備をする。サーバーを保温性のものに置き換えて、抽出開始だ。

幸いにもエスプレッソをボスが飲むのは朝だから、これでできあがり。

サーバーに並々と入ったコーヒー、コーヒーカップとソーサー、ミルクに砂糖、スプーン。忘れ物はないことを確認して、ワゴンを押して会議室を目指す。

形も色も同じ扉が続く。メモを睨みながらもなんとか目的の扉の前にたどり着いた。

ノックをしてみる。何も反応がない。

メモを再確認すると会議室はなんと隣の扉だつた。危ない危ない。ワゴンを戻して扉の前で立ち止まり、再びノックをする。開けてくれたのはグレイだつた。

中には彼以外に、ボス、ジャザナイヤ隊長、アビゲイルともう一人体の大きな男の人気がいる。

奥の椅子には、テーブルをオットマン代わりにして座つているボス。行儀が悪いし、とんでもなく偉そうに見える。

腕を組んで考え込んでいる様子で、こちらには目もくれない。「待つてたぜ」

グレイは一番に注いだコーヒーを手にした。

「少しは控えたらどうだ」

ジャズ隊長の隣に座つている体格のいい男が声をかける。服の上からでも盛り上がつた筋肉が分かる。コートを詰襟にして

着ている姿はまるで軍人のようだ。

その頬には横一直線の大きな傷跡があつた。短い逆立つた金髪や浅黒い肌、たくましい体と相まって迫力を増している。

「いつも飲みすぎじゃないか、グレイ」

「うるせーな。いーんだよ。オレはこれがねーと体のキレが悪くなんだから」

彼より随分と若いはずのグレイは気安い言葉で返した。

それはカフェイン中毒じゃないんだろうか。そう私は思いながらもソーサーにミルクと砂糖とスプーンをセットし、ボスのテーブルへと寄る。

後ろから置けば、彼の視線とかち合うことはない。
無事にコーヒーを置き、手を引つ込めようとしたとき、ボスの頭が小さく揺れた。

私は瞬時に後ろに飛び退く。カップが小さな音を立ててしまつたが、幸運にもこぼれはしなかつた。数秒待つても何も反応がないので彼の顔を覗きこむ。

眠っている。会議の場で堂々と。

なんていう人だろう。

呆れるというより、起きたときに冷えたコーヒーに気分を害して怒られるのは嫌だ。私は傍のジャズ隊長に耳打ちした。

「起こした方がいいですか？」

「なんだと？」

私の声より数倍は大きな声で聞き返してくる。

隣の男と向かいに座っているアビゲイルが、慌てて静かに人と人差し指を立ててジェスチャーする。

「お前、殺されたいのか」

今度は普通の声だ。

「こいつの眠りを妨げるなんて自殺行為だぞ」

一同ものすごい速さで頷いている。コーヒーを啜っているグレイまでも。

皆その恐ろしい結果を十分知っているようだ。

「だいぶ良くなつてきてるんだがな。昔は所構わらず、扉が開かないと思つたら、向こうでこいつが寝てたなんてこともあつたし」「ジャズ隊長は大物だ。ただの懐かしい昔話をしていくかのようになにこやかな口ぶり。

そんなに楽しい話のはずではないのだけど。ドアをぶつけられたボスのそれからの行動を考えたら。

「……でも、起きた時、冷めたコーヒーなんてあつたら同じことだと思いますけど」

私の言葉に一瞬にして真顔になる。そして撤収だと命令した。

それは賢い選択だとは思うけど、引くのは私だ。

片手を伸ばし、ソーサーを持ち上げる。緊張に手が震え、かちやかちやと音が鳴る。どうかこれで目を覚ましたりしませんように。なんとか無事に回収した時には妙に疲れていた。コーヒーを出すだけで、こんな緊張感なんて味わいたくない。

結局、ワゴンの周りに皆が集まって立ち飲みになった。いざボスが目覚めたときに皆にカツプがあつて自分のところにないとなつたら、また大変だということで。

ああもう、なんでこんなことまで気を遣わなければいけないの。溜め息をつく私。慰めとなつたのはコーヒーを絶賛してくれるグレイだ。

それに隊長やアビゲイルも美味しいといつてくれた。

唯一、あの小山のような男の人だけは、ボスにちらちら目をやりながら、無言で飲んでいた。あんな強面な人なのに、コーヒーに入れたミルクと砂糖の量は半端ではなかつた。相当な甘党らしい。

そのギャップに笑い出しそうになるが、真面目な顔の男と目が合いい、耐えるしかなかつた。

皆でコーヒーを飲みほした。空のサーバーの載つたワゴンを押して私は厨房に戻ることになつた。またコーヒーが必要になつたら呼びだしがくることになつっていた。

ドアを開けて廊下へと出ようとしたときだった。ボスが起きたようだ。欠伸が聞こえる。私の背後にアビゲイルとグレイが立ち、隠してくれた。

「コーヒーの匂いがしねえか？」

開口一番の彼の言葉。

振り返るとアビゲイルとグレイが一斉に首を横に振っている。奥のジャザニアと大きな男の人も。

「そうか？」

ボスは声からして不審そうだ。

これではばれてしまう。そうなつたら誰にその怒りが落ちるのか。コーヒーを持ってきた私ではなく、他の人が怒られことになるのだろうか。

戻りかけた私を後ろ手で出て行くように一人は押しやった。

「匂いつてこれじゃねえか？」

ジャズ隊長がポケットから何やら取り出した。丸い、紙に包まれたもの。飴玉のようだ。

「食うか？」

「ふざけんな」

差し出した手をボスは払う。だが、それで納得したようだ。隊長の機転で助かつた。

大人の男が飴玉なんて持ち歩いているなんてとは思うが、あの人だつたら似合つてる気がする。

それにしてもボスは手間のかかる人だ。

「会議を再開するぞ。議題は何だつたかな」

資料を覗き込み、ジャズ隊長は自然にそう言つた。視線がちらりとこちらに向く。私には出て行けど、一人には戻つて来いということがだ。

「ミッションの更なる効率化について。経費との折り合いのグラフの評価からだ」

ボスの言葉は、今まで眠っていた人の口から出てくるものとは思

えない。ジャザニア隊長よりもずっと状況を把握している。

あれは本当に寝ていたのではなくて、狸寝入りだったのだろうか。
私は音のないようになりつつと外へ出て、扉を閉めた。

安堵の溜め息をつく。

最後に振り返ったとき、ボスと田が合ったように思つたが気のせいだろう。もし本当にそつなら、無事に会議室から出て来られるわけがない。

いつ呼び出しがかかるかもしれない。またコーヒーを用意していなければ。

ワゴンを押して急いで厨房に戻る。だが、その日電話がかかってくことはなかった。

14・コーヒーブレイク（後書き）

次回予告：複雑なボスの好き嫌い。適応し始めたミシールであったが、ボスを満足させるとはまだまだ先のよひで……。

第15話「ボスの地雷原（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はひとつのみです）

15・ボスの地雷原（前編）

「何か変なもん、入れてんだろ？が」

ああ、今晚もまだ。勘弁してください、ボス。

今日はサラダに入れたホウレン草が気に入らないらしい。マスティマに入つて早一ヶ月。この人の嫌いなものはなんとなく分かつてきた。

だが、調理によつて変わるのは本当に面倒くさい。スープに入つていたホウレン草には何も言わなかつたのに。

「こんなもん、ブタに食わせろ」

酷い言われようだ。でも大分慣れてきた。涙も出ない。あるのはふつふつとたぎる鬪志だけ。

彼はサラダを私の頭にぶちまけると、皿を壁に投げつけた。聞こえてくるのは耳に馴染んでしまつた破壊音。

「おい、アビゲイル」

「もう店には連絡してゐるわ」

アビゲイルも呆れ氣味だ。

ボスが去つてから片付けを手伝つてくれるのもいつものことだ。また食器が一枚減つてしまつた。私が買う氣にもなれない高価なものなのに。あの人はまったく気にすることがない。

「進歩はあるようね」

一緒に皿の破片を拾いながら、彼女は思いもかけぬことを言つ。唚然として振り返ると微笑む彼女がそこにいた。

だから弱いんだつてば、この人の笑顔には。顔が赤くなる。

「日によつて一皿目まで大丈夫なことがあるし、文句を言いながらも少し食べてたでしょ」

「そうでしょうか？」

今日は「ブタに食わせろ」まで言われたのに。自分で繰り返して少し凹む。

「ボスはあれであなたに期待してるんだと思うわ。毎回食事の時間にはちゃんと来ているもの。それに嫌なら絶対に口にしない人よ」
ただ私を苛めて楽しんでいるだけのような気もするけど。その機会を逃さないために、席に着いているんじゃないだろうか。

でも物事は受け取りよう。この際、アビゲイルの言葉に乗つておぐか。

「……僕、頑張ります」

「あなたって前向きだから好きよ」

笑顔での褒め言葉に顔が真っ赤になる。

やばい。自分自身を褒められるなんてそう経験ないから、戸惑つてしまふ。

私の反応に彼女はさらりと笑む。見ないようにじょひ。心臓がばくばくだ。

胸を押さえながら考える。

そう、もちろん、私なりに前向きに努力はしてきた。

ボスが食べずに無駄になる料理。

なるべく少量で済ませたい私は、ワゴンの改造を頼んで鍋を直置きできる保温機能をつけてもらつた。

そして選んだのはコース料理。一品一品出していけば被害は最小限で済む。

手をつけることなく残つた料理や試作品は隊員たちに食べてもらえばいい。

ボス専用の高級食材だ。彼らは大喜びで食べて感想までくれる。参考にならないことも多かつたが、時には食べた人にしか思いつかないヒントをもらえることもあつた。
皆の存在は私を支えてくれた。

ボスの料理への助けというだけではない。笑顔で美味しいと言ってくれる人がいるということが、どれだけ料理人である私に力をくれるか。

どうやって彼らに報いれば良いだろう。私にできることはなんだ

ろうか。

そして、思いついたのがスイーツだ。皆の疲れを癒してくれるもの。

マスティマは男ばかりだから、あまり甘すぎず、カロリーも考えたものを作つたらしい。

だけど、あいにく製菓は専門外だ。その上、低カロリーで美味しい物という条件付。他に知恵を借りるしかない。

私は母にメールをして相談した。

私を生むまでパティシエを志して勉強していた母。途中でやめたのが悔やまれるほどだ。

彼女の作るデザートは最高だった。幼い頃、父と私とで取り合いになつたものだ。

母からの返事はすぐに来た。応援のメッセージと共にたくさんのレシピが。大助かりだ。

早速、次の日から調理に取りかかる。コーヒーの香りと共に甘い匂いが厨房からもれ出してもると、食堂にはさらに人が集まるようになつた。

15・ボスの地雷原（前編）（後書き）

次回予告…!! シェルは、隊員たちのためにスイーツを用意することに。評判は上々。グレイと一緒に幹部会議にいた大柄な男までやつてくれるようになつて……。

第16話「ボスの地雷原（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

「今日はティラミス。一人一個までですよ」

私は食堂で声を張り上げる。

食べるのは男の人だから切り分けは大きめにして、カロリーを考えて個数制限をした。

大好評だ。次は何がいいとかリクエストまで来る。

いつものように訪れたグレイは、人の多さに驚いていたが。

彼は半分でいいからとケーキを分けていた。それを足してもらつていたのが、意外にも幹部会議にいた体格のいい短い金髪の人だ。私と目が合うと、彼は決まり悪そうに肩を丸めた。

「いや、試食に来ただけだ。隊員たちにどんなものを食べさせていけるか気になつてな」

「ただ甘いものが好きだけだろ?」

グレイの言葉に彼は慌てた。

「おひグレイ、話が違うぞ」

「いーじやん、レイバン。ビーセまた来るんだし。先に言つとけば」

「いや、そうじゃなくてだな……自分は……」

しじろもじろだ。大きい体を縮込ませている様を見ていると可哀想になつてくる。

私は彼の前にコーヒーを差し出した。もちろんミルクと砂糖を添えて。

「どうぞ、レイバンさん。いつでもいらしてください。毎日違うデザートを用意しますから」

「毎日、違う?」

彼の目が輝く。本当に好物のようだ。私は頷いた。

聞いたかというように彼は何度も脇のグレイを見やつた。グレイはそれを無視している。

「さんとか付けなくていいんだよ、ミック。呼び捨てで。オレの後

輩なんだし」

どう見てもグレイのせりが十歳くらいは年下に見えるのだけど。文句も言わず、じつと耐えているから本当なのだろう。この組織の上下関係ははつきりしている。

悲しげな瞳に折れたのは、グレイのほうだった。体は大きいのにつぶらな瞳だ。

「へーへー、オレはあんまり甘いもの好きじゃねーけどな。ま、これなら半分くらいは付き合つてやるぜ」

フォークにケーキを乗せて、一口食べる。

すると、レイバンもまた食べ始めた。一口一口味わうように嚥みしめている。唸り声がもれてることからして、満足な味だとは思うのだけど、彼はなに一言口にしない。

「まあ、こんなものだろ?」

すべて食べ終わって最後に出たのはその皿葉だった。

「てめー、正直に美味いって言えよ」

グレイがせつつく。だが、彼はそれ以上言わずに席を立ち、食堂を出て行ってしまった。

「あいつ、お前にライバル心燃やしてんだぜ」
レイバンの姿が見えなくなつて、グレイはテーブルに肘を付いて私を見上げた。

「お前はすぐに辞めるつて言つているくせにな。このままずっといて、ボスの気に入りにならないか冷や冷やしてるんだ。あいつは狂信的なボス信奉者だからな」

「ボスの気に入り? そんなことありえませんよ。今日だつて料理を壁に投げつけられたんですから」

私の答えにグレイはにやつと笑う。意味深な笑い方だ。

「オレはお前がずっと続けるに賭けてるんだ。あいつに勝つてもらつちゃ困るんだよ」

なるほど、そういうこととか。いくら賭けていいかは分からぬが、お金が絡んでいるから、こんなことを言うんだ。なんだか気が抜け

てしまつた。

「あなたにはお世話になつてゐし、負けをせませんよ」「私は笑いながら言つた。

グレイはコーヒー ハーフカップを手に取つた。

「あいつの好きな物作つてゐる間は大丈夫だろうが、後ろには氣をつけろよ。男の嫉妬つていうのもたちが悪いんだからな」

悪い冗談だと思い、笑つてゐると、彼は真顔でコーヒーを飲んでいた。

まさか、そんなことが本当なんであるんだろうか。このマスティマ内部で。

「まあ、城の中でそんなことしようもんなら、ボスの鉄槌が下るだらうけどな」

彼の言葉はますます本氣だ。私の笑いも思わず引きつる。当のグレイはいつもと変わらなかつた。固まる私に向かつてコーヒーの催促をした。

まったくマスティマの人たちは（特に幹部は）、私の常識を超えてゐる。皆一癖も二癖もある人たちはばかりだ。

次の日もレイバンはグレイにくつついで、好物を食べに來た。大きな手でちっこいタルトを頬張る姿は微笑ましくも見える。美味いことを言つてはもらえないが、グレイが残した分を紙ナップキンに包んで、ポケットにしまうのを目にてしまつた。

あんなのを見てしまつたら、明日も頑張つて作らうと思つじやないの。

私は無言ではあるが常連の訪問者を得て、嬉しくなつてしまつた。

他の隊員たちには好評だつたスイーツ。だけど、ボスにはまるで効果がなかつた。

食事の後に出しつゝまるで手を付けようとほしない。それどころか、突き返されてしまつた。

「男がこんなもん食うか」とのお小言付だ。

レイバンは嬉しそうに食べていますけど。そう言いかけて、慌てて口を塞ぐ。そんなことを言つたら最後、とばっちりが彼へと行きそうだ。

だいたいボスは好き嫌いが多すぎるのだ。特にスパイスは地雷原だ。香草も要注意だ。

コリアンダーなんかは爆発する類だ。試したことはないけれど、おそらく間違いない。タイやベトナム料理は詳しくないから冒険する気にもならないけれど。

新しい料理を出すときには、いつもただならぬ緊張感に包まれる。そして、文句を言われずに済んだときのあの脱力感。

私がつけるコックのメモ帳はどんどん埋まっていった。失敗したときの料理とレシピは細かく記しておく。一度と同じ失敗を繰り返さないように。

お陰で、すぐいつぱいになり新しいメモ帳が必要になつた。

いつしかこのメモに何も書かずに済む日が来るのだろうか。私は見えない未来を思つて、溜め息をつく。そして、今日もまた新しいページに書き込んでいくのだった。

16・ボスの地雷原（後編）（後書き）

次回予告・マステイマの城の庭でミシユルが目にした黒い人だから。聞こえてきたアイリッシュ・ダンスの音楽。これから何が始まるのか……。

第17話「サロン・ド・マステイマ（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

髪というのは人それぞれだ。形や色、質感。どれも個性だ。例えば、アビゲイルとジャザナイア隊長姉弟の巻き毛は燃えるような赤い色。

一人とも長いので遠くからでも目立つ。見事過ぎて地毛かどうか疑いたくなるくらいだ。

レイバンの短い金髪は刈りたての芝生のようだ。思わず手を伸ばして触つてみたくなる。マスティマーの背の高さ。身長の差から考えると、そんな機会は巡ってきたかもしれないけれど。

グレイの髪は銀色でさらさらだ。長めの前髪がいつも左耳を隠している。搔き分けている仕草なんて見ないから、髪越しに耳を使っているのだろう。透明感ある髪だからその辺りは可能そうだ。

マスティマの象徴色でもある真の黒の髪を持つのはボスだ。艶があつてしなやかだ。この人の第一印象はきっと皆“田つきの悪い黒髪の男”だろう。それしか頭に残らない。残る余地がない。

そして、私の髪はといふと、一言で済ますなら典型的なクセつ毛。その上、伸びるのが早い。背丈に行く分のエネルギーが髪に行っているのではと思うほどだ。

一番扱いづらるのが中途半端な長さ。あちこち跳ねて收拾が付かなくなる。

それに微妙な髪の色。ダークブロンドと言えば聞こえがいいが、田陰ではほとんど茶に見える、かるうじての金髪。

色はともかく、この髪質は幼い頃からずっと疎ましいものだった。マスティマに入る前に短く刈った髪も今やかなり怪しい雰囲気になってしまっている。

そろそろ街へ出で切つてこなければ。

そんな風に思つも、仕事の忙しさに流されて口などとどん経つていく。

やばくなってきた。このままでは爆発後の髪型になりかねない。言い方を良くするなら、ボンバー・ヘッドという奴だ。

廊下の窓ガラスに映りこんだ姿に足を止める。このまま、医務室に行つてアビゲイルに時間休を貰えるようお願いしよう。だが、私の足は止まつたままだつた。覗いた窓の向こうに見えたものに引きつけられたのだ。

下の中庭にブルーシートが広げられていた。隊員たちがぞろぞろと集まつてきている。

何が始まるのだろう。

窓から見下ろしていると、赤い頭がひょいと動いて私を見上げた。ジヤザナ�이ア隊長だ。彼は白い歯を見せると手招いた。

隊長に呼ばれたからには無視するわけにはいかない。それに好奇心もあった。

中庭に下りると、隊員たちがシートの上にパイプ椅子を並べていた。横一列に五席。

集まつている人数からみるとあまりに少ない数だ。まさか椅子取りゲームじゃないだろうけど。

隊長が名前を呼びかけている。四人の隊員が応えて席に座つた。そして、彼は手を腰にあてたまま振り向いた。傍へやってきて顔を覗きこむなり、「うん」と唸る。片手を私の頭に乗せると、くしゃくしゃに髪を撫でた。

「よし、マイケル。お前もそこに座れ」

一つ空いた席を指し示す。

なんだか分からぬが、隊長命令だ。

私は辺りをきよろきよろと見回しながら、席に着いた。

何があるのかは不明だが、そう悪いことではなさそうだ。席に着いている人も回りにいる人の表情も柔らかい。笑顔を見せている人もいる。

「リクエストは簡潔にな。左から順番に言つていけ」

隊長は私の後ろに立つていて、左手に四席並んでいる。というこ

とは私が最後だ。

「J・デップ」

隊員たちは次々に言つていぐ。アメリカの映画俳優、それにスペインチーム在籍のサッカー選手の名前だ。

「五分」

「お任せ」

彼らの言葉に周りの人たちは笑つて離し立てる。

「デップにロナウド？ 勝手なこと言つてんなー」

ざわめきを割つたのは知つた声。グレイだ。

私たちを取り囲んでいた隊員が彼のために道を開ける。とたんに音楽が聞こえてきた。軽やかなダンスでも踊れそうな音楽。これはアイリッシュ・シュ・ダンスの曲だ。

唇の端を上げて笑つているグレイは、右肩に大きなスピーカーの付いたCDデッキを乗せていた。その格好はいつもの制服姿ではない。カーキ色のつなぎを身に着けている。

彼は傍の隊員にCDデッキを任せると、腕をまくった。

振り返つたその手には四角い物が握られていた。

「始めるぞ。動くなよ」

左手の物が震えて音を発し始める。この音は耳にしたことがある。この音は……。

私たちの前をオモチャの飛行機を持って走る少年のようにグレイが通り過ぎていく。

エンジン音の真似は必要なかつた。手にした機械の音がそれにそつくりだつたのだ。

17・サロン・ド・マステイマ（前編）（後編）

次回予告・呪われた五体は半年に一回のグレイ演出のショー。犠牲者五人のうちに選ばれたミシル。観客達に囲まれ、逃げ出すことも出来ない彼女の運命は……。

第18話「サロン・ド・マステイマ（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はひとつのみです）

心の中の悲鳴は誰にも届かない。

逃げ出したいが、できなかつた。後ろからジャズ隊長の手が肩を押さえているからだ。万力みたいにびくともしない。

周りを花びらのようなものが舞つてゐる。

もちろん、これは花吹雪などではない。散つてゐるのは髪の毛だつた。

右手に鍔、左手にバリカンを手にしたグレイが踊るように私たち五人の前を動いている。

今は一人がヘッドロックの体勢。バリカンを滑らす姿は、羊の毛刈りのようだ。

アイリッシュ音楽にぴったりはまつてゐる。

きつと本業の羊刈りの人もびっくりだ。スピードが半端ではない。飛び散る髪の毛が四方八方に舞い散る。

そうだ。私たちは哀れな生贊の子羊のようなものだ。

見世物に興じる観客達の歓声。

身動きの取れない私は観念して目を閉じた。

どんな悲惨な髪型になろうが、毛はまた生えてくる。いざとなれば帽子やスカーフでも被つてごまかせばいい。それに犠牲者が私だけでないのも救いだつた。

どれくらい時間が経つたか。十分か十五分くらいなものだらう。不意に音楽が止まり、喝采に混じつて盛大な拍手が聞こえてきた。恐る恐る目を開けてみる。私たちの前に立つたグレイは腕を組んでいる。満足げな笑顔だ。

そりや、あれだけ派手な催しをやり遂げた後だもの。気分だつて爽快だらう。

白衣の襟から入つた髪がちくちくする。襟元をパタパタやりながら

ら、横にいる被害者の会の人たちを見やつた。

あれ。皆笑顔だ。手鏡を片手に角度を変えて自分の姿を見やつている。

そこにいるのはJ・テップ。それにC・ロナウドではないか。少なくとも髪型は。

あと一人は綺麗な五分刈り。残る一人はファッシュ・ショーン誌の表紙に出てきそうな伊達男ぶりだ。

びっくりして私の口は半開きだ。唇が開いたままのところへグレイが近付いてきた。

「お前はリクエストねーから、伸びた分くらい切つてみた」

手鏡を渡しながら言う。

鏡を覗くと、すっきりだ。不ぞろいだった毛が見事に切りそろえられている。プロも顔負けの仕事だ。あんな短時間にそれも五人一度でなんて。

「凄い」

本音が思わずポロリと出た。

「グレイの器用さは折り紙付きだからな。それに年に一度だけ。なかなか見れねえんだぞ」

ジャズ隊長の声は興奮しているようで大きい。

グレイは肩をくわめた。

「年中やつてるショーンなんかつまんねーの。面白くねーもん」
この人の基準ってやつぱり面白いかそうでないかみたいだ。だけど、それに腕が付いてくるなんて。まだ若いのに未恐ろしい人だ。

「隊長も切つてやろーか。少し伸びすぎじゃねーの？」

「いやあ。おれは美容師決めてつから」

鉗を取り出したグレイに隊長は慌てたようだ。ふさふさした赤毛を撫でながら退散した。

「隊長は自分の髪、こだわってるもんな」

腕を知つていながら、あの態度。グレイの言葉に納得した。そういえばジャズ隊長つてよく自分の髪を触つている気がする。

姉であるアビゲイルも同じだが、パー・マをかけたかのように巻く赤毛。その鮮やかな色は今まで見たこともないほどだ。大事に思う気持ちも分かる。

いつも一つに束ねた髪はジャザナイア隊長のトレーデマークでもあつた。どんなに遠くからでも彼だと分かる。

現に城に入つて廊下を抜けしていく姿が窓越しに判別できるくらいだ。

「三ミリットまであと三分。わざと片付けて仕事に戻れ。ボスにどうされつぞ」

グレイが腕時計を見ながら歯を急かしている。

ボスとの言葉を聞いて、隊員たちの動きが格段に早くなつた。あつという間にブルーシートは丸められ、パイプ椅子も撤去された。城の一階の部屋を見上げたグレイは、もう一度腕時計にちらりと目をやつた。

一般的の建築物よりも高い位置。二階から四階に当たるくらい。あの辺りはボスの執務室だ。窓ガラスに日の光が反射して中は見えなかつたが。

「グレイ、今回のことってボスは……」

グレイはいつも調子でやりと笑う。

「報告済。年一回の恒例行事だもん。内緒なんかできねー」「よく許可が下りましたね」

「実益を兼ねるしな。けど、時間制限の条件付。今頃、上から様子を見るんじゃねーか」

十分ありえる話だ。

再びボスの部屋を見上げようとした私だが、できなかつた。

グレイに頭を押さえられていたからだ。

「不用意に顔を上げるな。何が降つて来るか分かんねーぞ」

これもまたありえそうな話だ。そつとしながらも頷く。

「よし」

グレイが周りを見回して、声を上げたときには中庭には私たち一

人しかいなかつた。

たくさんいた野次馬も嘘のよう。お祭り後の静けさだ。

「置いてくぞ」

あまりにも早い撤収。茫然としていると声をかけられた。

当のグレイはすでにつなぎを脱いでいた。腕にかけて、その上口

ートまで着ている。一体いつの間に。

一人突っ立っている私は阿呆のようだ。城の入り口に消える彼の後ろ姿を走って追いかけた。

18 サロン・ド・マスティマ（後編）（後書き）

次回予告：突然、緊急連絡用のブレスレットにAngeの文字。食堂に現れた少女。この二つのことには一体どんなつながりがある……？

第19話「コードAnge」（前編）

話を氣に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランギングの表示はなしのみです）

時は昼下がり。今日のお菓子、クッキーをオーブンで焼いていた頃だった。

昼時の混雑を終えたばかりで、誰もいない食堂で私は遅い昼食を食べていた。

残ったサンドイッチを頬張る。ゆっくりと出来る貴重な時間だ。コーヒーに手をやつたとき、ブレスレットが震えた。何事かと表示を見やる。

黒い液晶に青「コード」ということは緊急業務連絡。続く文字はAngleだ。業務連絡で天使？

まるで訳が分からない。だが、すぐに城内が騒がしいことに気付いた。廊下を隊員たちが走り回っている。

声をかけようとしたとき、ひときわ大きな人影が近付いてきた。レイバンだ。黒いコートを翻して走ってくる様は鬼気に満ちている。彼は立ち止まると、私の肩越しに食堂を見渡した。

「何があつたんですか？」

私の問いかけにも答えようとせず、辺りに目を光らせている。こんな厳しい目をした彼は初めて見る。

「誰か入つてこなかつたか？ 自分たち以外に」

やつと私を見て尋ねた。

だが首を横に振ると、彼は毒づいて、他には何も言わずに走つて行つてしまつた。

一体何が起こつているんだろ？ また私は蚊帳の外だ。
と、いけない。オープニングの時間がそろそろだ。厨房へ戻ろうとした私の前に、それは現れた。

真っ白いふわふわとした素材の白いワンピースを着た少女。肩までのストレーントの金髪は、艶のリングを作り出している。大きな青い瞳は私を真つ直ぐに見上げる。年は三、四歳くらいでふつくらと

した頬が愛らしい。

彼女はテーブルの影から出てきた。レイバンが見渡したときは隠れていたのだろう。

「いい匂いがする」

「彼女は胸いつぱいにクッキーの匂いを吸い込む。

「クッキーが焼けたから。食べてみる？」

額くその子は本当に可愛らしかった。

私はもうレイバンの言葉はもちろん、何故こんな所に子供がいるかの疑問さえどうでも良くなってしまった。いそいそと厨房に戻り、クッキーを皿に載せる。

「飲み物はカフェオレがいいかな。コーヒーにミルクとお砂糖入れたの」

「温かいミルクがいい」

この子の言うことなら何でも聞いてあげたくなってしまう。牛乳をカップに入れてレンジで温め、彼女の前に置いた。

「美味しい。プリシラ、こんな美味しいの初めて食べたよ」

「こぼしながらも一生懸命に食べて、そんなことを言ってくれる。私は本当に嬉しくなつてしまつた。

「プリシラちゃんつて言つんだね。私はミシヨルよ。よろしくね」

言つてしまつてから気付く。本当の名前を口にしてしまつた。明らかにのぼせている。

私は冷静を取り戻そつと右手で頬を叩いた。一度言つてしまつた言葉までは取り返せないが、子供だし、なんとか「まかせるだろう。「プリシラちゃんはどうしてここに来たのかな」

レイバンが誰か来なかつたかと言つていたのを思い出として、尋ねる。それにコード Angle にこのことではないかと考えをめぐらせる。

「いい匂いがしたから。それに怖い顔のお化けが追いかけてくるんだもん。すつごく大きいの」

両手を広げて表現する。それはレイバンその人のことだろう。子

供とはいって、こんな言われよう。氣の毒だ。

「ここに来てよかつた。美味しいお菓子食べれたもん」

椅子で足をばたばたさせながら言つ。

なんて可愛いことを言つてくれるんだりつ。冷静な気持ちも吹っ飛んでしまいそうだ。

「そう？　だつたら少し持つて帰つたら……」

クッキーを詰める袋を取りこ、厨房に行こうとしたときだつた。

「プリシラ！」

息を切らせたアビゲイルが駆け込んできた。

相當に慌ててきたのだろう。いつもきちんと整えられていく髪がほつれている。彼女は少女を抱きしめた。

「もう、この子つたら。ママかパパと一緒にやないと来てはいけないって言つてるでしょ？」

私は豆鉄砲をくらつた鳩の気持ちがなんとなく分かつた。

ママ……ところどは、この子はアビゲイルの子供といつことへ。混乱する私をよそに二人は会話を続けている。

「だつてママ、窓開けてたらね、すつこくいこ匂いがしたんだよ？」しかも話の流れがこっちに来ている。

私は恐る恐る尋ねた。

「その子、アビゲイルの子供ですか？」

「そうよ。私の子。プリシラよ」

なんだか力が抜けた。あの「*Barcode*」は迷子探しの「*Barcode*」だつたのか。

19 · ハード A n g e l (前編) (後書き)

次回予告・アビゲイルの娘プリシラ。ミシルのクッキーを氣に入ってくれたその子供。だが、彼女の好みはミシルの度肝を抜かせるもので……。

第20話「ハードAngel」(後編)

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします(ランキングの表示はPCのみです)

プリシラは私のクッキーがどんなに美味しいかアビゲイルに力説している。母親の口にクッキーを押し付けてまで。

アビゲイルは確か初めて私の料理を口にしたはずだ。彼女は驚いたように目を見張つて、このクッキーのレシピを教えてほしいと言つた。

レシピくらい御安い御用。私は席を立とつとした。だが、それより早くプリシラが椅子から飛び降りた。

「ボスー！」

彼女は叫んで、一直線に廊下を目指して駆けていく。

瞬間、アビゲイルの顔が青ざめた。彼女は慌てて立ち上がり、娘の後を追つた。私も一人の後を追つ。

廊下の先に、立ち止まつて振り返るボスの姿と駆けつけけるプリシラの後ろ姿が見えた。

彼の顔は遠くからでもはつきりと分かるほど引きつっていた。眉間に深い皺。唇はへの字に歪んでいる。

「ボスー、抱っこー」

くるりと背を向けて足早に歩き出した彼を、叫びながら必死で追いかけている。

ボスの足取りは競歩かと思つほどだ。

当然、プリシラは追ふことは出来ず、すぐにアビゲイルの腕に捕らえられた。

「抱っこー、ボスに抱っこがいいのー」

彼女は泣きわめいている。

アビゲイルは彼女の体を揺らすようにしてなだめる。

「ボスは忙しいのよ。無理を言つては駄目よ」とか言いながら。

食堂に戻つてからも泣き続けていた。クッキーでつるつとしても無駄だった。

どれくらい時間が経った頃か、散々泣きつくした彼女は疲れたのだろう、眠ってしまった。

「何故かボスに抱っこされることに執着しててね」

アビゲイルは腕の中の子供を見ながら、疲労の見える声で言った。
「最初にパーティーで会わせたときからそうだったもの。ボスに抱っこせがんね。の人、固まっていたわ。後で私と夫が呼び出されて、えらく怒られたわ」

確かにボスは背が高いから見晴らしはよさげだけだ。

それにしてもさつきのボスの反応。その時の状況が日に浮かぶようだ。こっちが冷や汗出てくる。

「プリシラちゃんはボスが怖くないんですかね」

レイバンはお化けだと黙つて怖がっていたのに、本当に不思議だ。ボスの方が何倍も目つき悪いし、声だって低くて迫力あるのに。

「不思議とね。逆にボスがこの子を怖がってるみたいよ」

確かにそうみたいだった。あんな引きつったボスの顔、そう見れるものではないだろう。こんな可愛い子の何が怖いのか分からなければど。

すやすやと眠っているこの子は本当に天使のようだ。

「それで緊急連絡で来たんですね」

レイバンが必死で探していた本当の訳。あれはボスとプリシラの接触を防ぐためだったのかと、今さらながらに理解する。

「マイケル、悪いのだけど今度お菓子を作つたら……」

遠慮がちなアビゲイルの声。私は頷いた。

「お届けしますよ。僕の作ったものを作っただけ美味しいように食べててくれるなら喜んで」

私はビニール袋にクッキーを詰めると、眠る彼女の手に握らせた。ぎゅっと握りこむ手はまだ小さく、柔らかい。

私を支えてくれる人がまた一人増えた。温かい気持ちになりながら、そう思った。

これほど心強いことはない。こんな可愛らしい天使の加護を受け

るなんて。

私はまた新たにボスと対決する勇気をもつて、どんな仕打ちを受けようと耐えられる自信ができた。

次回予告・勤務明けの隊員と親睦を深めるジャザナイア隊長。酒のつまみを頼まれ、届ける//シエル。隊長の笑い声が思わずものを引き寄せる……。

第21話「ジャズ隊長のお楽しみ」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

21・ジャズ隊長のお楽しみ

「ナックの仕事は二食を作るだけではない。他にも沢山あるとこうことを知った。

お菓子作りは今や毎日のことだつたし、会議があれば休憩時間にコーヒーの差し入れもした。あとはお酒の用意、つまみなんかも準備することもあった。

要するに食に関するものなら何でもありだ。

お酒に関してだけ言うなら、ボスは手がかかるない。

毎晩、トレーにワインを一本用意して執務室に置いておく。つまりも適当でいい。ナツツだろうがチーズだろうが文句を言われることはない。翌朝空になつた瓶と皿をトレーごと回収するだけだ。

ちなみに執務室とはボスの私室と続きになつていて、例の目覚まし係の恐ろしい結末を目にしたあの場所のこと。

ボスより手がかかるのはジャザナイア隊長だ。

彼は賭けカードが趣味らしい。会議室の横の小部屋を貸し切り状態。勤務を終えた隊員とお酒を飲みながら、よく朝まで騒いでいる。お酒の種類によつてつまみの内容も毎回えてほしいなどと言つから、困つたものだ。

一晩に何種類も手を付けるものだから、予測がまったく不能なのだ。催促されたときに作るしかない。

今晩は、ビールに合うものをと要望されたので、チーズ乗せクラッカーにフライドポテト、生ハムの野菜サンドを用意してみた。

丁度二皿なので、ワゴンを使うこともないと思い、両手に持つて運ぶ。

相当盛り上がつてゐるようだ。廊下の随分手前から騒いでいる声が聞こえる。

この大きな笑い声は隊長だ。話し声は普通なのに、この人の笑い声ときたら通りが良く、三軒先の家にでも届くくらいだ。特に酔つ

ているときはさらに大きくなる。

両手が塞がっているとノックがし辛い。ワゴンを使うべきだったと思うも、後の祭りだ。

仕方なく、片手に一皿載せて、胸との間に落ちないように挟んでノックをした。

騒々しさに消され、返事があつたのかさえ分からない。少し待つて、ドアノブを回して扉を開けた。

丁度カードの決着が着いたらしく、隊長がガツツポーズをしていた。

歓喜の叫びを上げている。ドアの間から見えるのは彼の背中だけだつたけども。

「やつたぜ、今夜はおれが三連勝だあ！」

続くのは恐ろしいほど鼓膜を刺激する笑い声だ。お酒も相当に入っているのだらう。両手が自由なら耳を塞ぎたくなるほどだ。

いつものごとく散らかった部屋。床にはビールの空き缶に混じってワインの瓶が転がっている。ゴミ箱が役目を果たしていない。

中央には、テーブル四方を取り囲んでいつものメンバーがそろっている。いや、一人は席にいない。トイレにでも行っているのだろうか。

肩で押しやつていた扉の重さがふつと軽くなつた。誰かが持ってくれた。もう一人が戻ってきたのだらう。

「あ、ありがとうござ……」

お礼を言いながら振り返り、その誰かを見て言葉を失う。

それは賭けカードのメンバーなどではなかつた。よりもよつてあの人だつた。

濃いグレーの寝巻きの上にマスティマのコートを羽織つている。足元は素足にスリッパだ。明らかに場違いだが、みなぎる迫力が全てを圧倒していた。

田つきの悪さが半端ではない。いつもにも増している。不愉快そうな唸り声を上げて、彼は部屋の中に入つていった。

「次もいくからな。カードよこせ」

背を向けているジャズ隊長はまだ気付いていない。両側の二人は

氣付いた。彼らはあまりの恐怖に凍り付いている。

「なんだ、ノリが悪いぞ」

持っていたビール缶を空けた隊長は、肩越しに後ろに放り投げる。床に落ちるはずの缶は壁に当たって高い音を立てた。彼の背後にいる人物に手で弾き飛ばされたからだ。

振り向いた隊長は、ようやくボスの存在に氣付いた。

「おうボス、なにしてんだあ！」

テンションがマックスだ。片手を振りかざして挨拶しているこの人は、状況が分かっているのだろうか。周りの部下の人はドン引きしているのに。

誰も何も話さない時間が数秒続く。

「うるさくて眠れねえ」

静まり返った部屋にボスの低い声だけが響いた。彼は上着の内側から大型の黒い拳銃リボルバを取り出した。まさかあんなものをここで？

銃声が鳴り響く。

ジャズ隊長の頬からは血が流れた。弾丸は壁にめり込んでいる。

「何しやがる？」

隊長はくつてかかる。

「次は口をそき落とす」

ボスはそれだけ言うと、拳銃をしまった。啞然と立ち尽くす私の目の前を通って、去つて行く。

しばらく唸つていた隊長だが、傷口に触ると顔をしかめた。

「こりや顔洗うときに沁みそーだな」

いや、心配するところが違う気がするんですけど。

彼は扉のところに立つ私に気づいた。こちらに来るようだと手招きする。それに応じて行くと、つまりの皿を置くように指示した。傍の保冷庫から取り出した缶ビールの蓋を開け、ひと飲み。それ

からクラッカーを齧ると、爽やかに笑った。

「さあ、もう一勝負やるか」

「一人とも怖気づいて、とてもそんなノリではないのだけど。

「そんなことじゅマスティマの幹部にはなれねえぞ」

笑いながら言つ。

彼の笑い声はいい意味でも悪い意味でも状況を変えてしまう。
部下の二人は顔を見合せた。そして、そのうち一人がおずおずと言つた。

「僕、やります」

異口同音。もう一人も同じように言い出した。ジャズ隊長はしてやつたりと笑みを浮かべる。

私は巻き添えを食わないようそっと部屋を後にする。

廊下に出たとき、「その配り方はねえぞ」と隊長の突っ込む声が聞こえてきた。

くわばらくわばらく。つまみが切れたなんて、もう呼び出しがきましたよ。そして、ボスの眠りが安らかなものでありますよ。早めに切り上げて上がつてしまおうと私はそのまま、大急ぎで片付けを済ませた。

2.1 ジャズ隊長のお楽しみ（後書き）

次回予告・マステイマに入つてから休みを取つていなしミシェル。彼女を外食に誘つたアビゲイルは真の目的を明かし、彼女を説得するのだが……。

第22話「ミシェルの休暇」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

城住まいも月日が経つてくるといろいろなことが分かってくる。ここに住んでるのはボスだけではない。他の人たちもいる。

私の部屋のある区画は、一般的の隊員たちの住居スペースだ。彼らは任務につくのはもちろん、交替で城の警備にあたっている。そして、ディケンズ本社の要請で他の場所や人の警備に出向くこともある。

ジャザニア隊長を始めとする幹部はとくに、私たちとは別な場所に自分のスペースを持つていてるらしい。こう仮定形なのは覗いたことはないからだ。噂で聞いただけのこと。

プライベートについては、自分からは踏み込まないことを心がけていた。相手の領域に関わることは、自分自身もさらけ出さなければならない危険性を含んでいる。

家族や出身地、個人を特定できることはベールに包んでいなければならぬ。私が女であること。知られてはならない事実に繋がりえる全てを。

だから、隊員から伝え聞く話は貴重なものだった。彼らは様々な情報をもたらしてくれる。

例えば、幹部達の部屋は私たちの部屋とは比べ物にならない広さだということ。ホテルのシングルルームに対し、スイート並らしい報酬の桁は違うし、城にいれば使うこともないから貯まる一方。そういう財産持ち、豪邸だって買えるはずとは食事に來ていた隊員からの情報。

幹部特権の一つが住居を城に縛られないことだというのだが。現実には皆城で暮らしている。

そういえば、アビゲイルはプリシラが大きくなつたら、新たに家を持つのが夢だと話していた。子供が小さいから、現在は保安面を考えて城住まいをしているらしい。

グレイはわざわざ遠くから出でくるのは面倒だと言つていたし、ジャザナイア隊長は皆でわいわいやつてするのが好きだからという理由だつた。レイバンがいるのももちろん、ボスと同じ屋根の下で生活したいからといつことだ。

結局、城は大所帯。皆家族みたいなものだ。

そう思つと、不思議と普段は遠いあの人にも親近感が沸いてくる。これだけ人が多ければ、一人くらいちょっとひねくれた人もいて当然。

皆の顔を覚えつつあつた私は、ますます楽しく仕事をこなす。あの人こと、ボスとのやりとりに恐々としながらも充実した日々を送つていた。

そんなある時、厨房を訪れたのがアビゲイルだつた。

昼食と夕食の合間の時間。静かな食堂に差し込む柔らかい午後の光。テーブルで背中にその温もりを感じながら、私はジャガイモの皮むきをしていた。

「晩御飯の準備ね」

彼女は、私の前の丸椅子に座りながら言つた。

「いい天氣ね。部屋の中に入るのがもつたいないくらいだわ」

視線が窓へと向く。私も振り返ると、ちょうど窓の外をヒバリが飛んでいくのが見えた。

白い雲の浮かぶ空。イギリスの地では珍しいほどめつたにない快晴だ。

そういうえば最近外には出でていない。最後に出たのはいつだつたらうづ。

意に沿わず、グレイのヘアカットショ―に参加したときだつたらうづ。あれを外出に含めるなら。

「マイケル、あなた明日休暇を取る気はない?」

アビゲイルの申し出は急で、驚いた私はナイフの手を止めた。

「ここへ来てからずっと休んでいないでしょ?」

思い返してみれば確かにそうだ。

本社から面接官のアーロンに連れてこられた以来、一日も休暇はもらっていない。あまりにも毎日が早く過ぎ去つていき、今まで気にするどころじゃなかつた。

休みか。とても魅力的な申し出だ。だけど……。

「でも、皆さんの食事の用意もありますし」

「そんなこと言つてたら、いつまでも休みなんて取れないわよ」

くすりと笑つて彼女は言つ。もつともだ。

「それに明日ならボスが一日出かけるし。ディケンズ本社に出向く予定だから。朝食をとりながらの会議で、夜もご飯食べてから帰つてくるはずよ」

ボスのことももううんとうだけれど、私の後ろ髪を引っ張るのは隊の眞で。

「ここに来た初日に田にした光景。『ミミ箱から溢れていたインスタント食品の容器。あんな食事を一度と繰り返してもらいたくはない。』部下の食事は作りおきして、温めて食べてもらえばいいじゃない。ねえマイケル、気にはならない？ ボスがよく行くお店。一緒に食べに行つてみない？」

アビゲイルの強烈な一押し。

「行きます」と即答してしまつた。

ボスが通う店。それを聞いただけで私の迷いはすっかり消えた。皆には悪いけれど、一日くらい我慢してもらおう。

ボスの馴染みの料理店がどんなところか、正直ずっと氣になつていた。行つてみれば勉強になるはずだ。うまくすれば、コックと話したり、厨房だつて覗かせてもらえるかもしねれない。

わくわくしてきた。料理人としての血が騒ぐ。

「じゃあ決まりね。休暇のこと、ボスには私から話しておくれわ私は喜んでその言葉に乗つた。

明日の朝九時に玄関に集合を約束して、彼女は出て行つた。

ありがたい。その時間なら朝食の準備までは完璧だ。

明日の朝と昼はサンドイッチとスープ、夜はカレーライスとサラ

ダの予定。朝と昼では挟む具材を変えて、パンも違うものを用意する。スープも朝はポタージュで、昼はトマトベース。

朝食を吃べるのは夜勤明けの人たちだけだし、彼らは昼間は休んでいる。だから、朝と昼を同じメニューにしたとしても、誰も同じものを食べることにはならないのだが。いくら休暇を取つていようと、コックとしてできることはしておきたい。

私はジャガイモの皮むきを再開した。明日の分までむいて備えよう。カレーは今晚の料理と合わせてせて作り置きすればいい。

ナイフを滑らせながらも、私の心はすでに明日へ。ボスの心を掴んで離さないという伝説の店へと向いていた。

22・ミシールの休暇（後書き）

次回予告：ボスの行きつけへと向つ。ミシールとアビゲイル。店に着くまでの彼女達の珍道中。

第23話「跳ね馬の女」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

23・跳ね馬の女（ひと）

翌朝の早い時間、ヘリコプターの飛び立つ音が聞こえてきた。ボスが出発したのだろう。

いつもより早めに食事の準備に厨房まで来ていた私は、食堂へと出た。遠ざかっていくヘリの姿を見送る。

それから、朝食の準備開始。具材を挟んだパンをスライスして切り分け、皿の上に並べていく。乾かないようラッピングして、ポタージュスープの鍋は保温機能のあるワゴンの上に置く。スープ皿を取り皿、スプーンも用意してこれで完了だ。

昼の分のサンドイッチは冷蔵庫へ。夜のサラダもそこに入れて。トマトスープとカレーの鍋はコンロの上だ。温めてもらえればすぐに食べられる。

それから炊飯器をセット。保温時間が長くなれば味は落ちてくるのだろうけれど、勘弁してもらひしかないだろう。

あとは、食堂の入り口に書置きを貼つておく。謝罪の言葉とセルフサービスでお願いしますと一言。

よし全て終了。部屋に戻って着替えてこよう。

クローゼットを開けて、とんでもないことに気付く。

ハンガーにかかっているのは女物の洋服。実家から送つてもらつた数枚の物だ。男物であるのは、ここに来たときに着ていた紺色のスーツだけ。堅苦しい。

でも、目的は食事だし、ボスが行く店にドレスコードがないとも考えにくい。またネクタイをするのは嫌だけど、他に着る服がないから仕方ない。

私は観念してスーツの上着に腕を通した。

「スーツで来たわね」

玄関で会つて早々、アビゲイルにそう言われた。

「これしか持つていらないもので」

私は肩を落としながらも彼女の服に目を見張る。

黒いワンピース。大きく開いた襟元と裾にあしらわれたフリルが華やかだ。腕には金ブレスレット。いつもはアップにしている髪も下していて、長い赤毛が大きくなっている。「ゴージャスだ。

「良かったわ。今日行くお店は二つよ。そのうち一つは五つ星レストランだもの。昨日服のこと言わなかつたから、ジーンズとかで来たらどうしようかと心配してたの」

ビンゴだ。やっぱりバスは高級店志向のようだ。

とは言つても、どちらにしても私にはこの服しかないのだけど。腕に手を回され、どきりとする。普段は匂わないエレガントな香水がふわりと漂う。

「運転は私にさせてね。街まですぐよ」

車のキーを見せながら言う。私は車の運転なんてしたことがないから、その申し出は都合がいい。

彼女の嬉しそうな笑顔。男だつたらきっと誰だつてぐらりとくるだろう。

腕を引かれて外へ出て、城の西側に当たる車庫へと着く。大きな車庫だ。港とかにある倉庫のようだ。何台もの車が並んでいる。軍用車両のようなジープやトラックから、大型の四駆、誰もが知る高級車までずらりだ。バイクもある。

車庫の前で待つていると、アビゲイルが出してきたのは赤いフェラーリのオープンカーだった。彼女は黒いサングラスをかけている。助手席のドアを開けて、私が乗り込むと出発だつた。

アクセルが踏み込まれ、わが國屈指の暴れ馬が走り出す。操るアビゲイルの顔にも笑みが浮かぶ。彼女の声が私の顔を余計に引きつらせる。

運転すると人格が変わってしまうタイプ。彼女もまたそうだつたようだ。

「行つけー！」

踏み込みっぱなしのアクセル。

渦巻く風に揉まれながら「街まですぐ」の言葉の本当の意味を知つた。

城から一番近い街。

アビゲイルの運転により一時間足らずで着いた。

周りの景色なんて見る余裕がなかつた。緑の丘が続いていたような気がするけど。

体中の力が入つていたせいか、肩や首が痛い。それになんだか凄く疲れた。

アビゲイルは運転席で伸びをした。「満悦だ。彼女はサングラスをとり、腕時計を見た。

「まだランチには早いわね。少し辺りを見てみる?」

そのほうがいい。今何か食べたつて味なんて分からぬだろうし、悪くしたら戻しちゃうかも。私は頷いて車を降りた。

開けているが、昔の風情が残っている街だ。私が生まれ育つた街をほうふつとさせる。

イタリアとイギリスでは、もちろん建物の形や生えている木々、空の色まで違つているが、なんだか思い出してしまつ。もしかしてホームシックだろうか。

私はアビゲイルと一緒に街を散策した。ボスの通う店の前を通りかかつたが、まだ準備中の札がかかつっていた。立ち止まつて中を覗き込む私の腕を引っ張つて、彼女は歩き続ける。

「今のが五つ星レストラン。お昼はここで食べて、夕食は別の店よ私の目はさつきのお店に止まつたままだ。どんな料理が出るんだろう。どんな調理をするんだろう。厨房はどんなシェフはどんな人だろう。

店が見えなくなつても私の心はその店にあつた。
辺りをぐるりと回つて、たどり着いたのが公園だつた。何人もの人が集まつている。

散歩中の人やベンチで日光浴をする人。今日もいい天気だし。

老人もいたが、親に連れられた小さな子供もいる。噴水の水に触ろうとしていたり、他の子と遊んでいたり楽しそうだ。

そして、地面に座り込んだ子供を見たとき、私の手はポケットに伸びた。地面を覆うのは沢山の鳩だ。子供が手にした餌を口當てに群がっている。

動物好きの血が騒ぐ。足が多いものと足がないもの以外は皆大好きだ。

辺りを見回すと餌売の人のがいた。よし、買って来よう。財布を手にうきうきと近付く。

だが、餌を買うことは出来ず、ベンチで待つアビゲイルの元に戻ってきた。

「どうしたの？」

彼女は怪訝そうだ。

我ながら自分の馬鹿さ加減には呆れてくる。私は一ポンドも持つていなかつた。財布の中にあるのはユーロ札とユーロ硬貨のみだ。訳を話すと彼女はお金を貸してくれた。

「あなたって動物が好きなのね」

餌を目当てに集まってきた鳩を肩や頭に乗せたばかりか、散歩中の犬にまでちょっかいを出す私を楽しそうに見ている。

「うちの猛獸もそうやって懷いてくれたらいいのにね」

「ぼそりと言う。それってボスのことだろうか。猛獸って……当てはまってるかも。

犬の尻尾にパタパタと足を叩かれながら、私の背に小さい震えが走つた。ああ嫌だ。休みのときまである人のことは考えたくない。撫でる手を止めてしまった私を不思議そうに見上げる黒い瞳。優しい顔をしたラブラドールに心癒される。動物って本当に可愛い。

公園で昼時を迎え、私たちはレストランまで引き返すことにした。

23・跳ね馬の女（ひと）（後書き）

次回予告…まずは一軒目。ボスをひきつける秘密を探る「シル」だつたが、出てきたのはその店のショフとアビゲイルの微妙な関係で……。

第24話「ボスの行きつけ」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

24・ボスの行きつけ

扉をくぐる前からいい匂いが通りに流れていた。

店の席に通された私たちの前に最初にやつてきたのは、店の支配人と思われる白い上着を着た恰幅のいい中年の男だった。

「いつもご利用いただきありがとうございます。それで……」

彼の視線が席を見渡す。

「今日はあの人来ないわ。ロンドンに出てるから」

アビゲイルの言葉にあからさまにほつとした表情。この人もきっとボスの被害者に違いない。

「この子はうちの「ツク」なの。勉強をしたいというから連れてきたのよ。後で厨房を見せてくれないかしら」

男はぶしつけに私を見つめる。躊躇みされているようだ。なんだか居心地が悪い。

「ほり、うちのコツクの料理をボスが食べててくれるようになれば、ここに来るのも減るんじやないかしら」

アビゲイルの一言は決定的だった。男は両手を合わせて握りしめると、何度も同意の言葉を口にした。

組織以外の人まで巻き込むなんてボスは罪深い。でも、このお店のお陰で私も助かっている部分があるのだし。複雑な思いでその人の背中を見送った。

やがてウェイターが現れて次々に料理を運んでくる。ランチなのでそう沢山は出でこないと思っていたが、想像を超える量だ。

内容も何料理なのか判断の困る感じだ。ベースになつているのはフランス料理のようだが、色々な要素が入り混じっている。創作料理と言つていいのだろう。

味は最高。さすが五つ星を掲げているだけはある。だけど、ボスの嗜好とは違う気がする。あの人はもっと濃い味が好みのはずだ。

最後の料理を持ってきたのは、コック帽をかぶった白衣の背の高い男だった。

「まあ、アントン。また白髪が増えたわね」
アビゲイルが立ち上がる。男はテーブルに料理を置いて苦く笑つた。

「君のボスのお陰さ、アビゲイル」

そう言う彼の頭には、なるほど白いものが目立つていて。アビゲイルより少し年上くらいなのに。黒みがかつた栗色の髪だ。余計目立つ。彼は私へと目をやつた。

「味はどうかな、同業者」

「とても美味しいです。でも、ボスの好みとは……」

「ああ」

彼は笑いながら頷く。温かみのある笑顔だ。

「彼が来たときには調整している。なかなか加減が難しいがね。見極めるまで何度呼び出しをくらつたり、厨房に押しかけられたりされたかしれない。遠慮なしに言わせてもらえるなら迷惑な客だ」
それはそうだろう。大いに同意だ。

「この店はティケンズ本社が出資していてね。断れない立場なのよ」
アビゲイルの耳打ちに納得する。五つ星を掲げるなら、本来であれば客を選ぶことだってできるはずだ。

「お世話をかけるわね、アントン」

すまなそうに彼女は詫びる。

「君のボスだから我慢してるんだよ」

彼の声はひどく真面目だ。この雰囲気はなんだか……。一人の間に微妙な空気が流れている。続く沈黙は耐えられないものだった。私は席から立ちあがつた。

「あ、あの、厨房を見せてはもらえませんか」
申し出に彼は無言で私を振り返る。

「私からもお願ひするわ」

アビゲイルの言葉に黙つて頷く。そして「ついて来い」と背を向

けた。

私は大急ぎで彼の背中を追つた。

店の厨房は大きかった。彼はシェフであり、五人のコックをかかえていた。

解説つきで調理を見せてもらつ。實に興味深かつた。だが、実用となると疑問が残る。

料理そのものも彼が独自に作り上げたもので、私の料理とは殆ど接点がなかつたこともある。そして、肝心な調味料の量については、彼は首を横に振るばかりだつた。

「まったく同じ料理を作るなら教えてやれる。だけど、そうでないなら田安なんてないんだ。作るものによつて違つてくるから。出来上がつた味を想像して、加えていくしかない。彼と同じ舌を持つたつもりでね」

同じ物なんて作つて、あの人気が納得するだろうか。猿真似だなんてかえつて怒りそうな氣がする。メモを取らせてもらいながら、溜め息をつく。

「同じ料理じや気に入らないんぢやないか。それならしづに食べに来ればいいんだから」

アントンさんも同じことを言つた。

やつぱりそうだよね。自分で探つていくしかない。私はメモを閉じた。

「コックたちに礼を言つて、厨房を出る。

「アビゲイルによろしく言つてくれ。彼女の助けになればと思つたんだが」

最後に彼はそう言つた。

二人の関係はどうも怪しい。テーブルに戻つた私を待つていたアビゲイルは、彼が何か言つていなかつたかと尋ねた。私は言われたとおりのことを見る。彼女は席を立ち上がつた。

「あの人とはずっと昔にお付き合いしてたのよ。今はどちらとも別

のパートナーを見つけたんだけどね」

別のパートナー？ 私が感じた限り、あの人のほうは未練たらたらのようだったけれど。

なんて言葉を返していいか戸惑う私を置いて、彼女は歩いていく。支配人に近付いてツケにしてくれと言つと、後ろを振り返りもないで外に出た。

こんな時、なんて言えばいいのだろう。頭の中はぐるぐる回つているが、気のきいた言葉は出てこない。

「マイケル、次のお店に行きましょ」

遅れて店から出た私を笑顔で迎える。一人で肩を並べて駐車場を目指す。

いつものアビゲイルだ。表情を窺いながらもほつとする。車を見て私は思い出した。またあのスピードと恐怖に耐えなければいけない。

横を見るとアビゲイルの姿はすでになく、意氣揚々と車のシートに身を沈めるところだった。

24・ボスの行きつけ（後書き）

次回予告・真打登場？　一件目の店でミシユルは確信する。この店の人にこそ学ぶべきことがあると。ボスの心を掴むその秘密とは…。

第25話「ボスの氣に入り」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

25・バスの気に入り

次の街までは、ほぼ一時間かかった。

地図にすれば、マステイマの城とさつきのレストランとこれから向かう店は三角形の位置になるらしい。
さすがにまだお腹は減っていない。

こうしたことなら、もつとゆっくりとドライブに漫ればいいと思うのだが、アビゲイルにはそんなつもりはさらさらないようだった。
「すっきりするわ」

輝くような笑顔で言つ。彼女もそういうストレスを溜めているのかもしれない。まあ、上司があんなのでは仕方ないか。
はっと気付く。またバスのことを考えてしまった。なんだか時間を損した気分だ。

気を取り直してまた街を巡る。やつきの街とは違い、じがんまりとしている。居心地がよさそうなのこうだ。こんな感じにバスの行きつけがあるのだろうか。

私たちは住宅地に差しかかり、各家の庭の素晴らしい景色に見入る。イングリッシュ・ガーデンといつやつだ。それぞれに個性があり、美しい。

アビゲイルは庭に出ていた奥さんに話しかけられ、バラを切り分けでもらっていた。

いいなあ。美人って得だと思いつつ見ていると、彼女は一輪手折り、私の上着の胸ポケットに入ってくれた。なんだか照れくさい。

そうして、私たちは時間を潰してから店へとやつてきた。

「ここですか？」

思わずアビゲイルに問づ。

そこは一軒の民家のようだった。店らしいものは何一つ見て取れない。もちろん看板もない。彼女は笑つて頷いた。

「まさに隠れ家よね」

扉を開けながら言つ。

中に入ると確かに店だった。テーブルと椅子が並べられ、中には数人の客がいた。程よく薄暗く、なんだか落ち着くところだ。そう広くないのもいい。

カウンターから太つた中年の女が出てきた。かなり背丈もある。迫力からしてレイバンといい勝負じゃないだろうか。

エプロンを身に着けた彼女は、私たちを見て白い歯を見せた。

「久しぶりに会うじゃないか、嬢ちゃん」

アビゲイルを抱き寄せる。

「ええ、アンナ。本当に」

そう言う彼女は大きい体に包まれ、今にも押しつぶされそうだ。体を離してから店の女は周りを見回した。

「今日は田つきの悪い坊やは来てないのかい？」

「私たち一人だけよ」

「そうだよね。三日前にも来たばかりだもんねえ」

二人の会話は続いていくが、私は付いて行つていなかつた。田つきの悪い坊やつて……やっぱりボスのことなんだろうな。

女の視線を感じて、彼女を見やる。

「これまたちつこいのを連れてきたね」

「うちのコックよ。あなたの料理を習いに来たの」

アビゲイルの言葉に、彼女は私の肩を掴むと、じつと顔を覗きこんだ。

そして、豪快に笑い出す。

「うちから学ぶものなんて何もないよ」

「そんなことありません。お願ひします」

私はそう言って食い下がる。ボスが通り続けるのには訳があるはずだ。あの人が満足のいかない料理を許すなんてわけがない。

彼女はぴたりと笑うのを止めた。

「あんたもあの田つき悪いのと同じで無理を言つね」

不機嫌そうに言つ。

そうして、太い腕の中に私の肩を包み込み、意思に関係なく、力ウンターの内側に引つ張つていった。

「あの坊やはね、初めてここに来たとき、随分無茶を言つたんだよ。だからつまみだしてやつた。あんたもそうされたいかい？」

ものすごい迫力だ。体が大きいからだけじゃない。太い声のせいだけでもない。なんかこうオーラがあるのだ。それにボスをつまみ出したつて？ 只者じゃない。

「嫌です。教えていただくまでは」

彼女は私の顔を覗きこんだ。顔そのものもとても大きい。黒い髪に太い眉。目力もある。

「頑固だね。さてはあんたのせいだね、最近あの坊やがここへ来るのが減つたのは」

営業妨害だと怒られるのだろうか。どうもそんな雰囲気だ。私が縮こまると彼女は笑い出した。

「大したものじゃないか」

私の背中を大きな手で叩く。あまりの痛さに飛び上がる。そんなことはお構い無しに、彼女は私の腕をとり、厨房へと引きずつて行つた。

「ご覧、あれがうちの秘密兵器だよ」

痛みからつぶつていた目を開ける前から、分かつていた。お腹を刺激するいい匂い。

目の前にあつたのは丸いドーム型の石釜。これはピツツアの匂いだ。

「イタリアの職人に作つてもらつたもんだ。うちの宝だよ」

腰に手を当て、彼女は得意げだ。

「もしかして、あなたもイタリアの方なんですか？」

「も……つて、あんたもかい？」

私は自分のこと説明した。

私の父親はイギリス人だが、住んでいたのは母の実家であるイタリアであることを。

たつた一つの共通点だったが、効果は大だつた。彼女は一気に打ち解けてくれた。

「うちも旦那がイギリス人で、あたしがイタリア人なんだ。あんたの両親と同じだね」と。

また新たな共通点を見出し、彼女はにっこり笑う。

石釜からピツツアを出してきて、味見までさせてくれた。

懐かしい味。とても美味しい。ソーセージからして違う。きっとトマトも。

案の定、彼女は特製のホールトマトを見せてくれた。やっぱりイタリア産のトマトだ。

使っているサラミもソーセージもイタリア製だ。嬉しくなつてしまふ。

「たくさんあるから持つてお行き

袋に次々詰めてくれる。

ピザ生地の材料も分量まで細かく教えてくれた。生地を作るときの注意点も。企業秘密も何もない。

「あの坊やもイタリアにはゆかりがあるようだね」「初耳だつた。思わずメモをとる手を止める。彼女の話は続いた。「色々と詳しかつたしね。だけど、うるさい子だよ。初めて来たとき、つまみ出したつて話しただろ?」このピツツアの味にいちやもんをつけたんでね。うちにはうちのやり方がある、文句を言つなんら帰れつて言つてやつたんだ」

両拳を腰に当てて笑う。全てが大きい人だが笑顔は可愛らしい。

「それでもう来ないと思つてたんだけど、一週間もしないうちに「来てやつたぞ」って偉い顔なんだ。もう呆れてね。うちは味を変えたりしないよつて言つてやつた。最初は何かいろいろ文句を言つていたけど、聞いてる暇なんかないよ。うちはあたし一人できりもりしてて忙しいからね。そしたら、いつの間にか、ちゃっかり常連客

だ

彼女は本当に凄い人だ。

いろいろ文句を言つていたつて、普通ならそこでボスの迫力に負けているはずだ。忙しつつ袖にするなんてどうやってやつたんだろ？。

でも、知つたところで彼女にしか出来ないやり方なんだろうな、きっと。

「あの坊や相手に苦労してんだろう。でも大丈夫さ。あんたにはあたしと同じ、イタリアの血が流れてるんだから」「よく分からぬ励まされ方だ。また背中を叩かれた。今度は手加減して軽くだ。

なんだか腑には落ちないが、大いに元気はもらつた。

重くなつた袋をようやく持つて席に戻ると、アビゲイルが他の客からパンとワインのおすそ分けに預かっていた。

「あんたたち、うちのピツツア食べていきな」「嬉しい。わつきはちょっとしか食べなかつたし。ワインも頂いちやおうかな。

私たちはアンナさんの極上ピツツアをしつかり堪能して、おいしいイタリアワインもゅっくりと味わつた。

ああ、休日つて最高。ずっとこんな日が続いたらいいのにと一瞬ではあるが、確実に思つてしまつた。

25・ボスの気に入り（後書き）

次回予告・マステイマの城へ戻ったミシェルとアビゲイル。だが、そこには激昂する、いるはずのない人が。一体何故こんなことに…。

第26話「怒りのボス（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

26・怒りのボス（前編）

店の常連さんたちと打ち解けての夕食。

店主に学んでか気のいい人たちだった。話は途切れることなく、笑いも絶えることがない。

ついにはアンナさんまでテーブルに呼んで、皆でワインの瓶を開けた。

古くからの知り合いのような気分になる。店を出る頃には一抹の寂しささえおぼえた。

最後にアンナさんは私を抱きしめると頑張れとホールを送つてくれた。また来ることを約束して扉を閉じる。

あの人はまさに伝説のマンマだ。故郷のイタリアを思い出させてくれる。

とても寬げで、リフレッシュできた。氣力も満ち足りている。今からすぐにでも、貰った素材で料理を作りたいと考え思えていた。

そして、帰り道は一人ともほろ酔い気分。

アビゲイルはお酒に強いらしく、ほとんど顔色も変わっていないが、私の顔は真っ赤だ。鏡で確認するまでもない。顔が火照るんだもの。

オープンカーの中で、荒々しく渦を巻く風が心地よく感じられる。城に着く頃には少しあまになつていてるだろつ。

危ないからとの忠告も上の空。私は席から立ち上がり、風に髪を梳かせるまでいた。頭上に広がる満天の星空を眺める。

一時間ほどかかり、見え始めた城からは光が漏れていく。月の光に照らされて、お化け屋敷のような趣きは初めて見たときと変わらない。

城に戻った私たちに気づき、早々と駆けつけたのはマステイマの

隊員の一人だつた。

「姐さん。マイケルも。早く来てください」

息を弾ませている。ただ事ではない様子に私の酔いも一気に醒めた。とりあえず、傍の椅子にアンナさんからもらつた食材の袋を置く。

彼の案内で走つて向かつた先は……。まさか、そんな。ボスの食堂だつた。

「申し訳ありません、ボス」

悲鳴のような声が廊下にまで聞こえてくる。

「許してやれつて言つてんだろうが。おれの部下に向てことさせりんだ」

続いての声はジャザナイア隊長だ。

「こいつは俺を騙した」

聞き違えるはずもない。これはボスの声だ。なんで食堂なんかにいるんだろう。今日は夕食を済ませてから戻つてくるはずなのに。こつそりとドアの隙間から中を覗くと、若い隊員が土下座をせられていた。その背中を踏みつけているのはボスその人だ。

「それは、おれにも責任があるつて言つてるだろうが」

隊長はなんとかなだめようと必死だ。ボスは彼へと振り向く。

「その責任はどう取るつもりだ、部隊長」

「だから、部下の失敗は上の責任だろ」

二人の間のしばしの沈黙。聞こえるのは床ですすり泣く声だけ。「てめえ、俺にも責任があるつて言いてえのか」

明らかに火に油を注いだ。

ボスは脇に置かれていたワゴンを蹴りとばした。鈍い音を立てて、ワゴンは五十センチと離れていないテーブルに激突した。

「夜中に大声出すなつて。近所迷惑だろうが」

「そんなもあるか。お前の笑い声のほうがよほど迷惑だ」

ボスは怒り心頭だ。いつもより口数も増えている気がする。

だが、ジャズ隊長は事態を收拾するどころか広げているようだ。こんな酷い状態なのに、飄々としていて、まるで動じていないよう見える。

こんなのは聞いてるのは心臓に悪い。私たちを連れてきた隊員は後ろでがたがた震えているし。

「まあまあ。落ち着いて、ボス」

アビゲイルが扉を開けて入って行つた。この修羅場に入つていけるなんて、さすがだ。

ボスは彼女を一度見ると、悪態をついてそっぽを向いた。

「一体何があつたのよ」

彼女がそう言うが早いが、ボスはひれ伏す男に向かつてワゴンを蹴り出した。衝突したワゴンは倒れ、横滑りした。男は呻いて身を丸めている。酷い。

「おい、ボス」

ジャザニア隊長の呼びかけにも答えない。憤然とこちらに向かつてやってくる。
私より後ろの隊員のほうが慌てていた。私の上着を引っ張つて隣の部屋に押し込み、隠れる。

大きな音が立つて扉が開き、ボスの足音が遠ざかつていった。足音にまで怒りが含まれている。

安堵に力が抜けたように座り込む隊員をそこに残して、私はボスの食堂に入つて行つた。

「大丈夫?」

アビゲイルが床にうずくまる隊員を気遣つてている。幸い大きな怪我にはなつていないようだ。

ショックで声は出でていないが、手を上げて問題ないと示している。「何があつたんですか」

私は隊長に尋ねた。

「ああ、マイケルか。実は連絡に手違いがあつてな。晩飯を食わずについが戻ってきたんだ」

彼は参つたといふように両手を上げる。

「んで、帰つてくるなり、腹が減つた、飯を用意しろつて。おれた
ち慌てたぜ。何しろ、部下の一人が先に分かりましたなんて答えち
まつたもんだからな。それで思いついたんだ。冷蔵庫に何かあるか
もしれないつて」

話が見えてきた。思わずぞっとする。

「まさか、それをボスに出したんですか？」

「それしかねえだろ。美味そうなものが色々あつて困つたくらいだ
ぜ」

それはボスへ出す料理の試作品だ。昨日作ったもので賞味期限は
まだ先だが。いや、そもそもそんなことが問題ではない。

ジャズ隊長は頭を搔いた。

「それで温めて用意したんだ。そこまでは良かつたんだがな。お前の
代わりに給仕をしたこいつが経験不足でな。問い合わせに正直に答えち
まつたんだ」

「と畜うと？」

「ゴックはまだ帰つていない。じゃ飯はぢりやつて用意したかとい
うと、冷蔵庫の中の物を温めたつてな」

「最悪だ。そんなことをボスが許すわけがない。

「それで、あいつは「温めなおしを食わすのか。騙しやがったな」
つて怒り出してな。参つたぜ」

案の定だ。それでさつきの騒動になるのか。

「でもまあ過ぎたことだし。仕方ないよな」

両手を広げてあつけらかんと言ひ。せんぜん参つてなんかいない。
数分前のやりとりを覚えていないかのようだ。だけど、あいつこいつ
いう隊長だからこそボスの下で働くんだらつ。

「なぜボスは急に戻つてきた訳？」

今度はアビゲイルが尋ねる。ジャズ隊長は笑つた。

「おれも聞いたんだが、本社の上役なんかと二食食えるかつてイラ
つとしてたぜ」

ああその様子が目に浮かぶようだ。

本社の人たちに囲まれて、にこやかに会食なんてボスには似合わない。

同席した見ず知らずの人に思いを馳せる。

あの人と食事なんて、仕事のうちとは言え、気の毒だ。いかにも消化に悪しそうだし。考えただけでお腹が痛くなつてくる。

26・怒りのボス（前編）（後編）

次回予告・ボスに壊されたワゴン。直してもらおうと技術情報部へ。現れたのは疲れ切った風体の男。いきなり切り出されたプリシラの話にミシェルは驚くのだが……。

第27話「怒りのボス（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

27・怒りのボス（後編）

私は横倒しになつたワゴンを見やつた。

ようやく立ち上がつたのはボスの犠牲者である若い男だ。まだ顔色は悪いから無理しないように、気分が悪くなつたらすぐに医務室に来るようになるとアビゲイルが声をかけていた。

彼ももちろん可哀想だが、二度も蹴りを入れられたこのワゴンも被害者だ。

しゃがんで傷に触れる。脇のアルミの板がぼつこつ凹んでいる。修理に出さなくちゃいけない。

「大丈夫よ、マイケル。技術情報部に頼んでおくから。明日の朝には直つて返つてくるわ」

アビゲイルはそう言つてくれたけれど。

私はこの時ほど強くなりたいと思ったことはなかつた。ボスをつまみ出したというあのアンナさんのように。

彼女から学ぶべきだったのは料理などではなくて、ボスに対抗できる強さだったのではないか。

私は立ち上がり、ワゴンを起こした。今はできることをするしかない。

「僕、出してきます。技術情報部つて何処ですか」

お願いして急いで直してもらつのに、入づてで頼むのはおかしいだろう。

私は場所を聞いて、ワゴンを押して部屋を出た。タイヤの軸もおかしくなつているのか、なかなか真つ直ぐには進んでくれなくて、大変だつたけれど。

技術情報部には今まで出入りしたことはない。それは西棟端の一階にあつた。

まさに外れと言つて過言ではない場所。廊下のカーペットはくすんだ色をしていたし、壁紙も古ぼけている。窓ガラスまで曇つて見

えた。

部署として名前は耳にしたことはある。あの不吉なボスの武器、衝撃銃ことショック・パルス・ランチャーの話のときだ。

それから、ワゴンに保温機能をつけてくれたのも確か技術情報部だ。アビゲイルを通してだつたので詳しくは分からぬけど。

もつとも、それ以外は何も知らなかつたし、他に耳にすることもなかつた。

考えてみれば、ジャザナニア隊長が率いているのは実行部隊なのだから、他に部があつてもおかしくはない。

だけど、これだけ話題に上らないことは、秘密の部署ということだらうか。或いは単なる開かずの間だつたりして。

目的の入り口である扉を見つけて、立ち止まる。両開きのドアだ。

ノックしようと拳を上げる。だが、そうする前に片方の扉が脇にスライドした。自動ドアだ。ノブのあるそのデザインからは想像もできなかつたが。

照明のある廊下よりも薄暗い室内。いくつもの光が点滅している。不意に扉の縁に白い指が現れた。

内側から出でてきたのは男だつた。足元はふらつき、怪しげだ。ちよつとつづけば倒れそうな感じだ。

襟に届くほどの金髪はぼさぼさに乱れている。ボタンを三個ほど外して前を開いた、しわくちゃのシャツにサスペンダー。背が高く痩せ氣味で、顎と鼻の下には薄つすらと無精ひげ。

目をしょぼしょぼさせながら、私に近寄ってきた。顔を寄せてきて、しばたくこと三回。

「ああ来たね。ノックのマイケルだつけ？」

疲れているのか、地声なのか。男の声はかすれていた。

胸ポケットに突っ込んだ丸眼鏡を取り出してかける。瓶底並の厚さだ。それでも目の下のくままで隠しきれていない。

彼はもつれた金髪を搔いた。まだ若そののに、かなり老けて見

える。

「アビーから聞いてるよ。ちょっと待つてて。おい、工具箱とつて
くれ」

肩越しに室内に声をかける。

部屋の中には何人もいるようだ。彼より若い青白い顔をした男が、
金属の長細いボツクスを持つてきて差し出す。

両袖をたくし上げた彼は、早速修理にとりかかった。ワゴンを横
に倒して、板を止めている螺子をドライバーで外し始める。
「プリシラがお世話になつたそつだね。ありがとう」

彼は作業を続けながら言つ。

私は話についていけず、固まる。

プリシラはアビゲイルの娘だ。お世話になつたそつだねつて、そ
んな言葉をかけるとしたら。

「あなたはアビゲイルの……」

「アビーは僕の妻だよ、マイケル。僕はオスカー。技術情報部の部
長だ」

丁度螺子を外し終えた彼は、下がってきた眼鏡を押しやつた。そ
れから右手を差し出す。私は慌てて彼の手を握つた。

「こちらこそ、彼女にはとてもお世話になつています」

私の言葉に笑顔を返す。疲れ切つた顔に束の間精気が戻る。優し
げで気持ちがほんわりとする笑みだ。

「君のことは聞いてるよ。頑張り屋だつて。彼女は君を気に入つて
いるみたいだ」

それは嬉しい言葉だけど。

手元に目を戻した彼は作業を続ける。アルミ板を取り外し、内側
からハンマーで叩いて凹みを伸ばす。実に手際がいい。車軸の歪み
まで直して、元通りになるには十五分くらいで足りた。

私は前後にワゴンを揺らして確認する。完璧な仕事だ。

「ありがとうございます。おかげで助かります」

「いや大したことではないよ。それより、君のコーヒーをうちの奴

らにも届けてもらえないかな。」『すう』と『もつぱなし』で徹夜なんだ

それでこの人はこんな風貌なのだと納得する。そういうえば、工具を持つてきた人も若いのになんだか元気がなかつた。

「部長、本社からデータが転送されました。解析始めます」

扉から顔を覗かせて、さつきの男が言う。

手を上げてそれに答えたオスカーは、私に背を向けると部屋に入つて行つた。

「コーヒー、すぐにお届けしますから」

私のその声に振り返つてにつこりと笑う。彼の笑みは心に染み渡る感じがする。きっとアビゲイルもこの笑顔で彼を選んだのだと思う。

自動扉が閉まるとき、私は大急ぎで厨房に戻つた。

煮立つたコーヒーを捨て、新しく入れなおす。そして、出来上がつたコーヒーを保温用サーバーに入れ、作り置きしていたクッキーと一緒にワゴンに載せた。

それからもと来た道を引き返す。技術情報部の人たちは喜んで受け取つてくれた。

27・怒りのボス（後編）（後書き）

次回予告：仮契約から三ヶ月経過し、いよいよ本採用だ。ミシェルの胸は高鳴る。だが、言い渡されたのは予想外の辞令。彼女の決断は……。

第28話「辞令交付」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

マスティマに入つてもうすぐ二ヶ月。まもなく仮契約は終わりだ。我ながら、よく頑張つたと思つ。ボスに酷い目に合わされながらも。

ようやく最近では、何回かに一回は完食してもらえるようになつた。ボスの行きつけのお店に行つたことが良かつたのかもしれない。なによりもピッタのお店のアンナさんからもらつた食材は大いに役立たせもらった。

だけど、もちろん、外したときは制裁が待つてゐるのは変わらない。

だいたいあの人は全部食べたときも感想なんてないのだから、本当に満足したのか、それとも気まぐれなのかの判断がつかない。

それでも初めて白衣を汚さずに食堂に戻つてきた日のことは、一生忘れないだろう。廊下ですれ違つ人まで、拍手を贈つてくれたのだから。思わず感動して不覚にも涙が出そうになつた。翌日にはまた、汚して帰つてきたのだけど。

アビゲイルも本当に喜んでくれた。ボスが出て行つた食堂で私を抱きしめてくれた。

男でなくつて良かった。こんなことされたら嬉しそぎて勘違いしそうだ。

彼女はマスティマの経理も担当していて、よく「うちのエンゲル係数は異様に高いのよ」とぼやいていたから、そういうつた意味もあつたんだろうと思つ。

なんて言つても、私の料理を木つ端みじんにした後のボスは外食に繰り出すのだから。時に五つ星のレストランを一人で貸切にしているらしいから、必然的に高くなるだろう。

三ヶ月目を迎える前日、アビゲイルがつきつきとした足取りで食堂へやつてきた。手に丸めた雑誌のようなものを握つて。

彼女は私を招いて、テーブルの上にそれを広げた。マスティマの制服のカタログだつた。

私はコックだからいつも白衣だが、式典のときなどに着ることになるらしい。色々な丈の上着、形のズボンがあった。なるほど。カスタマイズできるんだ。

一番印象的なのはバスのロングコートだが、幹部の制服には他にも色々なデザインがある。

ジャザニア隊長のは胸の切り替え部分にフリンジが付いている。グレイのは脇や袖に銀のバックルの飾りが付いているし、レイバンのは軍用コートのように襟を詰めることができるようにになっている。個性のある仕様だ。

「へー、ペーペー共とは違うんだ」

例の「」とくコーヒーを飲みに訪れていたグレイが横から覗き込む。彼女はにっこりとする。

「さあ、マイケル。どれがいい？ 自分の好きなものでいいのよ」私は背が高くないから、丈の長いコートは似合わないんだろうな。グレイと同じ短めの丈でいいかも。襟は立てるのも寝かせるのも出来るので、ボタンはダブルがいいかな。あつ、フードつきでファーがついたもあるんだ。袖口にも取り付けられるタイプもある。カタログを見て、悩みながらも選ぶのは楽しい。いつもの白衣も好きだけど、マスティマの制服は特別だから。

全てを決め終えると、付箋をはさんだそのカタログを持つて、アビゲイルは席を立つた。

「明日、幹部会議に出てもらわよ。十時からいつも会議室だから遅れないようにね」

いよいよ本採用なのだ。私は胸を躍らせながら返事をした。

翌日の十時十分前。私は会議室の扉の前にいた。

白衣からスーツに着替えた私は、その時を今か今かと待ちわびる。廊下を落ち着かなく行つたり来たりしている自分がいた。ネクタイ

の窮屈さも気持ちの外だ。

やつと三分钟。そろそろいいかな。ノックをする。

少し待つと、アビゲイルが開けてくれた。

「……の実施は来月の第一週だ」

ジャザナイア隊長の声が最初に聞こえた。

「またきたか。気が重いな」

レイバンの声は本当に憂鬱そうだ。

「オレは待つてたもんね。樂っしみー」

対照的なグレイの声。

ボスは奥の正面の椅子に座っている。さすがに今日は眠っていない。

彼は私に目をとめた。その斜め横の席に座っていた隊長も入ってきた私に気付く。

「お、来たか。さっき言つたなんだけどな……」

「そのことは後で俺から話す」

彼の言葉を遮ったのはボスだ。ジャズ隊長は頷いた。

「じゃあ始めるか。辞令交付式だ」

私を傍に招き、立ち上がると彼は笑顔で言った。

「マイケル、本日付で君を正式なマステイマのコックとして任命する」

「ありがとうございます」

差し出された手を握る。

「これからも頑張ってくれ

「彼もきゅっと握り返してきた。

私の感激もピークになる。やばい、感涙してしまいそうだ。

「おい、ジャザナイア」

黙つて見ていたボスが隊長を睨みつける。すると、彼は分かつて

いるという風に片手を挙げた。再び私に視線を戻す。

「それからもう一つ辞令がある。君をボス付けのコックとする」

耳にした後も意味が分からなかつた。コックはコックでもボス付

けつて一体……。

「ボス専属のコツクつてことよ」

アビゲイルが背後に立つ私を振り返つて補足してくれる。

そうか、なるほど。ボス専属の。

……つて、え？ それはどういう意味？

「それはボスの食事だけを作るコツクつてことですか？」

外れてほしいと思いながらも確認してみる。

「今までなかつたことだ。凄いことだぞ、マイケル」

私なんかよりジャザナイア隊長の方が興奮気味だ。だけど、納得がいかない。愕然としながらボスを見やる。

「光榮に思え」

ボスは私を見上げて言った。テーブルに両肘を付き、両手を組んでその上に顎を乗せている。

光榮に思え？ そんなこと思えるもんですか。

「……お断りします」

私の言葉に皆が睡然とした。レイバンが激しい目つきで睨んだ。

「僕はマステイマのコツクとして、ここに来たんです。ボスの専属コツクになりたかつたわけじゃありません」

「おいまいくる。ものすごい昇進なんだぞ」

ジャザナイア隊長は私を考え直させようとしている。私の肩に手をかけ、揺さぶるようにして。

「あなたは私たちと同じ幹部になるわ。私の部下じゃなくて、ボス直属の部下になるのよ」

アビゲイルまでも私を思い留まらせようとする。彼女は席を立ち、私の傍に寄つた。

「ボスの申し出を断るとは許されんぞ」

レイバンもまた立ち上がつた。怒りがふつふつとたぎつているのが分かる。

ボスとグレイだけが席に着いたままだつた。グレイの顔には薄つすらとだが笑みが浮かんでいるように見える。椅子の背もたれに寄

りかかり、彼は私を見上げていた。

「おい、分かつてるとか、コツク」

レイバンが私の前で仁王立ちになり、凄む。それでも私の思いを変えることなんてできない。

昔、命を助けてくれたボスへの恩を忘れたわけじゃない。だけど、今の私を支えてくれているのはマステイマの隊員たちなのだ。彼らへ報いとしてコツクとして務める意味があるだろうか。私は真っ直ぐにバスを見つめた。

「貴様」

レイバンが私の襟元をめがけて手をのばしてくる。

その時、バスが両手でテーブルを叩き、立ち上がった。皆が彼を見た。

「もういい。好きにしろ」

彼は吐き捨てるように言う。そして席を離れて歩き出した。

「だが、一度とチャンスはないと思え」

傍を通り過ぎるときに言ひ放つ。そんなことはひからぬ望むところだ。

私は彼の背中に向つて大きな声で言った。

「これからもマステイマのコツクとしてお世話になります」

答えはもちろんなく、勢いのついた扉が大きな音を立てて閉まつた。

28・辞令交付（後書き）

次回予告：ボスの専属コックの辞令を撥ね付けたミシェル。心配するアビゲイルたちだが、彼女の信念は変わることなく……。

第29話「コックの心意気」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

29・「ミックの心意気

「ボスが出て行くことで、会議室の緊迫した空気は一気に和らいだ。

「お前、本当にこれで良かったのか」

ジャザニア隊長は、私の頭に手を乗せながら尋ねる。

「はい。僕は幹部を望んでいるわけでも昇進を望んでいるわけでもないんです。マステイマの人たち皆に料理を作りたいんですよ」

私の代わりに溜め息をついたのは、アビゲイルだ。

「でも、惜しいことをしたんじゃない？　あれだけボスの満足のいく料理を作ろうと頑張っていたのに。だいたいボスがこんな申し出をするなんて、ありえないことよ。たとえ気まぐれだってね」

「僕は、皆さんに満足のいく食事をしてもらいたいだけです」

私は胸を張る。そう、それこそが私が目指すところだ。

「お前らしーな。オレは読めてたぜ。ボスの機嫌を伺つて昇進を狙つていく奴なんかじゃねーってな」

グレイが席を立ち、私の傍までやってくる。

「やつぱりお前は面白れーな、ミック」

彼は、銀髪から覗いた左目を細めて、楽しそうに笑つた。

「自分は認めんぞ」

レイバンの怒りは収まつていらない。脇に下した両拳を握り締めている。憮然とした表情のまま、会議室を後にしようとしていた。

「お前はボスの期待を裏切った。ボスが許しても自分が許さん」

最後に言葉を残して去つていく。

彼の気持ちはなんとなく分かったし、私に対する怒りも理解できただ。だが、もちろん、それで自らの考えを変えようとは思わない。

「気にしなくていいからな。あいつはボスが全てなんだから」

グレイの気遣いには感謝だ。気持ちが少しだけ楽になる。

私は三人に改めて挨拶をする。

「これからもよろしくお願ひします」

「ああ」と隊長。「いやいや、アビゲイル。」また「一ヒー頼むな」とグレイ。

今日からまた、本当のマスティマのコックとして頑張つて働かなければ。

「そうそう、マイケル」

決意を新たにしているといふアビゲイルが声をかける。

「あの制服の件だけ白紙に戻るから。他の隊員たちと同じになつちゃうけどいい?」

他の隊員たちといえば、幹部のコートとは違つて一様に揃いの黒いジャケットだ。

あれだけ迷つてカタログから選んだのに。私は肩を落としたが、決意には変えられない。

「そんなに着たけりや、おれのお古やうつか?」

ジャザニア隊長が見かねたのか、そんなことを言い出す。隊長としての慈悲つて奴だろうか。いや、違う気がする。

「そんなの貰つたつて嬉しくねーよな。サイズだつて合わねーだろーし!」

グレイが突つ込む。

「だつたらお前がやれ」

「オレの上着には色々仕掛けがあんの。タネバレ嫌だもん」

グレイがポケットに突つ込んだ手を出すと、そこには逆さ吊るしのトカゲが握られていた。ジャズ隊長は息を飲み、アビゲイルが声もなく隊長の陰に隠れる。

「オモチャだよん」

グレイはトカゲを揺らして笑つた。

「制服にそんなもん入れるな。大事な物出すとき一緒に出てくるだまつ少し的が外れたことを隊長が言つていてる。

アビゲイルは気持ち悪そうに腕を擦つていて。苦手のようだ。私は爬虫類でも手足四本なら平氣だ。

「マイケル、あなた大丈夫? これからお昼だし、すぐにボスと会

わなきやいけないけど」

アビゲイルが気を取り直して言った。私のことを心配してくれるなんて優しい人だ。

「大丈夫です。ボスと戦うことに關してももう三ヶ月目ですよ」「怖いのも痛いのも変わらない。苦しいのも辛いのも変わらない。だけど、今でこそ分かつてきたこともある。ボスが何に怒つてどう反応してくるか、ある程度考えることができる。対処だつて大分できるようになつてきた。

三ヶ月前の私とは違うのだ。私の浮かべた笑顔に彼女はほっとしたようだつた。

そして、ボスの食堂で。

今日の昼食である、チーズ入り冷製パスタは私の頭の上に乗つている。

“天使の髪の毛”^{カベツリー}が垂れ下がつてくる。そして、帽子のように引

つかかつてしているのは皿だ。

「俺を窒息させる氣か」

チーズの匂いのことを言つているのか、あるいは形狀なのか。どちらか或いは両方でボスはお冠だ。そういえば、一回むせていた。大丈夫ですかと近寄つたらこの様だ。

でも、なんだかほつとした。ボスは変わらない。専属コックを断つたことを根に持つて、難癖つけて暴力を振るう人ではないことは分かつた。

いや、変わらないと感じるのは、最初からそういうことをやつていたからだけなのか。

私は手早く頭のパスタを用意してきた袋の中に落とした。床にこぼれた分も拾つて入れる。

雑巾と絨毯の染み抜き剤、大活躍が決定だ。すぐに拭えば、ほぼ百パーセント汚れは落ちる。

ボスが壊しと汚しの専門なら、いつちは今や掃除と片付けのエキ

スパートだ。三ヶ月間で技術もかなり身についた。この汚れにはこれが最適だと人にアドバイスできるほどだ。

今日は、運が良いことに皿は無事で済んだ。洗うだけでいい。

厨房に帰ればタオルと替えの白衣も準備している。洗面所で頭まで洗えば問題ない。短い髪のおかげでドライヤー要らずだ。ボスが去っていく。床で四つん這いになり、雑巾を片手に、私は密かに拳を握り締める。

あなたには負けません。これからどんな無理難題を突きつけられようとも。

正式なマスティマ隊員となつたその日、私はそのことを改めて心に刻んだ。

29・「ラクの心意氣（後書き）

次回予告：突然起こつた停電。聞こえてくる、いくつもの銃声。何が起こつたのかと混乱するミシルの前に現れたグレイ。彼は肩に傷を負つていて……。

第30話「迫り来る敵（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

30・迫り来る敵（前編）

その夜、私は厨房で晩御飯の片付けをしていた。

流しに置いた食器を洗う。その中にはボスのものも含まれていた。今夜は幸いにも欠けた皿はなく、私自身も無事に帰つて来られた。洗剤で汚れを落とした後、水洗いする。水切りのトレイにおいていき、あとは拭いて食器棚に戻すと終わりだ。

今夜はジャザニア隊長からの酒のつまりの催促もない。あとでボスのワインを用意するだけの予定だ。いつもよりは少し早く上がりそうだ。

布巾をして皿を取ったときだつた。

一瞬のうちに照明が消え、辺りが暗闇に包まれた。停電らしい。私は皿を置いて手探りで、食堂へ出て廊下を覗いた。だが、何処まで見ても暗かつた。窓から月明かりが入つてくるだけだ。

しばらくすると、非常用の電源に切り替わったようで、足元を照らす淡い照明だけが点つた。ほつとする間もなく、遠くから人の悲鳴が聞こえ、発砲音がした。

ボスがまた誰かに怒りをぶつけているのだろうか。

聞き耳を立てていると、廊下を走り回る足音と、叫んでいる声、さらに重なつた銃声が聞こえてくる。

誰かが、それも何人もが銃を撃ち合つてゐる。

私は廊下へと踏み出し、何が起こっているのか見極めようと、歩いていこうとした。

すると、誰か人影がこちらへよろめきながら走つてくるのが見えた。その人は後ろから銃弾を受けたようで、音と共に床に倒れ伏した。制服の黒い背中は、艶のある液体で濡れている。ぼんやりとした光でよくは見えなかつたが、あれは血だ。

「ちょっと……」

大丈夫ですか、そう言つて男の元へ駆け寄つとする。手を動か

しているから、まだ意識はあるはずだ。

だが、走りだす前に私の肩を背後から掴むものがいた。

「よせ」

振り返ると、そこにいたのはグレイだった。彼は私の腕を掴むと食堂に引っ張つて行つた。

「何があつたんですか。あの人は……」

「動けない奴はあれ以上攻撃は受けない。大丈夫だ」

彼は壁に背をつけて、荒い息で言つた。

「グレイ、あなた……」

私ははっとする。

彼が自らの右肩に乗せている手は濃い色に染まっていた。黒いコートと薄暗さのせいによく見えないが、傷を負つているようだ。

「それよりもっと奥へ。敵が来るぞ」

私を急かし、厨房まで下がる。

流し台の前に座り込んで、彼は悪態をついた。

「トラップも全て回避か。かかつてたのは別の奴。意味ねーし」

右肩に触れていた手にぎゅっと力が入る。呻き声を漏らし、顔をしかめた。

「こんなに痛てーとはな。面白れーなんて言つてらんねー。腕がいいとこうなるつてか」

「大丈夫ですか」

「ああ」

返ってきたのは唸りにも似た低い相槌。

「一体何が起こっているんですか？」

躊躇いながらの問いに、彼は不審げに顔を見上げた。

「知らねーのか？」

何も知らない。緊急連絡用のブレスレットにだつて何の反応もないし。

また蚊帳の外といふことだらうか。仮契約時ならともかく、私はもう正真正銘マステイマの隊員のはずなのに。

「そうか、これはな……」

彼が説明を始めようとした時だつた。銃声が近くに聞こえた。誰かの悲鳴も。

乱れた足音。ほんのすぐ傍。そこの廊下ぐらいだ。

「くそ、もう来たか」

グレイは左手で上着の下から銃を取り出す。カウンターに仕切られて廊下までは見えないが、一つだけクリアな足音が響く。どうか通り過ぎて行つてくれますようにとの願いも、むなしく終わる。次第にこちらに近付いてくる。

肘と膝を付いて、グレイは静かに食堂のほうへ這つて行く。私も腰を落として彼の後に続いた。

物陰から食堂に入つてきた侵入者を見つけた。

足元を照らす非常灯の光しかないと、この距離で見えるのはシリエットくらいなもの。田を細めて見極めようとすると。相手は背の高い男だ。

一いちらへと歩きながら、男は下していた右手を上げた。鈍い光に銀色に煌くものが握られている。あれはおそらく拳銃だ。

これほど薄暗くて視界が悪い場所では、武器のない私にはどうすることもできない。傷を負つたグレイに頼つてしまつことになるのが腹立たしい。

当のグレイはさすがの落ち着きを見せている。長い前髪から覗く左目がじっと男を見つめる。相手の出方を考え、自分との距離を測つているようだ。

射程範囲内に入つたと判断したらしい。カウンターが途切れた場所から、床を転がりながら発砲する。

駄目だ、外れた。男は避けてもいない。銃を構えると、グレイへと狙いを定めている。

やらせてはならない。

私は床に置いていたビニールをかぶせたダンボールを引き寄せた。そこからつかみ出したものを投げつける。

男は唸り声を上げた。腕でそれらを叩き落す。

床に落ちたのは、野菜の切れ端、傷んだ林檎だ。それを見下ろした男は、さりに怒りを高まらせたようだった。足を早めてこちらに近付いてくる。

グレイが銃をいじつているのが聞こえた。装填が完了したようだ。男が狙いを定めるべく上げたのは先ほどとは違う手。もう一挺の銃だ。装備は向こうのほうが上だ。

私はダンボールの中を探った。こんなものでは痛手は「えられな」が、相手の気を少しでもそらすことができれば、上出来だ。あとはグレイがきっとうまくやってくれる。

取り出したのは更なる手榴弾。手の感触からしてまさにそう呼ぶにふさわしいものだ。

グレイが中腰になつて、カウンターの向こうに置かれている棚を相手に向かつて倒した。

後退する男に向かつて銃を向ける。私も手の内の物を投げつけた。銃声に応えて、相手もまた銃を撃つた。倒れる棚の間をすり抜けた弾が、グレイの胸に吸い込まれる。

「グレイ！」

私は叫んでいた。

30・迫り来る敵（前編）（後書き）

次回予告・厨房に隠れる一人に迫る敵。応戦するグレイに加勢しようとすむ//シール。やがて復旧した明かりに照らし出されたものの正体は……。

第31話「迫り来る敵（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランディングの文字をポチッとお願いします

31・迫り来る敵（後編）

「技術部、照明！」

男の低く鋭い声が響く。そして、同時に何かが潰れたような音も。辺りの照明が一気に回復した。

私は眩しさに目をしばたきながらも、グレイの姿を捜す。

彼は床に倒れこんでいた。体をくの字に曲げて呻き声を上げている。押さえているのは右胸。にじみ出でるのは血だ。だけど、なんだか様子がおかしい。掌を汚している色つて……。

「なんだ、これは！」

後ろから聞こえる男の怒声。でも、なんだかこの声は聞き覚えがある。恐る恐る振り返ってみると、やつぱりだ。

そこにいたのはボスだった。

いつもの黒いロングコートのボタンを全てとめて、小型無線機と思われるものを耳につけている。

私は混乱する。何が起こっているか分からない。ボスがグレイを撃つた。何がどうなつていてるんだう。

しかも、ボスの黒い髪にはどろつとした物がかかっている。彼はそれを掴んで見る。革手袋の指の間から垂れ落ちていくのを見て、その手がわなわなと震えだした。

私は心中で声にならない悲鳴を上げる。

見なくても分かつている。それは消費期限切れの卵だ。廃棄処分する予定のものだった。

ボスがこちらを睨みつける。突き刺すような視線が痛い。私はなんとか彼の目から逃れようと、再びグレイに目を向ける。

「くつそー、また負けた」

グレイは後ろ手を付いて、半身を起こした。

「一発ハンデもあるつていうのに」

悔しそう床を掌で叩いている。

その肩には赤い色、胸には黄色が付いていた。ペイント弾だ。食堂の壁に付いている赤い色、放ちながらも標的に当たらなかつたものと同じものだ。

「それにしてもボスの弾は痛ーんだよ」

そう言いながら、食堂を振り返ったグレイは言葉を無くした。怒りをくすぐらせているボスと目が合つてしまつたのだろう。彼は小さく呻いて、腰を床につけたまま、後退りした。

「おいお前、さつさと出て來い。何のつもりか言え」

ボスの声は殺氣立つている。

ここにじつとしていても仕方ない。時間が経てば経つほど彼の怒りは増していくだけだろう。私はゆっくりと立ち上がり、食堂へと出た。

と、廊下が騒がしい。

「どつちが勝つたんだ？」

「それはボスに決まっている」

食堂の入り口に現れたのは、ジャザナイア隊長とレイバンだった。彼らもまたペインント弾をその身に受けている。

ノーネクタイでシャツ姿のジャザナイア隊長。その胸に付いた黄色、腹の赤色が鮮やかだ。レイバンの広い額は、二色混じったオレンジ色に染まっている。

彼らは、生卵弾の洗礼を受けたボスを見て一瞬声を失つた。

「ボス、それはどうされたんです。何があつたんですか？」

最初に金縛りを解いて近付いたのはレイバンだった。ボスは彼を一睨みするなり、横蹴りを食らわせた。

「うるせえ」

とんだとばつちりだ。膝を付いたレイバンは、腹を押さえて呻いている。

ジャズ隊長はといふと、ボスの頭を指差してこぼれ出る笑いをこらえていた。ボスの殺気に満ちた視線が向く。

「るせえぞ」

隊長は口を押されて、分かつた分かつたと、もう片方の手を押し出している。

「申し訳ありません」

私はボスの前に踏み出した。

これ以上、他にボスの犠牲者を出すわけには行かない。私が投げた卵のせいなのだから。

「ボスが敵に扮しているなんて知らないくて。こんなゲームみたいなのがあつてるなんて」

「ゲームじゃねえ。非常時訓練だ」

前に立っているだけでも怖い。凄く腹を立てている。

それはそうだろう。私は何度もこういう目に合っているけれど、ボスはおそらく初めてだろう。しかも部下にこんなことされるなんて、夢にも思わなかつたはずだ。

私は怒りを受け止めるつもりで、首を垂れた。

「まあまあ。非常時の訓練なんだから、ある意味なんでもアリだろ。銃を持っている相手に、こんなもので応戦するなんて大した勇気じやねえか」

「お前は黙つてろ」

ジャザニア隊長の言葉にも、もちろん聞く耳を持つていない。ボスは傍までやつて来た。ちょっと手を伸ばせば、簡単に捕まってしまう位置だ。怒りを帶びた声が上から降つてくる。

「おい、落とし前はどう付ける気だ？」

「僕は……」

私はうなだれたままだった。

「オレはボスも悪いーと思うけどなー」

突然、思わずこころから助け舟が来た。グレイだ。

彼はいつものコートのポケットに両手を突っ込んだ姿で、ボスの傍に近寄った。

「なんだと？」

凄んだボスにも動じない。

「Jの非常時訓練のこと、発表したのは彼の辞令交付の日だつたよ。部屋に入つてくるくらいに隊長が言つていて、ボスが後から伝えるつて言つてたのを覚えてるよ。あれ、ちゃんとこの子に話してんの？」

ボスは沈黙した。

話していないのが故意なのかそうでないのかは分からぬ。だが、ここで突つ込まれるとは思つていなかつたようだ。

「だから、部下の失敗は上の責任で……」

ジャズ隊長がいつか聞いたフレーズを繰り返す。

ボスの睨みは彼に移つた。私は細い溜め息をつく。

「ボスは何も悪くない」

その時ぼそりと呟いたのは、床にうずくまるレイバンだった。

「ボスこそ全てなのだ。ボスは偉大なのだ。誰もボスに逆らうなど許されんのだ！」

「つるせえんだよ」

腹を押さえながら膝立ちになり、叫ぶレイバンを後ろからボスの足が押し倒す。肩の辺りを直撃している。足の長いボスだからこそなせる業だ。

レイバンは床に前のめりに崩れた。一度もとばっちりを食らうなんて、つくづく不運な人だ。

ボスは踵を返して、廊下へと向かつた。

「ボス」

私は追いすがる。こんな禍根のようなものを残して、終わりにしだくなどなかつた。

ボスは腕で払いのけた。もろに食らつた私はバランスを崩し、背後にあつた丸椅子を道連れに倒れこんだ。

「次の訓練の時には覚悟しておけ」

頭まで打つてしまつたのか、くらくらしているといひへボスの捨て台詞。

私はもう止めることなどできず、頭を押されたまま、座り込んで

いた。

「大丈夫か？」

グレイが覗き込んでくる。

私は頭を抱えながらも、大丈夫だと答えようとするが、できなかつた。

乱れた息に涙が滲んで視界がぼやけた。その上、ぶつけた腰が痛い。手でさすっている間に、なんとか過呼吸もおさまってきた。

「次の訓練は半年後だ。それまでにあいつの機嫌が直るか、忘れるかどちらか祈るしかねえな」

ジャズ隊長の言葉に、妙な汗が噴き出す。半年後って、もしかして年二回もあるってことなんだろうか。

「ボスは忘れはせん。自分も忘れんぞ」

レイバンが呻きながらそう言った。腹に手をやったまま、やつとという感じで立ち上がる。それから廊下を目指して足取りも怪しく歩いていった。

「あー、やつとうぜーのがいなくなつたぜ」

それはちょっと、グレイは言い過ぎなのではと思つ。

レイバンのあのボスへの忠誠心には驚くと共に少し羨ましく思う。あれだけ心に決めた人がいてそれを貫けるなんて。彼の律儀さには頭が下がる。

「立てるか。アビーに来てもらつか？」

ジャザナイア隊長の言葉に、私は立ち上がりながら大丈夫だと答えた。ここで彼女を呼んだら、また心配させてしまつに違いない。散々な一日の終わりだった。

皆が帰つていった食堂で、色の付いた壁の掃除をしながら、打ち身で痛む腰をさする。

今さらながら半年後が怖い。

だけど、きっとここはジャズ隊長のよう、「そん時が来れば何とかなるさ」で行くしかない。あの人の楽天的などこりは学ぶべきところも多いのかもしれない。

とりあえず畠田のことだけを考え、私は片づけを続けた。

31・迫り来る敵（後編）（後書き）

次回予告：本社との合図会議のため、休憩用の「コーヒー」を用意するミシール。会議室から聞こえてきた悲鳴。何事かと驚く彼女が目にした、倒れた人物とは……。

第32話：「髪は男の命です」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

32・髪は男の命です

その日の午後、私は厨房で焼き上がり間もないマドレーヌを皿に並べていた。

いい感じの仕上がりだ。粗熱が取れたばかりで甘い香りをまとっている。

それをワゴンに乗せる。コーヒー・カップやソーサー、スプーンもだ。

特に甘党のレイバンがたくさん使うミルクは大型のピッチャーハリ。砂糖のポットも大きい物を用意した。それから保温機能付きコヒーサーバー。

準備は万端。

今日は本社から来ている情報管理部の人との合同の会議。ボスを始めとして幹部皆が出席している。

本来ならボスは出席しないものだが、今回は特別らしい。統括長とかいう肩書きの人が一緒だからだそうだ。

腕時計を見やる。間もなく十五時。予定ではそろそろ休憩の時間になる。

ワゴンを押して会議室へと向つ。

通い慣れたルートだ。目をつぶつてだつてたどり着ける。

すでに扉は目と鼻の先。あと十歩足らずの所まで来ていた。

突然、凄まじい悲鳴が聞こえてくる。この方向、間違いなく会議室からだ。

足を早めようとしたところへ扉が内側からばたんと開いた。

「しつ、失礼しましたー」

そう言いながら、男二人が飛び出してきた。

禿げかかった頭の太目で年配の人と瘦せ型の若い人。スーツを着ているから本社の人たちだ。無造作に資料を抱えて、慌てふためいた様子だ。

「あの、今コーヒーが……」

呼びかけに、びっくりと振り返った彼らは私に手をとめて、若干気を緩めたようだった。

だが、それも一瞬のことだった。

続く扉の開く音に、後ろを振り返ることもせずに、一人は駆け出した。

「ご馳走様でしたー」

紙の資料を撒き散らしながら走り去っていく。ご馳走様つてまだ何も出していないのに。

続いて会議室から出てきた存在を知つて、彼らの慌てようの意味を知つた。

今度は私が焦る番だ。

「本社の犬が

低い声で罵りながら、小さくなつていぐ一人の背中を睨みつけるのはボスだ。

彼は私を一瞥しただけで、存在しないものと決め込んだようだ。横を通り過ぎていくボスを見ないようにする。怒りの炎がオーラのようになえ上がっているのを感じる。こんなときは関わらないほうがいい。

マスティマのコックとなつて獲得した、もつとも役立つ知恵だ。足音に耳を澄ませながら、角を曲がつたことを確認する。

それから、会議室の扉を開いた。

テーブルにうずたかく積まれた資料の山。だが、席には誰もいなかつた。

用意したコーヒーと菓子が無駄になつてしまつたのではと思つ前、続きの小部屋の扉が開いていることに気付いた。

そつと中を覗く。傍にレイバンの大きな背中があつた。邪魔になつて部屋の中を見渡せない。だが、アビゲイルの声を聞き取ることができた。

「しつかりしなさい。気を確かにじて」

ボスの被害者がいるよつだ。

さつきの本社の人たちはボスの怒りを田の間たりにして、逃げ出したのだろう。

「どうしたんですか」

足音を忍ばせて中に入ると、レイバンに尋ねる。

彼の視線の先、床にいる人物を見つけて私は思わず声を上げた。

「ジャズ隊長！」

まるで尺取虫のようだ。

頬を床につけ、腰を宙に浮かして、膝を付くといつ器用というか無理な姿勢。

ジャザニア隊長はアビゲイルの声に反応していない。唇は半開き、目は虚ろ。魂はどこかに行ってしまった、抜け殻のよつだ。

「哀れだ」

レイバンが神妙な顔つきで呟いた。

床が赤色に染まっている。傷を負っているのかとぎくつとするが、そうではないことはすぐに分かった。

「大丈夫だつて、隊長。髪なんかすぐに伸びるつて」

腰を落とし、力づけているのはグレイだ。

そう、散らばっているのは赤い髪の毛だつた。隊長の髪が無残に刈られていた。肩甲骨ほどまであつた巻き髪は、今や首の辺りの長さだ。

レイバンの言葉どおり、哀れを誘うばかりの髪。こんなことを誰がやるつて答えは決まつていて。

「オレが格好よく揃えてやつから」

グレイが鋏を手に取つた。

さつきまで床に転がっていたものだ。髪を刈るためのものではない。あれは文具の鋏だ。

ボスが使つたものだつた。会議室に常備している文房具の一つだ。ようやく隊長は起き上がつた。肩を震わせながら、皆の視線を振り切つて会議室のほうへ歩いていく。

私の横を通り過ぎる顔は、俯いたままで青白い。

彼は戸口の前に立つと背を向けたまま立ち止まつた。涙をこぼれるかのように顔を上に向ける。

「隊則第一章第一項。心に刻めよ、お前たち」
言葉だけではない。猛烈に背中で語つている。
そうして隊長は去つていった。

32・髪は男の命ですか（後書き）

次回予告・全ての始まりはアンチマスマティマの姑息な陰謀？ アビゲイル、グレイ、レイバンが語る、ジャザナイア隊長がボスに髪を切られたわけとは……。

第33話：「アンチマスマティマ」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

「隊則第二章第一項?」

ジャザナイア隊長の残していった言葉を反芻し、私は首をかしげる。記憶の欠片が掠めるが思い出せない。するとアビゲイルが暗唱した。

「髪型は問わないが、長いものは結ぶ、とめるなどして勤務に差し支えないようにして……よね」

確かにそんなのがあったような。短く髪を切った時点で、私には関係ないと気にもとめていなかつた。

「それってボスの犠牲者を減らすために、昔、隊長が作ったんだよな。それが自分でハマるなんてなー」

グレイは腰を落としたままで、床に散らばった赤い髪を一房手に取つた。

「これ、エクステに使えねーかな」

冗談かと思つたが、髪をかき集めている。本気のよつだ。

「ぬおおー!」

突然、レイバンが右拳を握り締め、雄たけびを上げた。

「隊長はマステイマとしての規範を身をもつて示されたといつか!」

「反面教師つてやつか。違うんじゃないのか?」

グレイは呆れたように、見上げて言う。

床に目を落としたアビゲイルは深い溜め息をついた。

「だいたい本社の連中が悪いのよ。嫌がらせにも程があるわ」

「八つ当たりで、ボスが隊長の髪を切つたってことですか?」

本社の人と今回の件とどう関係があるのでう。疑問に思つた私は尋ねた。

「イエスでもあり、ノーでもあるわね」

肩をすくめたアビゲイルは、事の次第を話してくれた。

ディケンズ警備会社の人間の中にはマスティマを毛嫌いしている者がいるのだそうだ。

上層部にも何人かいて、時々ちょっかいを出してくるらしい。もつとも本社のトップが容認派なので、表立つての動きはないのだが。今回の会議もそうだといふ。

システム関係の会議と銘打つておきながら、技術情報部長のオスカーハーがディケンズ支社へ出張中に開催を決める。統括長を担ぎ出してボスの出席を求める。これだけでも火種は十分だ。

その上、持ってきたのは膨大な紙の資料。プロジェクトやディスプレーなんて使わない。情報管理の名前が泣きそうだ。

これだけでは終わらない。

流行りのエコとかで、枚数を減らしたという資料の文字は豆粒のよう。皆資料に顔を突っ込んで、何ページの何項を参照とかで会議は進められらしい。

なんという陰湿でセコイやり方だらう。大の大人が仕事でやるようなことだろうか。

ボスがあんな風だから、マスティマがディケンズ本社の人たちから良く思われていなければ、想像に難くないけれど。

アビゲイルによると、昔のボスなら会議が始まる前にテーブルでもひっくり返して、おじやんにしていただろうとのこと。年月は偉大ねと感じ入っていた。

だけど、結局本社の人たちは途中で帰ってしまったのだ。結果は同じだと思う。

それに、まだ何故隊長が髪を切られたのか、教えてもらつていなさい。

会議室に場所を移して話は続いた。

アビゲイルは、「コーヒーを傍に置いて椅子に腰掛けている。ちぎつたマドレーヌを口に入れ、一息ついた。

「ジャズも運がなかつたのよ。髪を縛つていた紐が切れちゃって。すぐに替えを用意すればよかつたんだけど、会議が始まること前だつ

たから、それもできなくて」

「ボス、すっげー嫌な顔で見てたもんなー」

ワゴンの横に椅子を引っ張ってきたグレイは、コーヒーを啜りながら口をはさむ。

アビゲイルの隣の席でレイバンが頷いた。

「髪をかき上げ、かき上げ、資料を覗き込んで。それは鬱陶しかった」

「連中が新しい情報管理システムの説明に入った頃ね。図解なんだけど、印字が潰れて文字が読み取れないのよ。皆さらに資料に目を近づけて。ジャズは髪をまたかき上げてた。その時だつたわ、ボスの堪忍袋の緒が切れたのは。隣の部屋に引きずつて、いきなり鍔でチヨキンよ」

指で鍔を作りながら、アビゲイルは呆れたような笑いを浮かべた。

「不運だ」

マドレーヌを丸ごと一個頬張ったレイバンが、口をもじもじさせながら呟く。

彼の気持ちは隊長よりもマドレーヌに向いているようだ。アビゲイルとの間に皿を置いてあるのにまるで遠慮がない。

ミルクと砂糖たっぷりのコーヒーで流し込み、さらに両手に取る。一人で全部食べてしまいそうな勢いだ。まあ、お客様の分が必要なくなつたから、それでもいいか。

「立ち直れるかしら。あんなに気を落として」

姉らしい気遣いに満ちた言葉。

確かに落ち込んだジャズ隊長なんて今まで見たことがない。いつも元気で笑顔いっぱいのイメージだ。

それに部下たちから好かれていて。私にも気軽に声をかけてくれる。「元気か」とか「あんまり頑張りすぎるなよ」とか。上に立つ者の鑑のような人だ。

なのに、あんな仕打ち。いくらなんでも酷すぎると思つ。

「オレ、覗いて来つから。なんか面白そーだし」

カップを空にしたグレイが椅子から立ち上がった。
アビゲイルが礼を言つと、彼は背中を向けたまま片手を上げて応えた。

どうやらグレイなりに気遣つた言葉だつたらしい。いつものようには、ちつとも笑つていなかつたし。面白いことをずっと捜している彼だからこそ、洒落になる所とそうでない所の線引きははつきりしているようだ。

実際のところ、隊長の髪をきちんと整えることができるのは彼だけなのだ。

今日のところは任せで、今度会つたときに隊長に声をかけよう。
ボスに沈められた気持ちを何とかしてあげたい。

だって、ジャズ隊長は落ち込んだ気持ちを前向きにさせてくれる人なのだ。あの明るさで暗い雰囲気を吹き飛ばして、希望を見せてくれる。

今度は私が隊長を慰めてあげなければ。その人が再び笑顔を取り戻せるように。

私はそう心に決めた。

33・アンチマスマティマ（後書き）

次回予告：ひどい落ち込みだったジャザニア隊長にびつ声をかけるべきか迷うミシール。ところが、彼の様子はいつもと同じ。その心を救つた存在とは……。

第34話：「表裏一体」

お話を気に入つていただけましたら、下のワンドキングの文字をポチッとお願いします

ジャザニア隊長を田にしたのは、次の日のこと。玄関のホールでだつた。

腰を落とした姿。ちょうど座り込んで靴の紐を結んでいたところだ。

あつと声が上がる。片手に中途半端な長さの紐が握られていた。切れたらしい。なんだか不吉な感じだ。

嫌なところに通りかかつてしまつた。こんなときにはなんて声をかけるんだっけ。

「ご愁傷様でした？」いや、きっと違つ。

傍にいた隊員が気付いた。新しい靴紐を持つて来ようとして隊長に止められる。

「とりあえず、一日もてばいいもんな」

そう言つて、千切れた紐を結び合わせて使つてはいる。大胆だ。だけど、あれ？ いつもの隊長だ。昨日のことなんてなかつたかのようだ。

髪はもちろん短い。ポニーくらいあつたのがウサギの尻尾になっている。辛うじてゴムで束にしているといった様子だつた。

「そんなところで何やつてんだ、ミック」

不意に声をかけられる。

振り返ると、グレイがいた。黒いハーフコートのポケットに両手を突っ込んだ、いつものいでたち。

角に隠れるよつとして覗いていた私は不審者のよつだつたのだろう。

う。

「ジャズ隊長、立ち直つたみたいですね。さすがグレイ」

「オレはなんにもやつてねーよ。髪は揃えたけど」

グレイは隊長を見やつた。

「付け毛も無駄になつちまつたし」

いるかとポケットから取り出す。その赤い色、ウーブした形。見事なエクステだけど、私がもらつてもどうしようもない。一発で隊長の髪だと分かるものだ。そんなのを付けていて、ボスの目に触れたりしたら。考えただけで悪い夢でも見そうだ。私は首を横に振つた。

当の隊長はしゃがみこんだまま、笑い声を上げている。靴紐の結い方が左右違つと突つ込まれて、「本當だ」と部下の尻をぽんと叩いていた。

「飲み屋のねーちゃんだよ」

グレイが言う、隊長を救つた正体。

昨日、隊長の部屋を訪れたグレイは、髪を揃えた後、街へと飲みに誘つたらしい。

その飲み屋は隊長もよく行つていて、たちまち彼の髪型はおねえさんたちの話題になつた。

あれだけ短くなつているのだから、そりや誰だつて気付くだらう。派手な色だし。

そこで絶賛されたのだそつだ。

今のも素敵だとか、男ぶりが増しただとか、どんな髪型でも似合うのねとか。

気持ちよくお酒を飲ませるのは彼女達の仕事のうちだ。お世辞も入つていろとは思つただけど、隊長のテンションは一気に回復したらしい。

「あーいうシンプルだ、オレは好きだぜ」

彼の言葉にぎょつとする。上司を単純だと言つてのける、グレイもまた大胆だ。

そして、私をさらりに驚かせる存在がやつてきた。廊下に響く足音が聞こえてくる。

ボスだ。

二人の隊員を従えて近付いてくる。マスティマの制服である黒いロングコートを翻して歩く様は存在感抜群だ。たちまち雰囲気が塗

り替えられる。

両脇の二人は荷物持ち。段ボール一箱ずつ。上を開けたままのダンボールからは、ひらひらと紙が揺らめいているのが見える。持ち手が顎で押さえて何とか落ちるのを免れている状態だった。

あれはおそらく昨日の資料だ。

本社に出向くのだろう。嫌味の一つでも言ひに行くに違いない。嫌味だけで済んだらしいのだけど。

ボスは隊長へと目をやった。

隊長は気付いて、結び終えた靴紐から手を離して立ち上がる。

「本社に挨拶に行つてくる」

すれ違ひ様のボスの言葉に、隊長は頷いた。

「気をつけてな。連中に食われるんじゃねえぞ」

眼光鋭く横目で睨みつけるボスに気付いていないようだ。

「ボスにエール！」

大声で言つて、宙に拳を突き出す。

すると申し合わせたかのようにホールにいた隊員たちが集まってきた。隊長を中心にして菱形の陣形を作り出す。なんだろう、このノリは。

「それ、頑張れ、頑張れ、ボース！ 負けるな、負けるな、ボース！」

交互に拳を突き出しながら連呼する。他の隊員たちとも息がぴったりだ。意味が分からぬが、見事だ。

玄関の扉を目の前にして、ボスは足を止めた。振り返つた目つきの恐ろしいこと。

木製の一人掛け用の椅子を引つつかんで、戻つてくる。扉の傍に置かれていたものだ。

ストレートで飛んでくる椅子を身をそらして避けたのは隊長だ。拳を突き出すリズムも狂つていない。後ろの隊員に当たつた。痛そうだ。後ろ向きに倒れこんでいる。

ボスの舌打ちが聞こえてきた。彼は忌々しそうに腕時計を見やると、応援のコールを背にして去つていった。

「あーいう意味のねー情熱も好きなんだよな」
グレイの言葉は褒め言葉なんだろうか。

あの左右対称の陣形、そろつた拍子はおそらく練習の成果だろう。
その場でできることではないのは確かだ。

ジャザニア隊長とボス。二人の関係はやっぱりよく分からない。
まったく性格が違うのに、やっていているのが信じられない。
凸と凹、陰と陽、プラスとマイナス。互いを補つてバランスを取
つているのだろう。

つまるところ、共通点があるとしたら、バイタリティが溢れてい
るということだけなのだろうか。

そんな上司について行くのは大変だ。こっちの身にもなつて欲し
い。

だが、一人ともその気がないことは明白だった。

34・表裏一体（後書き）

次回予告：城で見かけた、アビゲイルとは別の女の人。マステイマには他に女性はいなはず。アビゲイルに問うミシール。その答えは彼女の想像を超えたもので……。

第35話「ボスの秘密」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

マスティマには、女はアビゲイルしかいないことになつてゐる。私も女だが、働いているのは男としてだ。控えめな胸を伸縮性のあるサポートーでぐるぐる巻きにして。それから、髪は常に短く刈り、声も低めに落とす。

変えられるのなら背丈も欲しいところだ。なんといつてもマスティマで一番背が低いのだから。体格のいい隊員たちの中に混じると、余計にそれを感じる。

女であることを理由にもできない。アビゲイルと比べたつて差がある。日本人である祖母の血を濃く引いてしまつたのだろう。イタリア人女性の平均を下回る、百五十八センチが私の身長。成長期を過ぎた今、これ以上伸びる可能性はゼロに均しい。

この話をするとき、気分が重くなるので話を戻そう。

マスティマに入る時の第一条件、それが男であることだった。女が男の真似をするのだ。少々の犠牲や努力もやむをえない。そう思つていた。

だから、初めてアビゲイルとは別の女人を見かけたとき、とても驚いた。

そもそも夜遅く。城の廊下で。

一日の仕事を終えて、部屋に戻るときだつた。ジャザナイア隊長のお酒とつまみを用意してから上がつたから、午後十時は過ぎていった頃だ。

ミニスカートに網タイツ、上着も胸が大きく開いたもの。私と同じくらいの年頃の人だつた。

ハイヒールを鳴らしながら廊下を歩いている。赤く塗られた唇やふくよかな胸にかかる長い砂色の髪が艶めかしさを強調している。

合いそうになつた視線を慌てて外す。不自然極まりないだろうが、うまく誤魔化す余裕さえなかつた。

くすりと笑い声が聞こえる。私は廊下の隅に寄り、頭を下げて彼女をやり過ごした。

顔が熱い。それにひどく胸がドキドキしていた。なにか見てはならないものを見てしまったような気がした。

翌日、アビゲイルに尋ねたとき、その感覚は間違つていないことを見つた。

「それはボスの愛人の一人よ」

こともなげに言う。

彼女の仕事場である医務室で、私たちは向かい合つて座っていた。もつとも医者と患者としてではない。彼女の娘、プリシラのために作ったお菓子を届けようと持つてきただけだ。

「恋人じゃなくて？ それもその一人つて……」

私は言葉に詰まる。

「恋愛関係にはないから。シェリー、アーリヤ、ミリアム、三人いるわ。あなたが見たのはアーリヤね」

指を折る彼女に目を見張る。愛人という言葉も信じられないのに三人もいるなんて。何でそんなに必要なんだろう。それが普通なんだろうか。

そういう話に疎い方だと自覚はあるが、三人なんて人数、とても常識的だとは思えない。

それに恋愛関係にない愛人つて一体……。

言葉の意味を悟るのに数秒は要したはずだ。

私はきっと瀕死の金魚みたいな顔をしていたのだと思う。アビゲイルは笑みを漏らした。

「考えられないわよね、普通。あの人は好みがうるさいし、集めてくるのも大変なのよ。頭の悪い女は嫌いだとか、喋りすぎる女も嫌だとが文句が多いんだから。だいたい皆長く続かないし。だから、いざという時のための三人なんだけど」

私の思考の域を完全に脱している。ボスを見る目が変ってしまいそうだ。しかも、集めてくるって、どういうことなんだろう。

「もしかして、アビゲイルが捜してくるんですか？」

まさかと思いながら尋ねる。すると彼女は肩をすくめた。

「相手をするのはマスティマのボスよ。変なのが紛れていたら困るじゃない。暗殺者とかスパイとか。だから、私が身元まで洗つてお願いするのよ。もう大変なんだから」

同性に頼まれる愛人の気持ちってどんなだろう。私には想像もつかない。

「誰がどれくらい深い関係かなんて分からんだけどね。どうも彼女達に諜報活動をさせてることもあるようだし。チャーリーズ・エンジエルみたいよね」

アビゲイルの言葉に頭をひねつて思い出す。

それって見たことがある。ありえない美女三人がスパイ活動みたいなことをやって大活躍する映画だ。

「ディヴィッツ・エンジエルか。語呂がちょっと悪い気がするけど。「まあ、あなたには関係ないことね。すれ違つたら挨拶でもしつけば良いんじゃない？」

アビゲイルはさらりとそれいつが、次に会つたとき出来るだらうか。不安になつてくる。

だつて、愛入つてことは、深くも浅くもボスとはそういう関係なんだろうし。ああ、もう想像どころか妄想の領域だ。

気が付くと、アビゲイルが私の顔を覗きこんで、微笑んでいた。

「あなたも若いものね。彼女でも作つたら？ 何なら私が紹介してあげるわよ」

「結構ですっ。失礼します」

慌てて立ち上がつたせいで、丸椅子がくるくると回つた。

乱れた足音を残して部屋を後にする私を、驚いたように見つめているアビゲイルがいた。

歩き方まできこちない。自分でも分かる。右手と右足が一緒に出てるんじゃないだろうか。目を落として確認してみるが、さすがにそれはなかつた。

廊下に出てほっとする。力が抜けると共に不自然さも消えていった。

彼女を紹介つて私、女だし。

ああもう、ボスの愛人なんて見つけるんじゃなかつた。

頭に当てた手で髪をかき乱した。

分からぬし、考えたくもない。あの人のことで頭を悩ませるなんてごめんだ。私は想像したボスに八つ当たりしながら、廊下を足早に歩いて行つた。

35・ボスの秘密（後書き）

次回予告：なんだかいつもと違う今日のマステイマの昼食時風景。
その原因はボス？ グレイが言つて、聖なる日^{ホーリーデイ}の意味とは……。

第36話「聖なる日」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチ
ツとお願いします

マスティマは機密管理に力を入れている。

例を持ち出すなら、城には住所が存在しない。物品の授受など、全ては表のディケンズ警備会社本社を介してやりとりをしている。電話もネットも回線が特別なもの。複数の防御策を講じて、招かれざる外部との接触を遮断しているらしい。

情報漏れを防ぐことこそ最大の防御。手段は他にも色々あるようだが、あとは私が気付いていないだけの話。

主となるのは技術情報部。マスティマのテクニカルチームの能力が発揮されるところだ。その機能はディケンズ本社の同様の部署をしのぐという噂。

表に出ることはない重要な存在だ。

「功績を挙げて目立てばいいのは実行部隊。縁の下の力持ちになつてこそが仕事だからね」と言い切るのは技術情報部、部長のオスカー。是非、ボスにも聞いてもらいたい言葉だ。

ボスといえば、彼を始めとして幹部達の移動の情報もまた秘密扱い。

誰が何処でどんな仕事をしているか、或いは休みを取っているかなどは前もって知らされることはない。

それでも、いないことが分かりやすいのはジャザナニア隊長だ。彼がいないと皆がさらにきびきびと働き出す。廊下を歩く速度から違つてくる。立ち止まって雑談なんてとんでもない。ボスからかばつてくれる唯一の存在がいないといふことが、皆の気を引き締めるらしい。

当のボスもまた城を空けることはある。もちろん日時の予告なし。食事を用意しなければならないコツクである私にさえ。アビゲイルづてで情報をもらえるのは良くて一時間前だ。

ボスの不在の日を知るのはジャズ隊長よりもっと簡単だ。朝、自

分の部屋を出たとたんに分かる。空気が違つのだ。食堂ではそれが顕著だ。

それはマステイマの食堂が一番賑わうお昼時。

もつとも隊の全員が集まることはない。

隊の隠語である“雑用”、これはティケンズ本社からの依頼の仕事のことなのだが、警備の人数補填のために外に出ている者も多い。それに城の警備は交代制。昼休みもちょっとずつ時間をずらしてとつているようだ。

搔きこむように急いで食べて、各自の持ち場に戻つていぐ。だから、賑やかなのもひと時の間だけだった。今日までは。

「やたら多いな」

「コーヒーを飲みに来たグレイが、げんなりとした表情で食堂を見渡して言つ。

そうなのだ。今日に限つて皆寬いでいる。もうすぐ一時を過ぎるというのに。席を立たない隊員が多く、食後の「コーヒー」まで楽しんでいる。

お陰でグレイの分の「コーヒー」は、新たにできるまで待たなければならなかつた。

「迷惑だよなー、聖なる日ホーリーデイなんか」

不満げな声だ。だけど、意味が分からぬ。聖なる日つてクリスマスはまだ先だ。首を傾げる私に、グレイはにやつと笑つた。

「任務以外でボスがいない日だよ。皆そう言つてるんだ。そういうばあ前、前のときはいなかつたな」

ああ、なるほど。悪魔がいない聖なる日か。それでリラックスクスマードなんだ。前の時はアビゲイルと一緒に、ボスの嗜好調査に出かけてたから知らなかつた。

「今日はなんでも新型のヘリを見に行くつて言つていたぜ」

そうか。任務ではないから隊員たちも城の警備が主な通常勤務。食堂が賑わうわけだ。

ようやく新しい「コーヒー」が出来上がつた。

グレイはカップに注いで早速飲み始める。立つたままの姿に部下の人たちが席を勧めたが、彼は断つた。

「グレイはボスがいた方がいいってわけですか？」

最初にひどく不服そうだったのを思い出して尋ねる。

「オレはどっちでもいいんだ。ボスに怒られるなんてへマしねーし

そんな答えが出来るのはきっと彼だけだ。

私たちのやりとりを耳にしていたのだろう。隊員たちが信じられないという顔でこちらを見ている。壁に背を付けて、グレイはコー ヒーを飲み続けるだけだ。

「それに、こういう時はだいたい……」

声を遮る物音。天井の方から甲高いキーンという音が聞こえてきた。それが消えたかと思つと、流れてきたのはちよつとH-I-Y-Eのかかつた覚えのある声。

「テス、テス、テス。これ聞こえてんのかあ？」

この声はジャナナイア隊長だ。

後ろで「隊長、聞こえます」と言つ声がしている。食堂の隊員たちは笑いをもらした。

ジャズ隊長は咳払いをして声を整える。

「今から臨時の体力強化訓練を始める。手が空く者は中庭に集合のこと」

続いての言葉に、グレイは顔をしかめて天井を仰いだ。

私もつられて見上げる。城内放送の装置があるなんて知らなかつた。天井には、灰色で穴のいっぱい開いた円形のものが埋め込まれていた。あれがスピーカーなのだろう。今まで気にもしたことなかつた。

それまで和んでいた隊員たちが、席を立ち始める。

せつかくボスがいなくて羽を伸ばしているところだ。こんなとき訓練だなんて、きっと嫌だらうなと思いつつ、彼らの表情を見てみると大外れ。皆にこにこしている。

体を伸ばしてストレッチをする人もいて、やる気だ。

次々と食堂を後にする隊員たちとは反対の人物が約一名。二杯目のコーヒーを片手に食堂の奥へと下がっている。

「オレは行かねーから。オレのことは見なかつたことにしてくれ」腰がひいているのはグレイだけだ。

私は廊下へ出て、窓から中庭を覗いた。ぞろぞろ人が集まってきた。何処からか姿は見えないが、指示を与えてるのはジャザニアア隊長の大きな声だ。

「僕、ちょっと様子を見てきます」

グレイにそう言うと、返ってきた言葉は「気をつけろよ」だった。体力強化訓練だから、きっと参加するなら怪我をしないようにということだろう。

私は中庭へと向った。

36・聖なる日（後書き）

次回予告：ジャズ隊長が始めた訓練。目的は本当に体力強化なのだろうか。ミシェルの目の前で起こった衝撃の結末は……。

第37話「ダークホースは誰だ」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

37・ダークホースは誰だ

中庭を田の前にして、ジャズ隊長の声が聞こえてくる。

「今日のテーマは脚力の強化だ。下半身がしつかりていれば、瞬発力にも繋がるし、蹴りを入れるなど攻撃力アップになる。気合入れていけよ」

城の出入口口から、集まつた隊員たちを盾にして様子を覗く。歩き回りながら喋り続ける隊長の姿が会間から見える。思わず田が点になる。

何だろう、あの格好。

黒い短パンに赤いポロシャツ、ハイソックスにニー カー。そして手に持つているのはサッカーボールだ。ホイッスルまで首に下げている。

「今日の田のために、おれの給料で買ったサッカーゴールだ。皆にはここでフリー キックをしてもらう。キーパーはこいつだ」 隊長が指示したのはぴかぴかのサッカーゴール。そして、その前に立つレイバンだ。

かなり不満そうな顔つきで、突っ立っている。それでも、キーパーらしい格好はしていた。ちゃんとジャージを着て手袋をつけてるし。

きつと命令だとか言つて、隊長が無理やり引つ張り出して来たに違いない。

「ボール置くから順番に蹴つていけよ
早速開始だ。

「この間は先読みの能力を養うとかでバットゴルフだつたよな」「そん前は腕と腰を鍛えるつてフリー バッティングだつたし」「俊敏さをアップさせるとかで卓球もあつたつけ。よく考えるよな」 隊員たちは、こそぞそ言い合いながらも楽しげだ。ボールの後ろに列が出来、次々に蹴つていく。

ところが隊長は「……」、ホイッスルを他の隊員に渡して、お構いなし。私も顔を知っている三人の男と集まつてなにやら喋つている。

「オッズは……」とか「ダークホースは……」とか、フリー・キックには関係なさそうなことを言つてゐる。これはもしかして、レイバンが横に飛んでボールを防ぐ。四人は見やつて、おおつと歓声を上げる。

この人たちは賭けカード仲間だ。とにかくとはさつき喋つっていたのも、きっと賭け事のことだ。

「おい、隅を突いていけ！」

一人がキッカーに叫ぶと、隊長が「余計なこと言つな」と突つ込む。

まさに駆け引き。賭博だ。

隊員たちを巻き込んでこんなことをするなんて、間違つてゐると思う。ボスがいたらどうなることやら。だから、留守のときを狙つてやつてるんだろうけど。

レイバンは好セーブを連発している。大きな体格だが、素早い動き。いまだゴールネットは揺れていらない。

「やっぱりあいつは凄いな。選んで正解だ！」

ジャズ隊長は楽しそうに言つ。

「でも隊長。隊長が賭けてるのは完封じゃなくて一ゴールですよ。このまま行けば僕の勝ちです！」

水を差すのは顔にそばかすの残る一番若い男。

隊長はひとつ笑つて、その男の髪を片手でくしゃくしゃにした。

「おれが出るんだよ！」

道理で気合の入った格好だ。

列の最後尾に並んだ彼は、屈伸や足を伸ばす体操なんかやつていて、意欲満々だ。順番まであと五人。

レイバンのセーブは続く。パンチングもありだ。

跳ね返つたボールはキッカーを直撃する。こうなれば、サッカー

ボールも凶器だ。

顔面に受けたその人は仲間に抱えられて、退場になつた。本当の試合以上に過酷になつてきているみたいだ。

とうとう隊長の順番だ。皆取り巻いて応援している。声を出していなければ、ノーボールに賭けたらしい若い男だけだ。

ボールを置きなおし、隊長はレイバンへと目を向ける。

「隊長とはいえ通しませんぞ」

レイバンは隊長をきつと睨んで叫ぶ。最初は嫌そうだったのに、今となつてはゴールキーパーの鬼だ。

隊長は助走に入る。

そして、一回目はフェイント。ボールには触らず、ぐるっと回つて元の位置に戻る。

踏み出したレイバンは慌てて足を引っ込めた。

一回目。今度は間違ひなく蹴るはずだ。その場の全員が息を詰めて見守る。

「お前ら何やつてんだ」

と、突然拡声された大声。

皆ぎこちなくその声が聞こえてきた方向を見やる。高い壁の向こうから真っ黒いヘリが現れた。そのコクピット、操縦士の横にはマイクを持ったボスの姿がある。

危険を察知したのだろう。隊員たちは散り散りになつて逃げ出し始めた。

「ボス、そんなの無茶です」

「いいから貸せ」

マイク越しに操縦士と話している声が筒抜けに聞こえる。ヘリの機首が下がった。

「嘘だろ、おい」

ジャズ隊長が唖然としながら言い、城のまつに回って駆け出す。

「ボスがお戻りだ」

「レイバン、お前も逃げろ」

感慨深げな様子でヘリを見上げるレイバンに、走りながら隊長が叫ぶ。

ヘリから何かがものすごい勢いで飛び出してきた。一直線にレイバンに向って飛んでいく。おそらくあれは対戦車用のミサイルだ。ようやく気付いたレイバンは、大股でゴールから飛び出した。ゴールポストの間を通り抜けたミサイルはゴールネットを突つ切り、地面に着弾して爆発した。

恐怖の一ゴールだ。

爆煙が上がり、土が飛び散る。伏せるレイバンの体を覆う土埃。運良くも彼は無事のようだ。咳をしながらも、立ち上がってサッカーゴールを振り返っている。

地面には大穴が開き、それは無残にも大破していた。

「ああ、おれの新品のサッカーゴールがあ！」

頭を抱えて悲鳴を上げるのはジャズ隊長だ。

彼は胸のポケットから何やら取り出して空に掲げている。よく見ると、それはレッドカードだった。なんでこの人はこういう小物を持つてくるのだろう。会議のときの飴玉といい……。

「勘弁してくれ。この間もおれのバットを折ったし、おれの卓球台壊したろうが」

ヘリに向って大声で叫んでいる。

何度もやられているのに、またサッカーゴールなんか買つて来る隊長は懲りない人だ。

「お前らが俺のいない間に遊んでいるからだ」

マイク越しにボスが返す。

ヘリコプターは旋回してポートへ戻ろうとしている。おそらく操縦士がこれ以上ここにいては危険だと判断したのだろう。これでひとまずは安心だ。

がっくりと肩を落とす隊長は別にして。

37・ダークホースは誰だ（後書き）

次回予告：ボスの介入で体力強化訓練は中止に。肩を落とすジャザニア隊長。だが、隊長は懲りることなく、最大の被害者さえも巻き込んで……。

第38話「連名プラン」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

「ギネス三点。ハーレイ十点。キーツは零点だな」
ぼそぼそと背後から聞こえてきた声。振り返ると、そこにいたのはグレイだった。

手にしていたペンとメモ帳のようなものが消える。ポケットに入れた様子もない。異空間に飲み込まれたように一瞬で見えなくなつたのだ。

さつき見たのは幻だったのだろうか。自分を信じらなくなつた私の傍に寄つてくる。

「やつぱこうなつたか」

隣に来た彼は、私の肩に肘を置いて空を仰いだ。降下していくヘリコプターの姿が見える。

「ボスの新しいオモチャ、ステルスヘリか。とんでもねー」
ステルスヘリ。私もテレビとかで見たことがある。たしかレーダーにも引っかかるない特殊な装甲で、飛行時の騒音も抑えられるヘリコプターだ。

それで近くを飛んでいても気付かなかつただろう。隊長たちを奇襲するには一番の乗り物だ。そんな理由でボスはあんなもので帰つてきたのだろうか。

「任務には必要だつて、ずっと本社とかけあつてたもんな。ボスとしては試し撃ちも出来て『満悦だるー』
部下を的にしてですか。

突つ込みたいが、あの人なら十分ありえそうだ。

「面白そー。オレも乗つてみてー」

グレイはいつもこんな感じだ。

ボスやジャズ隊長の信じられないような行動に、普通に対応している。もともと肝が据わっているから幹部になれるのか、幹部になる頃には肝が据わつてくるのかは謎だ。

私は壙の向こうに降りていくヘリを見やつた。あんなものの的になるのはもちろん、乗るのだって遠慮したい。

庭を風が吹き抜けていく。たち上った土煙が渦を巻く。

鉄くずとなつてしまつたサッカーゴール。それを背景に、隊長がとぼとぼとこちらに歩いてきた。あの肩の落としよう、なんだか可哀想になつていくる。赤い髪はほつれ、握り締めた拳の中のレッドカードにいたつては、しわくちゃだ。

「ジャズ隊長、次は何すんだ？」

よせばいいのにグレイが声をかける。うなだれていた隊長は顔を上げた。生氣を失つた表情だ。

「次か……」

大きな溜め息を吐ききる。幸せがどころか魂が抜けていきそうな感じだ。

こんな弱りきつた彼を見るのは、ボスに髪を切られたとき以来だ。声にも張りがない。

「次はなあ……」

考え込むように俯く。

「あっ！」

と、突然何かを思いついたように顔を上げる。両手をぽんと打ち鳴らした。

「背筋強化訓練でもやるかあ？」

声が大きくなり、テンションが尻上がりに一気に上がつた。追い詰められて、開き直つてしまつたのだろうか。

「場所を移してだな。カヌー競争とかいいんじやねえか」

さつきまでの落ち込みようは何処へやら。瞳にきらきらと星が見えるようだ。

「……自分はもう一度どぐ免だ」

隊長の後ろを通りかかったレイバンが呟いた。

彼の体はほこりに塗れ、灰色一色になつていて。遺跡とかにある巨大な石像のようだ。咳をすると全身から粉が舞い散つている。

一番割を食つたのは彼だ。それなのに、ジャズ隊長は、肩に手をやつて思いつきり引き止めていた。

「やつ言つなつて。訓練の意義さえ分かれば、あいつだって納得するぞ」

とても真面目な訓練には思えないけれど。

隊長はレイバンにカヌー漕ぎの極意を熱心に語り始めた。何処の筋肉を使い、続けていけばどう体が変わっていくかを。

「背筋を鍛えるだけじゃないぞ。全身運動になるからな」

「三角筋や大腿四頭筋もだな」

筋肉の話になると、レイバンの顔つきが変わった。隊長と二人、筋肉を指示しながら、カヌーを漕ぐ真似までして。これってエア・カヌーとか言うんだろうか。

彼らの話は盛り上がりを見せる。カヌーって一隻幾らするんだと費用まで計算中。ついには、川がいい、海がいい、湖がいいなど場所決めの話が始まった。

ボスに提案書を出して許可を取るんだと、今やすっかり意氣投合。互いの背に手を回して作戦を話し込みながら去つて行つた。

「今度は沈められて、溺死者が出るんじゃねーカ

グレイの最後の呴きは縁起でもないものだった。

私はへりでカヌーを狙い撃ちにするボスの姿を想像した。

悪魔だ。極悪人だ。ボスは本当はそんな人ではないと信じたい。

さつきの事を見てなければ冗談で済んでいただろうけど。今となつては笑つてなんかいられない。

私は訓練が行われないことを願つた。だがそうすると、隊長とレイバンがボスの犠牲になることを意味するのに気付く。また隠れてやるなんて気にはならないくらいに、こてんぱんに。

隊長とレイバンは尊い犠牲だ。だけど、大きな怪我にはなりませんよう」。

一つの思いは相反するものだったが、心からの祈りだった。

私は思わず一人の小さくなつていく背中に向つて、手を合わせた。

次回予告・医務室で話すアビゲイルとジャズ隊長。雲行きは盛りそ
うだけど、「ツクであるミシェルには関わりない」とのはず。だが、
彼女の思わぬ形でそれは降りかかる……。

第39話「アクシデント～発端～」

お話を気に入つていただけましたら、下のカンキングの文字をポチ
ッとお願いします

マスティマの組織は二重構造になつていて、

ジャザニア隊長率いる実行部隊。アビゲイルの夫であるオスカーが部長を務める技術情報部。

本来なら幹部扱いのはずのオスカーだが、実際は実行部の中に組み込まれている。技術情報部は創設から間もなく、部へと拡大されたのもつい最近らしい。

ディケンズ本社の技術開発と情報管理セクションのいいとこ取り。後付で作られたマスティマの技術情報部は何かと肩身が狭いようだ。私は、実行部隊に属するアビゲイルの部下だ。彼女はマスティマの総務を仕切っている。つまり、分かりやすく言えば、実行部総務課長がアビゲイルでその係員が私という形。

彼女にしても、グレイヤレイバンにしても幹部は組織図ではジャザニア隊長の下になる。だが、実際はジャズ隊長とほぼ同列扱いになっている。この辺りは内部の人間でないと分からぬものだろう。

もちろん、私は料理を作る人間であり、ミッションには関わりを持たない。

だから、今日、アビゲイルやジャズ隊長が騒いでいるときもあまり気にはしていなかつた。

それはボスの夕食が終わつてすぐのこと。

「スイスの空港？ 飛行機が飛ばないって、それはどういうこと？」医務室の開け放しの扉から、動搖するアビゲイルの声が漏れている。受話器を片手にしているから、電話口の相手に言つているようだ。

「おい、どうすんだ。他の二人も駄目なんだろ」

「隊長の声も少し慌てていてる。

「今考てるわ。少し待つて」

私はワゴンを押しながら、何の気なしに部屋を覗いた。アビゲイルと目が合つたので、目礼して通り過ぎる。

今から技術情報部にコーヒーを届けるのだ。

コーヒーサーバーの保温機は向こうにあるので、新しくできたコーヒーを持つていくだけだ。今日作ったお菓子を添えて。

仕事の内容上、閉じこもりがちな技術情報部。

何日まともに寝てないとか言つるのは部隊員たちの挨拶代わりのようだ。彼らが食堂に現れることは滅多にないようなので、このコーヒーの配達が唯一の接点といつてもいい。

部は違えど、あつちもマステイマの隊員なのだから、出来るだけのことはしてあげたい。その思いから始めた一日三度のこの往復は、今や日課になつていた。

私はサーバーを取り替え、菓子を置くと、もと来た道を戻る。

再びアビゲイルとジャズ隊長がいた部屋を通りかかつたが、扉は閉まつており、何の声ももれ聞こえては来なかつた。問題は解決したか、手を打つたのだろう。どちらにしても私が首を突っ込むようなことではないはずだ。

厨房に戻つて、夕食の食器の片付けを始める。

全てが終わつて、ひと一休み。余った料理で自分の夕食にありついた頃だった。ブレスレットが震え、黒い液晶に黄色の文字が浮かび上がる。

前にグレイからもらつた緊急連絡用のものだ。前に反応したのはアビゲイルの娘のブシシラが現れたときだけ。

私は表示の説明をしてくれたグレイの言葉を思い返す。黄色は確かに召集だつたはず。

文字が流れしていく。Dispensary 医務室へ。

ということはアビゲイルの関係だろう。何かあつたんだろうか。私は食事を途中にして席を立つ。廊下へ出ると足早に向つた。

医務室の扉をノックしてみる。

だが、返事はない。迷いながらもそっと開ける。鼻をつくなのは病院を思わせる消毒薬の匂い。

いつものデスクにアビゲイルの姿は見えなかつた。部屋の奥半分を隠す白い布のついたて。その向こうには患者用のベッドがある。そこにいるのだろうか。私は近付いていった。

「ミシェル・ロレンツィ」

「あつ、はい」

突然背後から名前を呼ばれ、思わず返事をしてしまつ。私は慌てて口を塞いだ。耳にしたのは私の本当の名前だ。

恐る恐る振り返ると、入り口の扉の影にいたのは、にっこりと笑うアビゲイルだった。

「やつぱり、あなた女だったのね」

私は動搖して後退りする。肩をついたてにぶつけ、倒してしまつた。その音に再びびくつとする。

「アビゲイル、どうして」

女であることがばれてしまつた。それが意味することを悟り、私のショックは隠せない。

「私の捜査能力を舐めてもらつては困るわ。それに、あなたが女である疑惑は初日からあつたのよ。健康診断はいらないと言つたセオの言葉、食堂から聞こえてきた悲鳴、それからプリシラがあなたの名はミシェールだとゆづらなかつたこと」

初日の食堂にアレが出たときの悲鳴、聞こえていたのか。

それにプリシラに本当の名前を言つたのは私の失敗だつた。子供だからと思つて油断していた。

「私だって疑つたんだもの。ボスが勘付くのは時間の問題よね。そうなれば、あなたの希望だつて通らなくなるわ。マスティマのゴックとしていられなくなるでしょうね」

アビゲイルの言葉は一番危惧していたことだ。掌が汗ばみ、呼吸が速くなる。そんなことは嫌だ。絶対に。せつかく今まで頑張ってきたのに。

「大丈夫よ、マイケル。いえ、ミシェル。私の考えに乗ってくれるのなら力になるわ」

何でもやります。やらせてください。そう答えた私の前に彼女が差し出したのは、鬘だった。私の髪の色とそっくりだが、まったく違う質感。艶々としたストレートの長い髪の毛だ。

それから次に差し出されたのは紙袋だった。ワンピースに、スツッキングやハイヒールまで中に入っている。

訳が分からぬ。アビゲイルは、混乱して後退りする私に寄つて白衣のボタンを外し始めた。

「な……？」

下の黒いTシャツもめぐりあげられて、私は素つ頓狂な悲鳴を上げる。

「ミシェル、あなた……」

難しい顔をして彼女は私を見上げた。

「こんなことしてたら、バストライン崩れちゃうわよ」

サポートでぐるぐる巻きにした胸のことだ。私は彼女から体を遠ざけ、下したTシャツの裾を握り締める。きっと顔が真っ赤になつてゐる。体中の血が脈打つているのが分かる。

「これに着替えて鬘をかぶつて。何でもやるつて言つたでしょ」

彼女の言つていることはめちゃくちゃだと思つ。女であることがばれないための考え方の筈なのに、女らしい格好をするなんて。

だが、アビゲイルの顔は眞面目だ。ふざけている感じなんてみじんもない。彼女は腕を組んで私の出方を待つてゐる。こうなれば、腹をくくるしかない。私は覚悟を決めた。

39・アクシデント～発端～（後書き）

次回予告…ついに女であることがばれてしまった。秘密を守る交換条件にアビゲイルが提示したのは女らしい格好をすること。そして、ミシーハルの災難はそれだけでは終わらず……。

第40話「アクシデント2～変身～」

お話を気に入つていただけましたら、下のリンクングの文字をポチッとお願いします

床に置かれた紙袋を手にし、倒れたついたてを起こす。アビゲイルから鬘を受け取つて、その後ろに回りこむ。

取り出したワンピースを前に、出でくるのは溜め息ばかりだ。こういう服は久しく着ていない。よく考えてみるとここに来る前から……。いやもつと前。中国で料理の修行を始める時からだから、一年近く前からだ。

これって頭からかぶるんだっけ。それとも足から入れるんだっけ。基本的なところから迷つてしまつ。

やつと身に着けたワンピースは、なんだか風通しが良くて心もない。ストッキングは記憶していた以上の締め付け。ハイヒールにいたつては足元がぐらぐらだ。こんな高くて細いヒール、一年どころか今まで履いたことがない。

私はほとんどすり足の状態で、アビゲイルの前へと戻つた。

彼女は椅子に腰掛けるように言つと、デスクの引き出しからポーチを取り出した。この状態、遠くから見れば、医者が患者を診察しているように見えなくもないだろう。

実際は私の顔に粉がはたかれ、睫毛の際には線が引かれ、唇は赤く縁取られている。彼女は手際よく私に化粧を施す。顔に浮かんでいた微笑みがだんだんと広がつていく。

彼女は数歩後ろに下がつて私の顔を見つめる。

「いいわ、素敵。可愛いじゃない」

アビゲイルはそう言つが、自分ではどんな顔になつているのか分からぬ。鏡さえ見せてもらつていなければ。

「それで、これからどうするんです?」

私は半ば投げやりな気分でそう尋ねた。彼女は白衣の内側、上着のポケットからなにやら取り出しながら、私の背後へと回つた。

「ちょっとじつとしていてね」

声と共に腕を取られて後ろに回される。手首に目の粗く硬い何かが押し付けられる感触がして、動けなくなつた。拘束されたのだ。戾せない腕によつやくそれに気付く。

唚然として声も出ない。それを幸いとしてか、彼女は私の口にテープを貼り付けた。

これで声を出そうとしても、ぐぐもつた呻き声しか出ない。ぞつとする間もなく、視界が黒いものに覆われた。黒い布の袋をかぶせられたのだ。

アビゲイルの足音が遠ざかり、扉を開ける音が聞こえる。

「ジャズ」

彼女はそう呼んだ。

ジャザナイア隊長もグルなのか。真っ白になつた頭で一生懸命に考えようとする。彼らがどうするつもりなのか。私がどうなるのか。「もうミリアムの代わりが見つかったのか」

隊長の声だ。女人の名を言つた。どこかで聞いた名だ。「ええ。急いでこの子を抱いで連れて行つて。時間が随分と押しているわ」

アビゲイルの言葉に、彼は私を見たはずだ。黒い袋をかぶされた人間。誰だつて不審に思つこと間違ひなし。

お願いだから隊長氣付いて。そう思つてからはつとすると。ここでも見つかつたらまずいことになるのだろうか。私がマイケルであることがばれたなら。

「何だこれ。布なんかかぶせて秘密のプレゼントか」

隊長の声は訝しげだ。

「そう、歴史にあつたわね。解かれた絨毯の中から現れる女性ってさすがアビゲイル。昔話なんか引用して、彼の関心を都合のいいようにそらしている。

「ナイチングールだつけか」

それを言うなら、クレオパトラ！　「ううう状態だというのに、私は思わず心の中で隊長に突つ込んでしまつた。

「クレオパトラでしょ」

アビゲイルの声も少し呆れている。

ジャズ隊長の肩に担がれたようだ。胃の辺りが圧迫されて苦しい。ここで暴れてもいいが、隊長や集まってきた他の隊員にばれるのは、やはりまずいだろう。

行く先を考えて、着いたところでどうにかするしかない。

頭に血が上ってくる。なんだか気分も悪い。人に担がれて、乗り物酔いつてあるだろうか。

そういう考へてるうちに目的の場所に着いたようだ。隊長の足が止まり、肩から下ろされる。そして、聞こえるノックの音。扉を開ける音と共に私は背中を押しやられた。

よろめきながら数歩前に行つて、そのまま倒れる。両手をつけないから肩から床に落ちた。幸いなのは床に厚い絨毯が敷かれていたことだ。

音がして首をひねると、扉が閉まるところだった。いつの間にか視界を遮っていた布も外されている。

何処の部屋だろう。薄暗い。体を起こしそうともがく。

絨毯に吸収されてしまふが、近付いてくる足音を聞きつけ、私は顔だけを上げた。シルエットだけが見える。その向こうにぼんやりとした明かりが付いているからだ。

私は体をねじつて、ようやく上半身を起こした。背を壁に預けて何とか姿勢を保つ。

黒い人影が私の前まで来て、腕の付け根を取ると、立ち上がらせてくれる。

誰だか分からぬけど、ありがとう。口を塞ぐこのテープもどうて欲しい。そう訴えようとする私だったが、最初に出たのは押し込まれられた悲鳴だった。

テープがなければ、響き渡つていただろう。

この人が、この暗くて顔もよく見えない人の手がまさぐつているのは私の胸だ。

「奇妙な遊びを考え付くな、ミリアム」

声を認識する間もなく、私は足を相手の股間にかけて蹴りだして
いた。

その人は後ろに体をずらした。蹴りは空振りに終わる。突き飛ば
されて、再び床に倒れこむ。

硬い音がして、何か金属のよつなものが頭に押し当たられるのを
感じた。

「何者だ」

低く鋭い声。

私は恐る恐る顔を上げた。最初に浮かび上がったのは白い色。目
をしばたいてようやく認識する。これはシャツの色だ。やがて闇に
慣れてきた目にその人の顔が映りんできた。

40・アクシデント2～変身～（後書き）

次回予告：田嶋しそれ、体の自由を奪われたミシェル。アビゲイルとジャズ隊長に運ばれ、放り込まれた場所には、あの人があ……？

第41話「アクシデント3～発覚～」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

41・アクシデント③～発覚～

私は誤解を解こうとして話しかける。呻き声がもれるだけだ。口に貼られた忌々しいテープのせいで。

その人はそれに気付いて、テープを一気に引き剥がした。

第一声は痛みから来る悲鳴。私は涙目になつて訴えた。

「酷いです、ボス」

私の声に彼は酷く顔をしかめた。

「その声、チビコックか」

初めて「おい」とか「お前」とかでない呼ばれ方だ。しかもチビまで付いている。

名前を覚えていないか、出てこなかつたのか、どちらからだ。そんなんに存在感が薄いのだろうか。私はこんな状況なのに落ち込んだ気分になつた。

「女装なんかしてどういうつもりだ？」

頭に押し付けられた銃が痛い。それに女装つて、ばれていないという事だろうか。

なんだか少しショックだが、その線で切り抜けてみよう。そう思つた私の目の前で、ボスははつと気づいたように、黒い革に包まれた自分の手のひらを見やつた。

「女か！」

銃口が捻られ、さらに痛みが強くなる。髪でなければ、悲鳴を上げているところだ。

それにボスの手の緩い曲げ方。あれつて私のバストサイズなんだろうか。痛いのと恥ずかしいのと女であることがばれてしまつたシヨックで、気が遠くなりそうだ。

「勘弁してください。抵抗したりしませんから」

苦痛を少しでも取り除きたい一心で言つ。彼は手を引っ込めると立ち上がつた。銃をむき出しのショルダー・ホールスターに戻している。

「さつさと出て行け」

鋭い眼光が降り注ぐ。

「無理ですよ」

私は体を捻つて、縛られた手首を見せる。彼は舌打ちをすると、かがみ込んで縄を解いてくれた。

「アビゲイルだな」

立ち上がりざまに吐き捨てるよつに言ひ。型の付いた手首をさする私を睨みつけて。

部屋を大股で横切ると、隅に置かれた電話の受話器を取った。内線番号を押しているようだ。

今のうちに逃げ出したほうがいいのだろうか。だが、そんなことをすればボスをさらに怒らせそうだし。それに外には隊員たちがいる。今頃は警備の交替時間だから、いつも以上に人が増えているはずだ。

私は立ち上がると、部屋を見渡した。目が慣れてきたお陰で、今ははつきりと映る。

広い部屋だ。付けられているのは奥の明かり。それも壁に取り付けられたものとライトスタンド。間接照明だけだ。

ソファとテレビが置かれているからリビングに違いない。それにしても大きなテレビだ。脇にはスピーカーまである。

そして、存在感のある石の暖炉。白っぽく見えるのは大理石だろうか。明かりに惹かれる虫のようにふらふらと近付く。その他の家具の色は黒でいかにも高級そうだ。

電話にかかりきりのボスは苛立つたようにフックを押している。どうやら、呼び出し音を鳴らしても相手が出なかつたらしい。

私は足を止めた。壁に埋め込まれた大きな本棚を見つけて。

さまざまジャンルの本が収まっている。背表紙から見てまだ新しいものが殆どだ。

ボスが読書なんかするんだろうか。タイトルを見て行く私は、思わず目を疑つた。

最下段の隅に置かれた本。

これは伝説の本ではないか。『世界の料理とその起源』 初版のみで増刷はされなかつた幻の一冊だ。料理人でこの存在を知らないものはいないくらいだ。

ボスはまだ電話のところにいる。アビゲイルのことを尋ねているから、空振りだったのだろう。姿を見かけたら来るように伝えると脅している。

受話器を片手のしかめつ面。普段から十分なのに怖さ倍増だ。私はそっと本を取り出した。少しだけ。少しだけ読ませてもらおう。ボスが受話器を置くまでの間。

床に座り込んで、本を手に取る。ずつしりとした重み。ページを開くと広がるカラー写真。分かりやすく見やすい調理の解説。その一品の由来や歴史。食材のルーツまで書かれている。

トマトの起源は南米アンデス高原か。ジャガイモと同じだ。

ふむ、ヨーロッパに伝わった当初は観賞用でしかなかつた。それどころか毒草だと思われていた。確かに知らなければ、あの赤い色は敬遠されるものかもしれない。

「食餓に見舞われたイタリアで食用となつた」

イタリア人ならトマトに足を向けて寝られないな。トマト様々だ。

「他にアンデスを起源とするものは、ジャガイモ、ピーナッツ、カボチャ、トウモロコシ、トウガラシなどがある」

色々あるんだな。南米がなかつたら、どれだけの料理の発展が望めなかつただろうか。

「ジャガイモの食用は約一万年前から始まつていたといわれており

……」「

読みかけ、背後の気配にはつとする。

ボスだ。いつの間にか電話を終えていたのだ。今、彼は本棚に右肩を預けている。額に手を当てたまま眉を寄せ、目をつぶっていた。「すみません。私、集中すると声を出して読んでしまう癖があつて私は慌てて立ち上がる。頭痛を招く声だつたんだろうか。言って

しまつてから気付く。それよりもまづ、本を勝手に手にしたことを謝るべきだった。

彼は目を開けると、私の全身を眺め回した。

「来い」

そう言つて、手首を取つて引っ張つていく。片手で緩めたネクタイを外し、シャツの襟を寬げる。引き抜いたベルトを床へと放る。そして、黒い革のソファに身を投げ出した。私があっけに取られて見下ろしていると、彼は人差し指で招く。これつて……。

4.1・アクシデント3～発覚～（後書き）

次回予告…ミシェルはボスの部屋で一晩を明かすことに。明け方を迎えて、ようやく抜け出す彼女だったが……。

第42話「アクシデント4～結末～」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

ソファの上でボスは、じつと私を見上げている。

私はといえば、冷や汗をだらだらと流し、突っ立っているだけだ。業を煮やしたように彼は体を起こすと、私の手首を取り、引き寄せた。

「読め」

床に崩れて座り込む私にそう命令する。訳が分からずに、手の本をじっと見つめる私を冷たい視線で射抜く。観念して本を開くと彼はソファに横たわった。

「……えっと、ジャガイモは芽に含まれる物質、ソラニンから食中毒を起こすことがある。それゆえに、毒があるということで長い間ヨーロッパでは食用とされていなかつた」

私はそつと本の影からボスの様子を窺う。

彼の視線とかち合いそうになり、慌てて本に目を戻した。

「フランスの宮廷では観賞用に栽培され、その花はマリーアントワネットの帽子の飾りになることもあつた」

読んでいれば、ボスと目が合わなくて済む。私はどんどん本を読み進めた。

「食用として広めたのはプロシア、当時のドイツの大王であり……」
静かな部屋の中、私の本を読む声だけが響く。一ページ、二ページ、三ページと進む。ボスがあまりに静かなので、気になつて再び本を盾にそつと覗く。

なんと彼は寝ていた。黒い革手袋の手を腹に置き、もう片方の手は腕枕にしている。目は閉じられていて、少なくともそう見える。私は確かめようと顔を寄せた。

静かで深い息。こんな風に彼の顔を見るのは初めてだ。通った鼻筋に男らしい上がり気味の眉。色の濃い肌。

そういえば、前にボスの嗜好を探るためにいつた料理店のアンナ

さんが言っていた。この人はイタリアにゆかりがあるようだつて。

だけど、顔立ちや骨格をみると、純粹なイタリア人とも違う気がする。じゃあ、なに人かと聞かれても、私には答えられないけれど。

いひしてみると、ボスはハンサムだと思う。

艶やかでこしのある黒髪。閉じられた切れ長の瞳。目は口ほどにものを言うというが、本當だ。いつもは迫力に圧倒されて、顔全体にまで目がいかない。起きているボスの顔をこんな風にじっと見つめるなんて、不可能だ。

男なのに長い睫毛だ。私より長いかもしだれない。

そして、なにより、ほのかにいい匂いがする。ずっと嗅いでいたくなるような感じだ。シャンプーだろうか、香水だろうか。私は目をつぶり、深々と吸い込んで確認しようとする。

シャープでいながらとげとげしくない、そんな香り。

「おい」

不意に声をかけられて、はつと目を開ける。

超近い。近すぎる。間近で見たボスの瞳の色は多分濃いグレーだ。飛び退いたためによく見てはいないうが。

ボスはぶしつけに目を凝らす。まさか私が襲うつもりだったとか誤解していないですよね、ボス。

「続きを読む」

はい、もちろん。その視線にさうされないのなら、なんだつて喜んで読みます。

私は慌てて本を開き、続きを読むし始めた。

どうやらボスは私の声を聞いていると眠れるらしい。

ところが、読むのをやめるとすぐに起きてしまう。それほどもたないのだ。

催促を繰り返され、私の喉はからからだ。それに眠い、休みたい。だけど、そんなことは許されるはずもなく。

部屋の時計で確認すると、すでに夜明け前。ようやくボスの眠り

は深くなつたようだ。読むのをやめても起きる様子がない。

私はそつと立ち上がる。恐ろしいほどの倦怠感だ。緊張の名残と

睡眠不足で足元はおぼつかない。それに嗄れかけの喉。

部屋に戻つて一時間ほど眠らせてもらおう。私はほうほうの体でボスの部屋を後にした。

廊下へ出るとありがたいことに人はいなかつた。

急ぎたいが、走る氣にはならない。高いヒールのせいで思つても出来ないこともある。それ以上に疲れが私を支配していた。

角を曲がると、こちらに歩いてくる三人の男が目に入った。中央

には小山のような男、レイバンだ。

隠れてしまおうとも思つたが、この一直線の道ではそれも不自然だ。それに何だかもうどうでもいい気分だ。それくらい疲労はピークに達している。

「おはようございます」

向こうの若い隊員が挨拶してきたので、私も同じ言葉を返した。声が掠れてハスキーボイスになつていて

「可愛い」

ぼそりと聞き覚えのある声。おそらくはレイバンだ。三人は立ち止まつたようだ。足音が止まつた。振り返つてみる気にもならない。

「ボスの新しい愛人かな」

「レイバンさんの好みつてああいう人ですか」

部下の隊員たちの声。レイバンは黙つている。彼は一人で歩き出したらしい。

「待つてください」

二人の足音が後に続く。

なんだかどんでもない言葉を聞いた氣もするが、今は考えたくない。ただただ休みたいだけだ。

他にすれ違う人はおらず、私は無事に部屋へと戻ってきた。

目覚ましを時間差で五回分セットしてから、そのままベッドへ倒れこむ。アビゲイルに借りている服だけど、この際皺になつても仕

方ない。

散々な目に合つたと思いながら、私の意識はすぐに眠りに引き込まれていった。

42・アクション4 → 結末 → (後書き)

次回予告：短編の番外編。シナリオ書式のコメティを予定しています

【番外編】「実録、幹部会議！」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします

【番外編】 実録、幹部会議！

議題 【幹部を動物に例えたら……】

幹部が集まつての会議中。議長はもちろんジャザナイア隊長。ボスを除いた四人が席に着いている。

ジャズ隊長「今日のお題は、皆を動物に例えるとしたら何なのがだ」

アビゲイル「客観的な視点が必要よね。難しいわ」

レイバン「ボスは考え方ぐが他は知らん。それより、ボスはいらっしゃらないのか」

アビゲイル「先に本社の書類に目を通さないといけないって。だから来るつて言つていたわ」

グレイ「客観的つて、あいつに聞いたらい一じゃん」

グレイの意見で、会議室の隅で休憩用のコーヒーを用意していたマイケルことミシェルが呼ばれる。

ミシェル「動物？ 何かの任務と関係あるんですか？」

ジャズ隊長「部内報に載せるんだ。まあ、余ったスペースを埋めるための苦肉の策つて奴だな。真面目な内容ばかりだと飽きたら」

ミシェル「『コミュニケーション・ツールになるつてことですね。それじゃあ……』

レイバン「ボスは百獸の王ライオンだ。それしか考えられん」
ジャズ隊長、アビゲイル、グレイ（それちょっとイメージが違うよくな……）

アビゲイル「レイバンの言葉は気にしなくていいから。あなたの考えを言つてみて」

ミシェル「えつと……ジャズ隊長は虎で、アビゲイルは猫、グレイが豹でレイバンは猪でしょうか」

アビゲイル（皆猫科なのに、どうしてレイバンだけ猪になるのか

しら)

ジャズ隊長「猫科最大のシベリアトラだな。縞の派手さがいいもんない」（しみじみ）

レイバン 「自分は納得いかんぞ」（怒）
グレイ 「そうかー？ オレはしつくつと思ひけどなー」

（笑）

ジャズ隊長「じゃ、ボスは何だと思つ？」

首を左右に傾げてしばらく考え込むミシェル。何かを思いついたようには拳を叩く。

ミシェル 「僕のイメージでは狼。それもばくれ狼です」
ジャズ隊長、アビゲイル、グレイ（なんで、ばくれてんの？ で
も、なんだか納得かも）

レイバン 「そんなわけがない。ボスは王者ライオンなのだ」
会議室の扉が開き、はぐれ狼ことボスの登場。

ボス 「なにを騒いでる？」

ジャズ隊長「部内報について話してんだ。幹部を動物に例えたら
つて記事を載せようと思つて」

ボス 「ぐだらねえ」

ジャズ隊長「たまには碎けたコーナーも入れないと。息が詰まる
だろ」

アビゲイル「いいじゃない、ジャズ。ボスは関係ないって言つて
るんだから。自分がどんな動物に例えられようとも構わないって。
じゃあ、マイケルの意見で決定ね」

ボスの鋭い視線はマイケルことミシェルへ。息を詰める彼女。

レイバン 「自分の意見はどうなつているのだ」

レイバンの言葉には誰も反応を見せない。

奥の自分の席に着いたボスは、いつものようにテーブルの上に組んだ足を乗せる。

ジャズ隊長「ボスは自分でどう思つてんだ？ どんな動物のイメ
ージだと思う？」

隊長を睨みつけるボス。

グレイ 「オレもそこんとこ知りてー」

アビゲイル「そうよね。ボス本人の意見を載せてもいいんだし」「グレイ、アビゲイルへと流れるボスの視線。やがて、目をそらして床を見つめた彼は、ぼそりと回答を口にする。

ボス 「……狼か」

固まる周囲。

アビゲイル「ねえジャズ、はぐれていな狼ってことかしら」「彼女の耳打ちに噴出しそうになるジャズ隊長。何笑ってんだと鬼気に満ちたボスの視線がとんでもくる。唾を飲み込む隊長。

ジャズ隊長「そうだよな。ボスは狼だ。皆もそう思うだろ」

頷くアビゲイル、グレイ、ミシェル。

レイバン 「だから、自分は……」

抗議しかけるレイバンの口を塞ぐグレイ。

グレイ 「狼だって立派な猛獸だろー。それに狼の群れはボスに絶対服従なんだぜ。格好いいじゃん」

耳元で小声での説得。不承不承であるが、納得するレイバン。こうして、ミニコーナーの記事は無事決定し、刷り上がりを待つだけになつた。

数日後、出来上がった部内報を見てミシェルは絶句することになる。その内容は……

幹部を動物に例えたら

レイバン：猪 グレイ：豹 アビゲイル：猫 ジャザナイア隊長：虎 ボス：狼（はぐれ狼）

【某コック談】

コックはマステイマには一人しかいないため、某なんて付けても差すのは一人だけ。

その後、ミシェルがボスに呼び出されたのは言つまでもない。

ボス 「なんで、はぐれた狼なんだ？」

ミシェル 「いえ、なんとなく……」（汗）

ボス 「ああ？」

凄むボス。慌てるミシェル。

ミシェル 「ボスは孤高の人だつてイメージがあつて。それで」

ボス 「それを言つなら一匹狼じやねえのか」

ミシェル 「あつ、そう、それです！」

ボス 「ざけんな」（怒）

衝撃銃の音は聞かなかつたことにして。

仲良きことは美しきかな。マステイマではそれは夢のようだ。

悪魔なボスことディヴィッド&大天使ミシェルのせめぎ合いは、ま

だまだ続していく模様であります。

【番外編】 実録、幹部会議ー（後書き）

次回予告・翌朝、早々アビゲイルが厨房にやってくる。彼女から伝えられるボスの言葉に、ミシルはある決意をするのだが……。

第43話「疲労困憊」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします

田覚めたときから気分は最悪。

五回目ベルでやつと田が覚めた。ぎりぎりセーフだ。
ほつとしたせいか一度寝をしかかり、これではいけないと飛び起きる。予定よりも大分遅れてベッドから抜け出した。
遅番の警備の人たちへの食事、それからボスの朝食の用意をしなければ。

まずはバスルームに飛び込む。ワンピースを脱ぎ、シャワーを洗面台まで寄せて頭と顔を一気に洗う。化粧のせいで顔は一度洗い。時間ががないのに焦る。

髪のタオルドライ完了。あとは自然乾燥だ。短いから、あつとう間に乾く。

体も洗いたいところだが、とても間に合いそうにない。時間が空いたときを見つけて、部屋に戻つてくるしかないだろう。
手早くサポートーを胸に巻きつけ、黒いTシャツを身に着ける。
それからいつもの白衣に袖を通した。

厨房に駆けつけて、準備をしていると、アビゲイルが顔を覗かせた。

「おはよう。昨日はお疲れ様」

昨日は……つて、私にとつてはほんの一時間ほど前のことだ。いろいろ思うところがあるが、挨拶は人間関係の基本だ。返しておこう。まだ声は本調子でない。

食堂との仕切りのカウンターに手を付き、彼女は微笑んでいた。「つまくいったみたいね。ボスからのお咎めはなしよ。さつき会つてきたの。今日の日程の打ち合わせと見せかけて様子見にね」

様子見つて、もしボスが怒っていたらどうするつもりだったんだろつ。でも彼女のことだ。きっと何か対策があつたに違いないけれど。

厨房に入つてくるアビゲイルをよそに、私は朝食用に刻んでいるキヤベツに目を戻した。彼女が傍に来たことをちらりと確認して、深呼吸してから尋ねる。

「ボスは何か言つてました?」

「あなたが女だつたつてこと? いいえ。でも『機嫌だつたみたいよ。私が挨拶したら、おうつて言葉を返してきたわ』

何も言わないと「おつ」の一言。それで機嫌が良いかどうかの目安になるところがあの人らしい。

アビゲイルは私に顔を寄せた。

「ボスに可愛がつてもらつたんでしょう。良かつたじゃない。これで

コツクの座は安泰ね」

こつそりと言つ。

私は手にしている包丁を落としそうになつた。

アビゲイルは明らかに誤解している。昨日の晩の私とあの人のこと。

「ボスとはそんな関係じゃありません」

大きくなりそうな声を抑えて、包丁を握り締めて震えを殺す。続けてキヤベツを切る。アビゲイルの声は不思議そうだつた。

「あら、ならどんな関係? 朝まで一緒だつたんでしょう。レイバン

が話してたわよ。廊下でボスの新しい愛人とすれ違つたつて

「本を読んでただけです。僕の声を聞いていると眠れるみたいで」

私は顔を上げることもせずに、切り続ける。刻んだ山がだんだん大きくなつていく。

「そうなの? でも、いいんぢやない。愛人より書きやすい関係かもよ」

続きを読むといつてじづいづい意味だらう。手を止めて、アビゲイルを見やつた。彼女は私の気持ちに気付いたようで、両掌を見せて肩をすくめた。

「あなたには月の半分來てもらつて言つてたもの」

月の半分? あんなことを一日に一回も? 無理だ。絶対無理だ。

血の氣の引いた私の顔色に、アビゲイルは申し訳なさそうに言つ。
「決定権はボスにあるから。直接言つて頂戴。私としては、あの人
の機嫌が良くなつて、人件費もかからなくなるんだから、これ以上
良いことはないんだけど」

おそらく愛人三人のうち一人か一人を首にするつもりなんだろう。
彼女は微笑んでいる。

それは経理の担当だから、気持ちは分からなくもない。だけど、
自分の身に降りかかるつくるとなると話は別だ。

私は青ざめたまま、まな板に目を戻した。そして、一心不乱にキ
ヤベツを刻み始める。

これはもうボスに直接陳情するしかない。

頑張つてと言葉を残して、アビゲイルは去つていった。
結局勢いに任せて五玉もキヤベツを刻んでしまつた。残つたのは
キヤベツの千切りの大山。

これは朝晩とキヤベツ尽くし決定だ。皆に頑張つて食べてもら
おつ。

おかしくもないのに笑い出している自分に気付く。
変なテンションだ。睡眠不足と疲労のダブルパンチを受けて。こ
うなつてしまつたら、ことこん笑つてしまえ。

朝の厨房に響いたのは奇妙に高揚した不気味な笑い声だった。

「菜つ葉ばつかだな」

朝食の席でボスは言い出す。

スープにもサラダにももちろん、オムレツにも刻みキヤベツたつ
ぶりだ。だが、味はボスの舌に合わせてある。今朝の厨房でのやり
とりを知らない彼は、それ以上何も言わなかつた。

食事を終えて、席を立つ彼に思い切つて声をかける。

「あのボス、お話があるんですけど」

お馴染みの迫力のある視線が飛んできた。それでも言葉を続ける。
一度止めてしまつたら負けの気がする。

「昨日の晩のことなんですけど……」

「一日おきに来い。次は明日だ。時間は昨日と同じでいい」
私の言葉など、はなから聞いていない。ハンガースタンドにかけていた制服のコートを取り、袖を通すと出て行こうとする。
「そんなの無理です。それに私はコックで、そんなことのためにいるわけじゃ……」

ボスは足を止めた。振り返った彼の目が言っている。何か文句があるかと。

「ここのでぐじけてなるものかと、私は目をそらさないよう頑張った。彼は私の前に戻つてくると、襟首を掴んだ。

「できなきや首だ。マステイマの隊員が私なんか使うんじゃねえ」乱暴な言いようだ。だが、弱みを握られている。返す言葉が見つからず、悔しさに唇を噛んだ。

「お前はあくまで表向きは俺の愛人だ。女らしい格好をして来る。他の奴にばれないようにな。口外は無用だ」まるで筋が通っていない。夜は女の格好で、コックとしては男でいるなんて。

それにもうアビゲイルに話してしまった。今さら口外無用と言われても無理だ。

黙つている私に話はついたと思つたのだろう。彼は手を離すと、踵を返して食堂から出て行つた。

私はテーブルにがつくりと片手を付く。

頭がうまく働かない。疲れと寝不足のせいでもあるが、それ以上に私は混乱していた。

どうしていいのか分からない。はつきりしているのは、ボスの言うとおりにしなければ、ここには居られなくなるということだけだ。マステイマのコックの仕事を奪われるなんて、考えられない。最初は命を救つてくれた恩返しのつもりで来たけれど、今はそれだけじゃない。最初に見た食堂の惨状が頭を掠める。皆があんな食事に逆戻りなんて、あつてはならないことだ。

条件を呑むしかないのだらう。理不尽な理由で人の言いなりにname
るのは本当に悔しい。

あの人ガボスだから。こここのトップだから仕方のないことなのだ。
私は自分をそう説得する。それにあの人は幼い私を救ってくれた恩
人なのだと。

大きく息を吐き、心を決めた。できるだけのことはやるう。泣き
言や文句はそれから言つても遅くはない。

辞めることなら、いつだつてできるのだし。その時は、あの人の
目の前で大声で宣言してやるう。

そう心を決めるど、もやもやしていたものは次第に収まつていっ
た。

そして、自分の置かれた状況もまた少し違つて見える気がした。

43・疲労因憲（後書き）

次回予告・マステイマ隊員として必要な技術、射撃の訓練。前日の騒動で疲労のミシェルもかりだされて……。

第44話「射撃訓練」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

「ツクはとてもやりがいのある仕事だ。

成果がすぐに出る。食事をした人の笑顔がなによりもの報酬だ。
また頑張ると気持ちも新たになる。

だから、一品一品に心を込めたい。誰が口にするかは関わらず。
そんな思いが変わったわけじゃない。ただ今日はあまりに疲れて
いるのだ。

「目が死んでる」と何人に言われただろう。料理人が目利きする
魚なら論外の言葉だ。食材としてはふさわしくない。もちろん、口
ツクとしてもだ。

体調や気分は味覚にも関わる。そうすると料理の味も変わってくる。
ダメダメだ。

時間を調整して、休憩を入れることにしよう。ボスと隊員たちの
ランチタイムが終わつたら、部屋に戻つて入浴と仮眠の時間を見る。
そう決めた私は、スケジュールを考えて、はつと思い出す。

今日つて、午後に何か予定が入つていたような。アビゲイルが前
に話していたつけ。

肩の荷が重くなるが、気を落としていたつて仕方ない。実行ある
のみだ。

そして、私は午後の貴重な休憩時間を手に入れた。

部屋に戻る途中、廊下でアビゲイルに出会つた。

彼女にまで言われてしまつた。「ゾンビみたいよ」と。

「目が死んでる」とどっちがましだろう。はあ、本当に生ける屍の
気分だ。

彼女は虫の知らせでも感じたのか、丁寧に今日の予定の念を押し
た。それから、手にしていた紙袋をくれる。ディケンズ本社経由で
送られてきた郵便物だ。

イタリアの実家から。それも母からの荷物。だけど心当たりがない。

部屋に入つてから中身を確認する。紙袋の中に紙袋が入つていた。これつてマトリヨーシカ？ サラに中から紙袋が……なんてことはなかつた。

メモ紙のような小さな紙がはらりと落ちる。それを拾つてみると、見慣れたイタリア語が並んでいた。

『多分あなた宛の荷物なので転送します。母さんに見つからないよ、こつそりとね。出会いの多いあなたが羨ましいわ』

母の筆跡。らしい言葉の羅列だ。

多分なんかで送らないで欲しい。それに出会いが多いって、そりやマスティマは言つてみれば逆ハー状態。異性ばかりだけど、一応私も男としているわけで。

……まあ、いいか。田の前にいるわけじゃないのに、突っ込むのもなんだかしんどいし。

祖母には、ディケンズ警備会社のコックとして勤めていると云えている。もちろん本当の性別で。

母が私宛に荷物を送るなんて知つたら、面倒なことになるに違いない。あれも入れる、これも入れると。

自家製梅干やら味噌やら、果てにはお腹を冷やすこように腹巻とか、毛糸のパンツとか。心遣いは嬉しいが、困るものまで詰め込んでくるのだ。祖母に内緒してくれたのは、この手紙で唯一評価できる点だ。

さて、肝心な紙袋はといふと、宛名書きはすべて漢字だ。これは多分中国語だらう。

話し言葉なら理解できるが、書いている物は分からぬ。だけど、送り主はぴんときた。紙袋の中身を見て確信する。

中国の師匠からだ。送られた物は男物の黒いカンフー着。サイズ特小。

最近、仕事にも慣れて時間配分もできるようになつてきた。だが

ら、『無沙汰にしていた鍛錬もできるんじゃないかと思つた。

師匠に近況報告も兼ねて、そんな電話をしたのが約一ヶ月前。マステイマの事情も知つてゐる師匠だけに、家に送つてくれたのだろう。

気持ちは嬉しい。だけど、今やゆとりある時間は奪われた。誰かさんのせいだ。残念ながら、もう鍛錬なんて言つてゐる場合ではないけれど。

まずはお風呂、そして仮眠。その後にお礼状を書いておこう。私はカンフー着を袋に戻して、机の上に置くとバスルームに向つた。

アビゲイルの第六感は当たつていた。お礼状なんて書く暇はなかつた。

起きてみたら時間きつぎり。大急ぎで支度を済ませて部屋を飛び出す。

すると、目の前の廊下で彼女が待つっていた。

「あと一分待つて出てこなかつたら、部屋に入るといけないよ」

そう言つて、マスターキーをちらつかせている。

謝る私に彼女は微笑んだ。

「似合つてるわよ。サイズもぴったりね」

「そうですか？」

彼女の笑顔に頬を熱くしながらも、自信なく答える。

とりあえず着てしまえで出てきた。鏡なんて、とても見る暇はなかつたのだ。

今、私が袖をしているのは、いつもの白衣ではない。マステイマの制服だ。他の隊員たちと同じ黒いジャケットにズボン、黒い靴。アビゲイルが背中を向けて歩き出す。

続く私の足が重いのは、疲れのせいでも制服のせいでもない。実際に、この服はすごぶる快適だ。軽くて伸縮性があつて動きやすいし。初めて着るので、緊張しているからというわけでもない。

アビゲイルを追つて階段を下る。地下へと伸びる道。向つている先が問題だつた。

だいたい地下室があつたこと自体も知らなかつた。それだけマステイマの城は広く、私の行動範囲は狭いということなのだろう。たどり着いた廊下の先の扉。途中で立ち止まつた私をアビゲイルは振り返り、諭した。

「マステイマの隊員として必要なことよ」

彼女はそう言うが、私は納得してはいなかつた。それでも戻つてきた彼女に手を引かれても、抵抗しなかつた。

扉を開けた途端、耳障りな音が聞こえてきた。

幾つもの銃声。並んだブースにイヤーマフをつけた隊員たちの背中が見える。その向こうには標的。

射撃場だ。拳銃が標準装備となつていてマステイマでは必要な設備だ。それは分かつていて。だが、私は銃そのものはもちろん、その発砲音も好きじゃない。

ただ引き金を引く、それだけで命を奪つてしまふ凶器。使い手によるのだ、例え、そうと知つても。

女が男に勝てる唯一確実な手段だと、ブルーノさんからも技術の習得を促されたことがある。父親代わりをしてくれた人の言葉ではあるが、受け入れられなかつた。

アビゲイルが振り返る。

私がまた途中で止まつてしまつたからだ。足が床に張り付いたようにな動かない。彼女の困つた顔に気持ちだけが焦る。そんなところに声をかけられた。

「制服決まつてんな。いよいよお前も練習か、ミック」

銀色の頭からイヤーマフを外しながら、近付いてきたのはグレイだ。

白いシャツ姿の彼の腰には、黒い革のホルスターがある。丁度、コートを着ていれば見えない位置だ。

味方を得たと思ったのだろう、アビゲイルは笑顔を見せた。

「グレイも言ってやつて。マステイマの隊員である以上、コックとはいっても自己防衛の手段が必要だつて」

「オレたちには敵も多いし。非常時訓練じゃねーけど、あーいうことの可能性はゼロじゃねーもんな」

二人の言葉は良く分かる。だけど、理屈なんかじゃ、どうにもならない。そんなものを持つなんて。まして撃つなんて考えられない。私が他に手段を求めるのも自然の流れなのだ。

グレイが差し出してくる拳銃を前に、拳をぎゅっと握り締める。私の体は強張るばかりだ。

そんな時、会場の空気が急変した。

44・射撃訓練（後書き）

次回予告：射撃なんて嫌。銃なんて持ちたくない。そんなミシェルに射撃場に現れた人物は……。

第45話「シユーティング・スター」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

45・シュー・ティング・スター

銃を撃っていた人たちは、そうでない人に声をかけられ、後ろを振り返っている。

音という音が途絶えた射撃場。異様としか言いよつがない。やがて、ざわめきが起こった。

「ラッキー、ボスの射撃を見れるなんて。面白くなるぞ」グレイが嬉しそうに呟く。

部屋に入ってきたボスは、辺りを見渡した。私はグレイの後ろに隠れた。そうする必要なんてなかつたが、反射的に逃げてしまった。ボスは部下から差し出される道具を無言で受け取ると、一番の奥のブースへと向つた。私たちの横を通り抜けて行つたが、こちらをまったく見ようともしなかつた。

皆、距離を置きながらも近くまで寄つていく。私もグレイとアビゲイルに押され、野次馬の集団の中に入った。

「プログラム」

彼は手元のイヤーマフに向つて呟つ。無線機が取り付けているようだ。

マフを装着し、懐から拳銃を取り出した。例の大型の拳銃だ。黒い回転式拳銃。

標的が動き出す。隊員たちが撃つていたのは静止した標的だったのに、ボスが狙つているのは左右に動く的だ。

リボルバーが火を噴く。

次々と真ん中に穴が開いていく。三発撃つて今度は左手に持ち変える。また三発。全て真ん中に命中だ。

周りの人たちは息を飲んで見守つている。ボスの弾を装填しなおす音が聞こえるくらいに。

ボスはマフに付けられたゴーグルを下して、装着した。真っ黒な色の付いたゴーグルだ。

的の動きが変わった。前後と上下の動きも加わる。的までの距離がさらに伸びている。

ボスは何事もないように銃を構えると、弾を撃ち始めた。一発、二発、三発。左手に持ち替えてさりげなく発。全ての弾丸が的の中央に吸い込まれて行った。

「すげえ」

「見えないのに全て命中だ」

隊員たちはざわめく。

だが、ボスはとくに拳銃を下げるなり、片手でマフを取りて無線機に向って怒鳴った。

「技術部、改良がなつてねえぞ」

苛立つた声。

「標的の動きにパターンがある。それに動く際の音も大きすぎだ。これじゃあ遊びにもならねえ」

イヤーマフを床に投げつける。無線の相手は相当な耳のダメージだつただろう。もしかして、アビゲイルの旦那さんだつたりして。「音つて聞こえた？ それにパターンつて……」

アビゲイルが答えを求めてグレイを見やる。

「分かんねー。大体ボスは目でなんか見てねーからな」

グレイは唸つてからそう言つた。

見ずには標的を狙えたりするんだろうか。それもど真ん中を。あつけにとられる私をよそにボスはブースを離れた。

こちらに歩いてくる。賞賛の眼差しが集まる。彼は私たちの傍で足を止めた。

じつとこちらを見つめている。手はいつも黒い革手袋。そして

リボルバーがあつた。

「マスティマとして失格だな。自分の身を守れねえ野郎は

私へのあつけだ。

彼は銃をこちらへ向けた。弾の入っていない銃で怖がらせようとしている。

なんでも脅せばいいと思つてゐるのだ、この人は。体が熱くなり、頭がたぎる。上司だと命の恩人なのだと、そんなことは一気に吹つ飛んでしまつた。

考えるより先に体が動く。私は踏み出し、手刀を振るつていた。二打とも寸前で避けられた。続いて体をひねつて膝を打ち込む。これも後ろに下がつて避けられた。その場で回転して勢いをつけた私は、飛び上がって今度は足刀を叩き込んだ。

後ろの階のどよめき。ボスは腕で私の攻撃を防いでいた。スピードなら自信があつたのに。さすがはマスティマのボスというべきか。格闘技にも通じてゐるようだ。私は後ろへ跳んで元の位置に戻つた。防御の腕を下げたボスは、信じられないといつた様子で私を見下ろしている。

「守れます。自分の身くらい！」

息巻いた私はそう言い切つた。

中国で料理と共に学んだ拳法。銃は使えない私の自衛手段。マスティマへ入ることを決めたときから、祖母の知り合いから空手や柔道を習つた。だけど、どれも芽が出なかつた。今思うと覚悟が足りなかつたんだと思う。

それが必要に迫られた。師匠が出した、料理の修行をつける条件の一つでもあつたから。

拳法道場で、重い中華鍋を自在に扱う体力をつけること。こんな風に役に立つなんて。

ボスは拳銃を私に向けた。そんなの怖くない。空っぽの銃で何が出来るつて言つつの。

私の背後の人たちが一斉に左右に割れた。どうしたのだろうと振り返つたとき、すぐ傍でつんざく銃声を耳にした。弾がまだあつたことに愕然とする。

「甘ちゃんが」

耳鳴りの中、聞こえてきた、それがボスの捨て台詞だった。彼は懐に銃をしまうと、その場から去つて行つた。

姿が見えなくなると皆が私を取り囲んだ。

「すげーじゃん、お前」

グレイは本当に驚いた風だった。両手を広げて、唯一見える青い左目は見開かれている。

「そうよ。不意打ちとはいえ、ボスに防御させるなんて。凄いわ、マイケル」

アビゲイルは私を抱きしめた。苦しい。大きな胸で窒息しそうだ。周りの人たちも贅同の言葉を口にしている。「ちっこいのにやるなあ」とか「ボスの防御なんて初めて見た」とか。

ちっこいのは余計だが、ボスをあつと思わせられたのなら、嬉しい。それでなくても、こつちは色々と鬱憤が溜まっているのだ。これくらい、あの人には我慢してもらわなきゃ。割が合わない。

だけど、本当にあつと思わせられたのは私の方だった。

隊員の一人が氣付いて指を差した。ボスの弾の行方を。弾はバスを貫き、奥の的まで飛んでいた。そして、当たっているだけでも信じられないのに、その場所は真ん中だったのだ。

「神業だな、こりや」

グレイは呻くように言った。

周りの皆さんボスの技に感嘆していた。

私は少しだけ悔しさを感じた。確かにボスは凄いと思うが、なんだか負けた気分になる。

こんなことで競い合つのは馬鹿らしいとは思つんだけど。相手はプロなんだし、最初から相手になるわけがないことは分かっているのだけど。

素直に「凄いです、ボス」ってならないのは、私の根性が曲がっているのだろうか。

私は考えるのをやめた。後ろ向きになるだけだ。それこそ私に似合わないじゃないか。

ありがたいことにこの事件のお陰で、銃の訓練の話はお流れになつた。

身につけた拳法のお陰だ。これはもう粗末になんてできない。カソフー着で本格的には無理だとしても、少しの時間でもやれることはある。鍛錬を始めなくては。間が開いているから基礎からやり直しだ。

翌日、誰も居ない朝の食堂で型を練習する私。廊下を通りかかり、それを目にしたボスは、何も見なかつたようにして去つて行つた。思いつきり目が合つたのに。

齧したって何もならないこともあるんですからね、ボス。呼吸を整えて、拳を突き出し、型を決める。窓から入り込んだ凜とした空気が私の気を高めていった。

45・シュー・ティング・スター（後書き）

次回予告：一日おきのボスの寝かしつけ役に疲労蓄積のミシェル。アビゲイルにすがる彼女だつたが……。

第46話「F分の一」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

射撃場での一件の後、夜のボスの相手は気まずいなんでものじやなかつた。

枕を頭の上に乗せて布団の中に隠れてしまいしたかつた。

もつともそんなことできるわけがない。今晚の朗読場所は寝室。ベッドの中にはボスで眠る気満々だ。今日はパジャマ姿だし。放られたナイトガウンを置みながら、溜め息をつく。

彼の目が私を捉える。早く始めると言つていい。

ベッドの横に据えられた椅子にしぶしぶ腰掛ける。不満は満載だ。だいたいベッドからして大きすぎる。キングサイズだろうか。今まで見たこともないから分からないけれど。我なら四人いても十分な広さ。

……そつか。この人は一人で寝るとは限らないんだ。

妄想へと進みそうな頭を切り替えるべく、慌てて手元の本へと目をやる。『世界の料理とその起源』のページを開く。

丸く照らし出すのは小さなスポットライト。それ以外の電気は消された。ボスは本来真っ暗でないと寝られない人らしい。

どつちにしたつて寝ないんだから、電気を付けてくれたらいいのにと反発を込めて思う。

私は小さい明かりがないと寝られない質だ。それに真っ暗闇は嫌いだ。

はい、そんなに睨まなくて分かっています、ボス。
私は本を読み始めた。長い夜の始まりだった。

一日おきでの夜のボスの相手。

殆ど眠れないのだから、終わつた頃には精も根も尽き果てる。

翌日のコックとしての仕事にも集中できない。自ずとミスも増えてくる。火の調節を忘れたり、計量スプーンが何杯目か確信がもて

なくなつたり。

容器に入れて振った自家製ドレッシングを厨房に撒き散らしたこともあつた。蓋をするのを忘れていたのだ。

反対に蓋を外しすぎて、鍋の中にコショウを盛つたこともあつた。すぐにフォローはできだが、致命的なミスを犯すのも時間の問題の氣がする。

両方の仕事をこなす覚悟はしていたが、体力が付いていかない。次第に溜まつていぐ、どんよりとした疲れ。慣れれば、ましになるかと思ったが、その見通しも甘いようだ。

たまりかねた私はアビゲイルに相談した。事情を知っているのは彼女だけなのだから、頼りになるのはこの人しかいない。

ありがたいことに彼女は秘密を守ってくれていた。ボスに関することを口外するほど、愚かではないというのは彼女自身の言葉だ。

「あなたの声でボスは眠れるよね」

二人つきりの医務室で、アビゲイルは考え込む。

なんだか不眠症の患者の相談に来た、その家族のようだ。私は疲れが抜けず、よく回らない頭で一生懸命考えていた。

「薬を渡すとか、治療は出来ないんですか？」

私の言葉に首を横に振る。

「私も何度も言つてるのよ。でも聞いてくれないの。薬での眠りの質が嫌なんですって。何かあつた時にすぐ対応できないからって。そう言われちゃあ、いつも無理強いは出来ないわ。それに……」

「何ですか？」

言葉を止めて、じつと私を見つめる緑色の瞳に焦つて問いかける。「もつと良い方法を見つけたって思つてゐるに違ひないもの。なおさら治療なんて受けないわよ」

彼女の言葉に、そのとおりだと思いながらも落ち込む。それつて逃げようがないってことなんぢやないだらうか。

私の肩の落としように彼女は慌てたようだった。

「オスカーにも相談してみるわ。彼は技術屋だから、私たちとは別

の観点で解決方法を見つけてくれるかもしれないし

私はその申し出に乗った。二人で考へても良い案が出なかつたのだし。他の人の知恵を借りるしかない。私が女であることと相手がボスであることは内緒で、彼の協力を願うこととした。

技術情報部の前の廊下で、アビゲイルと口裏を合わせる。

不眠症なのはイタリアにいる家族、祖母の設定。私の声を聞いていたときにはよく眠っていたのを思い出して、私に戻ってきて欲しいと願つていてのことにして。

矛盾した不自然な部分がないことを確認してから、扉をぐぐる。連絡を受けていたオスカーは私たちを待つていた。

彼がまず始めたのは音声解析。何が眠りを招くのかを調べるべきだとの意見だつた。

「女の子みたいな声だね」

ヘッドフォンをしたオスカーは呟く。録音した音声を機械にかけて分析しながらの言葉に、私とアビゲイルはぎくりとする。

「きつ……緊張したので」

「そうそう。緊張すると声のトーンが上がっちゃうものよね」

二人で視線を交わして会わせる。掌にじわっと汗が滲んでくる。オスカーの興味は、すでにそのことにはないようだ。

「そうだね」と笑みながらも、真剣な眼差しでグラフを刻む画面を見つめたままだ。

分析が完了した結果、ある二つのことが分かつた。

一つ目はF分の一のゆらぎを持つた特別な声であること。二つ目は、それは朗読の際にのみ発生しているものであること。それがアルファーワー波を減少させ、睡眠を促しているのだろうと彼は推論した。「CDを作つたらどうだう。そうすれば君自身がいなくても大丈夫だと思うけど」

オスカーは、機材の前の椅子を回して私たちを振り返る。

そうか。そうすればいつでも聞けるし、ボスだつてわざわざ私を

招くこともないから、満足してくれるに違いない。

さすが技術情報部の部長だ。頼りになる人だ。今日の彼はこの前見たときは大違いだし。

糊のきいたシャツにサスペンダー、エンジ色のネクタイ。髪はなく、くせのない金髪はきちんと整えられ、瓶底眼鏡もかけていない。だけど、当たりの柔らかい印象はこの前以上だ。始終浮かぶ笑みには余裕が見え、精気に溢れている。別人のようだ。

……って、これはこの人にもアビゲイルにも失礼かもしねりないが。「是非お願ひします」

私は喜んで彼の提案を受け入れた。

決まつてしまえば、あとは早いもの。オスカーの仕事の速さには舌を巻くほどだった。

技術情報部の部屋に入つてから一時間からず、CDは完成した。「だけど不眠症か。うちのボスもそうだったよね。彼にもこれを渡してみたらどうだろ?」

にこにこと笑いながらのオスカーの言葉。冗談だったのだろうが、私にとつてはそうではなかつた。

「やーね

やつといった感じで笑い返しながらも、アビゲイルの顔も引きつっていた。

礼もそこそこ、技術情報部を後にする。

アビゲイルが私の背中をどんどん押してくるからだ。部屋を出でから私たちはほっと息をついた。

すぐに彼女は再生用のCDプレイヤーを用意してくれた。

私にとつては、これからが正念場だ。ボスに渡さなければならぬ。だけど、それを乗り越えれば、今日からでもあの辛い仕事にさよならできる。

大きな期待と不安を胸に、ボスがいるはずの執務室へと足を向けた。

46・F分の一（後書き）

次回予告…CDを手にボスの元へ向づけ。これで、夜の仕事から解放されることができるのか。その結末は……。

第47話「希望の行方」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

執務室の扉を前にして立ち止まる。手には円盤型の薄いCDプレイヤー。

大きく息を吐き出して緊張をほぐす。プレイヤーを握り締め、決意の確認をする。

それから、ノックをして断りの言葉と共に部屋に入った。正面に据えられたダークブラウンの大きなデスク。ボスは書類にサインをしているところだった。こういうデスクワークも彼の仕事のひとつなのだ。

近付いていつても書類に目を向けたままだ。念力で火でもつけそうな勢いだ。そして、万年筆を滑らせる。サインを終えた紙に吸い取り器を押し付けてから、横に置いた箱に入れる。重ねられた新たな書類を一枚手にして、彼は顔も上げずに言った。

「なんだ」

「あの……ボス、これを」

私はCDプレイヤーを両手で差し出す。ボスはちらりと上目遣いにそれを見ただけで、再び書類に目を落とした。

「なんだ、それは」

下を向いたまま言う。

「技術情報部に頼んで作つてもらつたCDが入つています。僕の本を朗読する音声が記録されています。これ聞いてもらえば、きっと……」

私の説明によつやく顔を上げた。ぎろりと私を睨んでいる。背後の窓からの光が微妙な影をつけ、普段から十分な迫力を後押ししている。

無言でペンを置いて立ち上がった彼を見て、私は慌てた。

「あつ、ボスのためだといつことは言つてませんし、僕が女だとうことも……」

言葉が終わらないうちに、いつもの黒手袋をした手を伸ばして、プレイヤーをひつ掴んだ。驚いた私は手を離してしまった。

彼はデスクを離れると、背後の窓に向って歩き出す。錠が外され、窓が開く。何をするかと思えば、空に向ってフリスビーでも投げるかのようにそれを放った。

思わず短く悲鳴を上げてしまつ。私が最後に見たのは、弧を描く放物線の頂点から落下するプレイヤーだった。

窓に駆けつける直前に、地面にぶつかる無残な音が聞こえていた。覗くと大破したプレイヤーと飛び出して割れたCDが見えた。

「なんてことを

咳きを漏らさずにはいられなかつた。せっかくアビゲイルにも知恵を借りて、オスカーにも協力してもらつたのに。

それにプレイヤーは借り物なのにどうしよう。一瞬頭の中が真っ白になる。

「壊れたな」

ボスは私の横で、いかにも自然に壊れましたと言わんばかりの口調だ。

城で最初に会つたとき、アビゲイルに銃床ストックが欠けたライフルを渡したときと同じだ。壊れたのではなくて壊したのに。私の頭を後ろからど突く。反動でCDプレイヤー同様に窓の外へ落ちてしまいそうになる。それを踏ん張つて何とか耐える。彼はデスクに戻ると、再び書類を手に取つた。

「今夜は外に出る」

後頭部を押されて涙目で振り返る私を見もしない。

今日は夜のお勤めの日だ。外に出るということはキャンセルつてことか。初めての二日空きだ。久しぶりにゆっくりできるかも。なんだか休暇でも得たような浮かれた気分になる。だが、それはすぐに彼の言葉によつて沈められた。

「俺が戻ってきたら部屋に来い」

それつて、寝ずに帰るまで待つてことでしょうか。

そんなことしてたら、明日の朝、起きられなくなつてしまつ。

「朝食はいらん」

そんなこと言つたつて、誰もボスの朝食なんて心配していない。遅く帰つてきて食べないことなんて今までだつてあつたし。

「でも、遅番の人たちへの朝御飯の用意が……」

抗議の途中で何かが折れる音。首を僅かに回して、ボスが横目にこちらを見る。手にはペン先の折れた万年筆が握られていた。

「ああ？」

低い彼の声に体がぶるつと震える。この人の声にも田にも慣れるということがない。

先のない万年筆でも人は殺せるんだろうかと眞面目にそんなことを考えてしまう。

「……分かりました」

結局気持ちを貫けなかつた。ふがいない自分が恨めしい。

ボスはすでに自分の仕事を再開している。引き出しから新しいペンを取り出していた。

受話器を取ると、番号を押して、出た相手に文句を言つ。報告書を出しなおせと。それは多分ボスがさつきペン先を折つて、インクを滲ませた書類のことだ。また理不尽な命令だ。

私のせいもあるけれど、その人には許してもらいたい。もういつぱいいつぱいなのだから。

頭は今日の段取りを考えるのにフル回転だ。

明日の朝食は今日のうちに出来るところまで用意して、朝は火を通すだけで済むようにしておこつ。昼食もそんな感じにしておいて、途中で手の空いたとき、部屋で休ませてもらおう。

そうか、私自身の日程を変更すれば不可能なことではない。

ボスのせいにして、本来の仕事である料理をおろそかにすることなんて出来ない。そんなことは私自身が納得できない。プロとして厨房に立つからには妥協は許されないことはもちろん、なによりもあの人負けた気分になるのが嫌だった。

私は執務室から一皿散に退出した。

そうと決まればやることは沢山ある。今から準備に取り掛かれば、皆に迷惑をかけることはないはずだ。

ここはマスティマ・ゴックの根性の見せ所だ。白衣の袖を捲り上げながら、私は厨房へと急いだ。

47・希望の行方（後書き）

次回予告：冷暖房完備のマスティマの城。だが、それさえもボスには邪魔なことがあるようだ……。

第48話「冬のボス」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

隊員たちのために格闘技のコーチになつてくれないか。

ある日、ジャザニア隊長から打診された。どうも射撃場でのボスとの対決の噂が耳に入つたらしい。噂につきものの尾ひれが、隊長の判断を狂わせたようだ。

私の拳法は誰かに教えられるものではないと思う。

道場でいつも注意されていたつけ。ムラが多くすぎるって。気合のムラ、スピードのムラ、攻撃力のムラ。板きれ一枚割れないときもあれば、厚い鉄板を凹ませても平氣なときもあつたし。あんまりムラムラ言われすぎて、ムラの意味が分からなくなつたくらいだ。

自分の仕事が手いっぱいで時間が取れないというのもある。こういうものは継続的な訓練が必要になつてくるから、指導者としては致命的とも言える。

そして、最大の問題は、実戦でどれほど役に立つか私自身が分からぬことだ。

そんな中途半端なものを見人伝えるわけにはいかない。プロ集団でなければならない、マステイマの隊員の足元をすくうことになりかねない。

私は丁重にお断りした。理解を示してくれたジャズ隊長にほつとする。

「お前もなんか最近お疲れみたいだもんな」

去り際の隊長の言葉にぎくりとする。顔に出ているんだろうか。一応「そんなことないですよ」とまかしてみる。彼は笑顔を浮かべただけだった。

「最近寒さが厳しくなつてきたし、体壊さねえよにな」と私の肩を叩いて、隊長は厨房から出て行つた。

心遣いにじんとくる。

私よりも外に出ることの多い隊長たちのほうが大変なはずなのに。

こんな言葉をかけてくれるなんて、誰かさんとは大違ひだ。

厨房が仕事場の私には、暑さ寒さは問題にならない。マスティマの城には空調が完備されているからだ。温度、湿度がオートでコン

トロールされ、場所によって最適な環境に保たれている。
たとえ、外で雪が降らうが、風が強かるうが、城の中にいればまつたく関係はない。

……そのはずだった。

「ボス、寒いんですけど」

「俺は丁度いい」

何回目のやりとりだろう。同じ言葉の繰り返しにボスは不機嫌になりかけている。

だつて寒いんだもの。我慢や根性で乗り切るなんて無理だ。

ここはボスの寝室だ。当人はふかふかのベッドの中なんだから寒さなんて関係ない。むしろ暑くなるからヒーターの電源を切つてしまつた。私がいることなんてお構い無しだ。

最初はそれほどでもなかつた。部屋が冷えてくるまでは。厚着をしてくれば良かつたと思うも後の祭りだ。だいたい城の中でそんな装備が必要なんて考えもしれないし。

我慢していたけれど、それも限界になつて訴える。その答えが最初のボスの言葉。

風邪をひいてしまった。だけど、ヒーターを入れることは許されない。こうなつたらボスに早めに寝てもらつて、せつせつこの部屋を出るしかない。

私は片手で腕をさすりながら、膝の上の本のページをめくつた。

眠つても寒さは感じるものだ。

手を伸ばして、足に触れる肌触りのいいブランケットを引つ張つた。

眠くて目は潰れているが、引き寄せることは出来る。それで体を

覆うと、うん、温かい。電気毛布っていうのだろうか。温もりが心地良い。

これでやっと温かくして眠れる。

私がより深い眠りに引き込まれる瞬間、それを狙っていたかのように声が聞こえてきた。

「おい、起きろ」

うるさいなあ。今が一番気持ちのいいときなのに。邪魔するなんていけずな人だ。

「おい」

声が大きくなつて、頬をはたかれる。

私ははつと目を開けた。目の前にはボスの顔。彼は不機嫌そうに眉間に皺を寄せている。

何が起こっているのか分からぬ。それに頬がじんじんする。

「布団を返せ」

その一言でようやく状況が見えてきた。椅子で眠つていた私がボスの布団を握りしめていたのだ。彼の元にあるのは端っこだけ。私が殆どを奪つている。

謝りながら、慌ててベッドに布団を戻す。

だが、すぐに体が冷えてくる。夜も更けてきたからだろう。寒さが増しているようだ。

眠氣も酷くなつてくる。冬山で遭難して凍死してしまつ人つてこんな感じだろうか。

本の字が霞む。読む声は寒さと睡魔で震えながら途切れ途切れ。ボスもとうとう根負けしたようだ。

「上着を貸してやる。向こうからとつて来い。明かりは付けるなよ」

電気は私の手元を照らすものだけだ。寝室の隅にあるウォーク・イン・クローゼットの中まではとても届かない。

立ち上がるためまいさえ感じる。ふらふらと歩いていつて、手探りで上着を搜した。分からぬから適当でいいや。

早速袖を通すと温かい。ぜんぜん違う。長い丈の上着の裾を持ち

上げながら歩く。足もすっぽり覆われるから快適だ。

私はベッドの中で目をつぶっているボスのそばまで戻った。

「最初から読め」

目を閉じたままの命令。

私は憂鬱になりながらも本を開く。そして、半分眠りながら本を朗読し始めた。ポテトとトマトが置き換わるうが、アンデスがアンデルセンになろうが、もう勘弁してもらうしかない。

運良くもボスはそれから目覚めることはなかつた。

私は自分の部屋に戻る。静かに音を立てずに。

そして温かい部屋でベッドに沈むようにして眠り込む。極楽だ。また着替えもせず、シャワーも浴びないままだが、全ては明日だ。もう起きる力なんて残つていない。

束の間の休息。

私を叩き起こしたのは、目覚ましのベルではなく、何度も鳴り続ける電話のベルだった。

耳に押し当ても相手の声は遙か彼方だ。まさかあの世からの電話とか。私はまだ眠っている頭で考える。

「聞いてんのか」

小さく聞こえる声に耳を澄ます。この声はボスではないか。瞬時に覚醒した。私の部屋にボスが直接電話をかけてくるなんてただ事ではない。

声が遠いのは当たり前だ。受話器を逆さに持っていたのだ。持ち替えて耳に当てるとい、ボスの怒りの声が鼓膜を打つた。

「俺の制服のコート、どこにやつた？」

制服なんて知るわけがない。そんなもの触つてもいないし……と、考えてはつとする。私が借りた上着つてまさか。

不安的中だ。私が着ているのは王様のマントのように床に引きつたコート。ボスの背丈に合わせているのだから、合わないのは当然だ。裾のほうは汚れて白っぽくなっている。

部屋に戻つてくるときには殆ど眠りながら歩いていたから、気にしていなかつた。

おまけに着たまま寝たのでしわくちゃだ。かつこいい皺加工なんて程遠い、ただの不細工な皺だ。

「すみません、ボス。汚れて皺々になつてます」

「なんだと？」

ボスは激昂した。朝から本社に出向く予定があつたらしくアビゲイルを通じて、クリーニングに出した他のコートを何とか用意しようと命令された。出発が遅れたらどうなるか分かつてゐるんだろうとの脅しつきだ。

破壊音と共に電話がぶつつりと切れた。おそらく床に投げつけでもしたのだろう。

私はすぐにアビゲイルに電話をかけて、指示を仰いだ。

彼女はこの次第に驚いたものの、すぐに手を打つてくれた。
ディケンズ本社経由に出されたクリーニング。契約店はロンドンだ。ロンドンにボスが着いてからすぐヒューストンを届けてもらひよう手配をしたのだ。

「ヒーターを切らなければ良かつたのに。自分の責任もあるつて分かつてくれたら良いのだけどね」

落ち込む私に彼女はそう言つてくれたが、あの人があんなことを思ははずがない。

寒いつて言うから上着を貸してやつたのに、確かめもせず、汚してしわくちゃにした。チビコックの失態だ。そう彼は確信しているに違いない。

ああもう、いつとき帰つてこないで欲しい。

飛び立つへりを見送りながら、私はボスの怒りを思つて憂鬱になつた。

48・冬のボス（後書き）

次回予告：レイバンの元へ食事を届けることになったミシェル。そこには彼を慕う小さな守護者がいて……。

第49話「医食同源」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

医療と食事といつもの深き結びつきがある。

特に東洋ではその意識が根付いているように思ひ。医食同源という言葉は日本語で造語らしいが、中国でも薬食同源の思想が古くからある。

薬膳料理は中国の師匠が得意とする分野でもあった。だが、残念ながら、それを学んだことはない。とても複雑で奥深い世界だ。習得するには何年もかかるだろう。中途半端になるなら教える気はない、と、師匠からもはつきり言われた。

だが、その考え方は新鮮で、料理人の可能性が広がって見えたものだ。

私はこのままでいいのだろうか。仕事を把握し、慣れてきた者が誰でも考へるだろう。自問自答。夜のボスのせいでの時間は狹まつていて、コツクとしては常に追及者でいたい。

考えた末、出た結論はアビゲイルとの連携。タッグ。私に知識と技術が足りないので、他に協力を求めるだけだ。

コツクと医師として、隊員たちが健康であることを目指す。二人での話し合いも重ねた。

「疲れているみたいだけど、大丈夫？」

アビゲイルの言葉。弟のジャズ隊長からも言われたつけ。一人なら氣のせいでは済むが、一人目となると話は変わってくる。

「なんとかやつてます」

私の答えに、無理をせずに辛いときはいつでも医務室に来なさいと言つてくれた。いくら彼女でもボスには逆らえないようだ。

こうなつたら、ボスの夕食に睡眠薬でも盛るしかないか。……いや、これは冗談だ。本当にやる度胸なんてない。半ば真剣にこんなことを思うなんて、どうかしてる。深い溜め息が出る。

自分のことは触れないでおこう。どつと疲れが増す気がする。今、

私が考えるべきはマスティマの隊員たちのことなのだし。

彼らのほとんどが若者だから、治療食は今のところいらない。必要なのは予防のための食事だ。ビタミン、カルシウム、鉄分等の摂取。それに栄養バランスやカロリー。他にも頭を使うことは色々。風邪などの病気をして寝込んだ隊員に提供することも始めた。高栄養で消化に良い療養食。ワゴンに乗せて届けるデリバリーだ。病人のための、このサービスも次第に内容が変わりつつある。時として、幹部の食事まで玄関先に運ぶようになったのだ。ジャザナイア隊長とグレイはお得意様だ。幹部特権というものだろうか。料理の内容とか、色々と要望も多いから大変だ。ボスほどではないが気も遣う。

まあ、それはさておき、今日舞い込んで来た依頼は療養食だ。アビゲイルから名前を聞いて、やはりと思う。食堂に一週間以上も姿を現さなかつた。

グレイが一人で「一ヒー目当てにやってくるだけだ。

食堂の入り口に置いたアンケートボックスの常連でもあった、その人。食べたい物はの問いへの回答は、チーズケーキやらアップルパイやらバームクーヘンやら。全部お菓子だ。

紙に並ぶ小さな丸みを帯びた文字。体に似合わない筆跡だ。それがレイバンのものだと知ったときは驚いたけれど。

なんだか嬉しくなつて、作るのも自ずと気合が入つた。

食堂では、グレイを盾にしてお菓子に手を伸ばしていた。もつとも体格差からぜんぜん隠れてはいないのだが。

黙々と頬張り、そそくさと立ち去つていく。私と目が合つとばつが悪そうなので、あえて気付かないふりをした。

いないと寂しいものだ。つい姿を捜してしまつ。

任務で城を離れているのだろうか。それとも、もしかして体の調子を崩しているのだろうか。本人には余計なお世話だと言われそうだが、ちょっと気になつていた。

悪い方の予感が的中。

療養食ならば一押しのものがある。それはおじやだ。日本人である祖母が、風邪の時によく作ってくれたもの。リゾットとはまた違う、優しい味。栄養もあって消化にも良い、まさに病気の時には絶好の食べ物だ。

アビゲイルから教えてもらつた部屋の扉の前で立ち止まり、心を落ち着かせる。預かつた鍵で扉を開け、ワゴンを押して中に入る。

「こんにちは。マイケルです。入ります」

入り口付近で声を大きくして、私は通路を歩いていった。

私の部屋とは全く違う間取り、そして内装。ボスの部屋ほどではないが、全てが大きくて広かつた。

リビングには、パワーラックにセットされたトレーニングベンチ、バーべルやダンベルを始めとした筋肉トレーニング用の機器があった。ランニング・マシーンやエアロバイクが置かれた一画。あの隆々とした筋肉はここで維持されていたのかと納得する。

そして大きなテレビにゆつたりとしたソファ。掃除は行き届いていて塵一つない。自分でやっているか、委託しているのかは分からぬが、綺麗好きと見える。

私は足を止めた。奥の扉が僅かに開いている。その隙間からこちらを覗いているものがいた。黒くて丸い瞳。じつと私を見つめている。

私はワゴンの横に腰を落とし、口笛を吹いて手招きをした。小さな犬だ。確かにイングリッシュ・トイ・テリアという種類だ。姿からは小さなドーベルマンと言つたところ。茶色の体毛に足先と鼻先是黒。大きさは私の膝にも満たない。

その小さな子は私を怪しんでいるようだ。侵入者、つまりは敵かどうかを窺つてているように見える。どうやら決断を下したようだ。口笛を吹き続ける私の前に出てくる。赤い首輪が可愛らしい。

犬は私に向かつて猛然と吠え始めた。牙をむき出しにしたところなんて、とても小型犬とは思えない迫力だ。

犬好きとしては悲しくなつてくる。こんな風に吠えられるなんて

今まで一度もなかつたのに。

「マニア、どうした？」

奥の扉が大きく開き、声の主が現れた。レイバンだ。ランニングシャツにグレーのスウェットのズボンを身につけた彼は私を見つけるなり、不愉快そうな顔つきをした。

「なんでお前がここにいるのだ？」

「御飯を持ってきたんです」

私はワゴンを示した。

「……お前の世話になどならん」

声に咳が混じった。よく見ると顔色もまだ悪い。熱があるよつで赤みがさしている。声にもいつもの霸気がない。

レイバンは犬を呼んだ。一目散に駆けて、彼の腕の中にかくまれたその子は、じつと私を見つめていた。

腰を落としていた彼の足がもつれた。

私はすぐに飛び出した。倒れそうになる彼の腕を必死で引っ張る。「ベッドに戻つてください。」ここで倒れられても、僕ではあなたを運べませんから」「

意地よりも現実が勝つたのだろう。彼はおとなしく奥の部屋に戻り始めた。

ベッドに座ったのを確認してから、ワゴンを取りにコンビングに引き返した。

49・医食同源（後書き）

次回予告：レイバンに食事を届けることで、その心に触れるところでなったミシール。彼もまた、思つところがあつたようで……。

第50話「レイバンの思い」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

私が寝室に入ると、レイバンはベッドの上で体を起こして待っていた。

辛そうだ。咳も続いている。丸めた肩が体を一回り小さく見せた。布団の上ではさつきの犬が寝そべっている。

「言つておくが、お前を許したわけではないぞ」

「分かっています。でも、ボスの命令でもあるんですから、レイバン」

アビゲイルに聞いた通りに答える。そう言えば、「こねなくなるだろ」と。案の定、彼の顔つきが変わった。

「ボスのお言葉か！」

こんな風に具合が悪くても、ボスという言葉に反応する彼には、なんだか切なさを感じる。これほど思ってくれる部下。ボスはもつと大事にすべきだと思う。

レイバンは流行りの風邪にやられていた。熱に顔を上氣させ、咳き込む彼を見て、ボスは自分の部屋での静養を言い渡したのだ。そう言えば聞こえはいいが、実際のボスの言葉はこんなだったそうだ。

「お前の風邪なんぞうつされちゃかなわねえ。引っ込んでろ」

あの人らしいといえば、らしいが。病人に対して、上司はもつと気遣いを見せるべきじゃないだろうか。

顔を輝かせる彼を見て罪悪感に苛まれる。ボスの命令というのは真つ赤な嘘。私に食事を用意するように言つたのはアビゲイルだ。

「おじや作つてきました。僕の祖母が風邪の時よく作つてくれたものなんです」

私はワゴンの鍋から皿にすくつて入れる。

スプーンを添えて渡すと、彼は疑わしげに皿の中を見やる。

「なんか、○○みたいだな」

食事中には言つてはいけないカタカナ一文字だ。カレーのときの

〇〇〇と同じくらいに。

私は顔を引きつらせた。

「日本の料理らしいですよ。まあ食べてみてください」

慌ててそう付け足す。まあ彼の言ひようも分からぬでもない。私も初めて見た時思つたのだから。さすがに食べる前には言わなかつたけれど。

レイバンは恐る恐るスプーンを口に運んだ。疑わしげに顔に皺を寄せていたのが、すぐに嘘のように穏やかになる。ゆっくりとではあるが、食べ続ける。用意した水を飲みながら、やがて完食した。良かつた。後は寝ていれば風邪なんですぐに治るだらう。

今日のお菓子である蒸しプリンをベッドのサイドテーブルに置く。これも栄養価の高い消化の良いものだ。後から食べてくださいと言葉を添え、スプーンをつける。

「やはりボスは偉大だ」

彼は感動したように言つ。ボスが食事を持つて行くよう言つたからと誤解しているとはい、大げさな言ひようだ。

「あなたにとつてボスは特別なんですね」

思わずそう言つてしまつた。

今まで見てきた限り、ボスに入れ込む理由は分からぬけれど。時に一度も蹴られたこともあるといふのに、一体何が彼を驅り立てるのだろう。

レイバンは私を睨み付けた。余計なことを口にしてしまつたと気付く。

だが、言つてしまつたことをないことに戻せるわけもない。私は氣まずい沈黙を何とかしようと、ベッドに上の犬に手を伸ばした。かわいいワンちゃんですねとおづとしたができなかつた。この子は牙をむき出しにして唸つてゐるではないか。触つたなら噛み付いてやるといわんばかりだ。

「よせ。マリアは自分しか懷いていない」

レイバンの「じつに手には嬉しそうに頭を摺り寄せてゐるのに。彼

の田じりは下がりっぱなし。名前を連呼して、唇を舐めるがままにさせている。

マリアなんて女性の名前をつけるところからして、思い入れの

深さを感じる。

それにしても、でつかい人に小さい犬って、なんだか微笑ましい絵だ。

レイバンは仰向けになつた犬の腹をなでている。

「ボスは自分の命を救つてくださつた」

彼はぽつりと言つた。愛犬の存在が彼の頑なな心を溶かしてしまつたようだつた。

そして、ゆつくりとした口調で話し出したのは過去のこと。かつては世界中を渡り歩いたのだと。傭兵として各戦地に赴いた末、たどり着いたのがマステイマ。金を目的にしか働けなかつた彼を変えたのがボスだつた。

任務でしくじり、敵に後ろを取られ、窮地に陥つた彼を救つたのだ。

「それなのにあの方は、『野郎がどうなろうと知つたこいつやねえ。敵の後ろにお前がいただけ』と謙遜されて。こんな格好のいい人、見たことがあるか？ 絶対に付いていこうと思つたんだ」

謙遜だろうか。あの人が謙遜なんて口にするだらうか。

だが、レイバンは信じている。信念とは尊いものだ。私だつてボスに、マステイマに命を救われたのだ。レイバンの気持ちは理解できる。彼への親近感は強まつた。

「僕も昔ボスに救われたんです」

私の言葉に彼は驚いたようだつた。彼もまた思うところがあつたらしい。

ベッドサイドのテーブルの引き出しから、なにやら取り出す。写

真のようだつた。彼は大事そうにそれを手の中で広げると、その中の一枚を私に差し出した。

「今日の飯の礼だ。受け取れ。自分は借りを作りたくない」

私は言葉を失つた。

写真に写っているのはボスではないか。首を返して、こちらを見つめるバストショット。写真でも、もちろん田つきは変わらず悪い。アップのボスの視線に思わず目をそらしてしまひ。

「レイバン、これ……」

私は言いよどむ。

「他の奴には内緒で頼む。もちろんボスにもだ」確かにこんな物の存在をボスに知られたら大変だ。ただではすまないだろ?。

手の感触に思わず裏返して見る。ラミネート加工されている。落としたり少々濡れたりしても大丈夫だ。

「こういうのもあるが目立つからな。見られたらまずいと思つてさつき隠した」

彼がベッドのベッドボードの後ろ、壁の隙間から取り出したのは、額に入つた大判のポスターだ。まるでギャング映画の俳優のようだ。翻つてている黒いロングコート。丸い月と建物の黒い影を背景にボスがこちらに銃を向けている。その足元には銀色の毛並みの狼。合成まで使つてているようだ。

これだけを見たらファンでもできそうだ。かつこいい感じに仕上がつてている。

もうう写真もそつちのほうが良かつたなつて。……違う。そういう問題ではない。

「レイバン、困ります」

「何だ、一枚はやらんぞ」

私が他の写真まで欲しがつていてる勘違いしている。手の写真を庇うようにして。彼は大真面目だ。どうやっても付き返せそうにな
い。

「……ありがとうございます」

とりあえず礼を言って、白衣のポケットにしまった。

そして、逃げ出すようにして部屋を後にする。なんだか秘密を持

つたようで、気分があまり良くない。それにポケットの中の写真。どうしよう。

ワゴンを押して廊下を歩いていると、通りかかったアビゲイルと目が合った。

「マイケル、レイバンの様子はどうだった？」

「だ……大丈夫でしたよ」

私の言葉に形の良い眉をひそめる。そして、一息ちに寄つて来た。詰まつた言葉に加え、ポケットの上から手を押し当ていたのがまづかつたらしい。

「もしかして、アレをレイバンに貰つたとか？」

嘘が顔に出でしまうタイプであることは分かっていても、治せない。それに彼女はその存在を知つているようだ。私の手を退け、写真を取り出す。

「やつぱり。またやつたわね」

「写真を見ると、呆れたように言った。

「前にボスに隠し撮りを見つかって怒られたのに。懲りないわね」怒られるのは当然だろう。しかし、またとは。それであんな風に内緒だと私に言つたわけか。でも、どうしよう。写真はここにある。私はアビゲイルにどうすればいいか尋ねた。

「証拠隠滅。燃やしちゃうのが一番いいんじゃない？」

写真を返しながら彼女は言う。けれど、人の写つた写真を燃やすなんて、なんだか気が進まない。

それでなくとも、あのボスの写真だし。火をつけたりしたら何か悪いことが起こるんじゃないだろうか。祟りとか。

一旦自分の部屋に戻つた私は、仕方なく封筒を取り出して、その中に写真を入れた。

これでとりあえずは見えることはない。解決したわけではないが、なんだかほっとした。

それから、私は仕事場である厨房に戻つた。

しばらくの間、気になっていたが、何日か経つと忙しさに思い出

すことも多くはなくなつた。元気になつたレイバンが食堂に現れた時くらいだ。

彼は相変わらずグレイにくつついてやつてくる。私への態度も変わらなかつた。

変わつたのは私の気持ちかもしけない。私のボスへの反発心を憎むレイバンの思いが分かつたから。彼にはそれだけの理由があることを知つたから。

私は心から、彼の思いがボスに届く日が来ればいいのと願わずにはいられなかつた。

50・レイバンの思い（後書き）

次回予告…コックとボスの寝かしつけ役の両立は難しく、疲労をつ
のらせたミシェルはついに……。

第51話「過労の末に」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします（ランディングの表示はPCのみです）

疲れといつものはある一線を越えてしまつと、自分では認識できなくなるもののがやうだ。

感覚は蛇口の下に置いた鍋に似ている。いつぱいに溜まつた鍋。注ぎ込む水に目をつぶれば、どれほどの量がこぼれているか分からないのだから。

これはもうランニング・ハイならぬワーキング・ハイというべきか。手一杯なのに、新たな仕事を見つけてきてやろうとするなんて。自分イジメもいいところだ。

アビゲイルとの話し合いの時間を取り、食事の栄養に気を配る。療養中の者ばかりか、幹部の食事を提供しようとする。

少なくとも客観的な視点を欠いていたことは確かだ。冷静な判断ができなくなつていただろう。

疲れすぎると誰もがこうなつてしまふのか。それは分からぬが私の場合はそうだった。

グレイは何度か私の顔を覗きこんでいた。

「何言つてんのか分かんねー、熱でもあんのか」と問われたこともあつた。

レイバンからきたのはお菓子の苦情。ショークリームについてだつた。

なんと私が皿に並べていたのは、カスタードクリームなしのただのシュー。最初に口にしたレイバンの表情は一生忘れられないだろう。皿を白黒させてシューの中を覗き込んでいた。

他の隊員たちも、時として料理の味付けがいつもと違うと口にするようになつた。

やつたばずのことが、やつたつもりになつっていく。記憶の欠落と混乱。恐ろしいのは、それがついにボスの料理に飛び火したことだ。ボスの皿から出てきたのは異様な物体。具沢山のミネストローネ

のステップからだ。

無言で目の前に突き出されたスプーン。随分大き目のにんじんが乗っているな、切り方にでも文句があるんだろうと思つていた。

だが、よく見るとそれは香辛料のプラスチックの赤い外蓋だった。どこで入つてしまつたのか記憶がなかつた。気付いたらなくなつていて、床にでも落ちてどこかの隙間に入り込んでしまつたものと思ひ込んでいた。

ボスからは大目玉を食らつたのは言うまでもない。これは仕方ないことだ。

気付かずに、喉に引っかけたりしなくて良かつた。今回ばかりは、もつともな彼の怒りを私は黙つて受け止めた。

さすがに疲れているとは自分でも氣付いていた。時間があれば部屋に戻つて休んでいたのだが、それさえ億劫になつていて。食堂で、椅子を並べてその上で眠つたり、持参したクッションに顔をうずめて座つたまま寝たりしていた。

隊員たちは心配してくれたが、私の都合で解決できる問題でもない。それに、失敗は時折あるが、何とかやつていけているのだ。これからもやれるはずだ。そう思つていた。

だが、ある時。朝から酷い頭痛に悩まされていた日、その信念も崩れ去つた。

はつきりと覚えているのは、昼食の準備をしていたということだ。食べやすい大きさに切つたバゲットとホワイトソースを使った野菜たっぷりのシチュ。上々の出来上がりだ。匂いにつられたように食堂に隊員たちが訪れる。

さあ、あとは注げばいいだけ。片手で皿を取る。

すると皿が手から滑り落ちていつた。それも真下でなく斜めに。地球の重力が変わつてしまつたのか、或いはなにか超自然的な力が働いたのか。

何のことはない。私もまた倒れようとしていたに過ぎなかつた。

反射的に伸ばした手に積まれた皿が触れる。

床で次々と碎けていく音が遠くに聞こえた。それなのに異変に気が付いて駆けつけてくる人たちの声ははつきりと聞き取れた。視界が萎んでブラックアウトした状態だ。体が重くて指一本動かせない。

「大丈夫か、マイケル？」

「おい誰か、早くアビー姐ねえさんを呼んできててくれ」

皆が騒いでいる。

「触るなよ、お前ら。脳の方だつたら動かすとやべーからな」この声はグレイだ。コーヒーを目当てに来ていたのだろう。

大丈夫だと言いたいが、声を出すこともできない。本当に脳の病気でこんなことになってしまったのだろうか。

やがてアビゲイルが駆けつけたようだ。

「感染症の危険性があるわ。皆部屋から出て頂戴。処置をするから」彼女は今までに聞いたこともない緊張感のある声で言っている。

どよめきが起き、皆の足音が遠ざかっていった。

脳の疾患ではなくて感染症？ それも人を近づけさせないということは、バイオハザード級？ 空気感染でもする新種の細菌やウィルスとかだろうか。

話が大きくなってきた。周り人たちも危ういということなのだろうか。

彼女はがさごさと調理器具の置き場所辺りを探っている。

そして、彼女の手が私の白衣のボタンを外しだした。Tシャツを体から浮かすと、なにやら高い音が一、三度して胸元が涼しくなった。

「ミシェル、悪いけどこれ取らせてもうつわね。血流の妨げになるから」

胸に巻いているサポートのことだ。

彼女は伸縮包帯のようなそれを体から離しては、さつき聞いたのと同じような高い音を立てた。多分、これはハサミの音だ。それも調理用のハサミだろう。

こんなものを切つていたら、切れ味が悪くなつてしまつ。こんなときだというのに心配をしてしまつ。

全て切り落としたようだ。

調理台にハサミを置く音と重なつて聞こえてきたのは、扉の開く音だった。

「入つては駄目だつてさつきも……」

アビゲイルは苛立つた声で言つた。だが、それ以上声は続かなかつた。

扉の閉まる音。低い足音が近付いてくる。

「ボ……」

彼女は何か言いかけたが、それから先は聞こえなかつた。楽になつた呼吸。胸にすっと入つてきた空気を吸い込むと、体の力が一気に抜けた。そして、次第に意識もまた暗闇の中に沈んでいった。

夢見ていたのは幼い頃。

父と母、祖母に私と四人で囲んだ夕食後の和やかな語らい。

ソファで眠つてしまつた私をベッドまで抱いて運んでくれた父。心地よい浮遊感と揺れ。その腕の中で感じた幸福。

私は無意識に父の胸に顔を摺り寄せる。

嗅ぎ覚えのある良い香り。だが、それは思い出の父のものとは違つていた。

5.1・過労の末に（後書き）

次回予告・厨房で倒れたミシェルは医務室のベッドに運ばれた。そこで、彼女は自らの胸の内を語るのだが……。

第52話「ここにいる理由（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

52・じたまにいる理由（前編）

私は目を開けた。

ぼんやりとした視界に入ってきたのは見慣れない白い天井。細長い蛍光灯の明かり。そして、鼻をつく消毒薬の匂い。目をしばたく私にアビゲイルが声をかけた。

「良かった。気付いたのね、ミシェル」

「アビゲイル、私……」

辺りを見回して気付く。ここは医務室だ。私が横たわっているのは患者用のベッド。

「過労よ。働きすぎ。無理をしたのがたたつたのね」

白衣を着た彼女が顔を覗きこむ。

「もつと早く手を打つてあげればよかつたんだわ」

「いいえ。私が自分の体力を過信していたから。こんなことになるなんて思わなかつたんです」

私は溜め息をついた。

脳の疾患でも感染症でもなかつたことにホッとすると共に、アビゲイルの手を煩わせていることに申し訳ないという気持ちがこみ上げる。そうでなくとも、彼女は他の仕事を抱えているのに。

アビゲイルはベッドの脇に置かれた丸椅子に腰掛けた。

「ねえミシェル。あなた、本社に行くのはどうかしら？ 少しは楽な仕事になるわ。本社のほうはア解済みだし、ボスにも話はつけたわ

「そんなの駄目です！」

私は飛び起きた。布団がはぐれて自分のあられもない格好に愕然とする。

ボタンを閉じていない白衣。真っ二つに切り裂かれたTシャツ。

その下には何も身に着けていない。私は慌てて布団をかき寄せる。

「皆の食事はどうなるんです。また、あんなインスタントばかりに

なっちゃうんでしょう。ボスだって元の不健康な食事に戻ってしまったかもしれない」

顔を赤らめながらも、必死で言いつのる私の頭にアビゲイルは優しく手を置いた。

「彼女は黙つて私の髪をなでている。

「もしかして、もう他のコックを……」

不安に涙がこみ上げてくる。

「いいえ。マスティマのコックが務まるのはあなただけよ、ミシェル」

彼女はそう言つと手を下して、柔らかく笑つた。私は茫然と彼女を見る。

「変なことを言つてごめんね。あなたの気持ちを確かめたかったのでも、何故そこまで私たちのことを気にするの。あなたの後ろにはイタリアのマフィア、ブルーノ・マロッチーがいるでしょう。でも、あなたが関係者だとは思えない。どうして、そんな力を借りてまでマスティマに？」

私は俯いた。隠す理由なんてないだろう。私の正体を知つているこの人の前では。

顔を上げ、彼女の深い緑色の瞳を覗き込む。この人なら大丈夫だ。全てを語つてもきっと分かってくれる。そう確信して口を開いた。

「私、小さい頃、父の料理店の手伝いに出ていて。常連客だったブルーノさんを狙つたマフィアの抗争に巻き込まれたんです。そこへボス率いるマスティマが現れて。私は助かつたのだけど……父を亡くしました」

「あなた、まさかそれを恨んでうちのボスを狙つて？」

アビゲイルの早合点に驚いて、思わず短い笑い声を上げてしまう。

「違いますよ。確かに父は助からなかつたけれど、マスティマが来なければ私の命もなかつたんです。父だってその場で死んでいたでしょう。病院での三日。短かつたけれど、貴重な時間をもらえたんですね」

少しの間、だが意識のあった父との会話。交わした話は十年たつた今になつても鮮やかに思い出せる。父は最後まで私に怪我がなくてよかつたと喜んでいた。

「父を狙つた男を止めてくれたのがボスで。他の人も子供の私を気にかけてくれたりして」

「ちょっと待つて、それって何年前の話なの？」

アビゲイルが慌てたように話を遮る。

「十年前です」

「ちょうどあの人がボスになつた頃、先代から引き継いだくらいだわ。年若きボスの任務ね」

それまで思いもしない言葉だった。あの人もボスではない頃があるのだ。少年時代だつて。ちょっと想像ができないけれど。

十年前のあの夜、ロングコートを着たシリエットを思い出す。片手の黒い拳銃^{リボルバ}。顔もよくは見なかつたし、声色も定かではないが、言葉はもちろんのこと、迫力は鮮明だ。十年前だけれど、確かにあれは今のボスに通じるものがあった。

だからこそ、私はここにいるのだ。

「私、恩返しがしたくて。私の得意なものは料理だつたから、それを磨けば何とかなるかもしないって、あちこちで弟子となつて学びました。そして、ブルーノさんに無理を言つてディケンズ本社を紹介してもらつたんです」

「なるほど、そういうことだつたのね。でも、入つてみて驚いたんじゃない？ あんなボスで」

確かに驚いた。あんな人がいるなんて世界は広いものだと。

「言葉遣いは荒いし口つきは悪い、我ままで乱暴でどうしようもない人ですよね」

私はくすりと笑つた。

「でも悪い人じゃない。纖細なところもあるし」

「ボスが纖細？」

「はい。料理に対するこだわりから見てもそうだと思います。それ

に、何よりもマステイマのボスとして誇りを持っています。きっと私のまだ知らない良い所も沢山あるはずです。だって、ただの乱暴者なら誰も付いては行きませんよ」

私の言葉が終わるや否やアビゲイルが背後を振り返った。同時に小さな物音が聞こえる。ついたてに遮られて何も見えないが。

顔を戻した彼女は、につこりと笑っていた。

「あなたがそう思ってくれるなんて嬉しいわ。ボスだつてきっとそう思つてる」

椅子から立つて私の傍に寄つた。ベッドの端に腰を下ろす。

「ねえミシエル。さつきまでボスがそこにいたのよ」

ついたての方を差し示す。私はすぐには言葉の意味が理解できず、ぽかんと彼女を見つめた。

「あなたが起きたのとボスが去ろうとしたのが一緒だつたから、出て行けなくなつちゃつたのね。ついでに言つとくけど、あなたを厨房からここに運んでくれたのも、あの人よ」

とんでもないことを言い出す。何かの冗談だらうかと顔に目を凝らしても、何の変化もない。ボスが私を運んだなんて。どうしてあの人人がそんなことを。

驚く私を前に、彼女は経緯を話し始めた。

52 ニュースの理由（前編）（後書き）

次回予告・倒れた自分を運んだのはボス？ 思いもかけない「こと」に驚くミシール。そして彼女が休む医務室にやつってきたのは……。

第53話「こと」にいる理由（後編）

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はひとつのみです）

「あなたが女であることを隠すために隔離したまでは良かつたけど、どうやって医務室まで運ぶかが問題だったわ。ジャズを呼んで全て話すしかないと思っていた。その時、ボスが部屋に入ってきたの。騒ぎを聞きつけたのね。私はその時ひらめいたわ。あなたを安全に運ぶにはそれしかないと」

なんだか嫌な予感がするが、アビゲイルの話は途中だ。私は黙つて続きを待った。

「ボスに運んでくれるより頼んだけど、もちろん却下されたわ。仕方ないから少し脅しちゃった」

茶目っ氣のある笑顔だが、相手が相手だけにこちらは笑えない。「このままなら女であることがばれるわよ。そうなればマスティマにはいられない。あなたは美味しい食事も快適な睡眠も一度に失うことになるわ。今さら女も入れるなんて変えても無駄よ。きっと皆はこの子のためにボスの気が変わったんだと思うだけだわって」

恐るべシア・アビゲイル。逃げ場なしのハ方塞ぎだ。ボスもこれでは観念するしかなかつただろう。

「ボスが抱き上げて運んでくれたのよ。コートを脱いであなたを包んでね。食堂の外には野次馬がわんさといたけど、ボスの一睨みで沈黙して後退りよ」

うわあ。皆にどうやって顔を合わせたらいいんだろう。特にレイバンには。目にしたか噂を聞いたかで多少違つてくるだろうが、決して良い印象ではないだろう。

それにボスにも。あの人にそんなことをさせてしまふなんて。気を失つていたとはい、恥ずかしくなつてくる。

もう赤くなつていよいやら青くなつていよいやら分からぬ感じだ。

「あなたはもつと強気で大丈夫だと思うのよ。食事と安眠。伝家の宝刀を一振りも持つているようなものだもの。ボスだつてやすやす

と首にはできないわ。ていうか、首になんてさせないわ

アビゲイルは立ち上がった。「来たわね」と呟いて、ついたての後ろに回る。その頃には私も気付いていた。扉の向こうの廊間に。

彼女が扉を開けると、人のざわめきが耳に入つた。

「あなた達、病人がいるのよ。こんなに詰めかけてどうするの」

アビゲイルの声だ。

「でも、姉さん」

「マイケルの容態は……」

「あいつが死ぬなんてこと、ないですよね」

口々の声。

「お前らだけ」

これはグレイの声だ。皆の声がぴたりとやんだ。

「アビー、ミックがいねーと美味しいコーヒーが飲めねーんだよ」

「自分の楽しみも減る」

信じられないことに続くのはレイバンの声だ。

私はシーツがしわくちゃになるほど握り締めた。皆が私を必要としてくれているのが何より嬉しかつた。そして、それに答えられる状態ではない自分が情けなかつた。

「少しの間、休めば良くなるから。さあまあ仕事に戻つて。静かにしてないと、あの子元気になれないわよ」

アビゲイルの言葉が効いたようだ。遠ざかる足音が聞こえる。そのままにレイバンの声が混じつた。

「これをあいつに渡してくれ。元気を出せとな」

何かをアビゲイルに預けているようだ。

「あらレイバン、あなた、あの子のことを嫌いなんじゃなかつたのか？」

「あんな美味しい菓子作ってくれるの、ミックしかいねーもんな」

グレイが茶化している。

「そういうことではない」

慌てたようなレイバンの咳払い。

「ボスの意にそぐわぬ者は自分の敵だ。だが、今回のことはどうではない。あいつにとつての厨房は我々の戦場と同じだらう。そこで倒れた同志を放つておくなど、できるわけがない」

ボスに救われたという同じ境遇が彼にそんなことを言わせたのだろうか。それにしても、同志つまりは仲間として認めてくれたことに感動すら覚える。

やがて皆去つていった。

扉を閉めてアビゲイルが戻つてくる。彼女の手には本が握られていた。差し出された物を良く見ると『最新式筋肉トレーニング』というタイトルだった。体力をつけて倒れるなんてことがないよつて、との意味だろうか。

何か挟まつているのに気付き、抜き出す。茶封筒だ。何だか嫌な予感がする。

中を覗くとやつぱりだ。私は震える手で封筒の蓋を閉めた。

「またアレを貰つたのね」

アビゲイルが呆れたように言つた。

「でも、これを見たらきっと元気になるって。あのなりに考えてくれたんだと思います」

封筒入りのボスの写真。しかも今度はあのポスターになつていたものの写真版だ。

これ自体は始末に困る代物だが、彼の心遣いが嬉しかつた。

「五日間は仕事を休んでもらうわよ。ボスにも言つておいたから。夜のお勤めもなし。私たちの部屋に来てもらうわ。無理しないよつて監視するからね」

彼女は腕を組んで見下ろす。とても、逃げられる様子ではない。

皆の食事が気になるが、元気を取り戻さなければ、美味しい料理も作れないだろう。

私は彼女の申し出に従つた。幸いなことにオスカーはディケンズ支社をめぐる一週間の出張に出ている最中だという。私のいる四日間は帰つてこないらしい。一日くらいなら、女であることもしまか

せる。

そして、何より私の心を躍らせたのは、プリシラの世話を手伝つてねというアビゲイルの言葉だった。あの可愛い子と一緒に過ごせるなんて、大歓迎だ。

私はつまづきとした気分で休暇に臨んだ。

53・これららの理由（後編）（後書き）

次回予告・アビゲイル一家の部屋で静養するリシェル。けれど、リラックスタイプのものなかなか難しく……。

第54話「シークレットなサービス」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランディングの表示はなしのみです）

54・シークレットなサービス

アビゲイル一家のうち、私の仕事場である厨房と同じ一階で、医務室のすぐ傍にあつた。

家族仕様で私の部屋よりずっと広い。中庭に面したリビングとダイニングの窓は、大きくて日当たりもいい。

部屋数もあって、私にも一室あててくれた。「ちゃんとましたべツドームで、とても落ち着く。

「オスカーのいない間はコックのマイケルじゃなくて、ミシェルとして過ごすのよ。余計なことは考へる必要はないんだから。羽を伸ばして頂戴。食事も私が用意するから、手伝いも無しよ。あなたはお客様なんだから」

アビゲイルの気遣いをありがたく思う。

「あ、そうそう。御飯は少し遅めでもいい？」

その言葉にも不満はなかつた。

「コックの仕事をしているときも皆の分が終わってからだった。何の問題もないことだ。

「部屋から出るときは少しだけ気をつけてね。うちは出入りが多いし」

彼女の言葉に頷く。自分の部屋で休んでいたつて、注意しなければいけないのは一緒だ。

私は言葉に甘えて、ミシェルとして過ごすことにした。

胸に巻くサポートーからの開放。一言で言つて楽だ。声のトーンにも気を遣わなくていいし。

自分らしく過ごすつて、こういうことを言つんだろうが。自然体は気持ちばかりでなく体の力も抜ける。医師であるアビゲイルが勧めたわけを知る。

周りにいるのは本当の私を知るアビゲイルとプリシラだけ。

プリシラにとつては白衣で胸もなくて声も低めなマイケルも、今の私も同じのようだ。まったく気にしている様子がない。大人と違つて先入観がないせいだろうか。子供のキャパシティーには驚かされる。

彼女の作るパズルに付き合つていると、気が付いたら夕食の時間。食卓を三人で囲む。

美味しい。もちろん、アビゲイルの料理の腕もある。それ以上に誰かと食事を共にするということが私の心を満たした。

あつという間にその日は暮れていき、夜は明けて朝の八時ごろ。身支度を済ませた私は部屋を出る。コットンのシャツにジーンズのラフな格好だ。

廊下を歩いていると、突き当たりのキッチンにアビゲイルの姿が見えた。エプロンをしていて、朝食の準備中なのようだ。

こちらに気付いた彼女は、一瞬顔を固ませた。下げた片方の掌をこちらに向けて、来ては駄目だと示す。立ち止まるときつた声が聞こえてきた。

「いただき！」

この声、ジャザナニア隊長だ。

キッチンに飛び込んできた彼はフライパンの上のベーコンに手を伸ばした。摘み上げて、そのまま口へ放る。

熱かつたようだ。小さく悲鳴を上げて掌に吐き出した。

「ちょっと。行儀が悪いわよ」

「ジャズおじちゃん、汚ーー」

プリシラの声。姉どころか姪つ子までに突つ込まれている。すると彼は息を吹きかけて冷ました後、再び口へ放り込んだ。

「汚くねえぞ」

口をもぐもぐさせながら答える。アビゲイルは無言で布巾を彼に手渡した。指がベーコンの油でざざきになつっていたようだ。彼はぬぐつた手で決まり悪そうに頭を搔いた。

「それよりマイケルは？ 一緒に食うんじゃねえのか」

「病み上がりには気詰まりよ。あなた達と一緒にじゃ。別に食べてもアビゲイルは自然な様子で廊下に通じる扉を閉めた。シャツ姿の隊長の背中が見えなくなつた。それでも私は扉を見つめたまま動けずにいた。

あなた達？ サッキアビゲイルは確かにそう言つたけど。それつ

て……。

突然、何かが割れる音がした。

私の左側。壁を隔てた向こう。ダイニングからだ。続いて床に響く重い音。思わず壁に耳を押し当てる。

「レイバン、何やつてるの」

アビゲイルが呆れた調子で言つている。

「こんな所に植木があるとは……」

焦つた声のレイバンだ。どうも植木鉢でもひっくり返したようだ。「そんな大きな体で、窓から入ろうなんて無理があんなどよー」この声はグレイだ。隊長にレイバンにグレイ。次々の登場に驚く。壁を背にして落ちつかない胸を押さえる。

「グレイ、いつの間に。どこから入つたのだ？」

「オレはちゃんと扉からだぜ。普通が一番目立たねーんだよ」「ボスを除いた幹部勢ぞろい。朝から慌しいことこの上無しだ。

「ちやつちやと食べちやつて。今日の後片付けの当番は？」

アビゲイルが急かす。

「自分だ」

「くまちゃん、お皿洗えるの？」

プリシラの声だ。レイバンに尋ねているようだ。これは大きな出

世というべきか。お化けから熊への華麗なる転身だろうか。

「自分は熊ではないぞ。レイバンだ」

「怖ええ顔近づけんなつて。心の傷になつたらどうすんだ」

ジャズ隊長がプリシラをかばつてゐるようだ。可愛い姪っ子とはいえ、あんまりな言い様だ。

「くまちゃん……」

プリシラの萎んだ声。

「そーだな、プリ。そっくりだ」

グレイが声を殺して笑っている。プリシラが何かを見せているようだ。

「何を笑っているのだ、グレイ」

「確かに頭の毛が逆立つてるとことか。いいな、レイバン。グリズリーに似てるなんて」

ジャズ隊長の声は本当に羨ましそうだ。グリズリーってアラスカとかに生息する巨大な灰色熊のことだ。

グレイが我慢できずに噴き出した。

「もう。片付かないでしょ。早く食べて頂戴」

とうとうアビゲイルの一喝が入る。

ようやく皆が席に着いて食事が始まったようだ。壁の向こうが静かになつた。

「びっくりしたでしょ」

皆が去つた後のこと。私の朝食を用意しながら、アビゲイルは困ったような微笑みを浮かべた。

「ちょっとだけ。皆ここで御飯食べていたんですね」

ずっと気になっていた疑問が一つ解決。しかし、こうこうことだつたとは。

幹部達が食事担当で食堂に姿を現すことはなかつた。グレイがコーヒーを飲みに来るのとレイバンが菓子担当に来るのを別にして。

食事のデリバリーの注文も毎日のことではない。以前のボスのように、外に出かけているんだろうとぼんやり思つていた。

「始めはジャズだけだつたんだけど、後輩だつてグレイを連れてくるようになつて。そのうち、グレイにくつついてレイバンまで来るよになつたのよ。まあ、一人、一人増えようと手間は同じだけど

ね

「大変ですね」

「大丈夫よ。オスカーがいるときは彼が作ってくれるし」

アビゲイルの旦那さん、技術情報部長のオスカー。確かにあの人ならやつてくれそうだ。物腰が柔らかくて優しい感じだし。笑顔でキッチンに立つている姿が想像できる。エプロンも似合いそうだ。

それはさておき。

私はダイニングの窓に目をやつた。窓辺のポトスが收まり悪く傾いたまま植わっている。鉢の周りを新聞紙で囲まれて。あれがきっとレイバンがひっくり返したものだ。

「……でも、窓から入つて来るなんて」

「レイバンのこと？ あれはね、ある意味仕方ないのよ。ずっと前から他には秘密だし。いくらなんでも隊員全員の面倒までは見られないから」

コツク不在の時期が長かつたせいだろう。幹部の食事はアビゲイルが用意していたという。確かに彼女やオスカーだけで、隊全員の食事の面倒を見るなんて無理がある。

だからといつても、レイバンの行動は腑に落ちない。

グレイの言葉を思い出す。あんな大きい人が窓から入ろうとするなんてどう考へても目立ちすぎじゃないだろうか。屋上から降りてくるにしても一階から登るしても。

外から見た、壁に貼り付いた絵を思い描いてしまう。プリシラの表現を借りるなら、蜂蜜大好き、木登り熊さんのイメージだ。

テーブルの隅に置かれた絵本を見つけて、笑いがもれてしまう。そこには「蜂蜜がない」と両手を挙げて駄々をこねている、可愛らしい灰色熊の絵が描いてあつた。

「どうぞ召し上がれ」

声と同じくして、私の前に置かれた皿。

まだ湯気の立つベーコンエッグ。焼き目のついたトースト。みずみずしいサラダに絞りたてのオレンジジュース。美味しいそうだ。

フォークを手にとつて、はたと思いつく。

「アビゲイル、ボスは……」

「気になる?」

アビゲイルは華やかな笑顔で応えた。

「あの人は放つておいて大丈夫よ。あとたつた四日間よ。なんとかするでしょ。それに、あなたのありがたみを知つてもらつには良い機会だわ」

家に迎えたのはそのためもあると彼女は付け足した。ここにいれば、ボスも無理は言わないはずだと。

アビゲイルが隊の皆から姉さんと呼ばれている所以が分かつた。腕を組んだ彼女の笑みが不敵なものに見えてくる。姉御の笑みだ。「だいたい、ご飯だつて誘つてるのに断つてるのよ」

「ああ、それって想像できる。多分こんな感じで言つたんだろう。」「あいつらと飯まで一緒に食えるかって、ですか?」

「そう。分かつてるじゃない。それにプリシラもいるから」落ち着かないということか。それは少しだけ分かる気がする。
「ほら、冷めないうちに」

アビゲイルの言葉ではつとする。作りたての美味さを逃す手はない。ありがたいことに今私は食べる専門なのだし。

私は急いで、だが、しっかりと美味しい朝食を味わった。

54・シークレットなサービス（後書き）

次回予告：休養を終えて明日から仕事復帰。ミシェルを憂鬱にする、

ボスへの挨拶。思い立つて、彼の部屋へ向つたのはいいものの……。

第55話「ボスとミシェル（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチ
ツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

55・ボスとリシリル（前編）

五日間の休暇はあつという間だった。
緊張があるのは、ジャズ隊長やグレイ、レイバンが食事に訪れるときだけ。部屋に隠れて過ごした。

嬉しかったのはブリシラが懐いてくれたことだ。遊んであげているというよりは、彼女に遊んでもらっているような気分だった。アビゲイルの料理はどれも外れがなかつた。優しい味の家庭料理。女三人、そして、最終日にはオスカーを含めて四人囲んだ食卓。賑やかでとても楽しい気分で過ごせた。家族つていいなと思う。しばらく帰つていらないイタリアの家を懐かしく思つた。

そして、自分の部屋に戻つてきたその日の夜、最初に耳にしたのは、廊下を通り過ぎる隊員たちのぼやきだつた。どうもボスの「」機嫌が斜めで、犠牲になっている者たちがいるのだとか。

どうしようもない人だ。そう思いながら扉を閉めた。

とは言え、私を助けてくれた人なのだ。抱き上げて医務室まで連れて行つてくれた。想像してしまい、赤面する。

熱くなつた頬。片手で触れて、はつと我に返つた。なにやつてるんだろう。ローティーンじやあるまいし。

胸元を握り締める。ここには私の支えとなつてくれたものがある。ブルーノさんを始め、私を守つてくれた存在は沢山いるが、その中でも最も……。

心が落ち着いてくる。体の熱は引いていき、私は深く息を吸い込んだ。

明日の朝、ボスに会つたら、最初に五日間厨房を空けてしまつたお詫びと、運んでくれたお礼を言わなければならない。

そして、なにより十年前のことも。

本当はもつと早く話すべきだったとは思う。

例えば、初めて城に来たときとか。でも、他に人もいる中、廊下

でなんてあんまりだし。翌日の中食を用意したときもボスをボスと認識できずに大失敗、それどころじゃなかつた。

チャンスは毎食時あつたけど、酷い目に合わされたりして、タイミングを逃がしてきた。

思い立つたが吉日。今より他に好機なし。ちょうどいい機会なんだろう。

医務室の人人が私の話を聞いていたのだとしたら、なおさらだ。

伝えないわけにはいかない。

……ボスにありがとうって言葉を？

こみ上げてくるのは恥ずかしさ。それと共になんだか憂鬱になつてくる。こんな風では落ち着けない。きっと、このままではろくに眠れもしないだろう。

私は意を決した。思い立つたら即実行。悩んでもやもやしている時間はもつたまない。

すぐさま支度を整える。今からの時間、コックがボスと会うのは不自然だ。しかも今日までは休暇中だし。気は乗らないが、この格好をするしかない。アビゲイルから借りている化粧道具をフル活用。彼女が貸してくれるワンピースは、時としてぎょっとするほど丈が短い。今回のもだと溜め息ながらに身に着ける。お願いしてレギンスを用意してもらつていて良かつた。これがあるとないとでは、大きな違いだ。

髪もつけて、ようやく変身完了。廊下に誰もいないことを確認して、部屋から出る。そして、着いた先。扉を目の前にして息を整え、大きい音でノックする。

「誰だ？」

声を聞いて身が引き締まる。五日しか経っていないのに懐かしくさえ思える、扉越しのボスの低く威圧的な声。

「私です。ミシェルです」

少し間があつて返ってきたのは「入れ」という言葉。

私は扉を開けて、ボスの部屋に入つていった。間接照明だけの薄

暗いが落ち着く部屋。壁から明るい光が漏れていた。部屋を横切るボスの手にはライフルが握られている。私はびくりと立ち止まつた。襟の開いたシャツに用をなさないくらいに緩められた黒いネクタイン。上着を着ておらず、両脇に一挺の拳銃を納めた黒い革製のショルダー・ホルスターが見えている。今日もまた手袋はつけたままだ。彼はこちらを一瞥もせず、真っ直ぐに光の元へ入つていいく。そこは本棚ではないか。扉のようにその一部が開いている。その向こうには白い照明が照らし出す小部屋。隠し部屋だ。

覗くと、ボスが棚の台座にライフルを納めているところだった。そのほかにも、さまざまな種類の銃器が並んでいる。何より驚いたのは、一番奥には特注品と見えるワインセラーがあつたことだ。

それにしても大きい。透明なガラスの向こうに見えるのは何本だろう。高級なワインが収納されていると見て間違いない。

ボスの宝の部屋ということだろうか。それを隠すための本棚だったのかと納得する。書物とボス、合わない組み合わせだとは思つていたけれど。

本棚を元の位置に戻すと、彼は私の前を通り過ぎ、テーブルに広げた道具を片付け始めた。クロスや薬品の瓶、スプレー缶、ブラシが付いた細い棒など見慣れないものばかりだ。

工具箱のようなものの中にしまい、それを扉つきの棚の中に入れて閉める。

ようやくボスは私を見た。

「何の用だ？」

改めて尋ねられると言葉に詰まる。私は視線を泳がせ、棚に納められた本『世界の料理とその起源』を求めた。あの辺りだ。この距離ではタイトルも読み取れなかつたが。

「今日は必要ねえ。これからは週に二日でいい。日にはまた前もつて言つ」

ボスの言葉に啞然として彼を見やる。

「それじゃあ不服か？」

問いかけに首を横に振る。とんでもない。

それなら無理にはならない。きっともう倒れるなんてことはないだろう。だけど、ボスが妥協したなんて信じられなかつた。

「でも、それだとボスが……」

眠れなくなるんじゃないだろうか。私がいたつて、一度も起きずに済むことは滅多にないのに。

「お前はコッソクだらうが。勤めを果たしてあいつを黙りせろ」

苛立たし氣に言つ。

あいつって誰のことだらう。アビゲイルのことだらうか。続く言葉を待つたが、彼はそれ以上何も言わなかつた。

ガラス扉の棚に近付くと琥珀色の液体の入つた瓶とグラスを取り出す。グラスの形からして瓶の中身はブランデーだ。
私に背を向けてソファに座り、グラスに注ぐ。話をする態度ではない。こうなつては彼の背中しか見えないのだから。

「用がないならさつさと帰れ」

吐き捨てられる言葉に、ようやく思い出す。ここに来た理由。それを果たさずして帰ることなんてできない。私は彼の横まで近づいた。

顔を上げることなく、テーブルに置かれた木箱の中から何やら取り出している。先端をカットして口に咥え、マッチで火をつける。葉巻だ。

独特の強い香りが漂う。煙草にしろ葉巻にしろ、こういう匂いはあまり好きじゃない。それでもしばらくの間我慢するしかない。

「ボス、医務室での話なんですが。十年前の……」

「そんな昔のことは覚えてねえな」

言いかけた傍から割り込む。葉巻を口にしたまま、ソファに深く座りなおす。私なんていてもいなくても同じだ。

「……………」

私は汗ばんできた掌をぎゅっと握り締めながら、呟いた。

十年前の出来事。私には大きな転機だつた。良い意味でも悪い意

味でも、それまでの人生が一変したのだ。

だから、ボスも覚えているはずだと思い込んでいた。それは私の傲慢だったのだろう。

マスティマのボスにとっては、数ある任務の一つに過ぎない。いつも危険と隣り合わせ。巻き込まれる一般人なんて珍しくないのかかもしれない。

私は気取られないように静かに息を吐き出す。

ボスの姿勢、やはり私の話なんて聞くつもりはないようだ。気持ちを押し付けられるのはごめんだと言わんばかりだ。

だけど、あの人があなたのことをどう思つていても変わらない。

私がマスティマに助けられ、命を救われたという事実は。

私は自分の思うように志を貫くだけだ。相手が覚えていないなんて大した問題ではない。見返りを求めているわけではないのだから。さて、次の話。これは部下から上司への礼儀。気乗りはしないが、先に進まなければ。

「明日から勤務に戻ります。五日間もお休みを頂いて申し訳ありませんでした。それから……倒れたとき運んでくださったそうで、ありがとうございます」

「そんなことはどうでもいい」

さつきと同じ。こちらを見ようともしない。

私が倒れようが、命を落としているが構わないということなのだろう。ただの使い捨てのコックに過ぎない。

抱き上げて医務室に連れて行つたのだって、アビゲイルに言つてのこと。そうでなければ捨て置かれたに違ひない。伝家の宝刀。アビゲイルはそう言つたけれど、私はそんな物を持つているわけではないのだ。

顔が熱い。ボスがこっちを見なくて良かつた。こんな自分の顔なんて見せたくない。

「それよりお前、ちゃんと飯食つてんのか」「は……？」

振り返りざまのボスの言葉に私は慌てた。

顔の熱が引いていないのに、このタイミングで振り向くなんて思つてもいなかつた。それに驚きすぎて意味も分からない。

彼は葉巻を咥えたまま、じっと私を見つめている。

そんな風に見ないで何か言葉を続けてください、ボス。

固まってしまった体に反して、頭だけが回転する。どうやってこの場を逃れるべきか、それだけを考えていた。

55 ボスとミシェル（前編）（後書き）

次回予告：挨拶のはずが、なんだかとんでもないことに。ボスの部屋を訪れたアビゲイルが、二人を目撃して……。

第56話「ボスとミシェル（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

しばらく続いた、いたたまれぬ沈黙。

「そんななりじや銃だつて扱えねえ。武術の威力も半減だ」
ようやくボスが口を開いた。

時間があつたお陰で、私は冷静さを取り戻していた。体格の二とを言つているのだと理解する。

余計なお世話だ。自分でだつて分かつてている。

そりやアビゲイルくらい背丈があつて、おまけに綺麗だつたら言うことない。だけど、天の節理つていうか、努力ではどうにもならないこともあるのだ。

「私の拳法はスピード重視。一度で駄目なら数撃てばいいんです。
ほつといしてください」

私は、ほとんどふて腐れて言つた。

ボスの視線が更なる凄みを帯びた。何でか分からなが彼を怒らせてしまつたらしい。

「人の言葉に口答えするな、この野郎」

私は女だから野郎なんかじゃない。心の中で反発を強める。

葉巻を置いて立ち上がるボスに、ソファやテーブルが邪魔だと判断し、後ろに下がつた。足首がぐにやりと曲がる。ああ、もうハイヒールなんか脱いじやえ。私は靴を脱いで、その場で構える。ゆっくりと彼は近づいてくる。右手で左脇の拳銃を抜こうとしている。怒りに理性をなくしたんだろうか。あんなものを使われたら、怪我なんかじやすまない。こうなつたら自衛手段に移るしかない。私は右手を狙つて蹴りだした。ワンピースが翻る。生地の硬いズボンよりはずつと動きやすい。

左手でロックされる。その動きは読めていた。足を下しげまこう度は脛を狙つて打ち込む。今度はこちらの動きが読まれていたようだ。後ろにかわされた。

距離をとられれば、体術しかない私にとつて圧倒的に不利になる。私は懐に飛び込み、銃^{グリップ}把に手をかけようとするところに、拳を叩き込んだ。直撃だ。

だが、その感触に思わず手を引っ込める。拳に痛みが走る。私が打つたのは、ボスの手などではなかつた。左手にした黒い銃の銃身だ。彼の両脇には拳銃が固定されたままだ。ということは、どこかに隠し持つてい物だ。

痛みから一瞬動きが止まつた隙にボスは私を押し倒した。起き上がる暇もなく、覆いかぶさつてくる。左手の銃を突き出して。

大ぶりの銃だ。一見自動拳銃にも見えるが、口径の大きさからして銃というより砲だ。近くで見るのは初めてだが、これは例の衝撃銃、ショック・パルス・ランチャーに違いない。

「おい、手数が多くれば勝てるんじやなかつたのか？」

見下ろしてのこの言いよう。細められた目。この状況を楽しんでいるようにも見える。私は顔を背けた。

胸に銃が押し当てられる。この距離で撃たれれば、傷はできなくとも内臓へのダメージは相当なものだ。臓器損傷、心臓が止まることがたつてありえるはずだ。

こんな風に力ずくで屈服させらるなんて。私は自由になる左手で床をまさぐつた。目当ての物について行き着く。ボスはまだ気付いていない。

「どうする。許しでも請うか」

まったくもつて余裕のある声。憎たらしい限りだ。

誰が許しなんて請うもんですか。私は左手の物を握り締めた。と、その時、別の声が割つて入つた。

「ディヴィッド、大丈夫なの？」

声の主へとボスが振り返る。私もまた彼の肩越しに見つけていた。アビゲイルだ。白衣を着た彼女がそれこそ心配そうな顔つきで立っていた。床に倒れている私と目が合つ。

「あら、お邪魔だった？」

彼女の言葉に慌てる。一体どんな解釈をしたんだろう。

「アビゲイル、なんでこんな所にいる」

ボスは立ち上がりながら、しかめつ面で言つ。

「何度もノックしたのよ。でも返事がないから、中で倒れでもして
るんじゃないかと思つて。お取り込み中で気付かなかつたのね。鍵
くらいかけてくれないと」

医者の特権を振りかざした上、思いつきり誤解している。

そりやあ、ぱっと見、ボスが私を押し倒しているように見えなく
もないけど。いや、実際に押し倒されたのだけど。なんて言うか…
…。これは、やっぱり誤解されても仕方ない状況なんだろうか。

「そんなんじやねえ」

ボスはそう言つているが、彼女は聞いていないようだ。クリップ
ボードに挟んだ書類を差し出している。

「本社から急ぎで回してくれつていう書類があつてね。どうしても
今夜中にボスのサインが必要なのよ」

ペンも渡そうとしている。ボスは煮え切らない顔のまま、受け取
ると署名した。そうしなければ、きっと膠着状態になると判断した
のだろう。

アビゲイルは満足そうにボードを受け取つた。そして私に目を落
とす。

「まあ、ミシェル。そんな物を持つて、どうするつもりだったの？」
ボスの視線もまた降りてきた。私が手にした物を見て眉を寄せる。
慌てて後ろ手にして、それを隠した。

握り締めたハイヒール。細いヒールは十分武器になりえる。砂袋
を貫通するくらいの威力はある。悪くすれば流血沙汰になつていた
だろう。

アビゲイルは近付いてきて、私に手をさし伸ばした。助けを借り
て立ち上がる。ずれかけた髪を直して整えてくれる。私は気が進ま
ないままにハイヒールを履いた。

彼女の手が埃を払ってくれた。

「この子は病み上がりなのよ。こんな乱暴なことしてどうするの」
彼女の言葉にほっとする。アビゲイルはやっぱり私の味方だ。信頼に値する優しい上司だ。

「可愛がるのなら、床なんかじゃなく、ベッドを使ってあげなさい」
続く言葉に啞然とする。何を言っているのだ、この人は。
ボスはといふと声もなく固まっていた。当然だ。一人ともそんなつもりは全くなかつたのに。

「おい、アビゲイル」

呪縛の解けたボスは弁解でもするつもりだったのだろう。彼女を呼び止めようと声をかける。

だが、その頃には私を引っ張るようにして部屋を出るといひだつた。

ボスの声は届いていないのに、何の迷いもなく扉をばたんと閉じる。廊下に出た私たちは歩き出しながら、互いに顔を見合わせた。同時に彼女はくすくすと笑い出す。

「今の人見た？ あんな風に動搖するなんて久しぶりだわ。あ面白かった」

「アビゲイル、分かつて言つてたんですか？」

私は戸惑いながら問いかける。

「途中からね。今晚来て良かつた。ばれずにサインもらえたわ」「嬉しそうにボードを掲げる。何か決裁を貰うのが難しい書類だつたのだろう。私たちのごたごたを利用するなんて、小悪魔だ。

「それにしても反撃しようとするなんて。悪くしたら、あの銃で撃たれて、また一時お休みになるところだつたのよ。私が間に合つて良かつたわ」

あの時は必死でそれが一番だと思つてたけれど。反撃が成功していたら、ボスの逆鱗に触れていただろうし、不成功なら撃たれていかもしない。どちらにしても、きっと良い結果にはならなかつた。

私はほっと胸をなでおろす。アビゲイルが来てくれて助かつた。

これ以上仕事を奪われれば、勘は鈍るだらうし、何より私を支えてくれる人たちに申し訳が立たない。

「本当ですよね。助かりました」

「私もあなたのお陰でサインもられたんだから、おあいこねそう言つて笑みを浮かべる。

「でも、何を言つてボスを怒らせたの？」

彼女の問いに首を横に振る。何がきっかけだつたのか、まるで分からぬ。いきなり怒り出したように思えるけど。

アビゲイルの誘導で先ほどの出来事を思い返しながら話す。

「それは、あなたが軽くて瘦せてるのを心配したんじゃないの？」
彼女の指摘にまさかと思う。ボスが私を案じるなんて。それこそありえないことだ。

「そんなことないです。チビだから、自分の身を守ることなんか無理だつて言いたかったんですよ」

悔しいけれど自分でチビを強調して言つ。あの人は私をチビ口ックだつて言つていたし。私を馬鹿にしているに違ひなかつた。

「そうかしらね」

アビゲイルはそう言つていたけれど、私はどうしても彼女のようには思えない。

医務室に戻るアビゲイルと別れ、自分の部屋に帰つてきた。
なんだか大変な一日の終わりだつたが、一応挨拶は済んだ。今晩はゆっくり休んで明日に備えよつ。

服を脱いで浴室へ向う。

洗面所の鏡に映つた下着姿の自分の姿を見て、あつかんバーをしてみる。チビで何が悪いつていうの。何か迷惑でもかけたかつとう。

私は悪態をつきながら裸になつて、バスタブの中でシャワーを浴び始める。

そうすると、全てがなかつたことのように思われた。心も落ち着く

いてくる。嫌なことはお湯と一緒に流れていったかのようだつた。
これなら、明日の朝から気持ちよく仕事ができる。私はそう確信
して、ほっとした気分になつた。

56 ポスとシル（後編）（後書き）

お陰さまで連載一周年。感謝を込めて、次回掲載は番外編を予定しています。

内容は短編でシナリオ書式のコメーティです。

【番外編2】「実録、幹部会議ー（2）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランギングの文字をポチッとお願いします

【番外編2】 実録、幹部会議ー（2）

幹部会議の中休み。ミシェルはコーヒーを準備中。

ボスとアビゲイルは一時退席しており、会議室にいる幹部はジャザナイア隊長にグレイ、レイバン。

ジャズ隊長はテーブルに向い、白紙を前に唸つてている。ペンを耳に乗せ、腕を組んで考え込んでいる様子。

ミシェル「隊長、どうぞコーヒーです。休憩中も仕事ですか？」

コーヒーをジャズの前に置くミシェル。

ジャズ「来月が部隊報の発行月だからな。構成を考えてんだ」

ミシェル「まさか、また動物ネタとかやらないですよね」（汗）

ジャズ「うーん。そのネタ、大反響だつたからなあ。でも、さすがに前回と同じじゃなあ」

グレイ「面白くねーよな」

レイバン「同感だ」

いつの間にやら隊長の傍にグレイとレイバンが寄つてきている。

ミシェル「同じ例えるでも、もつと違つたものが」（無難な物をお願いします）

ジャズ「そうだなあ」

レイバン「自分が提案を。隊長、テレビや映画に出てくる集団に例えるというのはどうだろ?」

グレイ「面白そーだな」

レイバン「自分が思うに……」

レイバンの言葉を遮るジャズ隊長。

ジャズ「『特攻野郎Aチーム』だろ!」

他の三人「えー?」

ジャズ「ハンニバル大佐がボスでな、コングがレイバン、イエローモンキーがグレイで、おれがフェイスマンだ。ブラジャーからミサイルまで何でも揃えてみせるぜってな」

ミシェル（隊長、そのセリフが言いたかっただけじゃ……）

ジャズ「あいつらのパワフルさは、おれたちに通じるものがあるんじゃねえか」

グレイが片手を上げてアピール。

グレイ「オレは日本の漫画でいくぜー。その名も『ケロロ軍曹』だ」

レイバン「ケロケロだと？ なんだ、それは」

グレイ「カエル型宇宙人の出てくる話で……」

説明を始めるグレイだが、日本の、それも漫画に疎いレイバンやジャズ隊長は付いていけない。

グレイ「ケロロがジャズ隊長で、いつも武器持つてるギロロがボス。存在感のないドロロがレイバンで、マスクットキャラのタママはオレか？ クルルはオスカーかなー」

レイバン「存在感がない？ 聞き捨てならんぞ、グレイ」

グレイ「ホントーのことじやん」

ジャズ「グレイ、部隊報向けじゃねえな。カエル型宇宙人って、それ聞いただけでボスのお冠決定だぜ」

レイバン「だから自分の……」

グレイ「ミックはどうなんだ。何か案はねーのか」

ミシェル「レイバンが言いたそうですけど」

ちつと舌打ちするグレイ。やつと自分の番が来たと得意げに話し出すレイバン。

レイバン「自分が思うのは、『ミッション・インポッシブル』だ。インポッシブル・ミッション・フォース（IMF）こそ自分たちの姿だ」

グレイ「トム・クルーズが演つてたアレか。インパクトねー」

ジャズ「ありきたりかもな」

二人とも食いつきがいまいち。

グレイ「やっぱり、ミック、お前の案言つてみろ」

ミシェル「そんな急に言われても」（困）

グレイ 「映画でもドラマでもアニメとかでもいーんだからな
グレイの猛ブツシューにたじたじのミシェル。

ミシェル「じゃあ、日本の……サザエさんとか」

ジャズ 「サザエさん？ 海鮮料理番組か？」

ミシェル「マステイマはある意味、アットホーム家庭的だと思います」

グレイ 「キャラ設定は？」

ミシェル「えっと……ジャズ隊長が行動派の長男カツオ、グレイ
がしつかり者の次女ワカメ。レイバンが甘えん坊のタラちゃん
レイバン「甘えん坊……」（惱）

ジャズ 「なんだ、ファミリーーデラマか」

グレイ 「じゃあ、ボスつて、まさか」

ミシェル「雷親父の波平さん……？」（汗）

爆笑するグレイ。ジャズとレイバンは知らないため、訳が分かつて
いない。

グレイ 「インパクトはあるけど、他の連中は知らぬ一みてーだ
な」

ジャズ 「インパクトこそが大事だ。よし、それで行くぞ。その
アニメの注釈入れてな。絵のうまい奴にキャラも描いてもらおう」

ミシェル「え？」（大汗）

グレイ 「サザエさんって日本を代表するアニメだもんな。長寿
番組らしいし」

ジャズ 「そりや、あやかりてえな」

ミシェルの拒否の言葉もむなしく、マステイマの部内報に掲載され
ることとなつた、マステイマ幹部をサザエさんキャラに例えたら、

By某コック。はてさてその反響は？

ボス 「こんなつるつる頭が俺か？」

例の「ことく」呼び出しを食らつたミシェルは沈黙。

ボス 「なんか言い訳あるか？」

半ばヤケになつた彼女の答えは……

ミシェル「波平さんはつるつる頭じゃありません。毛が一本生え
てます」

ボス「そんな問題じゃねえ！」（怒）

ああ、今日もまたマステイマの城に衝撃銃の音が鳴り響く。
日曜日の定番アニメであるザザエさん。その魅力もマステイマのボ
ス、ディヴィッドには伝わらなかつたようだ。
部隊報にはもう一度と関わるまいと心に決めたミシェルでありまし
た。

【番外編2】 実録、幹部会議ー（2）（後書き）

次回予告：なにかとストレスが多いマスティマの「」の仕事。ニ
ショルはリラックス・ポイントを見つけたのだが……。

第57話「フェアリー・テイル」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチ
ツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

57・ファアリー・テイル

マスティマのコックの仕事は緊張の連続だ。トップがトップだけに気を抜けないことばかりだ。

だから、時には息抜きも必要。そうでなければ、とても続かないだろう。

リラックスできる場所。そういう隠れた、とつておきの場所を見つけた。

それは夜を迎えた城の屋根の上。

よじ登るには踏み台が必要だ。食堂からパイプ椅子を持ちだしてくる。そして、床にすえて高い位置にある窓から外へ出る。普通の建物なら五、六階にならうかという高さだ。

とても綺麗とは言えない屋根の上。白衣に汚れが付かないよう、気を配らなければならない。

窓から出て、内側からこぼれる光を頼りに、傾斜のある屋根の上をそろそろと進む。

マスティマの城の内部はきちんと整備されたもの。だが、外側に至つてはそれも怪しそうだ。体重をかけようとすると、しなる場所がある。

前にアビゲイルから聞いた、対衝撃仕様になつていてるはずの天井。それは内側からの衝撃のことなのだろう。外からを想定した対策なら、天井より屋根に特別仕様を組み込むはずだし。

この薄い明かりの中でも所々痛んでるのが分かる。踏み抜いて下の部屋の床まで落下するなんてことも十分ありえそうだ。

最適な位置を確保。ポケットから、折りたたんだ茶色の包装紙を取り出して広げる。その上に寝そべり、見上げる空には満天の星。

イギリスの天気は不安定で、晴れであることは多くない。だからこそ、貴重で大事にしたい時間なのだ。

遮るもののないこの場所。星に手が届きそうだ。宇宙の一部になつた気分だ。嫌なことがあつてもここでなら、全て忘れてしまえる。そんな所なのだ。

世界は広い。私なんてちっぽけな存在だ。私の悩みもまた小さいものだ。心を曇らせる必要なんてない。そんな風に自分の世界に浸りきついていた私を突然、呼び戻すものがいた。

「そんな所で何してんだ？」

窓から覗く一つの顔。私は飛び起きた。ボスではないか。慌てる私の足元がずるりと滑った。壊れた欠片が斜面を転がっていく。

反射的に掴んだのは下敷きにしていた包装紙。何の頼りにもならない。

私は悲鳴を上げた。甲高い、もろに女の悲鳴だ。屋根を一メートルほど滑り落ちてやっと止まる。足を伸ばせば端に届くくらいの位置だ。

きつと落ちたものが誰かにあたつたのだろう。下のほうから「痛い」と声が響いてきた。

私はそれどころではなく、変な汗をかき続けていた。ゆっくりと四つん這いでボスのいる窓へと戻る。彼は床へと降りてくる私を奇妙なものでも見る目つきで見つめていた。

「ここ、絶好の夜空展望ポイントなんですよ」

私は埃をはたきながら言つ。

彼の訝しげな顔つきは変わらず、私と窓の外を交互に見ていく。「他の人には言わないでください。本当は秘密にしておきたかったんです」

「変な奴だな」

変な奴つて。そんな言葉で切り捨てられる私つて一体。肩を落とす私に背を向けて、ボスは去つていった。何の用事もないのなら、ほつといてくれたらよかつたのに。

おもむろに落下物の被害者を思い出す。大きな怪我になつていなかといいけれど。

私は、その場へ向づべく駆け出していた。

現場にたどり着く前に、騒ぎが広がっていることを知つた。

私の悲鳴は静かな夜を打ち破り、辺り一面に響き渡つたらしい。城の玄関口であるロビーには人だかり。皆口々に喋つてゐる。

奇妙な声を聞いたとか。それも女の声。でもアビー・姐さんねえのものじやないらしい。だつたら誰の声なんだ。ボスの愛人か。いや、さつきボスが廊下を歩いていたから愛人は来ていない筈はずだとか。

「何か面白れーことがあつたのか?」

背を向けたソファの肘置きから一本の腕が伸びた。欠伸混じりの声。グレイだ。

彼は体を起こしながら、半分潰れた目で辺りを見渡した。隊員たちの説明に、また欠伸を一つ。

「幻聴じやねーのか。オレは聞いてねーぞ」

ソファの背に顎を乗せ、気だるげに言つ。

それはきっとあなたが寝ていたからだと思つ。皆も同意見のよう

で、彼の言葉は空氣のごとくスルーされた。

「何の騒ぎだ、皆集まつて」

とうとうジャザナニア隊長まで出てきた。

皆はさつきの話を繰り返し訴える。隊長は頭を搔きながら、話を聞いていた。

「女の悲鳴？ それって幽霊とか」

隊長の言葉にしんと皆が静まり返る。

この頃になつてグレイは完全に目が覚めたようだ。にやつと笑いを浮かべている。

「そうそう、よくも私を捨てたわねつて。隊長を恨んでる女の生靈かもしけねー」

「よせよ、グレイ」

そう言つジヤズ隊長の顔は引きつっている。どうも心当たりがありそうな感じだ。

「女が潜んでいるのかもしけん。徹底的に城の中を調べてだな……まつとうなことを言い出したのは、後からやつてきたレイバンだ。だが、そんなことをされでは困る。もし、女であることがばれるようなことになれば、ボスはきっと私を首にするだろう。」

「そんなことは無意味よ」

そう言つて、私の後ろから現れたのはアビゲイルだ。こちらに田配せず。悲鳴の主が私だと分かつてくれているようだ。彼女の助け舟にほつとする。

「ねえ、聞いたことない？ 古い城には妖精が棲むつて話。バンシーって言つてね、奇声を上げて人を驚かすの」

隊長の幽霊話とあまり変わらない。だが、皆は信じよつとしている。

イギリスは妖精の宝庫である。姿のない女の悲鳴なんてあまりに不可解だ。分からぬものにはそれなりにでも答えを求めるもの。それに言つているのは科学者でもあるはずの医師、それもアビゲイルだ。

「そのバンシーというのは物も投げるのか」

真顔で頭を撫でながら、彼女に尋ねているのはレイバンだ。よく見ると彼の頭には小さなたんこぶができているではないか。

私の全身から冷や汗が噴出した。よりもよつて彼に当たるなんて。

心の中で両手を組み合わせて詫びる。それにしても大きな怪我になつていなくて良かつた。

レイバンのこぶを覗き込んだアビゲイルは、手をひらひらさせて笑つてごまかしている。冷やして安静にしていたほうが良いと、医者らしいことを言つて話をはぐらかす。

ああ、心臓に悪い。私は解散する人たちに混じつて、ロビーを後にした。

それもこれもボスのせいだ。急に声をかけたりするから。私の怒りは彼へと向く。

バンシーの正体はボスに苛められた女ですとでも言ってやりたいくらいだ。

57・フェアリー・テイル（後書き）

次回予告…ミシェルのとつておきの場所。彼女の聖域を齎かすのは、やつぱりこの人で……？

第58話「リノベーション」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

数日後、悪戯好きな妖精話も下火になつた頃。

夜、廊下を歩いていると、例の窓から空を見上げるボスの姿を見かけた。思わず角に隠れて様子を窺う。

窓を開けた彼は、窓枠に手をかけた。私だと椅子がないととても上れない位置だが、問題ないらしい。あの身長と足の長さだ。よじ登り、窓の外へ出ようとした彼を通りかかったレイバンが見つけた。

窓からはみ出でている「一トを引っ張り、彼を留めている。

「危険です、ボス」

「邪魔すんな」

ボスは振り返り、「一トを引っ張り返す。

「このレイバン、ボスのお命に関わることはないの身に代えましても……」

飛びついで下そとジャンプするレイバンの顔面をボスの足が襲う。

額の真ん中に足の裏がクリティカルヒットだ。

「あいつに行けて俺に行けねえ訳ねえだろうが」

ボスの言いように、私は我慢できずに手の内でぶつと噴出した。その人が私に対抗意識を燃やしているなんて。

チビでもいいこともあるものだ。ボスの体重では、恐らく壊れかけの屋根を安全に渡ることは困難だ。

意味の分かつていなないレイバンだったが、ボスを助けようとする気持ちは本物だ。額の足型を氣にもしないで、必死で止めている。その様子にボスも諦めたようだ。下りてきた。

「アビゲイルを呼んで来い」

あからさまに安堵の表情を浮かべるレイバンへと命令する。

「修繕費が要る」

修繕費？ 私が壊してしまった屋根のことを言っているのだろうか。だけど、それはアビゲイルだつて知っているはずだ。怪我をしたレイバンだつて見ているから。

レイバンが固まっている。訳が分かつていなのは彼も同じのようだ。

ボスはコートの内側に手を回し、銃を取り出した。あの大きさ、普通の拳銃ではない。

悪い予感はすぐに実現した。

銃口の先には開け放たれたままの窓。的も見ずに手を上げた状態で、ボスは引き金を引いた。

派手な爆発音がして屋根が吹っ飛んだ。向こうの通路から大量の埃が流れ込んでくる。

なるほど、それで修繕費か。……って、納得している場合ではない。

ただならぬ物音に駆けつけてくる隊員たち。その中にはアビゲイルもいた。彼女は城の惨状を見て言葉を無くした。しばらく半開きだつた唇から漏れたのは、深い深い溜め息。

「衝撃銃のリミッターを勝手に外したのね」

そして、さらに彼女の血の気を引かせたのは「！」にバルコニーを作る」との横暴なボスの言葉だつた。

「ただでさえ赤字ぎりぎりなのに。本社の監査があるのに」

呪文のように繰り返している。気の毒だ。

それにしてボスは無茶をする。組織の城を壊すなんて、一体どういう神経してるんだ。

「コツクから聞いた。星空はここからの眺めが一番だとな」

ああ、ボス、なんてこと言つんですか。

隊員の一人が私を見つけ、指差す。皆の視線が一斉に集中する。私のせいだつて言うの？ そんなの酷すぎる。私だつてお気に入りの場所を壊された被害者なのに……。

結局、修繕費は経費で落ちることになつた。

だけど、それだけではとてもバルコニーなんて作れない。そこで、バスは作業を隊員たちにやらせる作戦に出た。修繕費を資材に当て、あとは彼らに作らせようというのだ。

地上五、六階の高さなのに素人がバルコニーなんか作つて安全だろうか。

だが、それは大丈夫だった。

人数がいれば中には建築に秀でたものもいるものだ。エリート集団のマスティマなら、なおさら高確率だ。

技術情報部が図面を引き、実行部隊が工事に当たる。鮮やかな連携プレー。

休憩中の飲み物やお菓子を現場に届けながら、舌を巻く。マスティマの制服を着ていなければ、本職の人たちと言つても通りそうだ。動きに無駄がない。

正規の業者よりは日にちはかかつたというが、やがて、立派なバルコニーが完成した。折りたたみ式の透明のルーフまで付いている。さらに、数段高い場所にはバスのプライベートゾーンまで完備。リクライニング・チェア付きだ。バスは私物の望遠鏡なんか持ち込んでご満悦の様子だ。

私も平らな場所で安全に星空を眺められるようになつた。

大喜びなのはジャザニア隊長だ。雨の日だつてルーフを広げてバーべキューができると。すぐに通販でバーべキューセットを注文したらしい。

グレイも肌を焼くにはいいかもと隊長にデッキチェアの購入を勧めていたし。というか、彼の場合は昼寝にはもつてこいということだろう。

レイバンさえも興味津々だ。造設中から度々現場を覗きに来ていた。

溜め息をつくのはアビゲイルだけ。彼女は監査のときにバルコニーをどうしようかと悩んでいた。これはもう見つからないように隠

すしかないと。

あんな大きな物、稀代のマジシャンでもない限り、そんなことは無理なのに真剣に考えている。

洗濯物干し専用のものだと言いくるめるかとか。……それにしても贅沢すぎるし。

出入り口を壁のように塗り固めるとかとか。……そんなことをしたら使えないと思つ。

「ああ、もう。ボスの衝撃銃で吹っ飛ばそうかしら」

煮詰まつた彼女はそんなことまで言い出す。そんなことをしたら、後で怖いことになるのは間違ひ無しだ。ボスにしても本社にしても。

「日にちはまだあるんでしょう。一緒に考えますよ、いい方法」

思わず声をかける。私にできるのはそれくらいだ。

それでも、彼女は良い協力者が出てきたと喜んでくれた。

一人では無理でも二人なら何とかできることがあるはずだ。私た

ちは一緒に知恵を絞つた。

58 リノベーション（後書き）

次回予告・マステイマでクリスマス・パーティ開催が決定？ ロンドンまで買い物に出てきたミシルは……。

第59話「イン・ロンדון」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

もう十一月。間もなく今年も終わる。
今日は半日休暇を貰つてロンドンの街に出てきた。一枚しか持つ
ていないスーツを着て。

相変わらず慣れず、違和感は変わらない。それに中に着込みすぎ
て動きにくい。男物のコートを一枚くらい買っておけばよかつた。
だが、クリスマスマード一色の街に、気分も高揚してそんなこと
はどうでもよくなつてくる。

なんだかんだ言いながら、一年あつという間だつた。特にマステ
イマに入つてからは。

忙しく余裕もなかつた。周りの人たちに助けられて、なんとか今
日まで頑張つてこられた。

だから、アビゲイルから聞いた、皆の労をねぎらつてのクリスマ
ス・パーティ開催には大賛成だつた。無礼講の上、なんとプレゼント
ト交換タイム付きだ。

私はゴックとして、皆の好きな食べ物を聞いて用意するつもりだ
った。これが私からのプレゼントだ。だけど、それ以外に交換する
物を用意しなければならない。

だから、デイケンズ本社へ出向く用の隊員の便を借りて、ロンド
ンまでやつてきたのだ。

何にするべきか悩んでしまう。雑貨屋を何軒かぐぐり、溜め息を
つく。これだというものが見つからない。

城に帰る便に乗せてもらうには、本社まで戻らなければならぬ。
移動の時間を差し引くともう時間がない。

どうしよう。また改めて出てくるしかないだろうか。

諦めかけた私の目にショーウィンドーから覗く射的が留まつた。
前に城の地下射撃場で目にしたようなものの小型版だ。見るとそ
の店はオモチャ屋ではないか。私は急いで店内に入った。

的とオモチャの拳銃。箱もあつた。田覧まし時計らしい。箱の脇に書かれた説明書きを読む。

（本職もハマる？ 究極の田覧まし時計。銃での的を撃つとアラームが止まります）とある。

面白そうだ。だいたいこんな風な物が合いそうだとしたら、グレイだらうか。いや、それよりも……。

私ははつと腕時計を見やつた。やばい。時間がない。もうこれに決めた。

会計を済ませて包装をしてもうう。箱を抱えて、本社に一直線だ。地下鉄に乗るために駅に走る。

電車に乗っている途中、持参していた布のバッグにその箱を突っ込んだ。

今日は食材を求めて出てきたのであって、プレゼントを買いに来たのではない。表向きはそのなのだから。

一応先に買つていたパスタを上に置きなおす。これで外からは入つているものが見えない。

私は改札を出ると、大急ぎで街を駆け抜け、本社ビルのエントランスの自動ドアをくぐつた。

受付で止められて確認を受ける。

姓名と生年月日、それに所属部署名、IDコードまで求められる。時間がないのに丁寧すぎるほどだ。微笑み溢れる受付嬢の穏やかな語り口にやきもきする。その場で駆け足したい気分だ。

手を差し出すよう言われ、甲に押された特殊インクのスタンプに光を当てる。浮かび上がったバーコードを読み込んでパソコンで命令。どこかへ電話をかけた受付嬢は申し訳なさそうに言った。

「へりはもう出てしまつたそうです」

案じていたことが現実になつた。でも、私のせいだ。時間厳守だと念を押されていたのに。私は落ち込んで首を垂らした。

マスティマの城は公共の乗り物を使って行けるような場所にはな

い。

もともと住所なんて存在しないのだ。詳しい場所だつて分からないから、タクシーに乗っても運転手に伝える自信がない。

第一、遠すぎる。それに一般の車両を敷地内に入れたりしたら、後できつと面倒なことになる。

どうしようかと思案に暮れる私に、受付嬢は明るく声をかけた。
「一時間半後に出てる便がありますよ。それに乗られたらいかがですか」

思わず、本当ですかと聞き返してしまった。

マスティマとディケンズ本社の定期便は朝の一便だけだ。悪くすれば、翌日まで足止めを食らうことも覚悟しなければならなかつた。こんなに早く次の便があるなんてラッキーだ。これで無事に城に帰れる。

受付嬢に時間つぶしの場所を尋ねた。最上階にティー・ラウンジがあるとのことだったので、エレベーターで向う。

綺麗な場所だ。とても社内とは思えないほど。

外に面した壁は全面ガラス張りで見晴らしがいい。壯觀にさえ思える立ち並ぶビル群。下を覗くと田がくらむ。米粒のような人と、ミニカーようさらに小さい車。

私は景色の良い窓際の席を陣取つた。利用する人もまばらで静かだ。

セルフサービスのコーヒーを紙コップに注いで席に戻る。まずは一口。あまり美味しくないけど、ただで飲ませてもらつてるもの。贅沢は言えない。

私は常備しているメモ帳を鞄から取り出した。パーティのことでも考えよつ。

まずはメニューから。城に戻つたら、隊員たちにアンケートをとつて食べたい物を尋ねなければ。一人一品と考えて、何品になるだろつ。

アビゲイルは城にいる隊員のほとんどが集まると言つていたけれど

ど、はつきりとした人数はその日まで分からないらしい。となれば、やつぱりピュッフェ形式にしたほうがいいかもしない。

場所がどこになるかでテーブルの配置が変わる。必然的に置ける料理の数も決まつてくる。これは相談しなければ何も決まらない。

私一人ではどうしようもないから、とりあえずこの件は置いとこう。私は早々にメモ帳を閉じた。

そして新たに取り出したのはバッグの奥に入れた本だ。古本屋で見つけたもので、あまり状態が良くはないが、レア物だ。

「世界の料理とその起源」の著者が書いた第一弾「料理の歴史とその変遷」。第一弾が一品一品に的を絞つて書かれていたのにに対して、この本は大昔の料理から現代の料理までの移り変わりを辿つていいく形だ。

時代と共に、土地土地で影響を受けあつて生まれる料理の流れは、まさに系統図のようだ。

仕事に戻ればゆっくり読む暇はないだらう。今こそがチャンスだ。無意識に声を出して読んでしまうのを防ぐために口を手で覆う。私はわくわくしながら本のページをめくった。

59・イン・ロンドン（後書き）

次回予告：本社の女性たちのおしゃべり。話題に上ったのはミシコルもよく知った名前。彼女は聞き耳を立ててしまうのだが……。

第60話「噂の人物」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

集中していれば時間は早く経つ。

本から顔を上げたとき、読み始めてからすでに一時間近くが経過していた。

そろそろ屋上に出て出発を待たなければ。今度こそ遅れることがないように。

すっかり冷めてしまったコーヒーを喉に流し込む。冷えると渋みだけが増して、ますます不味い。むせて咳をする私の近くで笑い声がした。喉を押さえながらも、田を向ける。

いつの間にか後ろの席に三人の女の人があった。綺麗な人たちだ。お洒落にスーツを着こなしている。ばっちりお化粧して、キャビン・アテンダントみたいな華やかさだ。仕事もてきぱきとこなしそうな雰囲気だ。

休憩時間らしく、寛いだ様子で会話を楽しんでいる。年若い女が集まつての話題は大体決まつている。

「うちで男探しですって？」

「手っ取り早くね。とりあえず収入は問題ないし」

「焦つたら変な捕まえちゃいますよー」

三人の話題は、そのものずばり、男のことだ。マスティマではまず耳にすることがない。まあ男所帯だし、こんな話題沸騰してたら気持ち悪いけど。

こういうのってオフィス・ラブっていうのだろうか。なんだか興味がある。「ツクの世界しか知らない私には遠い世界。○しつていふ響きからして憧れるし。

「だって一度くらいは結婚したいじゃない。誰かいい人いないかな」「社で思い当たる人なんていないわ」

落ち着きのある、黒髪をアップにした人がぱっさりと斬る。それでも結婚相手を探そうとしている長い茶髪の人は諦めきれないよう

だ。

「総取締役なんて素敵じゃない？ 大人だし物腰柔らかいし。大事にしてくれそう」

「あの人は既婚者よ。愛妻家だつて評判だわ。付け入る隙なんてないわね」

黒髪の人、容赦無しだ。相手は、はあと深いため息をついている。「先輩、社の男じや目の保養にもならないでしょ。外にも目を向けないとー」

一番若そうな金髪のショートカットの人気が満面の笑顔で言う。もちろん同じ短い髪でも私とはまるで違う愛らしいボブだ。

「あら、誰か目をつけたの？」

後の二人は興味津々だ。

質問に金髪の子が、三人だけに聞こえるくらいの小さな声で答えている。

「それはマスティマのディヴィッドじゃない」

黒髪の人人大きく声を上げた。

ディヴィッドはボスの名前だ。私は彼らの話に釘付けになつた。秘密を聞いているようで悪い気もするが、ここは公共の場なんだしと言い訳にして。なんだか胸がどきどきしてくる。

「やめときなさい、あの人は」

さつきの人が顔を横に振りながら言つ。溜め息混じりだ。よほど良い印象を持つていないうだ。

「どうして？ マスティマはディケンズの子会社みたいなものですよ。ディヴィッドって確かその社長よね」

茶髪の人人が言つ。彼女の言つていることは少し外れているが、まったくの間違いでもない。そうやって聞くとボスも大したものだと思つてしまつ。

「子会社とは言え、あの若さで社長！ すげーい」

金髪の子が、はしゃいで祈るように両手を組み合わせている。

「ワイルドで格好いいし、地位もあるなんて最高だよね」

完全な陶酔だ。

だけど、ボスがそんな風に見られているなんて興味深い。ワイルドか。物は言い様だ。あの横暴さは、とてもそんな一言で片付けられるものじゃないけれど。

「馬鹿ね。彼はそんな人じゃないわ。うちからマスティマに行つた男がどうなったか知ってる？　あの人に腕をへし折られて病院送りよ。周りから悪魔って呼ばれているらしいわ。それに……」

一番年上らしい、この黒髪の人は、マスティマの事情に通じているようだ。

まだ何があるのかと二人は引き始めている。ボスを推していた子も顔が強張ってきた。

「それに、総取締役との打ち合わせのとき、コーヒーを用意したことがあるんだけど……。こんな不味いコーヒー飲めるかつてテープルにひっくり返されたのよ。服に跳ねて汚れるわ、ノートパソコンは駄目になるわでもう最悪」

リアルに想像できる。私が飲んだコーヒーみたいなものを出したいたとしたら、それはもう気に入らないこと間違いなしだ。

それでもマスティマ以外の人にも容赦なしなんて、困った人だ。

「そんな怖い人、嫌」

ボスを慕っていたはずの子がとうとうそう言いだした。

「私、再来月の打ち合わせで応対者に決定してるんだけど……」

茶髪の人が言葉を詰まらせる。金髪の子が可哀想と言わんばかりの瞳で見つめている。

「総取締役の前でだとおとなしいらしいから。対応するときを見計らえば、きっと大丈夫よ」

年上の人気が落ち込む彼女の肩に手を置いて励ましている。

本社にはボスでさえ気を遣う人がいるのか。そんな人がうちにいてくれたら、どんなに楽だろう。マスティマのトップがボスなのだから、これはどうしようもないことだけだ。

私ははつとと思い起こした。出発の時間って何時だつたけ。

腕時計を見直して時間のなさに慌てふためく。荷物を持って急いで席を立つ。

「はあ。ちょっとといいなと思つてたんだけど、あの赤い髪の副社長も普通じゃないわよね。そんな上司の下で働けるんだもの」

「個性強すぎだよね。銀髪の子なんて、この間、社の廊下で爆竹鳴らして面白がつてたもん」

「マスティマの男なんてヤバイのばかりよ。目を呑わせちや駄目よ三人の会話は続いている。これはジャズ隊長にグレイの話？」

後ろ髪を引かれるが、今度乗りそくなつたら、きっと今日中には帰れない。噂話に気を取られている場合ではない。私はラウンジを飛び出した。

エレベーターへ向づ前に非常階段を見つけて駆け上がる。待つている暇も惜しい。

そして、扉を開けて屋上に出た私を待ち構えていたのは、プロペラを回して離陸準備に入っている黒いヘリコプターだった。

60・噂の人物（後書き）

次回予告・本社からマステイマの城へ戻るヘリコプターの機内。微妙に様子のおかしい同乗者にミシェルは戸惑うのだったが……。

第61話「沈黙のヘリコプター」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

61・沈黙のベリーポーター

ディケンズ本社の屋上にあるポートには、今にも出発しそうなヘリ「ポーター」。

回転翼から起くる風に押されながらも必死で駆ける。

その途中で担架に乗せられて運ばれる人とすれ違った。急病人だろうか。黒っぽいズボンだったような。顔も見たことがあるような。だけど、足を止めて確認する時間なんてない。まだ扉の開いているヘリへと向う。

「すみません、お待たせして」

詫びながら乗り込み、扉を閉めた。

「遅せえ」

低い声が迎える。

顔を上げると田の前の席にいたこの人は、バスではないか。白いシャツに黒いズボン、黒いコートのいつもの制服姿。色の濃いサングラスをかけた横顔が見える。

座席に着いた彼は反対側の窓から外を見やつていた。こちらを振り返りもしない。

なんでこんな所にバスがいるんだろう。

昼食の準備を終えた後、すぐに私はロンドンへと発つた。その時にはバスはまだ城にいたはずだ。

いや、出発がいつかなんて大したことではない。問題なのは、よりによつて私の乗るヘリにこの人がいるということだ。

「遅くなっていますません」

「詫びはさつきも聞いた」

声がとげとげしい。やはり、こちらを見もしない。イライラしている様子の彼は、操縦席を後ろから蹴りつけた。

「お前も降りるか。さっさと出せ」

そう言って操縦士を慌てさせる。なんだか、いつもにも増して凶

暴だ。

それから、むつりと黙り込んで、ボスは再び窓へと顔を向けた。

私は嫌な予感がして操縦席を覗きこんだ。

一つの座席の一つには黒い上着が残されている。操縦士は着ているから彼のではない。ということは、誰かがこの席にいたということだ。そして、今乗っていないということは……。

ヘリは離陸する。窓から建物の中に入っていく担架が見えた。まさか、あれに乗せられているの……。私はボスを見やつた。彼は変わらず外を見続けている。

何が起こったのかを知るために、操縦士かボスに尋ねるしかない。

だけど、もちろんどちらにも聞けるわけがない。ボスのあの苛立ちよう、触れたら火傷じやすまなそうだ。

最新鋭のヘリコプターのステルス機能が働きをみせる。機内の音もかなり抑えられ、静か過ぎるほどだ。なんとも気まずい雰囲気。ボスの後ろの席に着きながらも気を揉む。

その人が何に腹をたてているにせよ、重苦しい空氣はなんとも我慢しがたい。息をするのにも気を遣わなければいけない感じだ。

こうなつたら思い切つて突破口を開くしかない。

今晚の御飯の話題とか。コツクである私ができる話といつたらそれくらいだ。

意を決して、ボスの席へと回った。

「ボス、今日の夕食はペンネ・アラビアータにしようかと思つてゐんですけど、どうでしょうか。美味しいパスタが手に入つたので」後から思うと冷や汗物だ。文句を言わず食べてくれるものの一つには違ひないのだが。

このアラビアータの語源からしてツツ「ミジいろだ」。

ボスは何も答えず、振り向こうともしなかった。座席に寄りかかり、足を組んで膝に両手重ねて当てた状態から動かない。サングラスをかけているから、どこに視線が行っているのかも分かりにくい。

私はそつとボスの傍に寄つた。

そして気付く。この人は私を見てはいない、声も聞いてもいないこと。

耳にはイヤホンが差し込まれていた。目は閉じられていて、音楽に没頭しているようだ。

耳を澄ませば漏れている高音域。何を聞いているかは不明だが、完全に外の世界と隔絶している。

私は諦めて自分の席に戻つた。

ボスに対抗してではないが、私も自分のことをしようとも鞄から本を取り出しかけて止める。

小さな活字のものなんか読んだら酔いそうだ。かといって、他に時間つぶしになりそうなものは持っていない。

外を見るのもいいかもしないけど、空からの景色つて見ていて落ち着かないし。

田をつぶつて座席に体を預ける。眠くはないけど休むくらいしかないか。

今晚のボスの「」飯はペンネ・アラビアータに決まりだから、それに付け合せる物を考えなきや。他の皆のはラザニアにでもしようかな。

夕食のことを考えているうちに、なんだかエンジンの音が心地よくなつてくる。ステルス機能がこんな風に作用するなんて。そうして、私はいつの間にか眠りの海に沈んでいった。

城に着いて、操縦士が起っこしてくれたとき、すでに機内にボスの姿はなかつた。

そこでようやく事の次第を知つた。

ボスの犠牲者が操縦士見習いの隊員であること。離陸を急かすボスへかけた一言が災いを招いたこと。

そして、彼が言つたのは、「本社からマイケルがこの便に乗ると連絡が来ています。待たずに出発してよろしいですか」だということ

と。

とすれば、私のせいとしか思えない。その人が担架で運ばれることになったのは。

なんて謝ればいいだろう。うろたえる私に、操縦士は気にしないように言つてくれた。

ステップを上がろうとするバスに声をかけた見習い隊員は、操縦席から引き摺り下ろされた。

つまり、バスの苛立ちはへりに乗り込む前からで、呼び止めた時点で彼の運命は決まっていたのだろうと。

そんな風に聞いても慰めにはならなかつた。養生が済んで城に戻つてきたら、お詫びをしなければ。

落ち込んだ気分で厨房に戻ると連絡が入つた。アビゲイルだ。断りが入つたから、今晚のバスの食事は用意しなくていいと伝えてくれた。

それからその日、バスの姿を見ることはなかつた。

6.1 沈黙のくつ「アパート」(後編)

次回予告…「お前は良くやつてこい」って、これは誰の言葉? //
ショルは驚くばかりで……。

第62話「ねぎらい」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします（ランギングの表示はヨシのみです）

パーティで隊員たちの好きな料理を作る。それは思つていた以上に大変なことだった。

ひととおりアンケート調査を終えて実感する。

何しろ出身地が世界中と言つていいほど散らばっていて、その国独自の料理なんもある。

用意できるか不安な材料もあるし、何よりも出来良くなないといけない。試作は欠かせないだろう。不味い物を作つてパーティを台無しにしたくない。

ちなみに幹部の好きな物を聞くと、アビゲイルはジャンバラヤ、ジヤザナニア隊長はミートローフ、グレイはオニオングラタンスープ。そしてレイバンはザツハトルテだった。

ザツハトルテはチヨコレートケーキだ。

お菓子が出てくるのは予想外だったが、どのみちデザートは用意するつもりだったの、希望通りに作ることにした。ものすごく期待されているようだから、これは力を入れなければならない。

一番こだわりが多そうなボスの好物が気になるところだ。だが、聞くのはアビゲイルに止められていた。

パーティなんだからサプライズがないと。それに好きな物、大体分かつってきたでしようというのが彼女の言い分。

まあ、ストレートに聞いて答えてくれるとは考えにくい。それなら、とうの昔に耳にしただろうし、歴代のコックのメモにだつてあつたに違いない。

嫌いではないと見て間違ひのない物だつたら、なんとか分かる。それを用意するしかないだろつ。

その最たるもののがアラビアータだ。食の進むスピードが違う気がする。

ボスとアラビアータ。この言葉を並べるだけで、にやけ笑いが起

きてしまう。

正式名スパゲッティ・アラビアータ。怒りんぼ風スパゲティ。アラビアータはイタリア語で怒りの意味だ。

ボスには、ぜひとも好物だと言つてもらいたいところだが、人のことだから、そうだとしてもきつと答えてはくれないだろう。

前に夕食をキャンセルされたときに作る予定だったから良かつた。あれから作つていなかから、同じ物を食べることにはならない。文句を言わることもないだろう。

ボスの食事のメインはこれで決まりだ。他は主菜とのバランスを考えればいい。

一番重要なところが案外簡単に決まって、ほつとする。これで他の人たちの料理に専念できる。

私は必要な食材を書いたメモの確認を始めた。あとはアビゲイルに渡すだけだ。

やがて本社経由で注文した食材が届き始める。

冷蔵、冷凍が必要なもの。常温で大丈夫なもの。振り分けて保存しやすい形に加工する。

分からぬ部分を調べるための本も取り寄せた。

そろそろ試作品の調理に取り掛からなければ。食堂に人気がなくなつたところを見計らつて。

慎重に秘密裏に。パーティで初披露となるように。

会場についてはアビゲイルから連絡があった。ボスがいつも使っている食堂。テーブルを脇に寄せて、ビュッフェの皿を載せる。他にもテーブルを持ち込まなければならないが、力仕事は隊員たちに任せいいと言われている。

ボスは立食なんて嫌がるだろうと、別にテーブル席を設けることになつた。

日には十日後。開始は午後七時から。人数は、その時城にいる人たちのほとんど、四十から五十人になるらしい。

日程も場所も決まり。あとは料理だけだ。期待に応えるような美味しい物を作らなければ。

私は気合を入れる。普段なら心地よいくらいの緊張感。だが、それが自分で思っている以上に気を負っていたのだと間もなく思い知ることになった。

皆が談笑している。

和やかなパーティ会場の雰囲気の中、私は最後の料理をワゴンで運んできたところだつた。

これをテーブルにセットすれば、仕事はひと段落だ。

皿を置いて辺りを見渡す。あちこちで溢れる笑顔。楽しそうだ。こちらまで嬉しくなる。

部屋の一番奥に据えられた横に長いテーブルと椅子。いつも食事をする辺りに座っているのはボスだ。怖がっているのか誰も近付かない。一人で随分とワインを空けているようだ。

まずい。思いっきり目が合ってしまった。彼は目を細めて私を睨みつけると、こっちへ来いと指でサインを送つてくるではないか。無視するわけにもいかず、私は緊張しながら近付いていった。

料理に文句があるんだろうか。だが、皿を覗くとおおかたの物はなくなっている。だとするとなんだろう。心当たりを捜しながら、ボスの隣に立つ。

すると、彼は顎で壁際に置かれた椅子を示している。持ってきて座れということだろう。これは長丁場になるかもしね。動悸打つ胸を感じながら、彼の横に椅子を寄せた。

見るとグラスが空っぽだ。給仕係として注いだほうがいいのどうか。だが、その気がないのに勝手に動いたら怒られそうだ。

「ボス、このワインでいいですか？」

一応、栓の開いた赤ワインの瓶を示して聞いてみると

驚いたことに「おう」と言葉が返ってきた。懐きながらもグラスを満たす。

すると彼は新しいグラスを引き寄せた。別のグラスで飲みたかったのかと真意を測る。彼はそのグラスの足を指でつづいた。これは間違いなく注げという意味だ。続けてそちらにも瓶を傾ける。

「まあ座れ」

そう言われて、冷や汗をかきながら席に着く。
新しいほうのグラスがこちらに押しやられた。これって私のつてことなんだろうか。じつとワイングラスを見つめる。

彼は自分のグラスを傾けている。私は汗ばむ掌を膝に押し付けたままだ。なんだか展開についていけない。

「お前はあれだな……」

グラスを置いたボスは、パーティ会場を見つめながら言いかけた言葉を絶やす。

あれって何のことだろ？ ぐるぐる回り始める私の頭。

「よくやつてる」

何秒か後の彼の言葉に、頭の回転が全停止した。

「今回の料理も全部お前が用意したんだろうが。大変だつたな」思わず耳を疑う。ボスからねぎらいの言葉が。こんなこと言えるのか、この人は。

「アラビアータが俺の好物だつてよく分かつたじゃねえか」

怒りんぼが怒りんぼ風を好き？ 驚きすぎて笑いだすのも忘れてしまった。

私は椅子から立ち上がった。引っかかった椅子が弾んで大きな音を立てたが、構わずボスの全身を見回す。

艶やかな黒髪、私を見上げる強い灰色の瞳。襟を開けた白い長袖シャツに緩めた黒いネクタイ。マステイマのコートは袖を通さず肩にかけられたままだ。黒いズボンに黒い靴。いつものボスだ。だけど、こんなこと言つなんて普通じゃない。

そして気付く。肌身離さず着けている革の手袋がない。あの人が着けていないなんて見たことないのに。「こんなのボスじゃない」

私は後退りしながら言った。

そう思つて見てみると、何だか不自然な感じがしてくる。ボスがおとなしくこんな席で食事なんてありえるだろうか。

私の声に気付いた皆が一斉にこちらを向いた。

駆けつけるアビゲイルにジャザナイア隊長。近くにいたレイバンは、ムンクの叫びのような形相で固まっている。グレイはと、輪切りにしたバゲットの一片を大急ぎで口に押し込むところだった。私は確信を込めてボスを指差す。

「ボスの偽者です！」

その大きな声で私は現実に引き戻された。

ぼんやりとした光の中で、宙に突き出した自分の指が見える。ベッド脇に置いてあるスタンンドの豆電球の明かりだ。

自分の声で目が覚めたのだ。体を起こして夢だったことに驚く。それにしても変なものを見てしまった。パーティ本番に向けてのプレッシャーからだろうか。

おもむろに夢の中のボスが思い浮かんで、笑い出してしまひ。ねぎらいの言葉を言つたばかりに偽者と断定されてしまつとは。だいたいあの人には、そんな言葉は似合わないのだ。しばらく笑いは收まらず、眠気は退いてしまつた。

ボスに笑わされて睡眠不足になるなんて。それもまたおかしいことだ。

本物のボスに会つたときに笑わずには済むだろうか。私は自信がなくなつていた。

そして、再び眠り始めたときには起きてから一時間は経過していた。起床予定の五時まであと一時間ほどしかない。

今朝はクリスマスパーティーの料理の試作品、第一品目を作る予定にしていた。これからは、こういう生活が続くだろう。少しでも多く睡眠時間は確保しておきたい。

それでも、新たな夢の中でもまた私は笑い続けていた気がする。

62・わがりこ（後書き）

次回予告：クリスマス・パーティの準備で疲労気味のミシェル。彼女を休ませようと行動に出たのは……。

第63話「リフレイン」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

クリスマス・パーティの日まで、あと五日を残すばかりとなつた。やることは山積みだ。

部屋に戻つてからはレシピ本を読み、次の日、仕事の合間に試作品を作る。

頭に叩き込んだ情報の確認作業。その繰り返し。まさに未知との遭遇。見たこともない料理は感じたこともない味に出来上がつたりして、なかなか難しい。調味料を加減して納得できるものに仕上げていく。

普段の仕事も怠れないが、パーティの準備も手を抜くことはできない。

夜のお勤めを減らしてもらつていて良かつた。今の状況では前と変わらない。

ベッドの脇でボスに本を読み聞かせながら、眠りかけること数回。そして、またクッションを食堂に持参して空き時間に眠ることもあつた。

体調を崩して倒れたときと同じようなことを繰り返している。そつは分かつていたが、あと何日か。パーティが終わってしまえば、またゆとりある生活に戻れる。それまでの辛抱だから大丈夫だと思つていた。

ところが事件は起つた。

昼食の時間が終わり、人のいなくなつた食堂。片付けを終えて、束の間の休息に入るところだった。

クッションをテーブルの上にセットして、肘の位置を確認。頭をつけて、さあ眠ろうとしたとき、ボスが部屋に入つて來た。

横向きに床にする意外な人物の登場に飛び起きる。どうしてボスがこんな所に。

彼は無言のまま、私の腕を取ると立ち上がらせ、廊下へ向つて歩

き出した。

「一体何なんですか？」

問いかにも答えようとしない。前を向いたまま、どんどん歩いていくので、私は仕方なく小走りで付いていく。悲しいかなこれはコンバスの差だ。

目的の場所に着けば理由を教えてくれるはず。そう期待していた。扉を開き、執務室を抜けて、着いた先はボスの私室のリビングだ。彼はソファに私を突き飛ばした。

「何をするんですか！」

埋まりこんだクッションから顔を上げて抗議する。訳が分からない上にこんなことをされて、私は怒り始めていた。

「寝ろ」

ボスは命ずる。起き上がるひつとする私の頭を押さえつけた。

一体何だって言つんだろう。柔らかいソファの革に顔が埋まって窒息しそうになる。この人、こいつやって私を永遠の眠りに着かせようとしているんじゃないだろうか。

「いいから寝ろ」

繰り返される言葉。

こんな風にして、私が「はい、眠ります」なんて言ひとども思つてるんだろうか。物事には順序というものがあるのだ。私は半ば呆れて言つた。

「こんな所で寝るなんてできませんよ」

「ソファに縛り付けるぞ」

ボスはコートのポケットから取り出した紐を両手でぴんと張る。本気でやる気だ。私がこれ以上抗うなら。

「……なんだか、ちょっと眠くなつてきました」

思わずそつ返す。縛られるなんてアビゲイルにされた一件でこりだ。

紐をポケットに戻し、ボスは肘掛けに寄りかかる私を見下ろした。

「今から打ち合わせに出る。一時間後には戻る。その時にまだ起き

ていたら……」

言葉を途中にして背を向ける。あとは想像してみるといつことだろ、つ。

私はぞっとして、目蓋をぎゅっと閉じた。こんな風に体中に力が入った状態で眠れるわけもないが、少しでも努力している姿を見せるしかない。

「これ以上、あいつに首を突っ込ませるな。一度目の本社呼び出しこそありえねえぞ」

言葉を置き去りにして去っていく。あいつといつのが誰のことだ、本社の呼び出しが何のことか説明なんてなしだ。

扉の閉まる音を確認してから田を開ける。

何のことだか分からぬが、今回のことが本社と関わりがあるなら、アビゲイルに聞けば何か分かるかもしれない。すぐにも尋ねたいところだが、今この部屋から出るのはやめたほうがいいだろ。ボスに知られたら、それこそ何をされるか分かつたものではない。私は溜め息をついた。窓を見やる。午後の日差しは遮られている。厚いカーテンの縁に沿つて光の線が見えるだけだ。

一時間あれば、料理の手順書だつて作れるのに。

だけど、どのみち食堂にいたつて十五分くらいは眠るつもりだったのだ。四十五分はボスにあげたと思つて、休ませて貰おう。私は割り切つた。

頭の中でパーティーの料理の組み合わせを考えながら、ソファに横になる。

いいソファだ。憎たらしくなるくらいの心地良さ。私のベッドより上等かもしれない。

出来上がった料理が私の頭の中を巡り始める。やがて、それが想像の物であるのか、夢であるのか境目なんてなくなつていった。

薄暗い部屋の中で私は目覚めた。

見慣れない天井にソファの背を見やつて思い出す。ここはボスの

部屋だ。

視線をさ迷わせて、マントルピースの上の置時計を見つける。ち

ょうど「」の形、三時だ。眠つてから、きつかり一時間ほどだ。

ちゃんと休んだのに、なんだか体が重い。体を起こして、かけられたブランケットに気付く。そして私を見つめる視線にも。

驚いて声を上げかけて、慌てて手で口を塞ぐ。

そこにいるのは寛いだ様子のボスだ。上着を脱ぎ、ネクタイもなく、ショルダー・ホルスターも外した姿。一人掛けのソファに腰掛け、ワイングラスを片手にしている。

「会議、もう終わつたんですか？」

返つてきたのはふんという鼻息だけ。彼はグラスを傾け、赤ワインを喉に流し込んだ。

「休ませていただいて、ありがとうございます。毛布までかけて下さつて。夕食の準備がありますので、これで失礼します」

立ち上がつた私はそそくさとブランケットを畳む。少しでも早くこの場から離れたかった。

「そんなもん必要ねえ。何時だと思つてんだ」

ボスの言葉にぎくりとして手を止める。改めて時計を見て、閉じられたカーテンで覆われた窓を見やる。光がない。カーテンの影が暗く縁取つているだけだ。

まさか……私が見た時計の三時つて、午前三時のこと？

「十一時間も寝てたなんて」

「正確には十一時間三十五分だ」

ショックで咳く私にボスの言葉が追い討ちをかける。

「起こしてくれればよかつたのに」

今さらな悪あがきだと分かつていたけれど、そうもりてしまつ。

「俺もさつき外から帰つてきたところだ。まだいるとは思つてなかつたがな。今さら起こしても何の足しにもならねえ」

確かにそうだろう。食事を作らないコックなんて役立たずだ。ゴ

ミ箱に入れても邪魔になるような粗大ゴミも真つ青な代物だ。

「長々とお邪魔しました。部屋に戻ります」

がつくりと肩を落としながら、挨拶をする。

「また倒れるようなことをするなら、先に撃つてベッドから動けなくするぞ」

彼はグラスを置くと、テーブルに置いていた銃を手に、ちらつかせた。

「これだけ休んだんです。過労で倒れたりとかありえませんよ」

私は力ない笑いをもらす。あまりの自己嫌悪に恐怖も感じなくなつていて。いつそ撃つて、この思いを吹き飛ばしてくれるなら、それでもいいとさえ思つてしまふ。

寝すぎて腰と腹筋が痛い。それに頭も重い。こんな感覚は久しぶりだ。

ボスに暇乞いをして廊下へと出る。

つくのは溜め息ばかりだ。十二時間あれば試作が何品作れるだろう。

それにあの人の前で無防備に眠つていた自分に腹が立つ。もちろん、早々に起こしてくれなかつたボスにも。

私が起きるまで待つて、その上ブランケットまでかけてくれていた。

いつものボスからは考えられないことだ。やつぱり本社の何かが引っかかっているのだろう。でなければ、外から戻ってきた時点で叩き起こされているはずだ。

そういうえば、本社から戻るヘリで一緒になつたとき、様子が変だつた。一度目の呼び出しあはとか言つていたから、おそらくあれが一度目の呼び出しだったんだろう。

本社とボスとの間のことが私にまで関わつてくるなんて。

「訳分かんない」

人気のない廊下で声を上げる。考へても結論なんて出ないし。

朝、アビゲイルに尋ねることを心に決めて、私は廊下を歩く足を早めた。

63 リフレイン（後書き）

次回予告：アビゲイルからセオと呼ばれる、本社のアーロン。ミシェルをマスティマのゴックとして採用を決めたこの人は……。

第64話「セオ（前編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

巻き起じる風の中を私は歩いている。

足元に広がる四角い石を敷き詰めた地面。白衣の上に着たマステイマの制服である上着がはためく。手には銀色のジュラルミン製のアタッシュケース。

空には厚い雲が流れている。それをかき混ぜているのは騒々しく音を立てるプロペラ。地面から五十センチほどでホバリングして、一機の灰色のヘリコプターが待っていた。

「確かに預かつた」

開いたヘリの扉から手を伸ばしたのは、サングラスをかけたスーツの男だった。彼はアタッシュケースを引き込むと、操縦士に合図をした。

後ろ向きに距離をとる田の前で、扉を閉めたヘリコプターが上昇を始める。

堀の内側の植え木がざわめく。私の短い髪の毛も搔き乱される。背後には朽ちかけの様相を呈する城。大きく周りを取り囲む石堀。ここはマステイマのヘリポートだ。

そして、この闇世界の取引を思わせる出来事。始まりを語るには少し時間をさかのぼらなければならぬ。

十一時間睡眠を取つてから最初の朝食。

いつものボスにほつとする。田を合わせるのは食堂に入つてきて、私が挨拶の声をかけたときの一 度きり。

食器を扱う音だけが小さく聞こえる、沈黙のうちの食事。これこそが平和というものだ。この人が口を開くときは、ろくなことがないのだし。

アビゲイルの姿はなかつた。本採用になつてからは、それが殆どのことだ。後で医務室に向うつもりだった。

彼女なら知つていいるはずだ。ボスがボスらしからぬ行動をした理由。それが分からないうちは落ち着かなくて仕方ない。

朝食の食器を片付けることもそいそいに医務室に向つ。

「アビゲイル」

名前を呼びながら、ドアを勢いよく開けた。

最初に飛び込んできたのは確かに彼女の白衣姿。デスク近くの薬品棚の前に立つてゐる。

だが、それだけではない。予想外に他にも人がいた。こんな朝早くだから彼女しかないと踏んでいたのに。

デスクの椅子に腰掛け、パソコンの画面に顔を向けている男の人の姿。黒髪に黒ぶちの眼鏡。身に着けているのは上品なヘリンボーン柄のツイードのスーツ。

椅子を回してこちらを向いたのは見覚えのある壯年の男性。ディケンズ本社で私の仮採用を決めたアーロンという名の人だ。

「やあ、おはよう」

彼は立ち上がり、深く温かみのある声で挨拶する。

「おはようございます」

反射的にそう返したが、不審はぬぐえなかつた。何故この人が今こんな所に。

デスクに届く前に私の足は止まつてゐた。彼がこちらに近付いてきたからだ。

眼鏡の端を指で押し上げ、じつと私を見つめる。

「体重が落ちたかな。顔も少しやつれでいるね。だけど顔色は悪くない。髪の艶も爪の色もいいね」

腰を折つた彼は私の手を取つて見る。

じつと観察されている。居心地の悪くなつた私は体をもぞもぞと動かす。

「睡眠はちゃんととつていいるかい？」

「昨日は十一時間も寝てしましました」

その答えに彼は短い笑い声を上げた。楽しげな声だ。

「眠れることはいい事だけね。寝溜めなんて意味がないから、毎日の睡眠が大事なんだが、いつもそれくらい眠っているのかね」

「まさか」

今度は私が笑う番だった。彼は微笑んで私の肩に手を乗せる。親しみの持てる不快でない仕草。

「ディヴィッドも少しばかりを遣つてているようだね。絞つた甲斐があつたかな」

続く言葉にほぐれていた気分が一気に覆される。

私はあっけに取られた。ディヴィッド……ボスを絞つた？ 確かにそう聞こえたけれど、この人が？

ぐだけた笑顔はそのままだ。ボスに太刀打ちできそには到底思えない。マステイマの人事に関わっている人だとしても、例え年上だろうと関係ないはずだ。ボスが黙つて、こんな柔そうな人の言うことを聞くなんて。

「まるでユニークーンの乙女だね」

彼は自らの眩きにふつと笑いをもらすと、尋ねた。

「夜の勤めは減つてるね？」

「……どうしてそんなことまで」

アビゲイルが話したんだろうか。愕然と彼女を見やる。

いまだ薬品棚の前で腕を組んだまま立つていて、傍観者を決め込んでいるようだ。動く気配もない。

私は後退りした。彼の手は追つてこなかつた。

どうすればいいのだろう。うろたえる私の思考は混乱する。

頭の芯がかつと熱くなり、不安が押し寄せまつてくる。本社にまで私が女だと知られるなんて。もし、そのことがボスの耳に入つたら

……。

「何も心配する必要はないよ、ミシェル。私は君の味方だ。最初からね」

変わりのない穏やかな彼の語り口。

口惜しいことに言葉はまだ出てこない。何を言つていいのか分からぬ

らないほど心乱れていた。

彼は、初めから私が女であることを知つていながらマステイマへと案内した。それだけは分かつた。

そういうえば、城を前にして言つていた。健康診断は必要ないと。アビゲイルはその言葉をヒントに私を女ではと疑つた。そつ言つていたではないか。

自分の愚かさに今さらながらに驚く。彼が私の正体を気付いた理由。最初の時点で気付くべきだったのだ。

「それはブルー・ノさんが……」

「彼は君の性別については一切触れなかつた。私自身の判断だ。私は唇を噛みしめた。束の間とは言え、ブルー・ノさんを疑つてしまふなんて、どうかしている。

アーロンは歩み寄つてきて私の顔を覗きこんだ。再び唇に笑みが浮かぶ。

「ディヴィッシュがなんと言おうと、君をマステイマのコックから外す氣はないよ。君がそれを願つている限り……」

「何を言つてるんですか。あなたにそんなことが」

遮つて言葉が飛び出す。それが失礼だと考えることもできなかつた。

ボスが決めたこと覆すだなんて、いくら本社でも不可能なはずだ。マステイマのボスは一人なのだから。

「それができるのよ。セオなら」

アビゲイルが初めて口をはさんだ。アーロンの傍に歩み寄る。

「彼はボスのただ一人の上司。本社の総取締役なんだから」

その言葉に混乱は深まるばかりだった。

64・セオ（前編）（後書き）

次回予告：アーロンはティケンズ警備会社の総取締役だった。本社用に菓子を作つて欲しいとの彼の提案を受け入れたミシルだが、思わぬ事態に……。

第65話「セオ（後編）」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

落ち着いて考えよう。まずは一回深呼吸。

総取締役の英語の綴りを頭に描く。確かに、Chief Executive Officer。略してCEOだ。

本社の人たちが言っていた、ボスが一目置いているという人物。それがこの人だつたとは。

そうか。だからCEOなのか。勝手に苗字か名前の一
部かと思つていた。

「健康状態は良好のようだ。そうでなければ、最後の手段に出るつもりだつたが……」

彼の視線は私からアビゲイルへ。彼女は頷いた。

「ボスも懲りたんでしょう。本社に呼びつけられて訓告を受けるなんて、もうご免だと思つてゐるはずよ」

「三度目だよ」

アーロンは何処か慄然とした調子で言つた。

「一度目の注意は無視。彼女が倒れての二度目の注意も同じ調子だつたから、来てもらつたんだ」

この人こそがボスが口にしていた“あいつ”だつたのだ。私は確信する。

「勤めを果たして、あいつを黙らせろ」「あいつに首を突つ込ませるな」

どちらも苛立つたような言いようだった。ようやく話が繋がる。ボスの性格だ。外から茶々を入れられたのでは、お冠になる気持ちも分かる。

アーロンの瞳は変わらなかつた。眼鏡の奥で柔らかい光に溢れていた。この人の言つことにボスが耳を傾けるなんて、いまいち実感がわかない。

アビゲイルとアーロン。一人の視線が集まるのを感じて、私は身

を硬くした。

「どうするの。予定通りこの子を連れて行くの？」

「いや」

言ひざまに体を反らしたせいで、彼の眼鏡に銀色の光が差した。何かを思いついのか、思い出したかしたようだ。唇に微笑みが広がる。すっかりお馴染みになつた笑顔で彼は再び腰をかがめた。

「ミシェル、君の料理は本社でも有名だ。マステイマの隊員からの話が広がってね。社員達も興味津々。特にお菓子は絶品だと聞いているよ。そこでだ」

内緒話をするかのように声を落とした。

「ビスコッティを焼いてもらいたいんだ。うちは来客が多いしね。茶請けに出したいんだが。もちろん社員にも食べさせてやりたいからたくさんね」

「……それは構いませんけど」

彼は笑顔のまま「決まりだ」と言った。

机の脇に置いていたアタッシュケースを取り、私へと渡す。よくビジネスマンが持っているジュラルミン製の銀色のケースだ。

この中に入れてくれと彼は言つ。とてもじゃないけど、お菓子の入れ物には見えない。

「明日の午後一時、遣いの者を送る。それまでに用意できるかな。場所はこここのヘリポート。他の者には内緒で頼むよ。複雑にはしたくないのでね」

ビスコッティで複雑なことってなんだろうか。

分からなかつたが頷いた。理由を尋ねたりしたら、それこそ煩わしいことになりそうだ。

アーロンは「そろそろ戻らなければ」と口元した。

当然出口に向つていくが、その予想に反し、彼は部屋の奥へ歩いていく。白いついたての向こうの患者用ベッドが置かれている方へ。

ベッドフレームの鉄の支柱に触れる。すると、驚いたことにベッ

ドが折りたたまれ、床に穴が出現した。ライトが自動で点り、下へと続く螺旋階段が見える。隠し通路だ。

「そうだ、アビゲイル。カルテのチェックが途中になつてしまつた。本社にデータを回してくれ

「了解。あとで送つておくわ」

アーロンは頷くと、私の傍までやってきて頭に手を乗せた。

「クリスマスパーティーの準備だからといって、無理は禁物だからね。子供にやるような仕草で撫でる。不思議と不快な気分にならない、優しさに満ちた触れ方。

「張り切るのはいいけれど、また倒れるようなことになつたら……」「分かつています。これ以上ボスに迷惑はかけません

私は本心からそう言つた。イライラするボスも嫌だが、奇妙に優しいボスもなんだか落ち着かない。

アーロンはにっこり笑うと、踵を返して階段を下つて行った。

彼の背中が遠ざかると自動で床が塞がり、ベッドが元の位置に戻る。

私の背後からアビゲイルが肩を掴んで顔を覗きこんでくる。

「それにしてもユニコーンの乙女ねえ」

アーロンが口にした言葉を繰り返す。気になつて尋ねてみた。

「それって、どういう意味ですか？」

「例え話ね。ユニコーンは乙女の前ではおとなしくなる、彼女の膝を枕にして眠つてしまつていう伝承があるから」

もしかして、ユニコーンってボスのことだろうか？　まったく印象が合致しない。そんな優美な伝説の生き物のイメージとはちょっと違うと思う。

私が乙女っていうのも微妙だ。何といつてもマスティマでは男で通つてゐるし、ボスに膝枕だつてもちろんしたことないし。……と思つて、はつとする。

まさか、私がボスにそんなことをしてくると誤解してるなんてことは……。

「面白い例えだわ」

アビゲイル納得したように頷きながら言つている。私は奇妙な想像を頭から必死で追い出そうとしていた。

「それにもセオ自ら動くなんて。気に入られているのね。自分が推したものだからほつとけないんだわ」

「あの方もお医者様なんですか？」

少し焦り氣味に尋ねる。こういうときは別のことを考えるに限る。そういえば、彼はカルテがどうのと言つていた。確かに、あの人はドクターっぽい。白衣や聴診器が似合いそうだ。

となれば、彼の私への関心は職業病みたいなもので、健康状態に不安があるからじゃないだろうか。コツクである私が痛みやすい素材に氣を使うみたいに。

「セオの専門は精神科だけどね。内科や外科にも通じていて、腕の立つ医師だわ。私の師でもあるのよ。彼はマスティマビックがディケンズ警備会社、全社員のカルテに目を通しているの。五千を超えるっていうのに見ると聞かなくてね」

凄い数だ。ディケンズは世界規模の警備会社だから、社員数もそれくらいになるのだろう。

「それよりよかつたわね。明日の午後はボスが不在だし。うまく立ち回ればセオが来たこともばれずにいけるわよ」

「それも秘密なんですか？」

「当たり前でしょ。ボスは彼のことをあまり良く思つてないもの。城に来たなんて知つただけで氣分を害すわ」

玄関から出て行かずに秘密通路を使った理由を知る。それに渡されたジユラルミンケースも、内緒ということか。それにしても手間のかかることだ。

ケースを見下ろして息をつく。

ビスコツティをこんなものに入れるなんて、あまり氣が進まない。入れ物として不適切というだけではない。後で分かることになるのだが、それは多分虫の知らせだったのだ。

午後の日差しを遮る厚い雲。ベリコプターの色が空に溶け込んでいく。

これで守らなければいけない秘密も去つていった。私はほっとした思いでそれを見送っていた。

「おい、マイケル。今のはなんだ?」

突然、後ろから声をかけられて驚く。

振り向くと、そこにあつたのは、天を仰ぎながら近付いてくるジヤザナニア隊長の姿だった。

私はアーロンの内緒だという言葉を思い出す。うまく切り返せなればと考えたが、すぐには出でこない。

代わりに隊長の耳に届いたのは、胸ポケットに収まつた小型無線機の声だった。

「フライトスケジュールには記録ありません。未登録のヘリです」隊長が城へと田をやる。ここからでは姿を見ることはできないが、屋上にいる監視員からの連絡だろう。

「よし、横つ面にかましてやれ

無線機への応答に慌てる。

「ジャズ隊長」

声をかけるも、止める」となど遅すぎた。

城の屋上から白煙の尾を噴き出しながら、何かが打ち出された。方向を定めて進むヘリの脇を掠めるようにして飛んでいく。あれはロケットランチャーから撃ち出されたものだ。

「隊長、あのヘリは……」

「げえ！」

押し潰れたその声と私の声は殆ど同時だった。

彼は折りたたみ式の簡易スコープを手にしていた。田を離して肉眼で確認して、また覗き込む仕草を繰り返している。

「本社の機体じゃねえか。何で言わねえんだ、マイケル」

そんなことを言つたって、私の言葉なんて待つてくれなかつたの

「

「まいつたな、いつや。先に本社に謝つとくしかねえな」
ぶつぶつ呟きながら背を向ける。頭をかきかき、歩いていつてしまつた。

嵐のよつよつやつてきて、過ぎ去つてこく。やつこつといひよへ
知つているもの、いまだに付いていけない。
といふか、まともに張り合ふのは、もう一つの大嵐の元である
ボスくらいなものだろ。

そして、それは間もなく実証されたこととなつた。

65・セオ（後編）（後書き）

次回予告：ボスにヘリを威嚇砲撃した報告をするジャザナイア隊長。
その言い訳にミシールはひとり焦るばかりで……。

第66話「未確認飛行物体」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします（ランディングの表示はなしのみです）

ディケンズ本社のヘリを威嚇砲撃してから二日後の朝。私は城の廊下を歩いていた。

押しているワゴンの上の皿は空っぽ。朝食ミッシュジョンは無事完了。

次の仕事はこれらを洗うことだ。

途中、人の話し声を耳にして足を止める。

これはジャザニア隊長の声だ。そして、聞こえてきたのはボスの執務室からだ。

扉が完全に閉まつていない。隊長の仕業とみて間違いない。いつも細かいところをあまり気にしないのが彼でもある。

言葉の端を聞きつけた私は、ワゴンを壁に寄せ、扉に寄り添つた。ボスへ向けられたジャズ隊長の声を聞いて、耳を疑う。交わされているのは、この間の事件の話。

「それが残弾数不一致の理由か」

答えるボスの声は冷たくて深い。これは嵐の前の静けさだ。

「ああ。U.F.O.に一発かましたんだ」

対照的に明るい隊長の声。

しかも微妙に事実と違つていて、確かに、隊長にとっては未確認飛行物体だったわけだけど。

それにもしても、なんで今そのことを話しているんだろう。ボスに報告する際には、一緒にとお願いしていたのに。

なんといつても本社のヘリが来ることになつたわけは、私にあるのだから。CEOの言葉を安請け合ひしたせいなのだ。

その時、隊長は随分渋つっていたけど、最後には了解してくれた。

今日の午後に一人でボスに報告する予定のはずだつた。

一応腕時計を確認する。まだ十時にもなつていない。思いつきりフライングだ。

「ほう。それはどんな形をしていた?」

「えっと、スワロフスキーモードだつたぜ」

U·F·Oつてそんな形があつたつけ。

なんだか隊長、苦しい言い訳になつてきたんじゃないだろうか。本人が自覚しているかは不明だ。声のトーンはまるつきり変わつていないし。

「……アダムスキーモードのことか」

ボスの声、心なしか震えているような。

「さすがボス。物知りだな！」

隊長の声と重なる大きな打撃音。ボスがデスクを叩いたようだ。「ざけんな。お前が狙つたのはヘリコプターだらうが」

やばい展開だ。

でも、なんでボスがそんなことを知つているんだろう。その時は城にはいなかつたはずなのに。

その疑問はボス自身の言葉すぐに答えが出た。

「レーダーに機影がくつきりだ。三日前、俺が行つていたのは本社の技術開発局。最新鋭のレーダー実験会だ」

「ゲエ……」

ジャズ隊長の押し潰れた悲鳴と私の心の悲鳴は一致していた。

「ぐだらねえ嘘だな」

ボスが席を立ち、近付いてくる。このままではまずい。

足音を耳にして、いてもたつてもいられず、私は部屋の中に飛び込んでいた。

「待つてください、ボス」

ジャズ隊長の前に立つてボスと向かい合つ。

鋭い眼光が射抜くが、構つていられない。私がしどかしたことで、

ジャズ隊長が犠牲になるなんて間違つてゐる。

「なんで出てくんだ、マイケル」

隊長は後ろから私の肩を掴んで下がらせよつとする。私は彼へと振り返つた。

「話が違います、隊長。報告には僕も立ち合わせてもらひ約束じや

ないですか」

「どつちにしたって、あいつの怒りは変わらねえ」

「でも……」

言いかけた私を突然、肩を掴んでいた隊長が横に押し出す。

耳の辺りに風を感じた直後、派手な音を立てて壁にぶつかる物を目についた。

床に落ちたのは、デスクにあつたはずの獅子をかたどった書類を押さえるための重石。

背後からのスローダイニング。隊長が押してくれたお陰で当たらずには済んだのだ。

「邪魔だ。うせろ」

高圧的なボスの声。

振り向くと、腕を組んで私を睨みつけていた。自分自身を奮い立たせながら、私は一步前に出た。

「聞いてください、ボス。原因は僕にあるんです」

「ちょっと待て」

ジャズ隊長が慌てたように私の右腕を取つた。腕を振つてそれを払おうとする。

「重要なのは結果だ」

ボスは冷たく言い放つた。

「領空を侵せば落とされて当然。それが何処の機体だろうとな」

この人は、三日前に城を訪れたのがヘリコプター、それが本社のものだと知っているのだ。私は確信しながら、ぞつとした。

「これ以上、おれに恥をかかせるな」

ジャズ隊長はそう言つて、抵抗を忘れた私を引きずるよひにして扉へ向つた。

外の廊下へと突き飛ばされ、尻餅をつく。起き上がる暇もなく、扉は閉じられていた。飛び起きてノブを回しても開かない。内側から鍵をかけられている。

「ジャズ隊長！」

叫んで扉を拳で叩いたが、返事はなかつた。そばに耳を寄せても何も聞き取れない。隙間があれば届く物音も今は阻まれている。

それでもボスが銃を使つたなら、その銃声くらいは聞き取れるはずだ。大きな音が特徴の衝撃銃なら、間違いない。

問題なのはそんな音を耳にしても、扉の先にはいけないことだ。すぐ助け出すことはできない。

静か過ぎる廊下で気を揉むばかりだ。隊長のことが気がかりで、その場から放れることができなかつた。

二十分ほど経つて、扉が内側から開いた。

廊下に出てきたジャザナイア隊長を田にしてほつとする。無事だ。彼は私を見つけ、目を丸くした。

「まだいたのか、マイケル」

「だつて、僕の尻拭いのために隊長の身に何かあつたら……」

私の頭に手をやり、彼はにこやかに笑う。

「気にすんな。こんなの日常茶飯事だ。部下を守るのもおれの仕事だからな」

頭をぽんぽんと叩かれながら、私は白い歯をこぼす隊長を見上げた。

笑顔が眩しい。細められた緑色の瞳は愛情深さに溢れている。赤い巻き毛も豊かな感情を表しているようだ。肩幅も思つたより広いことに気付く。この人つてこんな頼りがいのある人だつただろうか。

「……隊長、惚れそうです」

思わず口走つた言葉。彼はぎょっとして手を引っ込めた。

「おれは男には興味ねえぞ」

軽く笑顔を引きつらせている。

そういう意味ではなかつたのに。彼が男だからとか、私が本当は女だからとか、そんなことではない。一人の人間として尊敬に値すると思つたのだ。あのボスに真正面に向き合つことができる、数少ない人物に違ひないのである。

隊長は私に背を向けた。

「もちろん。人としてつてことですよ」

私の言葉に振り向いて、分かつてゐるといわんばかりに頷く。笑顔が戻る。

「早く仕事に戻れ。あいつに怒るタイミングを与えたためにもな」
隊長の言葉に従つて、私は壁に寄せたワゴンに手をかける。
そして、隊長が向つたのとは反対の方向にある厨房へと歩き出す。
私はほつとしていた。この時は、ヘリへの威嚇砲撃の問題は解決したものだと信じていたのだ。

ジャズ隊長が無事に執務室から脱出を果たしたことから見ても、
間違いないと思っていた。あのボスが納得せずに隊長を帰すはずがないのだから。

66・未確認飛行物体（後書き）

次回予告：城の庭を工事している作業員。だけど、この人たちって見覚えが。ショベルカーを操縦しているのって……。

第67話「マスティマ式勤労奉仕」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

それは、ジャザナイア隊長がボスへの報告を終えた翌日の午後のこと。

厨房の「ゴミ」をまとめた私は、城の外へ運び出そうとしていた。両手には満杯の「ゴミ袋」。それを所定の場所に置きに行くのだ。

扉にはめ込まれたガラス窓から空を見上げる。一面重い灰色の雲。見るからに寒そうだ。

早く目的を果たそと庭に踏み出す。そして、騒がしい音に気付いた。

重機の音だ。サイズは小さいが、ショベルカーが庭に入り込んでいる。シャベルやつるはしを持った、作業服を着た人たちが地面を掘り起こしていた。

業者が入るなんて聞いていないけど、私まで連絡が来ないのはいつものことだ。

地面からの寒さ。足元から冷えが上ってきて凍えそうだ。早く暖房の効いた部屋に戻りたい。

城を取り囲む堀の傍の「ゴミ」置き場に急ぎ、始末する。身を切るような一陣の風に思わず足が止まり、体をすくめてしまう。続いて「くちん」と子犬みたいなくしゃみが出た。

「そんな薄着で大丈夫かあ？」

聞いたことのある声がした。

私は首をめぐらせて啞然とする。キャタピラーを軋ませて近付いてくる白いカラーリングのミニショベルカー。それを操作する人、ヘルメットに灰色の作業着のこの人はジャザナイア隊長ではないか。彼はショベルカーを横付けにした。

着ておけと上着を脱いで放る。内側にボアのついた紺色のウインドブレーカーだ。

そんなことをしたら隊長が寒いんじゃないかと思ったが、取り越

し苦労だった。中綿入りのジャンパーの下に重ね着をしているよう

で着膨れている。他の作業員の人たちと比べて、明らかに着すぎだ。

「とりあえず礼を言って袖を通す。まったく別次元。温かさ格別だ。

「何をやつてるんですか、隊長……」

「気を取り直して尋ねる。白いヘルメットには安全第一なんて書いてあるし、足元はゴム長靴だ。

「何つて新しい訓練場を作つてんだ」

「隊長ですか？」

答えが腑に落ちない。仮にもマステイマのナンバーツー、部隊長である人だ。こんな土方に借り出されていはずの人ではない。

彼は片手で髪に触れた。私はその行動に釘付けになる。こういう行動を取るときの隊長つて、パターンがあるような気がする。

「ボランティアだつて！」

じとつとした私の視線にたまりかねたように声を上げる。ますます怪しい。

「まさかジャズ隊長、この間のヘリのことと関係あるわけじゃないですね？」

「なんのことだあ？」

やつぱりだ。しらばくれて。後ろ頭をかく仕草からしてみても不自然だ。

「隊長」

詰め寄る私に、これ以上は無駄だと判断したらしい。

座席にかけていた黒い制服のコートのポケットに手を突っ込むと、私に向かつて何かを放り投げた。小石ほどの大きさのそれを慌てて受け止める。

「幸運のアイテムだ」

彼の言葉に、そつと包み込んだ両手を解くと、そこにあったのは十ペンスのイギリス硬貨だった。

裏返して愕然とする。表と同じ柄、頭に王冠を載せた獅子のデザイン。両面とも表だ。

「まさか、これでボスを？」

頭がくらぐらしてきた。こんなものであの人を丸め込んだなんて。そんなことがばれたりしたらって考えたりしないのだろうか、この人は。

「グレイに貰つたんだ。両面裏もあるんだぞ」得意げに言つてゐるが、そんな問題でもない。

「だから、ボランティアなんだ。なあ」

隊長は後ろを振り返つて言う。

いつの間にか向こうにいた作業員達がショベルカーの周りに集まつていた。

「終わつてからの飲み会が楽しみで」

「隊長、ご馳走になります」

異口同音の五人の男達。シャベルやつるはしを肩に乗せて。

よく見ると彼らもまた見覚えのある顔だ。マスティマの隊員たちではないか。体格のいい彼らは本職の人たちと比べても遜色無しだ。「ここの仕事なくしても土方で食つていけるぞ」

隊長の言葉に皆はどつと笑い声を上げた。

「さあ、ランチャーの弾代稼ぐまで、もうひと踏ん張りだ」

弾代稼ぐつて……それはすでにボランティアですらないと思つのだけど、皆笑顔を見せて楽しそうだ。片拳を上げて皆を鼓舞する隊長。まさに体育会系のノリ。

「この間の事件の関係なら、私も働くべきだと思ったが、それはジヤズ隊長に一蹴された。

「お前は休んだことなんてねえし、いつもが無償奉仕みたいなものだろ」と。

聞けば、ジヤズ隊長を始め彼らは一様に休暇中で、“ボランティア”の後の親睦会を目当てに、集つてゐるらしい。

つまり、昨日今日から始まつたことではないということだ。

城の修復を名目にバルコニーを作つたとき、手際が良かつたわけを知る。

あのボスが気付いていないはずはない。隊長に付き合つて、あの
人なりに折れているということなのだろう。

そう考へると、いつもは滅茶苦茶でも、やっぱりボスなんだな
と思う。……とはいっても、感心しているわけではない。そんなこと
は決してない。

「今日は寒いし、終わつたらホットウイスキーで一杯やるか

」そう言つて隊長たちは盛り上がる。

「日本酒の熱燗つていう手もありますよ

私は口を添える。

先日、取り寄せた料理用の日本酒。何故か来たのは大吟醸の一升
瓶。料理酒に使うのもばかれる名酒中の名酒。
冷え切つた彼らの体を温めるのに使えるなら、これ以上のことは
ない。

両方味わおう。彼らの結論はこうだった。

ジャズ隊長の自室を開放してのお疲れ様会。ボスの夕食前までに
は返してもうことを約束して、保温機能付きのワゴンを貸し出し
た。これで、熱燗だつて冷めることがなくばっちりだ。

こうして、ようやく「本社ヘリ威嚇砲撃事件」の幕は下りたのだ
った。

67・マスティマ式勤労奉仕（後書き）

次回予告：いよいよ始まつたパーティ。腕の見せ所とミショルは奮闘する。皆楽しんでいる様子だが、例外がいるようだ……。

第68話「クリスマス・パーティ」

？

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をボチツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

クリスマスパーティー本番当日。

制服を身に着けたままの隊員たちで会場は黒一色だ。賑やかさはいつも以上。忙しいのは夢を超えている。会場と厨房を何度も往復しだらう。

皆には、温かくてできたての料理を食べてもらいたいから、これは仕方ない。厨房のガスコンロもオーブンもフル稼働だ。横目でしか様子は見ていないが、最初から盛り上がりつつだ。

グレイは器用にもトランプやコインを使ったマジックを披露していたし、レイバンはいきなりお菓子の場所に寄ってきていた。ジャザニア隊長の大きな笑い声は絶えず聞こえていたから、上機嫌に違いない。

アビゲイルはオスカーと一緒に出席していた。プリシラも来ていて、手を振り合った。赤色のワンピース姿が会場に色を添える。隊員たちからエンジェルと呼ばれて、すでに沢山のプレゼントを受け取っていた。マスクコットキャラクターのような人気だ。

私はボスの夕食を運んでいた。くしくも夢の中と同じ配置だ。

ボス本人の姿はまだ見えないが、料理はすぐにでも出せる状態だ。八時に来る予定だとアビゲイルは言っていた。あと一、二分でその時間。あの人気が予定の時間に遅れることはほとんどない。

扉が開いた。ボスが現れた。

彼はその場で立ち止まる。あまりの賑わいに驚いているのか入ってこようとしている。何故だろうと思つて見ていると、私の傍にいたアビゲイルが苦笑を浮かべていた。

なんだか妙な雰囲気だ。

「何の騒ぎだ」

隊員たちを見回して言つ。低いがよく通る声に皆が振り返り、動

きを止める。

ボスは左右に分かれた人たちでできた道を抜けて、こちらへ歩いてきた。

「アビゲイル」

「何つてクリスマスパーティーよ。年に一度のお楽しみじゃないの」
彼女の口ぶりは見たら分かるでしょうと言わんばかりだ。だけどボスは納得していない。

あちこちに目をやつて、更なる金縛りの人を増やしていく。視線で人を石化するという伝説の生き物、バシリスクのようだ。
だが、アビゲイルには免疫があるためか、まったく通用していない。澄ました顔のままだ。

「ボスの好きな物をマイケルに用意してもらつたのよ。席はあっちね」

「聞いてねえ」

テーブルを示しての言葉に、ボスは苛立ちを見せる。

アビゲイルは肩をすくめた。

「そんなはずはないわ」

彼女は上着のポケットから折りたたんだ紙を取り出した。それを開いて彼の前に掲げる。まるで日本の時代劇で見たご隱居様の印籠のようだ。

「本社に提出した書類の控え。あなたのサインだつてちゃんとある。

クリスマスパーティの承認書よ」

アビゲイルの余裕たっぷりの声。

ボスはそれに目を近づけると唸つた。

「こんなもん、いつの間に」

覚えていないようだが、私には心当たりがある。

休暇明けにボスに挨拶に行つた晩のこと。体格のことを言われて、挑発に乗つてしまつた私を押し倒したときだ。あの時、アビゲイルが決裁のサインを求めてやってきた。きっとその時の書類だ。

本物であるかどうか疑つているようだ。ボスは手にとつて調べて

いる。だけど、それは間違いなく彼のサインだ。私もペンを取るところを見たもの。

「本社から〇・Ｋは取れているし、経費で出るわ。今さう止める？皆楽しんでるのに」

こういうやりとりを聞いていると、アビゲイルとジャズ隊長はやっぱり姉弟だなって思つ。悔やむなら、やつてしまつた後にしろつてタイプだ。

ボスは渋い顔をして辺りを睨みつけていたが、止める理由を思いつかなかつたらしい。

なんと言つてもサインをないことはできない。ろくに見もせらず署名したことは彼の問題であつて、そんな理由で書類は無効にはならないということだ。

入り口に向かってボスの足が止まる。引き返ってきて、見事な仏頂面のまま席に着いた。

どうしてだらうと扉のほうを見やると、前にはプリシラがいるではないか。彼女はグレイと話している。気付かれずに扉を通り抜けることは、いくらボスでも不可能だ。彼女がいるのはドアノブの真下辺りだ。

「おい」

しかめつ面のボスの視線が私に移る。

慌ててワゴンにセットされた鍋から料理を皿に盛る。スパゲッティ・アラビアータ、伸びていないと良いけど。あとはパン、野菜の甘酢煮、仔羊の香草焼きだ。

本来なら進み具合を見ながら、一品ずつ出していくのだが、今日は他にもやることが沢山ある。これらの料理は今までに出したこともあるし、この場を離れても大丈夫だらう。

皿を並べ終わるとテーブルを離れる。ビュッフェの料理はまだ途中だ。あと三品残っている。それを出し終えれば区切りがつく。ワゴンを押して会場を突っ切つていく。

料理が美味しいと褒めてくれる人、一休みして飲まいかと声を

かけてくれる人もいる。

私は礼を言いながら、あと少しだからと断りを入れる。早く片付けて皆と合流したい。

扉にたどり着くと、前ではまだグレイとプリシラが話していた。プリシラは貰つたプレゼントが気に入らないようだ。可愛いウサギのぬいぐるみをグレイに押し付けていた。

「プリが好きなのって、これだつたけ？」

グレイはどこからか掌ほどの袋を取り出して、彼女に渡している。プリシラはそれを開けるなり、声を上げた。

「キューーー！　ねえ、ミシエール」

通りかかる私は、声をかけられてぎょっとする。

ミシエールって殆ど私の本名だ。だけど子供の言い様。グレイは氣にも留めていないようだつた。

良かつた。ほっとする私に、グレイから貰つた人形をつくり出して見せる。

この造形、私にはとてもキューーーには思えないけれど。どっちかと言えばクールが近いかな。

彼女が手にしてるのは、確か日本映画に出てくる怪獣のキャラクターだ。名前はゴッズジラーだったけ。恐竜ティラノサウルスの大模型版のような姿。黒い皮膚と突き出した背びれが特徴。爬虫類には珍しい白目が凶悪さを象徴している。

プリシラは人形を振り回しながら、鳴き真似をして遊んでいる。気に入つていてるようだ。

ウサギのぬいぐるみより、こんな怪獣が良いなんてユニークだ。それに真似をしてている彼女の可愛いことと言つたら。

ボスに抱っこをせがむこの子の心理がなんとなく分かった気がする。ボスの乱暴さは怪獣級だということだろうか。もしかして、彼女なら言つんじゃないだろうか。ボスをキューーーだと。

私はくすくすと笑いをもらしながら、ワゴンを押して外に出た。あと少しだから頑張ろうと。やる気が沸き起こる。プリシラか

ら元気を貰つた気がした。

68・クリスマス・パーティ（後書き）

次回予告：クリスマス・プレゼント。よりもよって、何故この人に渡すことになったのか。ミシユルは気が進まないままに……。

第69話「プレゼント交換」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

全ての料理を出し切り、とりあえずの仕事は終わった。

ワゴンの下の段に乗せていたプレゼントを取り出す。さあ交換会だと意気込む私に残念なお知らせが。

たつた今終わつたらしい。皆が持つてるのは交換後のプレゼントなのだ。

さすがにがつかりだ。ロンドンまで行つて買ったものなのに。マスティマの人ならきっと喜んでくれるものだと思うのに。

「プレゼントをもらつていらない人がいるのよ。その人にあげたら?」アビゲイルが声をかけてきた。

私が持つていたつて仕方ないし、そうしよう。

彼女は私の腕を絡めて歩き出した。

片手に大きな紙袋を手にしている。プレゼントが満載だ。それに目を落としていると、アビゲイルは照れたように笑つた。

「人妻なのに、ありがたいことよね」

膨れ上がつた紙袋。隊員たちの中での人気が分かる。納得だ。アビゲイルは綺麗だし優しいし仕事もできる、女である私でも憧れる人だ。

彼女と私は人の間をすり抜け、奥に進む。

なんだか、この方向つてまづい気がする。足をとめた彼女の傍で強張る。

ワインの空き瓶が乗つたテーブル。その向こうの椅子には、ひとつを見つめるボスの姿。

酔つ払つてゐのか目が据わつてゐる氣がする。いや、この人の目つきの悪さは素面のときでも変わらないか。

「ボス、マイケルからクリスマス・プレゼントですつて。受け取つてあげて頂戴」

アビゲイルの言葉に息が止まりそうになる。

まるで、私がボスのために用意したみたいな言い様。そんなことはありえないのに。

確かにグレイジやなければ、ボスに似合うかもつてぢらつと思つたけど。本当に渡すつもりなんてなかつた。

ボスは無言で私たちを睨みつける。「そんなもん、いるか」ってテレパシーでも伝わつてきそうだ。

「じついう時はノリ良く受け取るものよ」構わず、アビゲイルは私を前に押し出す。こうなつたら、もう渡すしかないじゃないか。

私は恐る恐る包装された箱を差し出した。

ボスは私の顔を見上げたまま動かない。結ばれたままの唇。下から挑むように見つめる瞳は、私を追い詰めるだけだ。

じついう時つてどうすればいいんだろう。プレゼントを引くべきか、押し付けるべきだろうか。焦り始めた私に近付いてきたのはジヤザナイア隊長だ。

彼は刺繡の入った白いシャツを身に着けていた。カトルマンと言ふんだつたろうか、フェルト製で革の飾り紐の付いたハットをかぶつている。ウェスタンスタイルだ。

さつき見たときにはなかつたものだ。とすれば、これらはプレゼントだろう。早速着用しているなんて隊長らしい。それに束ねた赤毛に映えて、とても似合つてる。

私のプレゼントに目をとめた彼は、笑顔を見せた。

「ボスにもプレゼントか。いいな。いらねえんならおれが貰うぞ」ジヤズ隊長の言葉にボスの眉がぴくりと動く。箱を手に取つた。人から欲しいと言われたら、惜しくなる心理に陥つたようだ。

「レイバン」

ボスは私の背後を見やつて声をかける。

振り返ると、レイバンが紙袋を提げて立つていた。ボスに渡すつもりだつたのだろう。彼は名前を呼ばれて、喜び勇んで私の隣に並んだ。

「代わりにそれをやれ」

ボスの言葉に彼は硬直する。

まるで機械仕掛けの人形のように、ぎこちなく動いて、こちらを見下ろす。

ボスのためのプレゼントのはずなのに。そんな物を受け取るなんてできるわけがない。

「気持ちだけでいいです」

私は精一杯の笑顔で、その場を切り抜けようとする。レイバンはあからさまに安堵の表情だ。紙袋をボスに差し出す。

ボスは黙つて受け取ると、テーブルの上を滑らせた。止まったのはジヤズ隊長のまん前だ。

「一つもいらねえ」

あんまりな言葉だ。レイバンはショックのあまり顔面蒼白になつている。

「じゃ遠慮なく」

手を伸ばす隊長。本当に遠慮なしだ。

ボスもボスなら、隊長も隊長だ。レイバンの視線が私に下りてくる。彼は唇をへの字に曲げていた。フルブルと震えながら私の肩に手を置く。

気にするなど言つことだらうが、表情が全てを物語つている。彼は後ろからでも分かるほど肩を落として去つて行つた。

「毎度のことなのに落ち込むわね」

アビゲイルの声に同情の色はない。

「おれ、また貰つちまつたぞ」

ジヤズ隊長もそう言いながら、まるで気にしている様子がない。この人たち、同じようなことを毎年繰り返してゐるんだろうか。

私の考えをよそにボスが箱の包装を破りだす。パーティが終わってからそつと開けてもらいたかったのに。あんなオモチャ見て怒り出したらどうしよう。

箱から取り出して、テーブルに置いた射的と銃。

彼は眉を寄せた。何も言わずに射的の底にあるスイッチを捲している。

途端に警報音と繰り返しの音声が鳴り響く。

「午後九時二十八分。侵入者アリ、侵入者アリ。撃退セヨ」
ボスはオモチャの銃を取ると引き金を引く。効果音の銃声と共にアラームが止まった。

「へえ、目覚ましか。いいな」

隊長はつらやましげに言う。

私はというとボスの恐ろしい反応を予想して、耐え切れずに逃げ出していた。離れた場所から様子を窺う。

ボスはテーブルの離れたところに目的を置き直して、射撃を続けている。

「面白れーの。ボスも気に入つてんな」

グレイが笑いながら近付いてきて言う。

私には本当にそうなのか判断がつかない。顔を見てもほとんど無表情だし、楽しんでいるようには見えないのだけど。
そういうえば、あの人の笑った顔なんて一度も見たことがない。つていうか、笑つたりするんだろうか。

「ミシェール、ボスはまだお仕事？」

いつの間に近寄ってきたのだろう。プリシラが私の白衣の裾を引っ張る。近くには父親であるオスカーもいた。

私は彼女の顔と並ぶように腰を落とした。

「もうちょっとかかるかな。ボスは忙しい人だから」

仕事が忙しいから抱っこは辛抱しなさい。母親であるアビゲイルからもずっとそう言われてきたのだ。良心が痛むけれど、彼女を傷つけないためだ。

「プリシラ、がまんできるよ。だつてお願いしたんだもん」
きゅっと愛らしい唇を引き絞つて言う。

「サンタさんにお願いしたもん。ボスの抱っこプレゼントしてつて
グレイはふと噴出して慌てて唇を手で覆つた。ぎょっとしたよ

うに娘を見下ろしているのはオスカーだ。

それはそうだろう。クリスマス・プレゼントをそつと用意するのは親の役目だ。

私はというと、彼女のけなげさに胸を打たれていた。私がサンタなら、クリスマスの奇跡でもなんでも使って、プリシラの望みを叶えてあげるのに。

現実には非常に実現の難しい願いだ。

「プリシラ、動くゴッドジラのオモチャが欲しいんじゃなかつたのかい？ がおーって言つて火を噴くやつ」

オスカーは慌てて娘に尋ねる。それにしてもまた随分とデンジャラスなオモチャだ。

プリシラは真剣な顔で考え込んだ。大きな葛藤が渦巻いているらしい。今、彼女の中では、ボスと火を噴く怪獣が天秤にかけられている。

「いつそボスに着ぐるみ着てもらつたらいいんじゃね？」

グレイがにやけを隠せないまま、小さい声で口にする。

オスカーは仰天していた。プリシラに余計なことを聞かせまいとするように、彼女を搔き寄せる。

私もボスの着ぐるみ姿を想像してしまった。口の辺りから顔を覗かせた神妙な顔つきのボスを。

ドツボにはまつて動けなくなる大人たちを不思議そうに見上げるプリシラ。彼女を囲む三つの壁を幸いにしてか、当のボスはいつの間にか姿を消していた。

そうして、ほどなくパーティは終わりを迎える。

69 · プレゼント交換（後書き）

次回予告：朝、ボスの部屋から聞こえてきた銃声。踏み込んだミシ
ヘルの目の前で明らかになつたのは……。

第70話（最終回）「パーティ後日談」

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

クリスマス・パーティ翌日の早朝、サプライズがあつた。

部屋の表のドアノブにプレゼントが釣り下がつていたのだ。入れ物の黒いブーツは本物の革製のもの。本格的だ。

新品っぽいが一応匂いを嗅いでみた。だつて臭かつたら嫌だもの。良かつた。真新しい革の匂いだ。もらい物だから、あとで返しに来て欲しいとメモがあつた。ジャザナイア隊長からの伝言だ。

じゃあ、これは隊長から？ プрезент交換を逃して、ちょっとばかり落ち込んでいた私のテンションが一気に回復した。包装紙まで大事に思えて、丁寧に包みを解いた。

赤いマフラーだ。肌触りも良くて温かそう。

ジャズ隊長以下、隊員皆からの気持ちだとカードが添えられていた。

じんと熱いものが胸にこみ上げてくる。私を認めてくれる人たちがいることを心強く思った。同時にこれからも頑張らなければと気合も高まる。

部屋に戻つてマフラーを大切にしまつ。

さあ、仕事だ。仕事。朝ご飯の支度をしなければ。いつも以上に気持ちが入る。

静まり返つた廊下に、変わらない景色。

昨日のことなのに、クリスマスパーティがあつたこと覚え夢のようだ。毎日の仕事が果てしなく続いていくような錯覚。

年の終わりにつきものである慌しさもマステイマには無縁のもの。元々、曜日なんて関係ないし、カレンダーもあってないようなものなのだから。

ちなみにクリスマス休暇なんてのもない。

アビゲイルに尋ねたら、新入りは日を改めて取ることになつていついう答えだった。イタリアに里帰りできる日はいつになるのや

ら。

私はワゴンを押して歩いていた。バスの食堂の掃除と空気の入れ替え、朝食の食器を取りに行くいつもの作業だ。

窓の外はまだ暗い。イタリアもそうだが、イギリスもまたこの時期は日の出が遅い。

廊下は静けさに包まれている。響いているのはワゴンの車輪の音と私の足音だけ。まるで深夜と変わらない。

と、突然、静寂を打ち破る一発の銃声。聞こえてきたのは田の前の扉。バスの部屋からだ。

お馴染みの衝撃銃の音ではない。これはバスの愛用するリボルバーの音だ。

私は後先も考えないまま、扉を開け、バスの部屋に飛び込んだ。起こしに行つた隊員に向つて撃つたのだろうか。その考えもすぐには違つことが分かる。

手前のリビングにはひと気がなかつた。寝室へ続く扉は閉じられたままだ。起こし役の人がいるなら扉は開いているはずだ。最低限の逃げ口の確保は基本中の基本。

だとしたら、バスの寝込みを狙つて入り込んだ人間がいるのか。私は覚悟した。侵入者と鉢合わせになるか、あるいはその死体を目にすることになるのか。どっちにしても、あまりありがたい展開とは言えない。

一発目の銃声や物音を聞き逃すまいと神経を集中して、ノブに手をかける。

「失礼します」

そう言いながら、身構えつつ、素早くバスの寝室の扉を開けた。

日に飛び込んできたのは、ベッドの中で体を起こしている彼の姿。布団の上に置かれたその手には、もちろん拳銃が握られていた。

「何があつたんですか、バス？」

部屋の中には他に誰かいるような気配もない。

踏み出した私の足元で、何かが割れる高い音がした。硬い感触に

足を上げて床を見る。

これって……。

私は何も言つことができず、顔を上げて再びボスを見やつた。

ボスはそっぽをむいている。微妙な空気が流れる。

私の足元にあるのは、田覚ましである標的のなれの果てだつた。砕けたプラスチックの欠片が散らばつている。対のオモチャの銃ではなく、本物の拳銃で打ち抜いてしまつたらしい。

「間違えたんですね」

私は息を吐きながら言つ。安堵と呆れの混じつた溜め息だ。

人騒がせなことだ。おそれく寝ぼけでもして銃を取り違えたのだう。

ボスは私に眼を向けた。鋭い視線が飛んでくる。やばいと思つた瞬間だつた。

「なに勝手に部屋に入つてんだ？」

言葉が終わらないうちに聞こえた二発目の銃声。私の足元に打ち込まれた弾丸。ボスが発砲したのだ。

決まりの悪さを晴らすために、銃を使うなんてとんでもないことだ。漂う火薬の匂いに、私は口から飛び出しそうとする抗議の言葉をぐつとこらえる。

「文句でもあんのか？」

お見通しのボスは、銃を構えながら凄む。

私は唇を固く絞つたまま、首を横に振つた。

言いたいことはもちろんあるが、口にしたところはちゃんと伝わらない。それどころか、言葉を返したことを理由にして、制裁が待つてゐる可能性だつてある。

我慢だ、我慢。拳を硬く握り締める。今文句を言つたつて良い事なんて一つもない。

私は扉まで戻り、大きく一息深呼吸すると、ボスに向き直つた。

「ボス、今日の朝御飯はB-S-Tホットサンドとサラダにポタージュスープ、果物のヨーグルトかけです。食堂でお待ちしています」

思いつきりの笑顔を添えて。

もちろん、返事なんてなかつたけれど、彼は銃を持った手を下した。私の反応に苛立つ氣分もそがれたように見えた。

廊下に出てから扉を閉めて、その場で両拳を握り締める。やつた。なんだか新たな対処法を生み出せた気がする。

いつまでも同じ私だと思つていたら大間違ですよ、ボス。人といふものは追い詰められたら、それを切り抜けるために思わぬ力を發揮するものなのだから。

騒ぎに気付いて駆けつけてくる隊員たちに大丈夫だと告げながら、食堂へと向う。

私の足取りは軽かつた。ワゴンを押しながら氣分は上々。外はまだ薄暗いが、これから朝が世界を塗り替えてゆく。月も星も光に溶ける。私が感じた明るい見通しのように。

間もなく訪れる新しい年に私は思いを託す。来年もまた良い年になるようのこと……。

こうして、一年の終わりという区切りに、このお話もひとまず終わりを迎える。

コックとしての関わりはこれからも続いていくが、それはまた別の機会に。

私は翼を形作る一枚の羽のようなもの。

黒い翼を象徴とするマスティマ。それは決して光の元には姿を現さぬもの。一般の人々の生活には何一つ触れるものを持たず、その眼が捉えるのは漆黒の闇だけ。

物語がいつもめでたしめでたしで終わるとは限らない。

だけど信じたいと思う。私自身を、ボスをジャザナイア隊長を。アビゲイル、グレイにレイバン、そして私を支えてくれる隊員たちを。

これは私の運命。私の選んだ道なのだから

II
II
II

完

II
II
II

70 パーティ後日談（後書き）

最終回としましたが、続編を考えていますので掲載した際には第一部完に変更します。

あとがきについては活動報告にて掲載しています。

作者名から作者のページに飛び、活動報告の文字をクリックすると一覧で見られます。

2011年8月7日の記事です。これから予定なども載せてします。興味のある方はどうぞ。

（話の末尾にあるあとがき欄ではちょっと……かといって、別に一話分に代えて載せるのもどうかと思いましたので、じゅうに載せました）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランディングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その1

主人公ミシェル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介。

マスティマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシェル「今田のゲストはマスティマの幹部内で最年少、コーヒーが大好きなグレイです」

グレイ「ども」

ミシェル「グレイのプロフィールは……」

（名前） グレイ

（名付け親） ボス

（組織での役割） 幹部。人材発掘、育成

（容姿） 銀髪、碧眼。右目は髪で隠れて見えない。身長179cm、体重65kg

（嗜好品） フレンチフーハー

（好きな食べ物） オニオングラタンスープ

（苦手な食べ物） 甘いもの全般

（尊敬する人） ボス

（趣味） 悪戯、マジック

（特技） 高速ヘアカット

（好きな言葉） 明日は明日の風が吹く

（血液型） A型

（出身国） （年齢） （誕生日） ????

ミシェル「え？ 名付け親がボスって、本名じゃないんですか？」
グレイ「マスティマにはそういう奴結構いるんだぜ。ちなみに

誕生日も年もシークレット。出身国はここだけの話、フランスって

」と

ミシェル「つてことで？ アバウトですね」

グレイ「ちなみに名前の由来は髪の色らしいぜ」

ミシェル「ちょっと安易な気も。尊敬する人もボスなんですか？」

グレイ「もちろん。ボスは普通じゃねーもん。あれ以上面白れ

一人いねーよ」

ミシェル「ボスが面白い？ そついえばグレイはいつもその言葉を口にしますね」

グレイ「世の中は面白れーこと満載。どんな人間でも捜せば一
つくらいはあるんだぜ。レイバンのボスに対する忠誠心、あれも面白
れーし。ジャズ隊長の懲りねー所も面白れー。ボス自身も常識離れ
してるんだ。まさにスーパー・ボスだぜ」

ミシェル「……ちょっと分かった気も。悪戯やマジックもその延
長ということでしょうか。それにしても体験して実感したんですけど、ヘアカットは神業です！」

グレイ「最初は冗談のつもりだったんだけどな。ショーとして成
立するために技術を見せねーと」

ミシェル「根っからのショーマンですね。話は変わりますが、コ
ーヒー好きですよね。もつ中毒の範囲ではないかと思うんですけど」「
グレイ「そーかもな。しばらく飲まねーと頭痛がするし、体が
だるくなるんだよな」

ミシェル「完璧なカフェイン中毒では？」

グレイ「昔はベースモーカーだったんだよ。卒業した反動で
「コーヒーに走つちまつたんだな」

ミシェル「ボスのエスプレッソ・マシンを持ち出したこともある
とか」

グレイ「高級だから絶対美味しいコーヒーができると思ったんだ
けど、オレには濃いすぎ。エスプレッソは好きじゃねー」

ミシェル「ボスは相当怒ったのでは」

グレイ「証拠なんて残さねーもん。ま、オレだとは思ってるん

だろうけど。ボスは確証なしではまず怒らねーし

ミシェル「そなんですか？」

グレイ「そーゆー人だよ。もひとつ、いーこと教えてやろつか。
何かしでかすときには、ボスが怒る相手を絞つた後を狙え。そいつ
が割を食うから、こいつちは安全なんだ」

ミシェル（割を食うって……。それは使っちゃまずいんじゃ）

グレイ「面白れーを見つけるにはまず観察から。これ基本だぜ」
ミシェル「それはなんとか参考になりそう（汗）。グレイ、あり
がとうございました」

『他のキャラからグレイへの一言』

ジャザナニア……若えんだからもつと青春しようぜ
レイバン……龜の甲より年の功という言葉があるんだが
アビゲイル……今のうちに修行を積んで良い男に育つてね
ミシェル……すきつ腹にコーヒーは胃に悪いですよ
ディヴィッド……Hスプレッソ・マシン、やつぱりお前か

『グレイについて作者のつぶやき』

登場回数は少ないわけじゃないのに、他のキャラが濃すぎて実は影
薄いかも。今は要領良く立ち回つている彼も過去には色々あつたと
いう設定。

キャラクター紹介 その1（後書き）

キャラクター紹介は全5回の連載でお届けする予定です。

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチ
ツとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その2

主人公ミシェル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第一弾。

マスティマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシェル「今田のゲストは、マスティマでナンバーワン。実行部隊のジャザナイア隊長です」

ジャズ「おっす！」

ミシェル「ジャズ隊長のプロフィールは……」

（名前） ジャザナイア

（組織での仕事） 幹部。実行部隊・隊長。

（容姿） 赤い巻き毛の長髪。緑眼。身長183センチ、体重68kg

（趣味） 仲間内での賭けこと。動物もののドキュメンタリー番組の鑑賞。ウエスタンスタイル好き

（特技） 投げ縄

（好きな食べ物） ミートローフ

（好きなお酒） 一番はビール

（好きな言葉） あとは野となれ山となれ

（年齢） （生年月日） ????

（血液型） O型

（出身国） アメリカ

ミシェル「ジャズ隊長の髪はパーでたみたいで格好良いです

ね

ジャズ「そうだろ。おれのチャームポイントだ。なんといって
も派手さが一番！」

ミシェル「ボスに切られたこともあつたり」

ジャズ「そんなこともあつたな。もう伸びたし、氣にしてねえけど」

ミシェル「隊長はボスの次に偉い人ですけど、大変なことって多いですか？」

ジャズ「うーん。色々あるけど、まあ、やつていてるからな。終わりよければ全てよしつてやつだ」

ミシェル（どこが終わりなんだう）

「えっと、ボスと面くやつていくコツってありますか？」

ジャズ「考えすぎねえことだな。思つたままにバーンとぶつかつていく。人間つてやつは全身全靈でぶつかれば必ず伝わるもんだぜ」

ミシェル（それは随分勇気がいりそつな）

「……賭け事、好きですね」

ジャズ「仕事の楽しみ方だよな。ボスの目覚まし係の結果とか、任務での使用弾薬の数とか、会議の休憩にコーヒーが出てくるまでの時間とか。なんでも対象になるからな」

ミシェル「そんなことまで（汗）。今度コーヒー持つて行くときに緊張してしまいそうです」

ジャズ「お前は真面目だなあ（笑）。もつと気楽に行こうぜ」
ミシェル（笑い声大きすぎ）

「隊長の笑い声って特徴的ですね」

ジャズ「そうかあ？ そういうえば、昔アビーに怒られたこともあつたつけ。あんたが先に笑うから私が笑えなくなるつて。ハつ当たりだよなあ」

ミシェル（アビゲイルの気持ち、よく分かります）

「ボスにも怒られたりしてましたよね」

ジャズ「神経質なところがあるからな。けど、あいつがいねえとしまらねえ。組織の文鎮みたいなものだな」

ミシェル（文鎮？ 分かるような分からぬような）

「動物もののドキュメンタリー番組を見るのが楽しみだとか。お気に入りの動物つてありますか」

ジャズ 「コアリクイ。威嚇のポーズがキュートだぜ」

ミシェル 「？」

ジャズ 「キリンの喧嘩もダイナミックだ」

ミシェル （それは好きな動物と違うんじや）

「特技の投げ縄つて、カウボーイがやるやつですか」

ジャズ 「ああ。子供の頃は子牛を捕まえたりしてたんだぜ。今は仕事にも活用できるし、人生何が役に立つか分からねえな」

ミシェル 「馬に乗つてやるんじゃないんですか？」

ジャズ 「バイクで我慢だ。任務には連れて行けねえもんな。城で飼おうとしたらボスに却下されたし」

ミシェル 「それはボスが正しいと思います」

ジャズ 「今でもうちは十分動物園だつて。ひでえよな。せめてサファリ・パークくらい言つてもらいたいぜ」

ミシェル（？）

「それだけ皆さんが個性的つてことですよ、わざと」

ジャズ 「そうかあ？」

ミシェル 「そろそろ時間です。ジャズ隊長、ありがとうございます」

した

ジャズ 「おっ、もうか。お疲れさん！」

『他のキャラからジャザナイアに一言』

グレイ 「隊長、いつも髪何処で切つてんの？」

レイバン 「ボスの片腕が務まるのは尊敬に値する

ミシェル 「隊長が怒つてるとこ見たことないです

アビゲイル 「ボスと一緒にマスティマを盛り上げなさい

ディヴィッド 「訓練と称した遊びは許さねえ

『ジャザニアについて作者のつぶやき』

ボスとの対比を出したくて、こんなキャラに。書いていて気分がアガつてくる modeメーカー的存在。

キャラクター紹介 その2（後書き）

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その3

主人公ミシェル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第三弾。

マスティマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシェル「今田のゲストは、総務担当で医師でもあるアビゲイルです」

アビー「はーい」

ミシェル「アビゲイルのプロフィールは……」

（名前）アビゲイル

（組織での仕事）幹部。総務担当。医師。得意分野は外科

（容姿）巻き毛の赤い長髪に緑眼。身長168センチ、体重54kg

（趣味）夫オスカーへの教育。人間観察

（特技）針を使った麻酔。ボスの怒りをかわすこと

（好きな言葉）心頭滅却すれば火もまた涼し

（嫌いな言葉）つい言ってしまう「赤字」

（好きなもの）料理はジャンバラヤ

（嫌いなもの）人間は言うことを聞いてくれない男

（年齢）（生年月日）?????

（血液型）O型

（出身国）アメリカ

ミシェル「アビゲイルは医師として以外の仕事も多いですね」

アビー「ボスは人使いが荒いから。ある意味、私がマスティマの顔みたいなものね。ボスの顔を知らなくても私なら知ってるっていう外部の人間多いのよ」

ミシェル「小さい子をかかえてるのに大変ですね。疲れたりしませんか？」

アビー「そりや疲れる時もあるけど、こここの仕事は面白いわ。刺激的だし。他では味わえない充実感がある。部下達も良い子だしね」

ミシェル「皆、姉さんつて慕つてますもんね」

アビー「嬉しいことね。私にとつては家族みたいなものなの。苦楽を共にする仲間だから。私は自分のできることをやるだけよ」
ミシェル「結婚も職場ですよね。なれそめとか聞かせてもらえますか？」

アビー「オスカーも人使いの荒いボスの犠牲になつていてね。連続の徹夜で疲れが抜けないときとか、よく医務室にビタミンの点滴を受けに来ていたの。そこで親しくなつたのよ」

ミシェル「優しそうな田那さんですよね」

アビー「もちろん。でも、男は優しいだけじゃ駄目。技術も兼ね備えてないと、いざつて時に頼りにならないわ。だから教育は大事なのよ」

ミシェル「教育ですか？」

アビー「男も家事くらいできなきやね。オスカーはもともと器用な人だつたから、今では料理は私よりも上手なの」

ミシェル「凄いですね。アビゲイルが先生になつてですか？」

アビー「子供と同じで褒めて育てるのが一番よ。褒めて悪い気なんとする人いないし、機嫌よくやってくれるわ」

ミシェル「ボスにもその手なんですか？ レイバンやジャズ隊長、それにもちろん私もボスの怒りに触れることがあるわけだけど、アビゲイルはそんなことないみたいだし」

アビー「まさか。私は彼との距離を心得ているだけよ。それに昔のことも握つてたりするから。私に喋られちゃ困ること、あると思うわ。だからじゃないかしら」

ミシェル「わっ、なんだろ。知りたいです」

アビー 「話したら秘密じゃなくなるから、無理なのよね」

ミシェル 「やっぱりそうですね。でも、昔のことって、ボスと
はどれくらい前からの付き合いなんですか。ジャズ隊長も同じなん
ですか？」

アビー 「はつきりとした年数は内緒。ちなみにマスティマ入り
はジャズとボスが同時期、私はその後よ」

ミシェル 「秘密が多いですよね、マスティマでは」

アビー 「年齢は人物特定には重要な要素だから。好きな年を名
乗ればいいんだわ」

ミシェル 「それは女性には嬉しいことですよね」

アビー 「そうよ（笑）。一人で喜びましょう」

ミシェル 「以上で、アビゲイルの紹介でした」

アビー 「上手くしめたわね。上出来！」

『他のキャラからアビゲイルへの一言』

グレイ 男の操縦術、半端なさげ

レイバン マスティマの花は高嶺の花

ジヤザナイア なんか尻に敷かれてる気がする

ミシェル 女だったらきっと誰でも憧れるプロポーションです

ディヴィッド 子供の管理は親の仕事だ

『アビゲイルについて作者のつぶやき』

実は影のボス？ 女性ならではの現実的な視点で多くを把握。彼女
がいないとマスティマは金銭的問題で即崩壊の危険性大。

キャラクター紹介 その3（後書き）

お話を気に入つていただけましたら、下のランディングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その4

主人公ミシェル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第四弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり。

ミシェル「今田のゲストは、幹部で最年長、レイバンです」

レイバン「よろしく頼む」

ミシェル「レイバンのプロフィールは……」

（名前） レイバン

（名付け親） グレイ

（名前の由来） 本当の苗字と名前の一部をくつつけたもの

（組織での仕事） 幹部。アジトである城の警備主任

（容姿） 短い金髪に浅黒い肌。左頬に横一直線の傷跡。身長206センチ、体重88kg

（趣味） ボスのブロマイド作成と収集。筋肉トレーニング

（特技） ドッグトレーニング

（尊敬する人物） ボス

（好きな言葉） ボスは偉大だ

（好きな食べ物） 甘いもの。特にザツハトルテ

（嫌いな食べ物） 苦いもの、辛いもの

（安らぎの時間） 愛犬マリアとのひととき

（年齢） （生年月日） ????

（血液型） B型

（出身国） ドイツ

ミシェル「レイバンは甘いものが大好きですよね。なのに、贅肉なしなんてうらやましいです」

レイバン「田口のトレーニングの賜物だ。鍛錬は毎日。一日休めば取り戻すのには三日かかるのだぞ」

ミシェル（見た目どおりの体育会系だー）

「いつもグレイと一緒に食堂に来ますね
レイバン「たまたま休憩時間が一緒になるだけだ。金魚の糞などではないぞ」

ミシェル「そんなこと言つてませんよ（汗）」

レイバン「目がそう言つている」

ミシェル「そんなことありませんよ（冷や汗）。……つと、バスのプロマイドの出来は素晴らしいですよね」

レイバン「今ではプロ級だ。カメラの撮影技術、画像の補正も完璧だ」

ミシェル「頂いたうちの一枚は映画のポスターのようでした。どうやって撮つてるんですか？」

レイバン「内緒だが、任務の途中でだな、スコープを改造してカメラをつけたもので隠し撮りしているのだ」

ミシェル「任務中ですか（驚）。それはばれたら、かなりまずいのでは？」

レイバン「うむ。見つかって、カメラは何度も壊されたな。殴りも蹴られもしたし。だが、ボスのお姿を留め置くためだ。尊い犠牲だ」

ミシェル「ボスに撮らせてくださいって言つても、まず無理でしょうしね」

レイバン「だが、いつかは分かつてくださるはずだ。ボスが写真をちゃんと見てくれば、自分の真摯な気持ちにも理解を示されるはず」

ミシェル（うわあ。見てもくれないんじゃ、いつまでも理解なんてしてくれるわけないし）

レイバン「いつかマスマイマの隊証を作つて載せるのが夢なのだ。あの方の偉大さは、言葉だけでは語りつくせんからな」

ミシール（隊証に？ 四六時中あの田つきの悪いボスと一緒にとか、それはちょっと嫌かも）

「……ところで、ドッグ・トレーニングが特技とか？

それってマリアちゃんにも？」

レイバン「マリアは他の犬とは違うのだ。トレーニングなどいらん。あいつほど可愛いやつはおらんからな」

ミシール（それって、もしかして犬馬鹿？）

レイバン「少し甘やかしちぎってしまった氣もあるが」

ミシール（少しごぶりじゃないかもですよ。いつか人咬んじゃいそうですよ）

「そういえば、マリアって女人の名前ですよね。なにか由来があるんですか」

レイバン「……」

ミシール「あれ、レイバン？」

レイバン「……」

ミシール「まことに聞いたことがあります？」

レイバン「……以上、レイバンの自己紹介であった」

ミシール「勝手にしめちや駄目ですよー」

『他のキャラからレイバンに一言』

グレイ……マステイマで一番菓子を美味そうに食つよな

ジャザナイア……「ついけど、言つこと聞いてくれる可愛い部下だ

アビゲイル……砂糖は健康のためにほどほどにね

ミシール……お菓子のリクエストあれば、また聞かせてください

ディヴィッド……変わったやつ

『レイバンについて作者のつぶやき』

こんなに特徴あるキャラになるはずじゃなかつたのに。ボスのブロ

マイド收拾の趣味が強烈過ぎたか。

キャラクター紹介 その4（後書き）

キャラクター紹介は5回分の予定でしたが、5・1、5・2と1回分追加、計6回でお届けすることになります。

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その5・1

主人公ミシェル（マイケル）をホスト役にした主要キャラクターの紹介、第五弾。

マステイマの城の会議室を借りて、始まり始まり……じゃなくて。随分と小声で、それも部屋の隅で話は始まります。

ミシェル「今日のゲストってボスなんですか？」

アビー「そうよ。彼がいなきゃ主要キャラ紹介にならないじゃない」
ミシェル「それはそうですけど、僕だと、まともなインタビューにならないんじゃ……」

グレイ「やつてみて、駄目だつたら代わればいいじゃん」

ミシェル（それつて、いざとなつたら代わってくれるってことへ）
ジャズ「そうそう、何事にも当たつて碎けろだ」

ミシェル（砕けちゃうなんて嫌です）

レイバン「ボスをお相手になんて夢対談だぞ」

ミシェル（ひとごとだと思って……。だけど、腹を決めてやるしかないか）

「分かりました。やるだけやつてみます！」

送り出されたミシェルは対談席へ。

すでに椅子に座つたボスは足を組み、待ちかねている様子。

ミシェル（うう、早く終わりたい）

「お待たせしました。今日のゲストはボスです

ボス「……」（睨）

ミシェル「ボスのプロフィールは……」

ボス「ちょっと待て」

焦り気味にプロフィールの紙に手を落とすミシェルを遮るボス。

ボス 「なんだ、今のは」

ミシェル 「はい?」

ボス 「俺はどこのボスだ。ボスが名前か。何も伝わってねえぞ」

ミシェル 「し、失礼しました。今日のゲストはマステイマのボスことデイヴィッド…です」

（これで勘弁してください）

ミシェル 「ボスのプロフィールは……」

（名前） デイヴィッド

（組織での仕事） ボス

（容姿） 黒髪に濃い灰色の瞳。色の濃い肌。身長????センチ、

体重??kg

（趣味） ?

（特技） 狙撃

（好きな食べ物） ?

（嫌いな食べ物） ?

（好きな言葉） ?

（血液型） ?

（年齢） （生年月日） （出身国） ????

ミシェル（これってアビゲイルの字だ。しかもほとんど記入がないですか？）

（慌）

「えっと……マステイマのボスの仕事って、大変ではな

いですか？」

ボス 「人に語るよつなことじゃねえ」

ミシェル 「（汗）じゃあ、お休みのときには何をしてるかとか…」

ボス 「そんなことを喋る必要が何処にある」

…

ミシェル（話す気ないのになんでここにいるのー？（大汗））

「でもボス、これじゃインタビューになりませんよ
「知るか。俺はそんなもん聞いてねえ」

ボス
ミシェル（ええつ？）

部屋の隅を振り返るミシェル。「めんと片手を上げて謝っているア
ビゲイル。ジャズは腕時計を指すと、巻けと指示を送っている。
ミシェル（無茶苦茶だー。どうやってこれ以上進めりつて言いつの
パニックに陥るミシェル。

すると、ボスは立ち上がり、部屋の隅に手をとめる。

ボス
「俺を騙して遊びに誘うとはこいつ度胸だ」（苛）
衝撃銃を取り出している。

慌てるミシェル、ジャザナイアたち。

アビー
「遊びじゃないわよ。読者サービスよ」

一人、歩み寄ってくるアビゲイル。

アビー
「読者あつての私たちじゃない。読者様は神さまよ」

ボス
「俺は無神論者だ」（怒）

アビー
「知ってる」

にっこり笑うアビゲイル。

アビー
「ここからが本番よ。今日のゲストは、コックのマイケ
ル。インタビュアーは私ことアビゲイルでお送りします」

ボス
「……」

ミシェル（私に振るのやめてー）

焦るミシェルの心の中の悲鳴を残して次話へ続く

『他のキャラからボスへ一言』

グレイ
「ボス、サイコー！」

レイバン
「何処までも付いて行きます

ジャザナイア
「いつがいるからこそマスティマだ

アビゲイル
「備品を壊すのは控えめにお願い

ミシル……カトラリーの扱いは天下一品です

『ディヴィッドについて作者のつぶやき』

設定や過去など書き連ねていくと主人公であるミシルより文量が多くなる。どれくらい出すべきか、出さないべきか、それが問題。

キャラクター紹介 その5・1（後書き）

お話を気に入つていただけましたら、下のランディングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

キャラクター紹介 その5・2

アビー 「さて、これがマイケルのプロフィールです」

（名前） マイケル

（組織での仕事） コック

（容姿） 茶と金の混じった短髪でくせ毛。紫がかつた青い瞳。身長158センチ、体重46kg

（特技） 拳法

（尊敬する人） 祖母、料理の師匠

（好きな食べ物） 一番は祖母の作る日本料理

（嫌いな食べ物） 特になし

（好きなもの） 足の多いものとないものを除いた動物

（苦手なもの） ゴキ○リ

（好きな言葉） 好きにやもの上手なれ

（血液型） A型

（年齢） （生年月日） （出身国） ? ? ? ? 一応内緒どころ」とで

アビー 「マイケルに質問コーナーあります。まずは私ね。早速だけど、マイケル、私に隠しごとなーい？」

ミシェル 「……隠しごとですか？ ありませんよ、そんなの（まさかアビー、この場で私が女だつてばらす気じや…）」

…（汗）

アビー 「この間、医務室で定期検査受けたわよね？」

ミシェル 「え？」（嘘でしょ？（冷や汗））

アビー 「あなた、身長サバ読んでるでしょ。血口申告じや158センチって聞いてたけど、計つてみたら155・7センチだったのよね」

ジャズ 「3センチは大きいぞ」

ミシェル（2・3センチです、隊長。小数点以下が大事です）

「前に計ったときは158センチだったんですよ」

グレイ 「年寄りじゃねーし、そんなに縮まねーだろ」

ミシェル「でも、本当に……」

ミシェルの肩をぽんと叩くレイバン。

レイバン「分かるぞ。自分も学生時代、200センチ超えを198と言つたことがある」

ミシェル「変な同情しないでください。本当なんですから」

アビー 「書類に誤まつた記載をするのはどうかしり」

ボスをちらりと見るアビー。

ボス 「どつちでもチビには変わりねえ」

ミシェル（そんな身も蓋もない）（半泣き）

アビー 「……えつと、じゃあ次行きましょ、次。グレイね」

グレイ 「無茶振りすんなー。んーと、お前、オレたちが外の連

中から影でどう呼ばれてるか知ってるか？」

ミシェル「えつと……黒ずくめだから悪魔の軍団とか？」

グレイ 「着眼点はいいけどなー。お前が大嫌いな黒いやつだ」

ミシェル「！？」（それってまさかー（悪寒））

グレイ 「何処からか沸いて出るつて意味もあるらしいぜ」

ミシェル「……」（脂汗）

ジャズ 「生命力はすぐよな、ゴキブリつて」（感服）

ミシェル「……そんな名前で呼ばれて平氣なんですか？」

ボス 「そいつらこそが『ゴミ』だ」

アビー 「マステイマを敵視するのは後ろ暗いところがある人たちだも。そんな連中からどう呼ばれようと氣にすることはないわ」

頷く一同。ミシェルはひとりショックから抜け切れていない。

ミシェル（それでも、やっぱりそんな名前で呼ばれるのはちょっと……）

アビー 「マイケルが気分悪そうだから話題変えましょ。次はレ

イバン

レイバン「クリスマス・パーティのザッハトルテは絶品だった」
アビー「それは質問じゃなくて感想でしょ。続いてジャズ」
ジャズ「お前、アビーに気に入られてるみたいだけど、身の危険を感じたことはねえか？」

アビー「それはどういう意味？」

ジャズ「組織内不倫は、部隊長としてちょっととなあ

アビー、ミシェル「そんなこと、あるわけないじゃない（ですか）！」

アビー「お馬鹿なジャズはほつといて。気を取り直して、最後にボスどうぞ」

ボス「なんでお前、辞めねえんだ？」

皆「……」

ミシェル（酷いです、ボス（涙目））

アビー「……以上マイケルの紹介でした」

ミシェル（自己紹介にオチはいらないですー！）

『他のキャラからミシェルに一言』

グレイ根性すげー

レイバンライバルから同志へだな

ジャザナニアどんな良いバッテリー持つても充電は大事だぞ
アビゲイルボスと上手くいってくれたら、経理的にも個人的にも嬉しい

ディヴィッド料理以外は不器用者

『ミシェルについて作者のつぶやき』

レイバンのイメージを猪と言っていたけど、性格的には彼女の方が近いかも。思い込んだら一直線、猪突猛進キャラ。

キャラクター紹介 その5・2（後書き）

特別編のキャラ紹介はこれにて終了です。

次週は絵師様に依頼して描いていただいたイラストを掲載する予定です。

お話を気に入つていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

ボスと//シルのイラスト（頂き物）

まずは絵師様の「紹介です。

お名前はmico様。

「小説家になろう」と提携の画像投稿サイト「みてみん」でもイラストを掲載されています。

素敵な絵を描かれる方です。

ミシエルとボスのイラストを依頼して、イメージとしてあげていた
だいた2枚の線画。

通常はどちらかなのでしょうが、両方描いて欲しかった……！
2枚のイラストというわがままなお願いでしたが、快く引き受けた
くださいました。

設定なども詳しくお伝えしています。

こちらとしても大満足な絵に仕上げて頂きました。

> i 3 2 2 1 5 — 4 0 5 0 <

ふんぞり返つて座つているボスと料理をこぼしかけている//シエル
(マイケル)。
いつか見た光景です(笑)
きっと彼女を驚かせるようなことをしたんでしょう。

(銃を持っているから、やつぱり発砲?)

飛んでるタコさんワインナーがカワイイです。
ツートンカラーの床やエンジ色の椅子もオシャレ。

アジトの城との内装とは少し違うのですが、こうこうのもアリかな
と思います。

枠がフィルムになつていて、映画などのパイロット版のようですね。

街の中（裏通り）のボスとミショルです。

2人して街に出るなんてあり得ないので、これはもうサービス・シヨットと言つてもいいでしょう。

上のイラストでは見ることができなかつたボスのロングコート姿も格好良いです。

ベース色が赤に対し、こちらは青。

色味がとても好みだつたりします。

それにしてボスつて木箱の似合う男だつたんだんですね。

2枚のイラストを見て思つてしましました（笑）

ボスと>//シルのイラスト（頂き物）（後書き）

本日10月2日より、キャラクター人気投票を開催します。目次ページにリンクがありますので、協力をお願いいたします。実施は2週間程度を予定しています。

今回のような企画物、気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします（ランキングの表示はPCのみです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2989k/>

運命のマスティマ

2011年11月8日03時20分発行